

とある正義の心象風景

ぜるこば

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

終わらぬ理想の果てに、衛宮士郎は学園都市へと辿り着いた。上条当麻や禁書目録らと出会い惹かれ、彼らの事件に巻き込まれていくうちに兆す変化。幾多の辛酸を舐め、新しい世界での己の在り様に苦悩しながら、彼は這ってでも前に進む。いや、進むしかないのだ。

——止まらない、止まってはいけないのが、衛宮士郎なのだから。

※この作品は Fate/stay night, とある魔術の禁書目録のクロスオーバーです。原作におけるネタバレを多分に含みますので御注意下さい。

目次

Prologue: 水槽の部屋	1
そうして出会う	14
第二魔法	31
よろしく御願います	52
真夜中闊歩	76
交渉 I	103
city walk	125
不運な奴ら	151
start line	174
彼は彼女と共に	196
watched&watching	222
戦いを告げる	248
夜戦で廻る	271
剣閃の小夜曲	292
Reason	314
何故に彼らは剣を持つ？	337
彼は立ちふさがる	358
十でなく	380
誰も彼もが	412
Out of control!	439
思惑の網目を抜けて絡まり	465
火蓋が切られる前のあれこれ	487
幻想を追う男	512

遠く離れて

—

546

違和感

—

575

Prologue : 水槽の部屋

暗い部屋の中、幾つもの円柱形の水槽があり、それぞれが青白い光を発しながら辺りを照らしている。林立するそれらは、互いを照らし合いながら、一つの芸術品の如く部屋を彩っていた。

それだけ聞けば普通ならば、綺麗なイルミネーションか何かかと感じるかもしれない。しかしながら、その水槽の中身が少し、いや、かなり異質だった。水槽をよく覗けば、中でぶかぶかと浮遊しているのは、桃色の歪な球体に赤い紐がぶら下がったような物体。球体には多くの皺が刻まれており、紐は水槽の底近くまで伸びている。一目では、それが何かは分からないかもしれない。余りにも身近で、且つ眺めるには何よりも遠い存在であるソレ。

そう、それは脳。正確に言えば、人間の脳と神経を含む諸々の一塊。見渡す限りの脳、脳、脳。宛ら水族館の如く、脳の一群は青い液体の中、ユラリ、ユラリと浮かんでいた。常人ならば見ただけで吐き気を催し、トラウマになるような、そんな光景。更に始末が悪いのは、その脳の持ち主は全員生きてまま肉体と脳神経を引き剥がされており、どういう術をもってか未だに生きてまま保存されているという事であろう。そんな常識

では考えられないような光景が、ここには広がっていた。

——ここは英国の倫敦、かの大英博物館の地下に在り、アトラス院、彷徨海と並ぶ魔術協会三大部門が一角、時計塔。その一室であり、封印指定の称号を受けた者達を保護している場所。つまりは『貴重品』として魔術師が保管されている場所だ。

封印指定とは、一代限りであり学問の研鑽により習得する事が出来ない希少な魔術を持つ者に与えられる、魔術師にとつての最大級の名誉であり同時に厄介ごとでもある。その称号を与えられた魔術師は『保護』による自身の研究の停滞を防ぐ為その殆どが協会から逃亡をするのだが、このような『保護』の実態を省みるにむしろ当然の帰結であった。

そんな陰険な雰囲気漂う部屋で、ふいに一つの扉がすつと開き、部屋の埃が宙を舞う。扉の外もまた暗かったが、その暗がりの中から二つの影がするりと、部屋の中へ滑り込んできた。影達はそつと扉を閉めると、部屋をぐるりと見渡す。

「……がそう……」

影の片割れである女性が呟く。黒い服装に身を包み、極力目立たないような格好をしているのが伺える。青白い光に照らされたその貌は、美しくも妖しげな気色を放つてい

た。

「違うないだろう。事前に聞いていた情報に一致するし、此処まで悪趣味な部屋はそう無い」

この部屋を悪趣味と称したもう一つの影は、それなりに背の高く体格の良い男性のようである。同じような黒い服を着込んでいるが、こちらは威風堂々と言った感じで腕を組んでいた。闇より更に深き所を住処にし、世界の外側を探らんとする魔術師であるが、それでもこの二人はまともな部類に入る魔術師だ。男が漏らした言葉は、決して的外れではない。

「しかし、噂以上に胸糞悪くなるような光景ね」

ふん、と女性が鼻を鳴らす。そもそも秘匿を旨とする魔術師が、封印指定とはいえない魔術師の研究をもって何をするのか。いくら『貴重品』とはいえ再現も出来ないような魔術に、利用価値があるとは思えない。あらゆる望みを叶える願望器と言われていた聖杯すら根源へ到達する手段とは考えていなかった彼女にとって、此処は余り居心地の良い場所では無かった。ましてや、元とはいえ自らのパートナーとも言えるべき存在が囚われているのだから尚更であろう。

一頻り感想を漏らした二人は、一緒に目的の水槽を探し始めた。彼らはどうやら、ただこの部屋に迷い込んだ、もしくはこの水槽郡を見に来ただけという訳ではなさそう

だ。すると滑る様にして、水槽の合間合間を縫って歩く。時間が無い訳では無いが、あくまで此処は時計塔という魔窟のその一室、しかもそれなりに重要な部屋でもある。二人があまり離れないようにして歩いているのは、正直言って何が起こるか判らない、一緒に探した方が安全でむしろ早く済むだろうと言うだけの話である。

慎重に辺りを探りながら、一つ一つ水槽を確認していく二人。締め切った部屋で当然の如く冷房などは存在しないはずなのに、何故かこの部屋は妙に冷え切っていた。

「正直、アンタが協力してくれて助かったわ」

「何だ、いまさら君が礼を言うとは。一体どういう風の吹き回しだ？」

「私達だけじゃミリヨネカリオンともパイプを持ってなかったし、やつぱり名門のロードは違うわねと思ってね」

女性が辺りを見渡ししながら、少し皮肉気味に笑う。その笑みの裏にあるのは、代を重ねたロード達のみが支配権を握る時計塔の権威主義への嘆きか、それとも力なき自分達への怒りか。そう、封印指定総与へ接触を図るには未だ四階級止まりとはいえ、ロードの名を冠するこの男性の協力がなければ不可能であったろう。

その事を思い起こさせるような言葉に男性は顔を顰めた。かつての自分もまた、権威主義に反発し自身の実力を認めさせる為、無謀にもある戦争へ参加したことも思い出したのであろうか。結果として彼はその戦争で敗退してしまっただが、得た物もまた大き

かった。

自身の未熟さは置いておいて、その戦争に参加した事自体は全く後悔などしていない。あの戦争に参加したからこそ自分はここに立っているのだし、一生の目標も持ちえたのだから。もつとも、彼の隣にいる女性は正真正銘、その戦争の勝利者でもあるのだが。

二人して目的の者を探しながら、少し会話が途切れる。二人の間に沈黙が降り、黙々と探していた所だったが、先に静寂を破ったのは男性だった。

「……何も君達自らが、彼の封印を執行する必要は無かったのではないか」

先程の会話から何を思ったのか、気を遣う様な声を出す男性。彼としても珍しいその声色に、多少驚きつつも女性性は頭を振る。

「いいえ、あいつの封印を執行するのは私たちじゃないといけなかった。当時私達にはあいつを助ける計画はあっても、圧倒的に時間も資金も足りなかった。教会からの追手も迫っていたし、教会と協会のどちらにせよ捕まるのは時間の問題だったわ」

「だから自分達で手を打ったと？ そんな事は理由にならん。……隠し事は無しだ。私に協力を仰ぐ以上、それが礼儀ではないかね」

男性の意見も当然。男性はこの女性が感情論だけでは動かない事を、よく理解している。二人はそれなりに長い付き合いでもあった。彼女達がわざわざ直接彼を封印した

のは、何かしらの理由があるはずだと踏んでいたのだ。

そして確かに、彼女達がある男性を自ら封印したのはそれだけが理由では無かった。躊躇いがちな顔を見せたのも一瞬、女性はため息とともに口を開いた。

「……鞆よ」

「何？」

「鞆、騎士王の鞆。あいつの身体からそれを取り出すのが、本当の目的だったのよ」

あなたにはもう少ししてから話す予定だったんだけどねと続ける女性に、は、と男性は思わずぼかんと口を開ける。騎士王と聞いて彼の脳裏に浮かぶは、あの凜とした佇まいを持つ少女。血に塗れ、怨嗟の聲が響き渡る地獄に於いて、なお輝ける戦場の華。

彼らが騎士王を再び戦場へと呼び出した事は知っていたが、何しろ余りにも不意打ちだった。自身が鞆の実物を見たことはないが、英語圏に住んでいる彼にとつてアーサー王伝説がメジャーであるの言うまでも無い。あの騎士王の鞆なのだから、相当な力を持つ事は想像に難くなかった。

「待て、騎士王の鞆だ?!? どうしてそれをあいつが持っている？」

なんとかそれだけは口に出せたが彼といえども驚きは隠せないらしい、今までより幾分大きめの声が女性の耳を打つ。とはいっても普通の会話レベルの音量なのだが、場所が場所だけにその声はやけに大きく感じた。そんな彼に向かって、女性は、しっ、と人

差し指を艶やかな唇に当てた。此処は名立たる魔窟の深部である。何処に鼠が潜んでいるか、誰にも想像は付かないのだから。

「それについてはまた後よ。ただ実際に封印される際どんな事をされるか判らなかつたし、事前に取り出しておく必要があつたのよ」

水槽の青白い光が彼女の顔を照らし出しているが、男性の側からは光の加減か、あまりその表情を窺い知る事は出来ない。止むを得なかつたとはいえ、一度愛した男を自ら封印した彼女の心の内を、男性は知る事は出来なかつたし、知る気も無かつた。同情されるなんて事は、彼女には似合わない。どんな難路でも踏破出来るだけの力を持ち、全力で完璧にやり遂げてしまうのが彼女だと、男性は百も承知していた。

「ともかく今はあいつを見つけるのが重要、話はまずそれからよ」

表情を堅くしたままの女性の言葉を切り目に、二人は再び黙り込み探し始める。封印されている部屋だけあつて、此処に掛けられている魔術は、半端なものでは無かつたし、それらを一々掻い潜りながら目的の水槽を探すのは、非常に骨が折れた。

繁く辺りを見渡してふと、女性は先程の会話から一人の少女を思い出す。あの鞆の本来の持ち主を。気高く、騎士王たるに値する高潔な少女を。そして、共に過ごした者にしか判らない、意外な一面を持つ彼女。一月にも満たない間、一緒に暮らしていただけであつたけれど、あの娘の在り様は本当に好ましいものでもあつた。聖杯戦争や繰

り返しの四日間での思い出に、思わず女性は笑みを浮かべる。

だがそれも一瞬だ。真に彼女の事を思うならば、今こそこの計画を絶対に成功させなければならぬ。成功してこそ、漸く彼らは一步前に進めるのだから。

そうしておよそ、部屋の水槽の半分近くを調べ終えたところであつた。奥の方を探索していた男性が、女性に軽く声を掛けた。

「どうしたの？」

「……どうやら目的のものが見つかつたらしいぞ」

「本当！」

驚きの声を上げ、女性が早足で男性の近くの水槽へと駆け寄る。ほんの数メートルしか離れていないのに、その距離すらもどかしい。掻き分ける様に急ぎ男性の傍にある水槽に近づき、掲げられた封印指定の名前を確認した。ビンゴ。声を上げそうになる喉元を飲み込み、念のため懐から手帳を取り出すと、水槽の番号と手元の番号を確認する。

「どうだ？」

「これで、合っているみたいだね……」

女性は言葉と共に水槽をじつと見つめた。その目には強い決意。未来の彼との約束を果たす為、彼女は此処に立っている。手綱こそ一度手放してしまつたが、彼女は決して諦めた訳では無かつた。何かに誓うかの如く彼女は目を閉じ、手を握る。

「待つてなさい、必ずアンタを助け出してやるからね」

士郎

一切の照明が無いはずなのに、星のような光に満たされた広大な部屋。そこは無数のモニターやボタン、大小様々な機器に、チューブやコードの類で溢れていた。それらは全て空間の中央にある巨大なビーカー……直径四メートル、全長十メートルを越す強化ガラスで出来た円筒の器に繋がっている。円筒には赤い液体が満たされており、緑色の手術衣を着た人間が逆さに浮いていた。その『人間』は銀色の髪を持ち、男にも女にも見えて、大人にも子供にも見えて、聖人にも囚人にも見える。

アレイスター。学園都市の統括理事長。身体の殆どの機能を機械に任せる事によって、推定一七〇〇年もの寿命を手に入れる事が出来た『人間』。学園都市のありとあらゆる出来事を通じ、有事の際には幾万通りもの解決策を瞬時に叩きだせるほどの怪物。

そのアレイスターが今、ほんの少しの間ではあるが無窮の思考の海から浮き上がり、一つのモニターに気を取られていた。モニターから察するに、時空もしくは空間の歪みとでもいふべきか、不自然な座標空間の揺れが学園都市第七学区の上空で起きていたのだ。空間の歪み、それ自体は別に学園都市の科学をもつて起こせないものでもない。

むしろ、アレイスターが気になつてゐるのはその後の事。何の規則性も無く揺れ続けていた歪みだが、不意に一瞬、明らかに不自然にたわむ。今現在は、一般的に真夜中と言へる時刻だ。空も曇り空で視界は悪く、この不可思議な現象をともに観測出来たのはアレイスターぐらいであろう。

急激な変化に観測機器がアラートを告げているのが判る。だがアレイスターは、全く慌てていなかった。歪みそのものの発生からは、既に十秒ほど経つてゐる。それだけの時間があればアレイスターには対策を考えるには十分であつた。後は、結末を見届けるのみ。観測地点に、より意識を傾けるアレイスター。

ついに、歪みが今までに無いほど大きく揺れる。そしてその歪みから、ポンツとコミカルな擬音が出てきそうな感じで二つの黒い物体が飛び出してきた。なんとというか、予想していたよりもあまり緊張感を感じさせないようなそんな出来事に、思わずアレイスターは目を細める。まあ、五感さえも機械で管理しているかの人間にとっては本来そんな必要は無いのだが。

観測機器によれば、既に空間の歪みは終息を迎えつつあり、突然歪みから出現した黒い物体は何のアクションを起こすことなく、第七学区へと落ちていったという事は伝えていた。さらにあの黒い物体は、黒い服を着た人間と靴のような物であると計器は伝えている。残念ながら角度の関係か、その計器では落ちてきた人物の顔を確認するこ

とは出来なかつたようだ。

アレイスターは考える。学園都市には十一次元における絶対位置座標を正確に把握し、特殊な計算式によつて『空間移動』を可能にする能力者が五十八人ほどいる。だが、今のアレはそのいづれでもない計測機器は告げているし、能力無しにあんな芸当を可能にするような、そんな方法はこの学園都市の科学力でも難しい——出来るかどうかは別として——と断定した。

そもそも、東京の三分の一の広さを誇る学園都市の内部を完璧に把握しているアレイスターがアレの予測も出来無かつたと言う事は、アレは学園都市の外部の何かが原因であるという事で、それはつまり学園都市のセキュリティを丸ごとすつ飛ばして此処に現れたという事でもある。何も学園都市への不法侵入が、不可能と言っているわけではない。敢えてアレイスターはそれを見逃してはいるが、その気になれば不法侵入くらいならば可能だ。

ただ、それをアレイスターが事前に感知し得なかつた事が重要なのであつた。アレイスターは考える。あの現象は科学とは「全く別の法則」を利用して起きた何かであると。前触れも無く、ただ自分の『庭』のど真ん中に異物が入つてきたと言う異常。アレイスターは、それを可能にする術を知っている。

魔術。科学とは異なる法則を持つ、世界の異端。

この世界の常識を支配しているのが科学であるならば、魔術はその裏を補うものだ。大多数の一般人を含め、「科学側」に存在する人間でもその存在を認知している者はそう多くない。そんな秘匿された存在が、この科学が支配する街である学園都市に侵入してきた可能性がある。学園都市内部の出来事に付き、本来ならこちらから出向いて処断するのが得策だが、「魔術側」がかかわっていると云うのなら話は別だ。

都合のよい事に、つい先日学園都市へと侵入した「禁書目録」を保護するためにイギリス清教の魔術機関「必要悪の教会」から学園都市への関与に対する取引が持ち掛られたばかりである。向こう側が勝手に接触し合ってくれるならばそれで良し。接触する様子が無いのなら、こちらから圧力をかけるまでだ。ただ、アレイスターには一つ気になる所があった。

それは、あの人物の落下予想地点。狙って落ちたのかは知らないが、あの地点に落下したという事はアレと関わり合う事になるには必須である。と、なれば。(……もしかすると、プランを短縮出来得るかもしれない)

あの落下地点にはアレイスターのプランに深く関わってくる要素の一つが存在している。だがアレイスターはイレギュラーの要素すら、プランの短縮に組み込みさえ出来る傑物。今回も、その例外ではなかった。

落下した人間がどのような人物かはこれから調べるとして、今は様子見の段階だなど

アレイスターは結論付けた。アレと関わり合う事で、プランが短縮できる可能性があるならばそれに越した事はないからだ。しかし相手は魔術師である可能性が高い現状、一応は部外者となっているアレイスターが今直接関わる事は出来ない。一旦は魔術側の反応を見る必要もあった。それを含めて、プラン短縮について考え始めるアレイスター。

餅は餅屋に、この国の諺である言葉を思い出しながら、アレイスターは再び思考の海へと沈んでいった。

そうして出会う

夏休みを一週間ほど先に控えた七月半ばの夜遅く。学園都市の高校生である上条当麻は、へとへとに疲れながら学生寮の自室へと向かっていた。学生寮の一室といつてもアパートの一室のようなもので、いわゆるワンルームマンションでの一人暮らしのようなものでもある。

「はうあー」

なんとも間抜けな声を上げながら、上条は部屋の床に倒れこんだ。最近よく突っかかってくる、名も知らぬビリビリ中学生が余りにもしつこかった為、すわマイリマシターと下手な演技をかましたら、逆に火に油を注いだが如く激怒され、一晚中追い回されていたという訳である。

「……不幸だ」

幾度と無く吐いた言葉をぼそつと呟く。もしかしたら呟いた数だけでギネスに載るのではとも思ったが、そんなギネスはこちらから願いたい下げだコノヤローと呻く。明日が日曜だと言うのが不幸中の幸いと言う奴であろうか、もしも平日だったらば間違いなく授業中の居眠りのフルコース、小萌先生の説教付きである。

小萌先生の説教もさることながら、それに伴う補習やクラスメイト達からの、子供をいじめめる的な目線も恐ろしい。どう見ても十二歳くらいにしか見えない子供先生は、生徒達からも大変な人気者なのだ。

「とりあえず飯か……」

なんとか立ち上がり、んんと体を反らして背筋を伸ばす。なにしろ夕飯も食わずに追いかけてここをしていたのだ、そろそろ胃液で鳩尾が溶けるんじゃないやね、とアホな事を考えてしまいうくらいに空腹だった。別に何か買ってきてもよかったのだが、持ち前の不幸氣質を遺憾なく発揮し、追いかけてこの最中に財布（カードは入ってなかった）を落としてしまっていた。勿論財布は見つからず、今の上条は所謂一文無しである。

「つと、その前にと」

台所へ行って軽く夕飯を作る前に、上条はまずベランダへと足を向けた。なにしろ朝は良い天気であつたし、布団でも干しておくかなー、とか考えていたので、ベランダには朝干した布団が、干しっぱなしになっているのである。学校の補習や一晚耐久追いかけてこさえなければ、冷えきる前に畳み込めていたはずの布団。まだふかふかかなー、いやもう駄目だろうなーと己の運の悪さを再確認しつつ、ベランダへの網戸をぱつと開ける。

「……あれ？」

ベランダに視線を向けた上条は、その場のちよつとした異変に首を傾げた。ベランダの手すりに、何か黒いものが引つかかっている。干していた布団は白い奴一枚だけである。真つ黒なものを干していた覚えはないし、そもそもそんな布団は上条の部屋には無い。

上条が首を傾げながら目を凝らしてよくよく見ると、それは布団ではなかった。布団にしては横に小さく縦に長い。違和感を覚える最たるものは、なんだか人のような形をしているという事。というか、干してあつたのは黒い服を着た男性だった。

「はあ?」

上条は慌てて駆け寄り、男性の様子を見る。男性は意識がない様で、駆け寄ってきた上条に何の反応も示さない。

「いやいや、これはおかしいだろう!」

事態の余りの在り得なさに、上条は目を丸くして叫ぶ。帰宅したら、見知らぬ男がベランダで干されてましたという状況、テレビでも見た事がないどころか、前代未聞である。正直洒落にならない位の出来事であった。でもこのまま放っておく訳にはいかなしいしなと上条は考えると、とりあえず男性を床へ下ろし部屋の中へと引きずり込む。

なんとか下ろすことには成功したが、重いなと思わず呻いてしまうほど、かなりいい体格をしているようで、引きずって運ぶのにも一苦労した。出来るだけ優しく床へ寝か

せるも、改めて男性の服装を確認するに顔が少し引きつる。

「……もしかなくても、これは殺し屋さんって奴じゃございませんかい？」

勿論上条は実物なんか見たこと無いが、そう感じてしまう程その人はおかしな様相をしていた。男性は上下真つ黒のスーツ、見た目190cmくらいの長身。それだけならまだサラリーマンかもしれないと言いついできよう。しかし浅黒い肌、鈍い鋼色のような髪というおよそ普通とは言えない風体をしていて、かなり筋肉質な体をしている。マフィアだと言われても納得出来るような出で立ちだ。ただ顔色が悪く、どうにも健康そうには見えない。顔立ちは何となく日本人らしい顔立ちをしているようだが、肌と髪の色を組み合わせがそれらしくない。……髪を染めているようにも見えないし。

教師という可能性も一瞬考えたが、そもそもこんな所に引つ掛かっている意味が分からないし、研究者だったら白衣のはずだ。大体そういった類の人物が、学生寮のベランダで干されているわけが無い。やばい拾い物(?)をしたかもしれないと冷や汗をかき、思わず電話へと手を伸ばし、警備員アンデスキルへと連絡する事も考えた。が、がしかし。

「どうも、ね」

後味が悪いと言うか、なんというか。病人のような人物をそのまま放り出して警備員アンデスキルに突き出すのは薄情すぎるんじゃないかねえの、と上条さんは考えているわけですよ、と自分に言い聞かせる。明らかに不法侵入の上、ヤバい職業についているかもしれないような

人物（しかも無関係）に、薄情もクソも無いが。

ついでに言うなら——というよりこちらが本音かもしれないが——、上条はこの男性に少し興味がわいていた。別に男性自身に興味があいたという訳でなく、強いて言うならこの状況に、である。何の変化も無い日々をただただ過ごす高校生にとつて、こういったちよつとした非日常と言う奴は、全くそそれないと言つたら嘘になるだろう。上条もその例外ではなかった。

なんとなく、とりあえずは警備員^{アンチスキル}へ電話をすることを止めておき、男性の様子を見ておく事にする。そうしてちよつと気分が落ち着くと、上条は先ほど自分が何をしようとしていたのかを思い出した。

「……布団、干したまんまだったな」

確証は無いが、男性はしばらく目覚めないような気もするので、上条は先に布団を取り込んでおこうと決める。さっきは男性のほうに気が向いていて、寝る前に布団を取り込んでおくことをすっかり忘れていたのだった。

「夜のうちに突然の雨で濡れて、グシヨグシヨでしたっつーのは話になんねえからな」
伊達に不幸経験値が常人の数倍も持っているわけではない、予防できる事はきちんとやるのだよと、意味がわからない事を考えながら、もう一度ベランダへ向かう。

「……あり？」

ベランダの先で布団を取り込もうとして、思わず声を上げてしまう上条。なにも布団が無いわけではない、男性を部屋へ運んでいる間に風の悪戯で布団が吹っ飛ばすような、そんな不幸なイベントが起きているということは無かった。しかし先ほどは気づかなかったのであろう、よく見たらベランダの端の方に、これまた真っ黒なスーツケースが転がっていた。しかも、かなり大きいサイズのものだ。

「なんだ、これ？」

少なくとも、上条には見覚えの無いものである。こんなでかくて真っ黒なものは、記憶に無い。と、すると。

「つまり、あの人のものだってわけか」

自分の物でない以上、その可能性は高い。持ち主がベランダで干されていて、どうしてその荷物はきちんとベランダで直立しているのかとか言いたい事は色々あったがここは飲み込んでおく。とりあえず布団を取り込んでおくことはさておき、あの男性のものであろうスーツケースを部屋へ運び込もうとする上条。取っ手をつかもうとして、スーツケースに上条の右手が触れたその時、

「……………？」

バキッと妙な音がして、スーツケースが動いたような気がした。しかし、上条の右手には何の衝撃も無い。静電気か何かか、もしくは気のせいかと思ひ込み、もういちど、

スーツケースに触れる。

「……今度は何の反応も無く、普通に取っ手をつかむことが出来た。

「なんだったんだ今の？」

やはり、気のせいかと、スーツケースを部屋の中へ運び込む。部屋の中央にそれを置き、調べやすいように横向きに動かした。

「……悪いとは思うけど、こいつの中身を調べればなんか判るかもしねえからな」

普通だつたらまずやらないようなことだが、なにしろ事態が事態、何かこの男性に関する手がかりがあるならばと、スーツケースを調べる上条。大きさ以外は何の特徴の無いものであり特にイニシヤルやマークが付いていたりするわけでもなく、当然の事ながらしつかりと鍵もかかっていた。ただ、まるで新品の如く傷が全く付いていなかったが。

「……仕方ないか」

上条は一人呟くと、ちよつとすいませんよ、と誰に言うでもなく起きる気配の無い男性の服のポケットを探る。鍵がかかっているなら、その鍵くらいは持っているだろうと考えて、ポケットやらを漁っているのだが……。

「何も入ってないな」

どのポケットを探っても、ホントに何も入っていない。スーツケースの鍵はおろか、

財布も携帯電話も、何も持っていないのである。

「んん？」

これは駄目なパターンかと諦めかけつつ、スーツの内側の胸ポケットを探ったとき、平べったい紙のような何かがそこに入っていることに気づく。なんだろうと、上条はそれをそつと引つ張り出した。引つ張りだした物に目を向けて、上条の目はそれに釘付けになる。

それは写真だった。一組の男女を中心に何人かの人が集まり、笑い合っている写真。そこそこ古い物なのだろう少し色褪せているが、濡れてしまわないようにきちんとラミネート加工をされていた。

「これってこの人だよな……」

写真の中心に写っている男女のうち、男の方はどう見ても、目の前で横になっている男性であつた。古い写真のはずだが不思議とその姿は殆ど変わっておらず、どこか気恥ずかしそうな笑顔で写っている。仲睦まじいような様子で隣の女性と腕を組んで（組まされて？）おり、周りの人たちも皆幸せそうな笑顔を正面に向けていた。

「……、」

改めて男性を見る。相変わらず青い顔色をしており、目覚める気配も一向に無い。そのくせ呻き声も上げず、汗も全くかいていない。

「はあ……」

ため息とともに頭をガシガシとかき、立ち上がる。上条にはどうもこの男性が、悪い奴には見えなくなってきたてしまったし、いまさら追い出してしまふ気もなくなってきた。

「ちつ、お人好しだな俺も」

そうと決めれば、このまま床に男性を寝っ転がして置きたくも無い。服を脱がすかどうかはさておいて、とりあえず布団を敷いてその上に男性を横たわらせる。幸い、寝床も2セット作れるだけのモノはあり、上条が寝る分にも問題は無かった。自身が風呂に入ったり遅すぎる夕飯を食べたりしている間にこの人は起きるかなと思っていたのだが、ちつとも起きる気配はない。ただ心なしか顔色は良くなってきたような気がした。

上条は男性が目を覚ますまでは起きておこうと決め、こりや完全に徹夜かなと半ばあきらめつつも男性を見張っていたが。……さすがに一晚耐久ランニングが効いてきたのか、いつの間にか上条は壁を背にしたままぐっすりと眠ってしまった。

夢を見ている、胡乱な夢を。聖杯戦争、時計塔、幾多の戦場。決して届かぬと知りな

がら、ある理想を追い続けた。自分の意思で、追い求めた。

—— 体は剣で出来ている、常にも人を助けんとして、あらゆる戦場を駆け抜けた。

—— 血潮は鉄で、心は硝子、報われないと知つていても、足掻き続けた。

—— 幾たびの戦場を越えて不敗、ただ一度も敗走もなく、ただ一度も勝利もなし、退く事は無く、乗り越える。幾ら救おうとも、零れる命は確かにあつた。

—— 担い手はここに独り。剣の丘で鉄を鍛つ、あきらめることを知らず、ともに歩まんとした手すら振りほどぎ。

—— ならば、我が生涯に意味は要らず、理解を求めようとも思わずに。

—— この体は、無限の剣で出来ていた　ただただ人を救い続ける……

「……夢か」

ずいぶんと懐かしいものを見ていた気がするなど、衛宮士郎は思い返した。そもそも夢を見ること自体が、久しぶりな気がする。まどろんでいた意識の覚醒とともに、体をゆつくりと起こし辺りを見回す。

「(ハハ)は、……どこだ？」

全く見覚えのない、多少なりとも散らかった部屋。アパートかマンションの一室のような部屋であり、その壁際の布団に自分が寝かされていることに気づく。そして、反

対側の壁に寄りかかったまま寝ている、一人の少年。これまた見知らぬ顔であり、ツンツン頭の黒髪で高校生くらいのようにも見える。

「二体……」

何がどうなっているんだと、衛宮士郎は自分がここで寝ている理由を思い出そうとするが、

「……駄目だな、記憶が混乱している」

自分が何者かで、どういう人物かはわかる。聖杯戦争の事も、倫敦を出て戦場を駆け回っていた事も覚えている。しかし、それから先がひどく曖昧だ。どこで何をしたのかというのなら、おぼろげでも思い出す事が出来るのだが、時系列というか記憶の順番のようなものが、めちゃくちゃになっている。どうやら記憶が混濁しているらしい。

「とりあえず、現状把握が重要だな」

衛宮士郎は魔術回路を開くと、まずは自分の体に軽く解析の魔術を掛ける。……『^ア全て遠^{ツア}き理^ロ想^ン郷』も存在を確認できる、二十七本の魔術回路にも問題は見当たらない。特に体に異常もない様であるし、魔術も問題なく使えるようだ。次に記憶障害について、自分に何らかの魔術的要素がかかっているのではないかと疑いもしたが、詳しく解析を掛けても、そのような異変は見つからない。

「……念には念を入れるか」

少年が未だ目覚める気配がない事を確認しつつ、部屋の壁に手をつき今度はこの部屋を解析に掛ける。監視カメラやトラップ、そういった見張りの類の要素が科学的にも魔術的にもない事を確認した上で、衛宮士郎は静かに立ち上がると手元に意識を集中させた。

「トレス、オン
投影、開始」

衛宮士郎が小声で呟くと、その手元にはギザギザの、とてもではないが実用的であるとは思えないような、奇妙な形をしたナイフが現れた。それは『破戒すべき全ての符』と言われるもの。「裏切りの魔女」メディアの象徴たる宝具であり、ありとあらゆる魔術を初期化する最強の対魔術宝具。

衛宮士郎のみが使える「無限の剣製」から零れ落ちた、神代の武器すら再現可能な投影魔術。それを使って宝具を投影すると、その宝具を自らの手の平へ当てそつと真名を紡ぐ。

「破戒すべき全ての符」

……宝具は何の反応も起こさず、衛宮士郎にも何も起こらない。どうやら自身に何らかの魔術が掛けられているという可能性は無いようだ、衛宮士郎は結論付ける。考え過ぎかと衛宮士郎は宝具を消すと、今度は目の前の少年をじつと観察した。

先ほど部屋に掛けた解析の結果からここはワンルームマンションのような建物の一

室であり、一部やたらと高度な技術が使われている他何の変哲もないただの建物である事が判っている。そしてこの状況。自分には布団が掛けられ横に寝かされており、この部屋本来の主であろう少年は壁を背にして寝てしまっている。

(以上から察するにつまり……)

ここは普通の部屋であり、目の前の少年はおそらく何らかの理由で倒れていた自分を助けてくれたのではないかと、衛宮士郎は当たりをつけた。改めて少年を観察するに、東洋人のようであり魔術も知らぬごく一般の学生のように見える。

また、床に散らばっている、教科書やプリントの類に使われている日本語や名前を見るに、ここが日本であり、目の前の少年が、『上条当麻』という名である事が判った。だが少なくとも衛宮士郎は、上条当麻なる人物に覚えはなく、その顔にも見覚えがない。

「参ったな……」

上条が起きなければ衛宮士郎は事情を聞く事も、更に詳しい情報を得る事もできない。恩人かもしれない人物を放っておいて外へ出られるほど彼は薄情な人物ではなかったし、まさか寝ている少年を無理矢理起こすわけにもいかない。とりあえず外の様子でも見ておくかと、部屋の窓からそつと外を覗き見る。衛宮士郎は、自分の視力にそれなりの自信を持っている。強化の魔術と併用すれば、km単位での遠視が可能である。それゆえに、衛宮士郎はこの都市の異常さに容易に気づく事ができた。

「これは……」

衛宮士郎は外を覗き見て、その目を見開く。街並み自体は別に気になる点は無かった。いかにも発展した都市と言った様相を見せており、衛宮士郎の中にあるイメージとしては東京が一番近いだろう。異様なのは所々に存在する機械群。路面には滑るように動く樽の様な形をした機械が徘徊しており、街のあちこちに近未来的な要素を含んでいるのが分かる。空に至つては電光掲示板を掲げた飛行船の様な物が浮いていた。

気になる点は多々あるがそれらをまとめると、技術が進みすぎている、ただその一言に尽きた。少なくとも自分が知っているこの時代の風景よりかなり技術が進歩しており、そのくせ服装などはそうそう変わっていない。こんな技術を持つところは日本中、いや世界中にも衛宮士郎には心当たりがなかった。

（未来？ いや、私が永く寝ていたのか？）

どちらにせよ情報を収集しなければと少年のほうへ顔を向けるが、少年は起きる気配がない。仕方ないなとため息をつく、衛宮士郎は少年を起さぬように布団へ寝かせると、少年を持ち上げると、中肉中背くらいの体格であるがそれなりに筋肉質な体をしているのが分かった。だが人外的な体付きであるかと言つてそうではなく、至つて普通の運動を日常的に嗜んでいる学生と言つた感じだ。特に何かを隠し持っていた訳でもない、それらの事からこの少年が一般人であろうという事をより確信する衛宮士郎。

つまりこの少年は何の邪気も無く、見ず知らずの自分を助けてくれたという事だ。

衛宮士郎はその事に感謝すると同時に、何となく心が洗われた様な気分になる。こういう人間が存在する事は、衛宮士郎にとってある意味で救いだつた。そんな人間が存在するといっただけで、世界が平和に向かつているように錯覚させ、より自身が励む事が出来る。衛宮士郎にとって他人を救うという事の対価は自分が他人を救つた事自体に直結するものであるが、救える人の存在もまた対価と成り得るのだ。

相も変わらず歪んだ発想ではあるが、それでも素直に少年に感謝する。そうして衛宮士郎は少年を起こすつもりも無いので、彼が起きるまで大人しくそこらの本でも読んでおく事にした。幸い、学生の部屋らしく本の種類や数には困らない。教科書や雑誌でも今の衛宮士郎にとっては、時代背景を考察する上で重要な資料に成り得る。一先ずは社会関連辺りの本を手にとると、貪る様にページを捲り始めた。

上条当麻は学生である。幾ら学生寮に居るとはいえ平日にはそれなりに早く起きなければならぬし、体内時計もその時間に勝手に目を覚ますように習慣付けられている。上条は昨日遅くまで起きていた割にはわりかし早く目覚めると、布団にもぐりこんだまま寝返りを打った。

(今日は日曜だし、もう一寸寝てよっかなー)

目を瞑ったまま、そんな事を考える上条。なんか重要な事忘れてる気がすつな、なんだったけかな、と寝ぼけた頭を回す。眠い理由は帰りが遅く寝るのも遅かったから。帰りが遅かったのは追いかけてこをしていたから。では、寝るのが遅かった理由は？そこまで考えて、上条は急に昨日（今日？）の夜中の出来事を思い出した。

「そうだ！俺わけわかんね、真つ黒い殺し屋さん（？）を一人拾って……」

上条はぼつと布団から上半身を起こすと、まず自分の異変に気づく。

（あれ、俺、昨日布団で寝てたっけ？）

確か上条の記憶通りならば、自分は壁際であの男性を見張っていたはずである。何時の間にか寝落ちしてしまっていたが、間違いはない。それが今、上条が布団に寝ていたという事はつまり……。嫌な予感がしつツギギギと妙な擬音が出ているかの様な動作で、上条は首だけを真横に曲げた。目に入ったのは黒い服を着た男。壁に寄り掛かりながら、上条の物であろう教科書を読んでいる。男性は物音に反応したのかその顔を上げると、上条が起きたことに気付いた。

「ああ、ようやく起きたか」

気楽な声。なに気にする事はない一時間も待たされてはいないよと上条に声を掛ける、昨日の男性がそこにいた。どこと無く落ち着いた大人の雰囲気醸し出しており、悠々とした笑顔を上条に向けている。

何で自分が寝かされているのか、どうして男が壁際で自分の本を読んでいるのか。聞きたい事は多々あったが、急な事態で脳が状況に追いついていない。

「ど、どちらさままでせうか?」

混乱の極みにあつた上条が何とか搾り出せたのはそんな台詞。自分で助けておいてそれはねえだろ、いやむしろまともに声を掛けられただけで大健闘モノだったのか? と、上条はその時の自分を振り返つてそう思う。焦りで日本語がおかしな事になつてはいたが、そんなこと気にしている余裕は無い。男性は上条の様子にククツと可笑しそうに笑うと、

「衛宮士郎、私の名前は衛宮士郎だ」

とそう答えたのだった。

第二魔法

時計塔の魔術師、遠坂凜は同じく魔術師であり自分の後見人でもあるロードⅡエルメロイドⅡ世の真向かいに、机を挟んで腰掛けていた。

ここは時計塔の私室の一つ、ロードⅡエルメロイドⅡ世の部屋だった。権威主義に凝り固まった貴族にありがちな、ごたごたとした飾りはなかったが、何故か倫敦だというのに日本のゲーム機が数台、そして『大戦略』の文字がでかどかどかと書かれたTシャツ。時計塔でも一、二を争う売れっ子講師の部屋は、なんだか魔術師らしからぬ部屋だった。

「ロードⅡエルメロイドⅡ世、あなたにお願いがあつて参りました」

「……ミス・トオサカ、全くしつこいなキミも」

ロードⅡエルメロイドⅡ世は書類から顔も上げずに答える。遠坂凜の方からはその表情を確認する事は出来ないが、どことなくこめかみが引き攣っている様な気がする

「その話は受け入れられない、私は一切関与しないと何度も言つたはずだがね」

「ですから、こちらは何度もお願いに来ているのですよ」

「……キミは諦めるといふ言葉を知らないのか？」

「この件に関しては、私どもは諦める気持ちがありません」

遠坂凜はキツパリとした笑顔で返す。だがその顔には妙に乾いた笑みが張り付いていた。

その様子を目線だけで確認して、ようやくロードⅡエルメロイⅡ世は書類から顔を上げる。

「……まずはそのおかしな口調を止めたまえ。私にまで猫を被られたら、気味が悪くしょうがない」

話はそれからだ、とため息を漏らし彼はペンを机の上に置く。相手がようやくまともに話す気になった事を確認すると、遠坂凜は机に身を乗り出した。

「一体アンタは何が不満だって言うのよ！ 等価交換の対価が気に入らないの！」
「別に、そういうわけではないがね」

ほぼ180度違う女性の口調の変化にもさして驚かず、じゃあ何が不満だって言うのよと目の前で珍しく気炎を上げる遠坂凜をじっと見つめて、ロードⅡエルメロイⅡ世は彼女が初めて彼女達の計画を話しに来たときの事を思い返していた。

「衛宮士郎を封印指定から解放する？」

そうよと目の前でこちらを真っ直ぐに見ている遠坂凜に、ロードⅡエルメロイⅡ世は

思わず聞き返す。

「……寝言を言うとはキミらしくないな。寝不足か？それともミス・エーデルフェルトに、妙な魔術でも掛けられたかね？」

何年も前に封印されてしまったかつての相方を今更救おうと妄言を吐いているので、ロードⅡエルメロイⅡ世は彼女が気でも違ったのかと思ってしまった。最近妙な動きをしているのはなんとなく感じ取ってはいたが、まさかこんな事を考えていたとは思ひもしなかった。

「寝言でもなんでもないわ。それにルヴィアの奴も共犯よ」

「共犯とは穏やかじゃないな。一体キミらは何をやらかすつもりだ？」

どうやら気が違ったのは彼女一人だけではないらしいと内心呟きつつ、後見人として私に迷惑がかかるような事は止めてくれよと軽く牽制を掛ける。実際、昔は色々と迷惑が掛かっていたのだ。特に彼女とミス・エーデルフェルトのやり合い（じゃれ合い？）には、何度も頭の血管がブチ切れそうになった。

「何言ってるのよ、ロードⅡエルメロイⅡ世。あなたにも協力してもらおう予定なんだけど」

「……何？それは一体どういう事だ？」

彼女のぼつさりとした言葉に、まさか自分まで協力させるつもりだとは思っていないな

かったので若干顔を引きつらせつつ遠坂凜に説明を求めぬ。何を考えているのかは知らないが、厄介事に巻き込まれるのは遠慮したい。だがそれ以上に、厄介事を中心に立つのはもつと遠慮したいのであるが。

「あなたの力を借りたい。ミリヨネカリオンとのパイプがほしいの、それに降霊についての意見も欲しい」

「……、」

間髪を容れずに彼女が答えた率直な要求と、それに出てきた物騒な名前にロードⅡエルメロイⅡ世は眉を顰めた。ミリヨネカリオン。封印指定の総与の名前である。武闘派が多い封印指定の部門において、それを束ねる人物。決して気軽に関わられるような名前ではない。厄介事の大きさに嫌な予感を覚えながら、遠坂凜に話の続きを促す。

「勿論、等価交換の原則に従ってそれなりの対価も用意してある。計画に協力してくれたら、魔法クラスの儀式もお見せ出来るわ」

「……まあ、話くらいは聞いておこうか」

彼女の落ち着いた様子に、狂気という可能性は一応捨てる。嫌な予感もしているが、魔法と聞いては黙っては要られない。話を聞く気にはなつたので、とりあえず腰を掛けたまえとロードⅡエルメロイⅡ世は目の前の女性に椅子を指し示す。

ありがと、と彼女はすつと椅子に座つた。常に優雅たれ、という遠坂家の家訓は、特

に交渉事で真価を發揮する。落ち着き払ったその姿勢は、それだけである程度のアドバ
ンテージ足りうるのである。話し合う場を作るといふ、交渉の第一段階には、遠坂凜は
成功していた。

「詳しくはまだ言えないけど、もう既に準備は進んでいるわ。それで一番の要因として、
現在封印中の土郎に関する情報がほしいの。たとえばどういふ状態で保存してあるの
か、どこまで残してあるのか」

具体的にどこにあるのかとかね、と遠坂凜は付け加えた。ロードエルメロイ二世は、
それを白い目で見つめる。

「たとえそれが判ったとしてどうする？ 脳と神経しか残ってなかったら？ その場
合、肉体を一から作り直さなければならんぞ。そして悲しい事に、君たちは一番の問題
を忘れてる」

そこで彼は一旦言葉を切る。まるで教師が生徒にわざと考える時間を与えるように、
探るような目つきで遠坂凜の内側を覗こうとする。彼は彼女の教師としての魔術の指
導はしていないが、色々長い付き合いではある。彼女ほどの人物がこの問題に気づい
てないはずがない。そもそもこれが解決できなければ、彼女達の言う計画とやらが根本
的に成り立たない。

「キミ達は、一体どうやって衛宮士郎の封印指定を解除するつもりだ？」

そう、それが一番の問題という奴だった。基本的に一代限りの希少な魔術師に対する、封印指定という称号は解除される事がない。

一代限りだからこそその封印指定でもあるし、他の魔術師を助けるようなそんな奇特な行動に出た魔術師が今までにいなかったという事でもある。さらに衛宮士郎に限っては、用心しないといけないのはそれだけではない。彼にはその魔術の希少性の他に、もう一つ厄介な封印されている理由があるのだ。

「それによしんばキミ達が衛宮士郎を解放するのに成功したとしても、半年も立たずにアイツは再び封印指定にされるか殺されるかしているだろうよ」

その考えはロードⅡエルメロイⅡ世にとって、もはや予想ではなく確信であった。衛宮士郎の特異性を語る上で重要なポイントの一つに、彼は魔術師ではなく魔術使いであるという点がある。

魔術師と魔術使いの違いは魔術師のように根源に到る為に魔術を極めようとするのではなく、魔術使いは他に何らかの目的があつてそのための道具の一つとして魔術を扱っているという事である。衛宮士郎が特殊なのは、その目的が他の者たちと余りに違うからだ。その目的とは、つまり彼の理想。余りにも無謀すぎて、常人ならば失笑してしまう遠き夢。

「何せアイツは、正義の味方を本気で目指しているのだからな」

あの底抜けのお人好しの顔を思い浮かべながら、ロードⅡエルメロイⅡ世は顔を歪めた。衛宮士郎は、魔術の秘匿を気に掛けない。たとえ衆人環視の中だとしても、魔術を使うことで人を助けられるのなら彼は躊躇なく魔術を使う。

その結果、教会からは主の御心に反するものとして代行者を送られ、協会からは代行者による裁きによって彼が殺される事で希少な魔術が失われる事を防ぐ為に封印指定の執行者を送られる。彼が封印指定から仮に解放されたとしても、その生き方を変えるとは思えない。衛宮士郎の歪みを知る人物の一人として、その深さには何度舌を巻いたことか。結局再び少しでも人を救うため戦場を駆け巡り、そこで死ぬかまた捕らえられてしまうかであろう。

「それに一度衛宮士郎を引き止めるのに失敗したキミ達が、再びアイツを引き止められ続けるとも思わない」

その事実もまた、彼が計画の無謀さを主張する根拠の一つ。実際彼女達は一度、彼の手綱を支えきれずにその手を手放してしまっただから。キミ達に衛宮士郎を解放するのは無理だ、もしくは無駄だとロードⅡエルメロイⅡ世は冷酷に告げる。たとえ彼女達がなんと言おうと、彼はその事を確信していた。

少なくともロードⅡエルメロイⅡ世にとつては衛宮士郎の救出というのは無駄な試みであり、どうしても彼女達が衛宮士郎を救いたいと言うのなら、自分に一切関わるこ

となく勝手にやってくれと。たとえどれだけの条件を出されたとしても、結果として無駄にしかならない事が判りきっているのなら、自分にとつては無価値であると。

そんな突き放すようなロードⅡエルメロイⅡ世に、遠坂凜はむっと顔をしかめる。

「別にアイツをそのまま解放するとは言つてないわよ、それなりの措置はとらせてもらうわ」

「ふん、死ぬまで監禁でもしておく気かね？ 極論をいうならば、それこそ、封印指定と大差はあるまい」

馬鹿馬鹿しいと顔を背け、そろそろ彼女を退出させようかとしたその時、

「とばすのよ。アイツを、別の世界へ」

遠坂凜のその言葉に、彼は動きを止めた。ゆっくりと、背けた顔を彼女の方へと向ける。

「とばす、だと。つまりキミ達は……」

「ええ、かなり限定的だけど第二魔法を再現したわ」

資金やら準備やらでかなりかかったし大体一人用でしかも一度きりだけどね、と付け加える遠坂凜に彼はまだ何も返事が出来ない。

魔法。

現代においては、たった五つしか存在しない「根源の渦」より引き出される力の発現。

ありとあらゆる技術を駆使しても、実現不可能な「結果」をもたらす奇跡。そのうちの第二魔法とはつまり、『並行世界の運営』。数限りなく存在する平行世界を、自由に行き来する事が出来るというもの。

いくら稀代の才能を持つ彼女達が協力し合ったとしても、限定的ではあるがそれを再現してしまうとは。ロードⅡエルメロイⅡ世は別の意味で、やはり彼女達はどこかおかしいと思ってしまうた。

「……それでどうするのだ。平行世界へ送れば解決するとしても？ アイツはそんな生易しいものではないぞ」

彼は何とかそれだけを口に出す事は出来たが、もつともな話でもある。平行世界でも同じことを繰り返し結果捕まってしまったのなら、それこそ無駄というやつである。そういう意見を予想していたのか、はたまたいつも不機嫌そうな自分の後見人の珍しく少し呆けた様子に気を良くしたのか、遠坂凜はにやりと口の端を上げた。

「それくらいわかってるわ。でも、どの道アイツは平行世界へ送り出さないとイケない。勿論アイツの綱を握る、お目付け役も一緒にね」

「どの道、とはどういうことだ？ それに限定的なキミ達の第二魔法では、まだ一人しか平行世界へ送れないと言っていないかったか？」

「正確には、一人分の大きさの穴くらいしか開けられないってこと。それに人を二人送

る訳でもないわ」

どう、興味湧いてきた？と悪戯っぽく微笑む彼女に、むむむとロードⅡエルメロイⅡ世は呻く。どうやら彼に興味を湧かせるという交渉第二段階にも成功したらしい。

「お目付け役、と言ったな。それは誰だ？　そしてどういう手段で衛宮士郎についていさせるつもりだ？」

「それはね……」

「ちよつと、人の話を聞いているの!？」

遠坂凜の声に、ロードⅡエルメロイⅡ世は、意識を現在へと戻した。相変わらず、気炎を上げながら迫ってくる彼女の様子に、にやりと笑う。

あの時と何も変わっていない。一人の男の為に、ここまで彼女達は頑張れるのかというその熱意に、彼は内心呆れてしまう。だが、その熱意は彼は決して嫌いではなかった。

「まあ、落ち着きたまえ。この私にだって、色々と準備や覚悟という奴が必要なのだよ」あの怪物もとの交渉にはかなり気を使いそうだからな、とため息をつくロードⅡエルメロイⅡ世。彼のその言葉に、じゃあと驚いたようにこちらを見つめる彼女に言い放つ。

「ああ、封印指定総与とのパイプくらい紹介してやる。あとは…、降霊科としての意見だったか？」

「ありがとうございます!!」

突如良い返事を出した彼の言葉にさつと素早く、しかし落ち着き払って頭を下げる遠坂凜。思わず敬語を使ってしまう。何故彼が突然協力してくれる気になったのかは分からないが、協力してくれると言うのならそれにこした事はない。

彼女のその姿に苦笑しつつも、ロードⅡエルメロイⅡ世は思いを馳せる。実際、計画に協力すること自体は吝かではなかった。デメリットが無い訳ではないが彼にとつてはメリットが大きかったし、計画自体も自分が協力しさえすれば無理が無いものでもない。実を言うと彼が返事を渋っていたのは、お目付け役の人選への不満であった。勿論そんなことは遠坂凜の目の前では、おくびにも出していないが。ただお目付け役の人選といつても、別にその人が気に食わないと言うわけではない。ロードⅡエルメロイⅡ世自身も、知っている人であるしおそらく最適であろうとも思う。

言うなれば自分自身の王への遠慮と言うか配慮と言うか、そんなようなものである。勿論彼の王がそんな細かい事を一々気にするかと言えば、それは否であるが。

要は彼自身との折り合いをつけるのに時間を要した、という事である。

(まあ、こゝで意地になつてもな)

頭の中で豪快に笑い続ける彼の唯一の主君にちよつと断りを入れながら、ロードⅡエルメロイⅡ世は結局、遠坂凜達の計画に協力してやる事を決めたのだつた。

「衛宮、士郎……さん、ですか」

そうだと頷く、目の前の衛宮士郎と名乗る男性に上条当麻は思わず身構えていた。ただ、上条が寝ている間に自分を布団へと運んでくれたのならば、彼は悪い人ではないのだろうと考える。しかし正体も知らない全くの他人を家に入れていて、意図せず身構えてしまうのは仕方のない事ではある。

「ああ、そう身構えないでくれ。怖がらせてしまったのならすまない。だがむしろ、君に感謝をしているくらいなのだ」

私を助けてくれたのだろうか？ ありがとう、と頭を深く下げる衛宮士郎に上条は警戒心を少し解いて彼の話を聞く事にした。

「それで、一体どうしてあんなところに引つかかっていたんですか？」

「別に敬語を使う必要はない。君は私の恩人なのだし、衛宮とでも士郎とでも好きに呼んでくれ」

「は、はあ」

どこか抜けた返事をする上条に、衛宮士郎は、ふむと考えると逆に上条に質問した。「すまないが、私がどこにいたか教えてもらえないかね？」

実は全く覚えてなくてな、とすまなそうに言う衛宮士郎に上条はいや別にいいけど、と返すと彼をペランダへと案内した。

「ここにアンタ、引つかかかってたんだ。こう……、なんていうか布団みたいな格好で」

だらんとペランダの手すりに覆い被さり、状況を再現する上条。その様子をじっと観察していた衛宮士郎であったが、しばらくして深く息を吐く。

「駄目だな。何も思い出せん」

やれやれと首を振る衛宮士郎に上条はなんとなく申し訳ない気になったが、一番重要な事について聞くのを忘れていた事を思い出した。

「……そういや、アンタ何者なんだ？」

名前やらなんやらの前に、どうしてこれを聞かなかったのか。正直に話してくれるとは限らないが、場合によっては警備員ジャックメイトに連絡しないといけない。そう意気込んで上条は疑問を投げかけたのだが、

「本当にすまないと思うが、実は自分が何者かも覚えていないのだ」

そんな、斜め上の回答に動きが固まってしまった。

「……何も覚えていない!? 記憶喪失って奴か？」

「どうやらそうらしい。自分の名前やぼんやりとした事なら思い出せるのだが……」

衛宮士郎の申し訳なきような顔を見て、嘘をついている様には上条には見えなかった。上条が人の心を読めるような能力を持っているのなら真偽はすぐに分かるのだが、あいにく上条は、無能力者と学園都市からは認定されている。そしてこの右手に宿っている能力は、『異能の力』なら問答無用で打ち消す事のできる「幻想殺し」イマジネーションレイカー。

正直、今は全く役に立たない。そんな様子のそれは参ったなと顎に手を当てて考えている上条に、衛宮士郎は内心すまないと再び謝った。

当然名前しか思い出せないというのは、嘘である。確かに記憶が万全と言う訳ではないが、所々思い出せるのは事実ではある。しかしまさか魔術使いとして戦場を駆け巡っていたら、いつの間にかここにいましたなんて言う訳にもいかない。

そんな厄介ごとを初対面の少年に話すわけにも行かないし、どんな事に巻き込まれるかもわからない。ろくにお礼も出来ずにこの場を去るのは忍びないが、この土地の詳しい地理的状况や年代的なことを聞いたら、迷惑を掛けない内にさっさと退散しようと思っていたのだが、

「まあ、ここは最先端の技術をかき集めてある学園都市だし、記憶喪失くらい何とかなるんじゃないのえ」

と言う上条の言葉に、今度は衛宮士郎が固まりかけた。聞きなれない言葉に、思わず

言葉を返す。

「学園都市?」

「そう、学園都市。」

知ってるだろと返す上条。この日本いや世界に住んでいる人にとって、日本に科学技術に特化した(しすぎた)都市があると言うのはある程度常識であるはずなのだが、

「……いや、知らないな。良ければ説明してくれるか?」

「まじかよ!」

えー、と上条は声を上げるが、知らないものはどうしようもない。記憶喪失でも一般的な常識は失っていないと主張する割には、こんな常識も知らないとは。この人は世捨て人か何かかと上条は思ったが、とりあえず知っている限りの説明をする事にした。

「学園都市っていうのは、東京西部にあつて東京の三分の一ほどの大きさを持つ科学技術に特化した都市なんだよ。それで、特に能力開発に力を入れててその研究をしてる。だから「外」と比べて二、三十年は技術が進んでるとかよく言われるな」

「つまり、恐ろしく技術が進歩した都市である?」

そういうこと、と上条は頷く。理解が早いようで助かる。そして上条は更に説明を続ける。

「人口は二百三十万くらいで、そのうちの八割が学生。んで、学生はみんな何らかの『能

力者』だな」

だから学園都市って言うんだという説明に衛宮士郎は、ん？と少し違和感を覚えた。「能力者、と言ったな。なんだそれは？」

「まあ、簡単に言っちゃまうと、超能力ってやつだよ。テレビとかでの笑い者じゃなくて、数式の確立された『異能の力』のこと」

「は？」

今度こそ、衛宮士郎は完全に固まってしまった。魔術ではなく超能力。別にそういった類の力に心当たりがない訳ではないが、上条の言い分から察するにどうやらこの都市ではそれが存在する事が常識であるらしい。だが衛宮士郎にはそんな都市が存在するなんて聞いたこともないし、そんな情報の断片すら掴んだことはない。

「ちよ、ちよつと待て。少し整理させてくれ」

とりあえずそれだけ言って、衛宮士郎は考え始めた。上条は衛宮士郎の反応に少し驚いたようだが、特に気にした風でもなく彼を見ている。衛宮士郎はまずは今までの事が全部嘘であり、上条の妄想の産物であるという可能性を考えた。

しかしその割には彼に妙な雰囲気を感じないし、第一上条が衛宮士郎に嘘をつく理由がない。それによく思い出したら、上条が寝ている間に読んでいた上条の教科書らしき冊子は、なんだか高校生の割には普通は聞かないような専門用語が少々書いてあった。

先ほどチラリと覗き見た外の様子も、確かにかなり技術が進んでいるように見える。

結局、科学技術が二、三十年進んでいると言う話は嘘ではないだろうと衛宮士郎は結論付けた。問題は超能力の話である。この学園都市限定とはいえ、超能力が一般的なものになっていると言うのはわかには信じられない。

「……わかった。それならば、きみの超能力を見せてくれないか」

つまり、実例が欲しいという事。少なくとも実演さえしてくれば、自身を納得させる足掛かりにはなる。学生がみんな超能力を使えるというのなら、上条がそれを見せてさえくれれば何とか納得も出来るだろうと考えたのだが、

「……えっと、無理」

「何?」

即答。

やはりからかっているのかと少し睨む衛宮士郎に、上条は慌てて両手を振る。

「別にそういう訳じゃねえんだけど、ただ俺の能力は幻想殺しって言って、なんつーか……」

言いよどむ上条に、では説明だけでもしてくれと請う衛宮士郎。じゃあ説明すつけど、と前置きしつつ、上条は右手を目の前に差し出す。

「この右手。この右手で触ると……それが異能の力なら、原爆級の火炎の塊だろうが戦

略級の超電磁砲だろうが、神の奇跡だつて打ち消せませす、はい」

「……やはり、からかつて……」

「だから違うんだつて、本気なんだつて！」

予想通り上条の幻想殺しでは超能力を証明するのは難しいのか、衛宮士郎は上条の力を信じなかった。だがにわかには信じられようか。学生が超能力を日常的に保持していると言ふこと自体、信じられそうにも無いのだ。目の前にいる少年がそんな反則級の力を持つているなんて、どうしていきなり信じられよう。

「そんなでたらめな力があるか。その力が本当なら、キミの右手はあらゆる超能力の天敵と言ふ訳ではないか」

「いや、そうなんだけどね……」

信じてもらえなかつとへこむ上条に、衛宮士郎は何事か考えた様子を見せると唐突に右手を差し出した。

「……？　握手でございますか？」

「違う、何故に敬語だ。ただキミの足元に妙な虫がいるから、手助けしてやろうと思つたまでだ」

「うおおおおつ、そういうことは早く言えつて！」

衛宮士郎の右手をとり、ばばつと立ち上がる上条。だが、彼が言うような虫はどこに

も見当たらない。あれと呟き衛宮士郎の方を向く。

「ちよつと、エミヤサン。その虫とやらはどこに？」

「すまん、見間違いだ」

「……そんなあつさり認めんなよう」

すまないな特に悪びれた様子もなく答える衛宮士郎に、上条は少し肩を落とす。だが衛宮士郎のその顔は、何故か険しい。

「どうしたんだ？別に、俺怒ってないけど？」

「いや、気にするな」

はあ、と気の抜けたようにこちらを見ている上条だったが、衛宮士郎は、自分の右手をじつと見つめていた。

(まさか、イマジンプレイカー幻想殺しとやらが本当に存在するはな)

なんらかの未知の力の存在を頭ごなしに否定するほど、衛宮士郎の頭は固くない。彼自身、そういった力を使っているのだし。

そのために衛宮士郎は先程あらかじめ、自分の右手に強化の魔術を掛けていたのである。勿論上条の力を確認する為であり、先ほども虫についての嘘も上条に右手を触らせる為の嘘だったのだが。しかしその右手に掛けていたはずの強化の魔術が、上条の右手に触れたとたん本当に跡形もなく解除されたのだ。これでは幻想殺しとやらを認めざ

るを得ない。つまり、超能力が日常的に存在していると言うこの都市のことも。馬鹿な事と自分でも思うが、その時点で衛宮士郎には自分の置かれた状況について一つの仮説が出来上がっていた。それを確信にするには、逆にもっと大まかな情報が必要である。

「今年が西暦何年で、何月何日か教えてもらえるか？」

「げ、そんなとこまで記憶喪失なのか！　じゃあ、他にも色々な常識をおしえたほうがいいのか？」

「あいにく、一般的な常識ならわかっているつもりだ。携帯電話やパソコンだって使いこなせる。紅茶の入れ具合なら、そんじょそこらの輩に負けるつもりはない」

「なんで、紅茶？」

「淹れてやろうか」

「いや、今は遠慮しとく……」

あ、でもあとで貰おうかなとずれた感想を抱きつつも、上条はわざわざ壁にかかっているカレンダーを下ろすとその日付を指差した。それを見た衛宮士郎は、今度は盛大にため息をつく。

「どうしたんだ？　なんかまずい事でも思い出したのか？」

「そういう事ではない。自分の現状を改めて思い知らされただけ……」

「現状？」

「なに、君が気にする事ではないよ」

衛宮士郎の仮説が確信に代わった瞬間だった。つまり、ここは衛宮士郎がもといた世界とはよく似た別の世界。いわゆる、平行世界であるという事を。

こんな「結果」をもたらす事が出来る「原因」など彼には一つしか心当たりがない。

(よりにもよって、第二魔法とは)

これからどうするのだと突然頭を抱えだした衛宮士郎を、上条はこの人本当に大丈夫かと心配そうな様子で見つめていた。

よろしく御願ひします

「いやあ、さすがに豪語するだけあつて大したもんだな」

「喜んで貰えて何よりだ。おかわりはいるか？」

いりますといりますと返事をしながら、机の上のおかずを口の中にかき込んでいるのは上条当麻だ。食欲を誘う匂いが程よく辺りに漂い、机の上にはあくまで朝飯の範囲を超えない感じで結構な質のおかずやら何やらが置いてある。それでも朝食にしては些かポリユームの多い食事であつたが、食べ盛りの高校生たる上条にとつては適量と言つてもいいくらいだ。そして何故かエプロン姿の衛宮士郎は、上条の言葉に満足そうに頷きながら皿を運んでいた。

「なんでだ！　なんでただの卵焼きがここまで美味しく感じるんだっ！」

「気になるか？　ポイントはダシだ。それはただの卵焼きではない。特製のダシを混ぜたダシ巻き卵なのだよ」

「なんと……！」

これは是非とも御教授して貰わねばと、おかずの旨さに感動しつつ密かに決意する上条。衛宮士郎の方を覗き見るとこちらに背中を向けて台所に立っていた。

その背中が言っているような気がする、ついてこれるか、と。

上条とて伊達に一人暮らしをしていない、家事の能力にはそれなりの自負がある。ついてこれるかではない、テメエの方こそついてきやがれと無駄に目に闘志を燃やしながら意気込む上条の姿がそこにあった。

なんかズレているかもしれないが、もの凄く平和な朝の一面でした。

……一体どうして、このような事態になっているのか。時は数十分前に遡る。衛宮士郎が己の現状に頭を悩ませていると、上条の胃が空腹を訴え始めた為、それならばせめてもの恩返しだと衛宮士郎が（勝手に）朝飯を作り出したのだ。

ぶっちゃけ記憶喪失の人間に飯の用意をさせるのがかなり不安な上条だったが、自信があると衛宮士郎が言うので思い切って任せてみたのだが、

「いや、ホントうまいな。衛宮って実は料理人だったんじゃないか?」

「ふむ、そうかもしれないしそうでないかもしれないな。一応、候補には入れておこう」
予想以上の出来栄えに軽く感動している上条。朝飯という物の在り方を考え直さねばなるまいなどと心の中で決める程、衛宮士郎の朝飯は良く出来ていた。上条の言う衛宮士郎が料理人なのではという意見は、お世辞ではなく彼の本心である。食が進むとはまさにこの事だなど頷きながら、上条はご飯を口に放り込んでいた。

「ってというか料理に自信があるってことは、何で覚えてたワケで?」

「そういわれてもな、私にもよくわからん。芯から身につけている技術というのは、自然と体が覚えているものなのだろうよ」

「ふーん、そういうもんなのかね」

あいにく記憶喪失になつた事ないからわかんねえけど、と付け加える上条。まあ衛宮士郎の記憶喪失はあくまでフリであるので、本当にそうなのは知らないが。実は衛宮士郎自身もまともな料理をするのは随分と久しぶりであつたので、腕が余り落ちていなくなつたことに密かに驚いていたりする。何しろ長い戦場生活では質より量、味より栄養を重視した食事を中心に取つていた為、味覚が妙な事になつてはいないか心配だつたのだ。家事が趣味とも言える衛宮士郎にとつて、このことは素直に嬉しかつた。

食事のあとは、上条が布団を畳み衛宮士郎が食器を洗つてゆく。全ての雑事が片付いた所で、二人は今後の事を話し合おうと食事中に決めていたのだ。上条からしてみればさつさと本題に入りたい所ではあつたが、本人が手伝うと言うのならばしようがない。勿論、家事が少なめで済むというのも本音の一つではあるが。

一通りの家事が終わつた後、落ち着いて今後を話し合おうと衛宮士郎はお茶を二人分注ぎ、上条も机を挟んで反対側に腰を下ろした。朝がそこまで遅くなかつたおかげで、まだ時計の針は正午よりも幾分か前だ。机の上では、注がれたお茶が白い湯気をゆらゆらと立てながら二人分鎮座している。夏場だからかそれが何となく暑さを増すように

感じさせるが、それでも心なしか落ち着いた雰囲気を醸し出している。

そう多分を感じている訳ではないが、緊張感が薄れるのは上条にとつてもありがたかった。食事中に衛宮士郎は、既に超能力の存在については納得したと上条に伝えてある。上条は何で衛宮士郎が急に超能力について納得したのか不思議に思ったが、そこは適当にお茶を濁されてしまった。本人は今までの情報を統合して判断した結果だと言っていたが、何かをきっかけに急に納得したのは上条にも気になる所ではある。だが信じてもらえるのであればそれに越したことは無いわけであるし、上条も深く突っ込むのは止めになっていた。今やっているのは、衛宮士郎の軽い現状整理である。

「つまり、身分証も何もなくて、学園都市に許可をもらって入ってきた覚えもないと」「そうなるな。君の言うところの不法侵入だろう」

「何でそんなに落ち着いていられるんだよ……」

普通もつと焦らない？と呆れる上条。先程からそうであるが、この衛宮士郎と言う人物は何だか全体的に落ち着き過ぎている様な気がする。だって名前しか覚えていない状態で、見知らぬ土地に放り出されているのだ。普通だったらもつと不安がってもいいもんだよなと上条は考えていた。だが実際に記憶喪失で無い上条には、衛宮士郎の心境など分からない。案外記憶喪失になった人つていうのは皆こんな感じで落ち着いているものなのかなと、そんな感想を上条は抱くのであった。

そうして衛宮士郎について色々と考えていた上条であつたが、その時あの黒いスーツケースのことを思い出した。そういえばと部屋の間ここに放置していたスーツケースを、上条は衛宮士郎の目の前に引つ張り出す。大型でかなり重い物なのだが、下に車輪がついているので楽に動かせるのだ。ベランダから運んできた時もそう苦労はしなかつた。まあ、ごころごととそれを転がした時に車輪が床を傷つけてしまったのが難点ではあつたが。

「なあ、このケースに見覚えはあるか？」

「いや、ないな。一体なんだそのスーツケースは？」

「……たぶんだけど。これ衛宮と一緒に落ちてきたんだと思う」

「私と？」

「ああ、衛宮のすぐ傍に落ちてたんだ。何か分からないかと思つて開けようとしたんだけど、鍵が掛かつてて」

「ふむ」

鍵はベランダを探しても無かつたんだよなと付け加える上条。衛宮士郎は上条からスーツケースを受け取ると、こつそりと解析魔術をかけた。何か未知の物体を手にとつた時それを調べる前に解析を掛けるのは、戦場で生活していた衛宮士郎にとつてもはや癖のような物である。

向こうの世界の一般的な魔術師にとってどうかはともかく、解析魔術は衛宮士郎にして見れば非常に有用な魔術であった。これならば触れただけで爆発物なども判別できるし、なにより消費魔力が低コストというのも大きい。元々衛宮士郎はそう魔力量が多いほうではないのだ。それに構造が把握できるのは何も小物だけでなく、建物だつてその気になれば解析出来る。土地勘の少ない土地では良く役に立ったものだ、衛宮士郎は内心思い返していた。そんなことを考えながら、改めて詳しくスーツケースを解析する衛宮士郎。だが何度解析しても、何の魔術もかかつていない様子である。それに見た目もいたつて普通のスーツケースであつた。

しかし、

(二段構造になつているな)

ケースの内部に、少し仕掛けがしてある様であるのが分かつた。スーツケースは本来、開くと両側に収納スペースがありそこに物を入れるのが普通なのだが、このスーツケースは何故かその両方ともが二段底になつているのだ。

しかもまるで隠しスペースであるかの如く、簡単には見つかからないように細工がしてある。怪しき満点のその空間には、何かが入っている事も衛宮士郎は判別できた。ただし、爆発物だとかさういった危険物が入っている様子ではない。スーツケースを開けた瞬間に、部屋ごとドカンと吹っ飛ぶという心配はないらしい。衛宮士郎は少し思案する

と、鍵穴がある方が自分の前になる様にとスーツケースをずらした。

「何か針金のようなものを持ってないか？」

「針金？ いや、もってないけど。なんに使うんだ？」

「鍵開けだ。これ位なら私でも開けられるだろうからな」

「鍵開け!! そんな事まで出来んのか!？」

「アンタ本当に何者だ!？」と驚く上条に、ないなら仕方ないなと衛宮士郎は呟くと上条に分からぬようポケットから取り出すようにして、投影した針金を引っ張り出した。解析で構造さえ把握出来れば、単純な鍵ならば空けることが出来る。幸いスーツケースの鍵穴は、そう複雑な構造の物ではなかった。

(あれ、ポケットに針金なんて入ってたか……?)

上条が衛宮士郎のポケットを探った時には、そんな物は無かったはずである。というより、記憶喪失の癖に鍵開けまで出来るのか。そんな上条の疑問をよそに、衛宮士郎は解析の結果を参考に、針金を曲げたり伸ばしたり(こっそり強化したり)しながらスーツケースの鍵開けをし始めた。

馴れたような手つきで、針金で鍵穴を弄ること一分ちよい。鍵自体は簡単なものだったので、割りとあっさり開錠することが出来た。カチャリと軽快な音を立てて、鍵が開く。

「開けるぞ」

「お、おう」

上条が頷くのを確認すると、止め具を外しスーツケースを開いた。何が入っているのかと、怖さ半分期待半分でスーツケースの中身を確認した上条だったが、

「……普通だ」

「普通だな」

何とも平坦な感想。しかし上条の気の抜けるほど、その中身は至って普通だった。数点の洋服に財布などのちよつとした小物。いかにも旅行者然とした中身である。特に怪しいものも入っておらず、危険を感じさせる物も無い。こりや本当に一般人かもと上条は内心一人ごちていた。なんせ刃物の一本すら入っていないのだから。

……表向きは。

衛宮士郎が確認したとおり、このスーツケースには隠しスペースが存在する。本当なら二段底になっている隠された下の段の方を今すぐにも確かめたかつた衛宮士郎だが、わざわざ隠してあるだけあつて何があるのか確かではない。だから上条の目の前で開ける事は一旦止めておこうと決めた。上条に隠しスペースの存在を悟られぬようにしながら、そのまま上段の中身を二人で漁る。服は色々あつたが、余り派手なものはない。上条は、衛宮士郎が服から何か思い出せないかと彼に聞いてみた。

「服のほうに見覚えはあるか？」

「特には……。いや、これは？」

「執事服？ 何でまたそんなものが」

普通の服の方に見覚えが無いのは嘘ではない。だがケースを探っていた衛宮士郎が目にしたのは、高級そうな執事服だった。執事服なんて実物は始めてみたなど考える上条。何かのヒントになるんじゃないかと、メーカーの印などを見つけようとするがそれは無かった。衛宮士郎にしてみれば、なんだか倫敦時代にバイトで働いていたとある魔術師のお嬢様の屋敷で着ていた物にそっくりな気がする。

……主に金髪縦ロールのお嬢サマから、時計塔時代に礼儀作法についてかなり厳しく躰けられた記憶が甦る。あの時はあかいあくまも一緒に騒ぎ始めて大変だったなど、思わずため息をついてしまう。

「どうしたんだ、額なんて押さえて？」

「なに、これを見ているとなんだか嫌な悪寒に襲われてな……」

「なんだそれ？ ……その執事服に見覚えがある訳？」

「ああ、確証は無いがおそらくこれは私の服だ」

なんで入ってるかは知らんがなと、衛宮士郎は続ける。綺麗に仕立て上げられてはいるが、これだけなら分かった。丹念に製造元を消されてはいるものの、何せ物に頓着し

ない衛宮士郎にとっては珍しくかなりの思い入れのある物である。自分が彼女の屋敷で使っていたものに違いは無いだろうなと、簡単に予想がついたのだ。

「じゃあやつぱり、このスーツケースは衛宮の物なんだな」

「で、あろうな。他人のスーツケースに私の服が入っているはずもない」

「でも執事服に見覚えがあるってことは、衛宮はもしかして執事だったんじゃないか？」

それなら料理上手いのもなんとなくわかるし、と続ける上条だったが、もう一つ大事な事を忘れていた事を思い出した。そう、上条は最初に衛宮士郎を調べた時にあるものを手に入れていたはずである。というよりその持ち物のおかげで、上条は衛宮士郎を警備員ジャッジメントに引き渡す事を止めたのだから。その事を思い出して、上条は意図せず大声を上げる。

「そうだよ、写真があつたんだ！」

「写真？」

「そうこれ。衛宮のスーツの胸ポケットに入ってたんだ」

勝手に見ちまつてごめんな、と謝りながら自分のポケットから上条は写真を取り出した。それは衛宮士郎が様々な人に囲まれながら写っている、あの写真だ。上条は写真を見つけたあとにポケットにしまいこんで、そのままであつたのだ。思い出してよかつた、と上条はほっと息をつく。

どんな写真かと受け取った衛宮士郎は、写っている光景に一瞬目を疑った。

……それはその写真が、衛宮士郎の持つ苛烈な記憶にあまりにも場違いな、とても穏やかなものだったからだ。もはやはるか昔のように感じさせる、倫敦時代の思い出。衛宮士郎の今までの人生において、一番充実していたと言つても過言では無い一時。それを凝縮させたものが、そこにはあつた。

(これは……、一緒に写っているのは凜に桜それにルヴィアか……)

なんとなく見覚えのある景色をバックに、他にも様々な知己と一緒に写っている。臃げな記憶は、こんな写真をとつたような気がすると己に訴えかけていた。おそらく、衛宮士郎が戦場へ飛び出すより少し前に撮つたものであろう。衛宮士郎の記憶にある彼女達の姿と、写真に写っているその姿はなんら変わつてはいなかった。ただ衛宮士郎自身にこの写真を常に携帯していたという記憶は、無い。

——それともただ忘れてしまっているだけなのか。思いもがけない形で友人達の姿を見たせいとか、衛宮士郎の心の内で様々な感情がのた打ち回る。だが衛宮士郎は、それを強引に押し留めた。今この場で、感情を露にする事は出来ない。記憶喪失と言っている以上、それを突き通さねばならないし、上条に疑われるわけにはいかない。深い所まで立ち入らせないよう、あくまで衛宮士郎は平静を装う事にした。多少何かが目の奥で熱くなるような感覚がしたが、溢れ出る感情を押さえ込むことには成功する。

上条にもその変化を悟られた様子は無かった。

「どうだ、今度はなんか思い出したか？」

「……………いや、……………やはり何も思い出せんな」

衛宮士郎がどうか答える事が出来た言葉に上条は残念そうな表情で、そうか…と呟いたが衛宮士郎の内心の動揺には完全に気づかなかつたらしい。その事に衛宮士郎は安堵しつつも、新たな思いが頭の中を駆け巡る。

（しかし、何故この写真が私と一緒に？）

疑問。

執事服といい、写真といい。衛宮士郎自身に縁のあるものがこのスーツケースの中には多すぎる。状況から察するに、おそらく両者とも衛宮士郎をこの世界へ送った人物が忍び込ませたと推測するのが妥当だろう。

だが、誰が。何のために？今一度、混乱している記憶も含めてこの世界に来る直前の出来事をどうにか思い出さないといけないな、と内心考えていた衛宮士郎。そこへ上条があつと突然声を上げた。

「ほら（ハ）、この写真の後ろに写ってる建物。これって時計塔ビック・ペンって奴じゃないか？」

「……………本当だな」

上条が写真の上を指し示した先には、左上の方に小さく、しかし大きな時計塔が写っ

ていた。英国の中でも有数の名所。時計塔^{ビック・ベン}。魔術協会の本部も時計塔だが、あちらは英国博物館の地下にあるもので、こちらは正真正銘の観光名所の方だ。

衛宮士郎は人物の方ばかりに気をやっていたから、背景にまで気が回っていないかった。

「それならもしかしたら、衛宮の知り合いが英国の倫敦にいるかもしれないな」
「なるほど。確かにそうかもしれない」

実際には英国どこかこの世界中どこを探したって、この世界には衛宮士郎の知り合いは一人たりとも存在しないのだが、そこは調子を合わせるように適当に頷いておく。上条は記憶の事の方が気になるらしいが、衛宮士郎は実際には記憶喪失と言うわけではない。

上条には嘘をついているが、記憶自体はある。ただ少し、それが混乱しているだけである。

（まあ、記憶喪失と言うのもあながち嘘ではないがね……）

当然の如くここに跳ばされる直前の事も全く思い出せないが、衛宮士郎は別にそこまです焦ってはいなかった。それよりももう一つ、別の深刻な問題がある。確かに今の衛宮士郎は戸籍も身分も何もない、法的にはどこにも存在しない人物だ。知り合いもいなければ、身元を保証するものも何も無い。いずれ今はまだにしろこれからどうするにつけ

ても、身分という物をどうかしないといけなくなるだろう。しかし、問題なのはそこではない。

問題は魔術。そう魔術の存在、もしくは魔術を扱う組織の有無。

ここが平行世界であると分かったのなら、早急に魔術方面の情報を入手する事が必要だった。実際に確認した訳ではないが衛宮士郎が普通に魔術を扱える以上、この世界にもそれを研究している組織があると言う可能性は大きい。

その上で考えなければならぬのが、その組織力と純度の規模。超能力を科学技術の一つとして扱うという、衛宮士郎から見ればふざけているとしか思えないような組織がこの世界には普通に存在している。そんなイレギュラーがある時点で、元の世界の魔術組織を参考にこの世界の魔術を計るなど、ほぼ参考にはならない。

最悪の場合、衛宮士郎が平行世界を超える（超えさせられる）のに使われた第二魔法が既に相手側に観測されており、原因追及のためこの都市になんらかの魔術側の人員が派遣されてくる事も否定はできないのだ。

上条に迷惑が降りかかる前に、さっさとここを立ち去るのが賢明だろう。衛宮士郎はそこまで考えると、上条の方をちらつと覗き見る。上条はいまだに、何か手がかりはないか、とスーツケースの中を漁っていた。

いい少年だ、と率直な感想を抱く。初対面の人間に、ここまで協力してくれる人はそ

うはいない。好印象であるし、どこことなく人を引き付けるような雰囲気を持っている。

だがそれだけに、余計に上条をトラブルに巻き込むわけにはいかないかと結論付けた。だから空港の場所でも聞いて、上条に余計な疑いを持たせないうちにここを出ることに決めた。決心したのならばさつきと行動すべきである。衛宮士郎はまだ鞆を探っている上条に、空港の場所を聞くために声を掛けた。

「空港の場所？」

「そうだ、ここにいても埒が明かないからな。とりあえずイギリスにでも行ってみようかとおもつてな」

そう言いながら、衛宮士郎はスーツケースをパチンと閉じる。勿論冬木市の事も調べる予定だがここが平行世界である以上、冬木に聖杯戦争の仕組みがそのまま残っているとは考え難い。しかし英国を含むヨーロッパなら、世界の歴史がそう変わっていない限り魔術も発展しているはずだ。魔術の有無に関する情報を掴むのも可能だろう、と衛宮士郎は当たりをつけていた。英国ならば上条にも言い訳がきく。

「でも、パスポートとかどうすんだよ。それに、記憶も無いまま外国なんか言つて大丈夫なのか？」

「まあ、なんとかなるだろう。これでも英語は話せる。どうにかして手がかりをつかむさ」

「……やつぱり、学園都市の病院に行った方がいいと思うけど」

「身分証もないのに？ 最悪、私は不法侵入として逮捕されてしまうだろうよ」

確かにそうだけどさー、と上条は続ける。身分証が無いことは上条も把握していた。アレだけ探しても免許証の一つも出てこなかったのだ。病院などいけるはずも無いのは上条とて百も承知であった。

「パスポート無しに外国に渡る方が無茶だと思うけど」

「なに、金さえあれば何とかなるさ」

「身分証無しじゃ、学園都市じゃ何にも出来ないぜ」

「だったら学園都市から出ればいいだけの話だ」

そういつて笑う衛宮士郎を、上条は胡散臭そうな目で見つめる。そう衛宮士郎は知らないが、ここには文字通り大きな壁が存在しているのであった。

「身分証も何もなしにどうやって壁を超えるんだよ」

「壁？」

「そう、壁」

時代錯誤な言葉を聞いて眉を顰める衛宮士郎に、上条は説明する。学園都市は世界最高の科学技術を保有する都市であり、その情報の漏洩には非常に気を使っていること。学園都市は全体を壁で囲まれていて、管理されているような状況であるということ。そ

の壁は高さ五メートル幅三メートルほどもあると言うこと。おまけに壁の出入り口では嚴重なチェックが行われていて、とてもではないが勝手に外には出られない様なものであること。

「それではまるで独立国家ではないか……」

衛宮士郎は呆然と呟いたが、上条としてはそれが普通なのでとくに疑問に思わない。実際に学園都市がそういった側面を持つている事は嘘ではないし、学園都市だけで通じる条例のようなものもある。そのような説明を上条から聞いて、世界の違いにおける価値観の差異かと衛宮士郎は諦めたが、それにしたって身分証があつたとしても容易に学園都市の外へと出られないというのは問題だった。確かに窓から覗いてもそれと判るほどやけに監視カメラの数が多く、それこそいたるところに設置されているので監視に力を入れていることはわかっていたのだが、まさかここまでとはと衛宮士郎は呻く。

正直な話、衛宮士郎は暗示系統の魔術が苦手だ。出来ない訳ではないが、この高性能な技術力を誤魔化せるほどかと言われるとそこまでの自信は無い。ただ、それだけ嚴重な警備を敷いているのなら逆に魔術側も関与しにくいのではないかと当たりをつける。

どのみち簡単には学園都市の外へ出られないなら、どの程度のセキュリティを敷いているのか調査が必要だなと衛宮士郎は考えた。魔術の方に関しては、幾らなんでもイン

ターネットやらなんやらで調べられる事ではないのでとりあえず先延ばしにしておく事にする。

(私のことが感知されていなければよいがな)

……この世界の魔術に関して何一つとして情報を持っていない今の状態で、仮の事を心配してもどうしようもない事は分かっているのだ。とにかく学園都市を出ることが第一目標だと衛宮士郎はゆっくり息を吐く。上条はというとそんな衛宮士郎の様子を見て、やっぱ身分が無くとも記憶を取り戻す方が先だよなといくつかの病院の名を軽く挙げていた。

「記憶を取り戻すんだったら、今言ったような専門の病院にいけば大丈夫だとは思うけど」

「病院や警察は少し遠慮したいな。何分、身分を保証するものを何も持ってないのでね。病院に行つた途端にすぐ逮捕、というのは避けたい」

「じゃあ、どうすんだ?」

「そうだな……。では、学園都市の案内をしてくれないか」

「学園都市の案内を? 俺が?」

「いや、何か用事があつたならかまわない。できれば、というだけだ」

外に出ればなにか思い出すかもしれないからな、と言う衛宮士郎。上条もそれならと

納得し、外に出かける準備をする。本当は衛宮士郎が学園都市の実状をこの目で見たいというのもあり、案内が無いよりも有る方がよいだろうと思っただ。どうにかして不法に脱出しなければならぬ現状、情報収 集は重要だ。

それに何せ全くの未知の都市でもある。特にここは学園都市という、衛宮士郎にとってはほとんど別世界のようなもの。不必要な騒ぎを起こして、警察機構に目をつけられるのも遠慮しておきたい。上条としても一度拾った以上このままほうっておくわけには行かないよなと何だかペットに対するような考えをしていた。それに身分証がないのは確かにまずいし、記憶が戻るかもしれないなら案内した方が良くに決まっている。幸い今日は日曜日なので、上条の都合も良かった。特に入っている予定も無い。

何かの助けになればと衛宮士郎に学園都市を案内するために、二人は部屋の外へと足を向けたのだった。

「で、何だよその格好は？」

「まあ、念のための変装という奴さ」

あまり、気にするなと言う衛宮士郎を見て、上条は呆れたような声をあげていた。

二人は今、学生寮を出て第七学区の通りを歩いている。上条は適当に夏服を合わせて

着込んでいたが、衛宮士郎は相変わらずスーツ姿だ。しかも御丁寧に、黒髪のカツラに度無しの眼鏡としつかり変装をしている。勿論、全て衛宮士郎がこつそりと投影したものだ。そんな小道具スーツケースの中に入れてたつくと上条は不思議に思ったが、付けているならあつたんだろうなと自分を納得させる他無い。まさかマジシャンじゃあるまいしなど、上条は当たらずとも遠からずの感想を抱いていた。

「別にそこまでしなくていいんじゃないか？」

「そういうわけにもいかん。私は色々と目立つからな」

衛宮士郎の言葉に、上条はまあそうだけどと返す。ただでさえ学生だらけの町に190cm近い銀髪に黒い肌の青年など、いらぬ目線をひきつけかねない。身分証も持っていない（ついでに戸籍上の記録も全くない）衛宮士郎が、警備員にでも目をつけられてしまえば即逮捕だ。そういう意味でも念を入れるにこした事はない。そういった衛宮士郎の説明を聞きながら上条は通りを歩いてしたが、不意に気になったことを衛宮士郎に聞くことにした。

「そういえば、これから衛宮はどうすんだ？」

「とりあえず、どうにかして学園都市を出ないとな」

「いや、そつちじゃなくて。寝泊りの方」

「うん？ まあ、なんとかするさ。幸い無一文ではない。どこかホテルでも借りて……」

「でも身分証も持ってないんだろ」

「……最悪、野宿でもかまわんよ」

「いや、だからな」

ほら、と上条が指をさした先には円柱形の警備用のロボットがいた。警備ロボットは学園都市のいたるところに配置されていて、常にあたりを見回っている。何かしらの違反をすれば、学生証の提示を求めるときもある。

とてもではないが、学園都市は身分証もないような人間が野宿を出来るような環境ではない。それなりに学園都市の生活に慣れた人間なら可能かもしれないが、衛宮士郎は学園都市初心者だ。まず、無理だろう。公園で寝ていても、職質(?)されるのが落ちだ。

衛宮士郎は、警備ロボットや他にもそこらを動き回っている清掃用のロボットを見て呻く。窓からその存在を確認はしていたが、まさかそういった機能を持つものだとは思ってもしなかった。

「……あんなものまであるのか」

「ああ、言っただろ。学園都市は「外」より数十年先の技術力があるって」

「……治安維持の技術が進んでいるのは喜ぶべき事ではあるな」

今の私にとっては少しまずいがなと、衛宮士郎はぼそりと続ける。そんな衛宮士郎の

横で上条は何かを考えるかのように顔を伏せていたが、不意にそうだと声を上げる。

「なんだつたら四、五日の間、俺の学生寮の部屋にいてもいいぜ。このままじゃ、ホントに捕まっちゃうだろ」

「は？」

衛宮士郎は予想外の上条の言葉に、思わず間の抜けた声を出してしまう。しばらく身を固まらせた後、いやいやいやと頭を振る。

「悪いが正気か？ こんな初対面の人間で、しかもなにやつてるかわからないような男を家に泊めるほど信用すると？」

「人を見る目はそれなりにあるつもりだけどな。衛宮って悪い奴に見えないし。まあ、衛宮が嫌って言うなら別だけど」

「申し出はありがたいが、大丈夫なのか？」

「何が？」

「寮なら寮監がいたり、規制が厳しかったりするのではないか？」

「私がいることで迷惑がかかるだろう、と聞く衛宮士郎に上条は大丈夫、大丈夫と笑って返す。

「いいんだよ。うちの管理人室はアレ、管理人室って名前のただの物置だから」

「……それはそれでいいのか？」

都市内との警備の落差に呆れる衛宮士郎だったが、せっかくの申し出を断る理由もなかった。上条に迷惑を掛けたくないというのも事実だが、捕まってしまうては元も子もない。

よくよく考えてみても、もしもこの世界の魔術側が第二魔法を観測できたとしても、その観測自体は既に終わっているはずのものである。

誰かが確認の為に派遣されてくるとしても、それは衛宮士郎の有無には関係が無い。むしろ何も知らない上条を、一人ここにほうっておく方が危険だろう。魔術側の様子を見るという意味でも、世話になった方が良いかもしれないと結論付ける。

上条としてもそのまま放り出しては必ずつかまってしまふと理解しておきながらも、衛宮士郎をほうっておくのは後味が悪かったのだ。衛宮士郎自体なんか不思議な感じがある人ではあるが、少なくとも危険人物であるようには思えないし。

……どっちにしろ二人とも随分とお人よしである、という訳であった。

「で、どうする？　泊まるか？」

上条が再び聞いてくる。衛宮士郎は少しの間逡巡していたが、何かを決めたような顔をする。上条の方を真っ直ぐ向く。ここまで来たからには、乗りかかった船だ。拠点があるのは衛宮士郎にもありがたかつたし、何より上条の好意を無碍にする事も今更出来ない。上条の目を見つめながら、その頭を下げる。

「すまん、少しの間厄介にならせて貰う」

言葉とともによろしく頼むと手を差し出す衛宮士郎。そんな衛宮士郎に、上条は気にすんなよとその手を握るのだった。

ここに奇妙な縁で出会った男が二人、その共同生活が始まったのである。

真夜中闊歩

「どうして眉だけ白いんですかー?」

「……、」

どうしてこうなつたと、上条当麻は上を向いて呻いていた。

第七学区の通り、お昼過ぎの時刻である。上条と衛宮士郎は一時共同生活を送る事を決めたので、二人分の人間がしばらく暮らせるだけの生活必需品を買いに来ていたのだ。具体的には食料とか歯ブラシとか、そういった類の物を量販店で買ってきた帰りであった。

そんな時に限って何故か偶然、上条のクラス担任の小萌先生と道端で出くわしてしまつたのだ。当然、上条ちゃんの隣にいる人はだれですー? と聞かれたため、上条は苦し紛れに従兄弟の上条士郎さんですーと紹介してしまつた。その後二人は互いに自己紹介をしたのだが、

(ヤッペー、そういえば気付いてなかったけどさあ)

衛宮を連れて歩いている時に小萌先生と出会うとは、これはいつもの不幸体質のせいとかーと心の中で叫んでいた所にこの質問である。

実は今の衛宮士郎の格好、髪は黒いのに眉だけ真っ白という中々に面白い見た目をしていた。あくまで眉だけなのですれ違った程度では判別が付くことは無いが、こうして誰かと立ち止まって話してしまうと丸分かりになってしまいくらいには目立っているのだ。

何でこんな状態になっているのかと言っても大した理由は無く、ただ単に二人の気がそこまで回っていなかったと言うだけの話である。カツラに眼鏡まで掛けて変装した方がいいが、眉を染めるまでは二人とも思い至らなかつた。衛宮士郎なら気付いても良さそうなものだが、彼とて日常的に変装していた訳ではない。やはり馴れぬ事をするのはリスクが付き物だなと、衛宮士郎は他人事のような感想を抱いていた。

正直二人の内どちらかが気付いても良さそうなものであつたが、衛宮士郎は勿論、一緒に歩いていた上条に至つても小萌先生に指摘されるまで気付かなかつたと言うのだから笑えない。上条も何で今まで気付かなかつたんだと、内心自分に呆れていた。

(ちよつとどうすんだ！眉毛だけ白いとかどう言い訳するんだよ！)

(私としては彼女が先生であるという事の方が驚きなのだが……)

(そんなこと言ってる場合じゃねーだろ!?)

小萌先生に分からない様に、目線で会話する二人。まあ目線で会話といつても目の動きで眉を指したり小萌先生を指したりしているだけであるが、この状況なら互いに言い

たい事も何となく伝わった。

上条は眉の事を終始気にしているが、衛宮士郎からすればそれよりも目の前の小学生（？）が教師であるという事実の方が驚きである。世界中を巡り様々な人々を目にしてきたが、人間の範疇の中でここまで幼い大人を見たのは流石に始めてであった。

いやあ世界には色んな人間がいるものだど衛宮士郎は感心していたが、上条にはそんな余裕は無い。下手な受け答えをすれば、この場で小萌先生に妙な疑いを持たれる可能性もあるのである。こんな時に何考えてんだと興奮する上条に、衛宮士郎はまあ落ち着けと視線を送った。そうして改めて小萌先生の方へ視線を向き直す。

「眉の事ですがね、先生は馬良という人物を知っておいでで？」

「馬良……ですか？ 響き的に中国の人だと思えますけど……」

それが何か？と頭を傾げる小萌先生に衛宮士郎は続ける。

「そう、三国時代の蜀の人間です。彼は馬氏の五人兄弟の四男で、彼の兄弟にはみな優れた才能があつたのですが、その兄弟の中でも最も優れていたといえます」

「はあ」

「馬良は眉の中に白毛が混じってしまってますね。兄弟は五人とも字に『常』という字がついていたので、『馬氏には五人の“常”がいるが、白い眉の“常”が最も良い』と謂われたのですよ」

「つまり、その人物にあやかっているという事ですかー?」

「さすが先生ご理解が早い、その通りです。ちょうど私は五人兄弟でしてね……」

その後も、大学で中医学を研究している事や学園都市には資料を取りに来たのだという事などべらべらと嘘をつく衛宮士郎。続けて話題を逸らす様に、上条の成績の話へと話を移していく。上条は隣で聞いていて、良くここまで咄嗟に出任せが言えるなど呆れ半分感心していた。衛宮士郎自身も正直かなり強引な言い訳をしたものだと考えていたが、さも有り気に語ったせいとか何とか小萌先生を納得させられたようである。

その後も衛宮士郎は小萌先生としばらく世間話をしていたが、上条は衛宮士郎の話の上手さには内心舌を巻いていた。答えられる事には答え、時に話題をすり替える事で危なげな矛先をかわしてゆく衛宮士郎。だが次第に危なくなつて来た所で、話題に不安を覚えた上条が衛宮士郎にそつと耳打ちする。

(なあ、そこまでにしておかないとそろそろボロが出るんじゃない?)

(そうだな、ここまでにしておくか)

上条が心配して衛宮士郎に話すと、衛宮士郎は近くの時計を確認するようなそぶりを見せた。そうしておやと驚いたような声を上げると、小萌先生に話しかける。

「ああ、もうこんな時間だな。そろそろ失礼します月詠先生、実は当麻には学園都市の案内を頼んでましてね」

「いえいえこちらこそ、わざわざお引止めしてしまってすみませんでしたー」

それでは上条ちゃんもまたねーと手を振り去っていく小萌先生を見送り、上条はようやく肩の力を抜いた。一時はどうなる事かと思つたが、無事にやり過ごせた様でほつとする。

「いやー、危なかつたな。まさか、小萌先生に会つちまうなんてな」

運がなかつたぜ、とため息をつく上条を見て衛宮士郎は首を振つた。

「そんな単純な事ではないさ。まあ、今回は十分に注意を払えていなかった私の責任でもある」

まさか眉毛が白いままだったなんてなど、可笑しそうに笑う衛宮士郎。上条としては笑える様な事ではなかつたが、結果良しなので文句は言わない。ただ上条としては、先程の会話で一つだけ気になる事があつた。

「さつき中医学を研究してたつて言つてたけど……」

「ん？ 勿論嘘だが。単に馬良の話に合わせただけだ。その方が先生も納得しやすいだろう」

「……衛宮にはまだ言つてなかつたけど、学園都市は出るのも厳しければ入るのも厳しいんだ」

「当然だろうな。育脳開発などやつていては迂闊に部外者を招き入れる事も……、むう

……」

上条の言葉に、衛宮士郎は何か気付いたかの様な顔をする。自分が言った言葉の落とし穴に今思い当たつたらしい。そもそもの部外者が学園都市側で選別されるならば、当然その絶対数も多くはないという事で。

「つまり大学で研究しているなどと軽々しく言つては、直ぐに身元がばれてしまうかもしれないと言う事か」

「そういう事。まあでも学園都市には入れるのは研究者以外だと生徒の肉親だけだから、さつきはああ言うしか方法はなかったんだけどな」

「だがやはり私が浅慮だったな……。すまない当麻」

「そう気にするな。結局怪しまれなかったんだし結果オーライだつて……。ん？」

謝る衛宮士郎に上条は気にするなど返すが、その時ちよつとした異変に気付く。

「“当麻”？ 今俺の事、下の名前で呼ばなかったか？」

「ああ言つたな。だからこれからは当麻も、私のことを“衛宮”ではなく“士郎”と呼んでくれ」

私も君のことを当麻と呼ぶから、と言う衛宮士郎に上条は、え、と口を開ける。

「そりゃ別に良いけど、いきなりなんで？」

「……君が先ほど、私のことを月詠先生に“上条士郎”と紹介しただろう。同じ上条な

ら下の名前で呼ぶのは自然ではないかね？」

衛宮士郎に指摘されて、そういやそうだったと上条は思い出す。言われてみれば確かに、上条自身が「上条士郎」と紹介した人物を「衛宮」と呼ぶのはおかしい。同じ苗字の従兄弟という設定を作ってしまったのならば、下の名前で呼び合う方が自然ではあった。

人の繋がりというものはどこで重なり合っているかなんて分からない。意外なところからボロが出るかもしれないのだ、呼び名という細かな点でも気に掛けていく必要があった。

「あー……、悪い。そこまで考えてなかった」

「まあ、かまわん。本名を知られるのも、問題だったしな」

気にするなど、衛宮士郎も上条に声を掛ける。この程度ならば呼び名をこうして変えるだけで解決するし、大した問題ではない。ただやはり学園都市の内部と外部の間でも、共通認識と言う奴に齟齬があることも分かった。

上条達の様な学園都市の住人にとっては当たり前のことでも、外部の人間にとってはそうでない事もある。その逆もまた然りだ。互いの『常識』について話し合う必要があるなど上条達は考えると、それから二人は学園都市の常識について語り合いながら帰路へとついたのであった。

二人は学生寮に帰り着くと、結構大量に買い込んだ荷物を下ろした。ドサリと重そうな音を立てて買い物袋が床へ下ろされるが、二人とも慣れた様子で買ってきた物を整理し始める。ついでに軽く部屋の整理もしてから、衛宮士郎は買い物の最中で気になった事を上条に聞いた。

「そういえば、当麻。君達は一体どうやって生活しているのだ？」

「どうやって？」

「ああ、君らはまだ学生だろう。見たところ働いているわけでもなさそうだ。収入源は一体なんなのさ？」

「ああそっか、と上条は声を上げた。外の人間には学園都市の学生がどこから収入を得ているのか気になるもんな、と頷く。

「俺らはさ、学園都市の時間割りにしたがつて授業を受けてるワケ。それで、自分達のレベルによってある程度の差はあるけど、基本的に学園都市からお金を毎月貰って暮らしてるんだよ」

「つまり、学園都市側も研究の材料が手に入り、君らもここに居る限りはお金がもらえるという事か」

「そうそう。それに学生主体の都市だから基本的に日用品とかは安いしな。支援金だけで充分食っていけるんだよ」

そのかわり漫画とか菓子とかの嗜好品はやたら高いけどとべる上条。よく出来ているものだと衛宮士郎も頷く。ついでにもう一つ、以前から気になっていた事を聞くことにした。

「学園都市の人口が約230万人。そのうちの八割が学生で、皆何かしらの超能力を持つっているわけだろうか？」

「そう。まあでも、六割くらいは無能力者だけだな」

「無能力者？」

「学園都市では超能力をその威力や効果で六段階に分けててさ。『超能力者』『大能力者』『強能力者』『異能力者』『低能力者』『無能力者』。『超能力者』は一人で軍隊と戦えるレベルだけど、『無能力者』は測定不能だったり効果が薄かったりして殆ど役に立たないくらい感じかな」

「それはまた……、何というか差が激しすぎないか」

「まあ、能力にも才能って奴が必要なんだよな」

本物の『超能力者』なんか七人しかいないしなとため息をつく上条に、衛宮士郎はどこの世界も似たようなものだたと内心頷く。衛宮士郎自身も、時計塔時代には周囲との

才能の格差に愕然としたものである。……比べる対象が優秀過ぎたという事もあるのかもしれないが。少し学生時代を思い出して懐かしい気分になるが、ふと上条自身のレベルも気になった。

「ちなみに、当麻の『幻想殺し』イマジンブレイカーはどのくらいのレベルなのだ？」

どんな能力でも問答無用に打ち消す事が出来るのだからかなり高いのではないかと自分なりに考えて聞いた衛宮士郎だったが、上条の返答は予想を大きく裏切った。

「いや、俺の『幻想殺し』なんか『無能力者』判定だけど……？」

「何だと？」

何当たり前のこと聞いてんだ？と上条が普通に返したので、衛宮士郎は思わず聞き返してしまった。幾らなんでも『無能力者』は無いだろうと言葉を返す。

「君の『幻想殺し』が、よりによって『無能力者』に判定されているだど？そんな馬鹿な話があつてたまるか」

「いやそんなこと言っても、マジでそうなんだつて。だいたい『幻想殺し』なんて、日常じゃ何の役にも立たないだろ」

「それは……、確かにそうだが」

日常で役に立つかどうかと聞かれると、確かに『幻想殺し』は何の役にも立たないだろう。納得はしたが、ついつい戦闘時のことを基準にして能力を計っていた自分の

感覚が一般人とずれているのかと衛宮士郎は思う事にした。そもそもその『能力』の判定と言うのも研究や日常生活での生産性を基にして決められる場合もあると言うので、その判定は案外妥当なのかも考える。

「それにしても科学の力を使って能力を開発しているとは、なんだか腑に落ちんな」

上条の話を聞いて、改めて得宮士郎はこの学園都市の異常さを実感した。衛宮士郎にしてみれば超能力の類は元の世界では完全に裏側の話であつたので、それがこうも堂々と世間に受け入れられているという状況はやはりなんだか違和感を覚える。そんな事を考えていた衛宮士郎を見て、上条がポツリと言葉を漏らした。

「まあ訳の分からない薬飲んだり、脳を弄くったりしないといけないけどな」

上条の何気ない言葉に、衛宮士郎の顔が強張る。

「脳を、弄くるだど?」

「ああ、電極を頭にブツ刺したり薬を飲んだりして俺らは能力を開発するんだよ」

言つてなかつたっけ? と何でもなさそうな顔でこちらを向く上条に、衛宮士郎は真剣な目で問い掛けた。

「……君らはそれで良いのか?」

「良いのかつて、どういう事だ? だって『能力』だなんてモノを手に入れるんだつたら、それくらいはするだろ」

「確かにそうかもしれないが、見知らぬ人間に頭の中を弄られるのだから？不安ではないのか？」

「だってここは学園都市だし、そこら辺は心配ないだろ」

「だいたい脳を弄るだなんて脳外科医でもやってる事だしなと続ける上条に、衛宮士郎は二人の価値観の違いを実感する。普通なら少しは拒否感が出てもおかしくは無いはずなのに、こうまで気軽に受け入れていると逆に怖気を感じた。それがこの世界での常識であるならば衛宮士郎にはもはや何も言う事は無いが、念のため一つの事を確認する。

「勿論君らは皆、望んでこの学園都市に来ているのだろうな」

「まあ、ほとんどはそうじゃねえか？超能力に憧れて入ったりする奴もいるみたいだしな」

「……そうか」

上条の気楽そうな言葉に、衛宮士郎はどうにか心を落ち着かせる。もし『開発』が強制的なものであったのなら、衛宮士郎は何としてでもそれを止めるつもりでいた。だが自由意志ならば本人達も納得しているのだし、大丈夫なのだろうと自分を納得させる。

リスク無しで力を手に入れる事が出来ないのは確かにその通りではあるのだが、それ

でもやはり衛宮士郎には不信感が残った。帰り際に学園都市の説明を受けているときにも感じたが、やはりこここの人間はどうもズレている気がする。

だがそれだけ学園都市の科学力を信頼しているという事でもあるのか、と半ば呆れる衛宮士郎。幾ら衛宮士郎が万人を救う事を己の旨として行動していても、ここで学園都市の方針をおかしなものと断ずる事は今の彼には出来なかった。

世界が違えば価値観にも差が生じるのである。本人達が納得しているならば、私がどうこうする問題でもないしなど、衛宮士郎は特大のため息をつくのだった。

その後も二人で話し込んでいる内にいつの間にか夕方となり、夜となった。上条が夕飯のあとに明日の支度をしていると、衛宮士郎がなにやら外へ出かける準備をしているのに気がついた。

「士郎、何やってんだ？」

「ちよつとした様子見に行こうと思つてな」

「様子見？　なんで今ごろ……」

「日中はあまり街中の詳しい所まで見て回れなかつただろう？　だから夜のうちに学園都市の構造を、せめて第七学区くらいは頭に入れておきたいのだ」

「ふーん。ま、夜のほうが今の時期は涼しいし、色々動きやすいだろうしな」

「そういう事だ。ああ、戸締りはしていても構わないからな」

そうして、朝までには戻ってくると言い残し衛宮士郎はさっさと外へ出てしまった。そんな衛宮士郎を見送りながら、上条はぼそりと呟く。

「……………やつぱり士郎は変わってるよな」

記憶喪失のはずなのに妙に行動力が高い同居人の背に向けて、上条はそんな言葉を口にするのであった。

真夜中近い時間帯、学生がほとんどの都市にもかかわらず人の姿が結構見える。衛宮士郎はそんな学園都市の夜を歩いていた。

昼の間に出かけたときに、あらかじめ監視カメラの位置を大体把握しておいた衛宮士郎は、それに極力映らないように心がけながら通りを歩く。勿論、昼間と同じような変装を施してもいるが、

「まあ、今回はきちんと眉も黒くしたしな」

大丈夫だろう、と見当をつける。昼間とは違い、眉まできちんと黒くした一応完璧な変装だ。服装も適当に夏の夜らしい、極めて目立たないような格好をしている。

(それにしてもあんな単純なミスをするとは、凜のうっかり癖でも移ったか?)

昼間の事を思い返し、そんな事を考える衛宮士郎。かつてのパートナーを思い浮かべ、思わず笑みを浮かべる。

そうして三時間ほど歩き回っているうちに、やや薄汚れた路地にたどり着いた。

「やはりな……」

衛宮士郎は辺りを見回して呟いた。そこはどこにでもあるような普通の街並みだった。但し、空気が普通の路地とどことなく違う。

そこかしこにある路地の入り口には、足元に無数の鉄杭が打ち込んであった。鉄杭の長さはまちまちで30cmのものもあれば10cmくらいのもあり、それが1mほどにわたって続いていた。よく見ると、頭上には空を覆うようにビニールシートがビルとビルの間に張られている。

無法者達のためり場。

全人口230万人の八割もの学生がいるなら、落ち零れる者達もまたそれなりに存在しているという事で。幾ら治安技術が発展しているとはいえ、こういった場所は大都市なら必ず存在しているものである。それが学生ばかり集まった学園都市ならなおさらだ。

衛宮士郎は、なにも適当に歩いてここに来たわけではない。衛宮士郎の目下一番の目

的は、学園都市を隠密に出ることであり、その為の情報収集である。魔術で誤魔化すにしろ、どれくらいかの審査・警備が敷いてあるのかは重要であるし、金を使った後ろめたい方法があるのならそちらを使っても構わない。何もそこらの不良に直接聞く訳ではないが、何かしらそういった裏側への手掛かりがあるならばと、このいかにもな場所にやつてきたのだが、

「妙な敵意を感じるな…」

なんだか路地に近づいたとたんに、悪意のあるギスギスとした視線を感じる。感覚を研ぎ澄ませて見れば、そこかしこから感じる人の気配。まるで路地裏の奥が、生き物が息づいているかの如く蠢いている様に見えた。

(これ以上近づくなと言うことか)

だがそういうわけにもいくまいと、衛宮士郎は鉄杭のバリケードを大股で越えた。その時、近くでこちらの様子を伺っていたのだろう三、四人の少年達が、路地の奥からぞろぞろと現れる。各々が鉄パイプやら警棒やらで武装しており、どう見ても穏やかそうには見えない。

「よお、兄さん。こんな夜中に、こんな場所に一体なんのようだ？」

「ここから先は、俺達『スキルアウト』の領域だぜ」

「それとも身ぐるみ全部、俺達に譲ってくれんのかあ？」

近づいてきた少年達が口々に喋りだす。見た所まだ高校生かそれくらいの年齢だ。こういう人種は、どうやら世界が変わろうと大差ないらしい。衛宮士郎が一人で、しかも何の武装もしてないと油断しているのか軽薄そうな笑みを浮かべている。

(スキルアウト……か)

彼らの口振りから察するに、どうやら彼らは何らかの集団に属しているらしい。特にこちらから何もアプローチを掛けずともべらべらと自分達の事について喋りそうな雰囲気であつたので、衛宮士郎は彼らからある程度の情報を探り出す事に決めた。

「いやなに、実はキミ達のリーダーに用があつてね。出来ればそこを通してもらえるとありがたいのだが」

「はあ？ 駒場のリーダーに用があんのか？」

そんな連絡受けていたか？ と少年達は確認しあっているが、それは勿論、衛宮士郎の嘘だ。ある程度の規模を持った集団なら、誰かリーダー的な役割を持つ人物がいてもおかしく無いと踏んだのだが正解だったようだ。

「ちよつとそこで待ってる。確認してくる」

お前らはそこで見張つとけと仲間を掛け、少年達のうちの一人がリーダーに確認をとりにいく為か路地の奥の方へと走っていく。残りの少年達ももしかしたら衛宮士郎が客人かもしれないという事に油断したのか、各々武器を下げて息をついた

(スキルアウト……、それなりに統制の執れた集団であり規模もそこそこ。リーダーの名前は駒場か……)

とりあえず今までに得た情報を確認する衛宮士郎。この短時間でこれだけの情報を手に入れられたのは僥倖であったが、まだまだ足りない。未だ情報不足ではあるが、このままここで待つについても実際には駒場なる人物と会う約束などしていない為、追い返されてしまうのが関の山だろう。下手をすると、荒事に発展してしまうかもしれない。そう考えた衛宮士郎は、少年が奥へ走っていったのを見届けると、いきなりスタスタと先へ歩き始めた。焦ったのは残された少年達だ。慌てて衛宮士郎を囲み込むと武器を突きつける。

「テ、テメエ！ 大人しく待ってやがれ！」

「それ以上先へ進めば、痛い目にあってもらうことになるぜ！」

「まあ、そう殺気立たなくてもいいだろう。私が約束をしている事などすぐに分かる事だ」

「馬鹿かお前?! だったら大人しくしてろ！」

「どうせすぐに行く事になるのだ。少し早くとも何の問題もあるまいよ」

そんな言葉を交わしつつ、衛宮士郎は奥へと突き進む。少年達は律儀に衛宮士郎を囲んだまま付いて来るが、約束が本当か嘘かも分からないので迂闊に手を出して止める事

も出来ない。

結局、奥へ進んでいく衛宮士郎とそれに武器を突きつけつつ囲み込んだままの少年達がついて行く形という、はたから見たらなんとも間抜けな光景のまま彼らは奥へと進んでいった。

「……俺に客人だと……」

路地裏の奥の奥、廃ビルの一室に武装集団『スキルアウト』のリーダー、駒場利徳はいた。先ほど路地の見張り係から、部外者がここに立ち入ろうとしていると連絡を受けたばかりである。

「そうです。そいつ、駒場のリーダーと会う約束をしているとかで……」

「……そんな約束をした覚えはないな……」

見張りの言葉に駒場は思案をしつつ言葉を返す。厳つい顔をしたゴリラのような大男が陰鬱そうな口調で喋る様は、中々に迫力があつた。部屋が狭く感じるのはおそらく駒場の図体の大きさだけではあるまい。

「……だが気になる。警備員アンチスキルには見えなかったのだろうか？……」

「は、はい。特に武装もしてなくて、一人で来たようでした」

「…………どう思う、浜面」

駒場は隣に立っている別の少年に話しかける。彼の名前は浜面仕上。『スキルアウト』のNo.2のような存在であり、主に多種多様な車の運転や鍵開けなどを得意としている。

「学園都市側からの刺客かもしれないねえ。罠の可能性もありますよ」

無防備に見せかけて実は強力な能力者とか、と浜面は続ける。しかし、わざわざ刺客を送られる様なまねをした覚えはない。別に今、危ない事を計画しているわけではないのだ。彼らはまだ資金集めの段階だ。ただまあ売春にこそ手を出してはいないものの、窃盗・強盗なんでもござれで金をかき集めてはいるが。

「金の盗みすぎ？ いやでもそんなら警備員アンチスキルが動くだろうし…」

浜面は不思議そうに首を傾げるが、幾ら考えた所で分かる話でもない。

「……………そいつをここへ呼べ……………」

「おいおい、リーダー。マジで罠だったらどうするんだよ!」

「……………こちらもそれなりの罠を張ればいいだけの話だ。念のために戦闘準備もしておくべきだな……………」

浜面の心配をよそに、準備を進める駒場。どうやら完全に相手をする事に決めたようだった。

(……相手が何者であれ、確認はせねば。……たとえ刺客だとしても、叩き潰すだけだ……)

そう考えながら周りのメンバーに指示を出していると、なんだか急に外が騒がしくなってきた。

「どうした？ なに騒いでんだ？」

浜面が部屋の外に確認を取る。しかし、そこから返ってきたのは予想外の言葉だった。

「そ、それが。例の野郎が急にこっちに向かいだしましたー！」

「何だと!？」

思わず大声を上げてしまった浜面だが、そうこうしている間にも騒ぎの中心が段々こちらへと近づいてきているのが分かる。まさかこちらが返事を返す前に、向こうから突っ込んでくるとは思わなかった。

「どうするリーダー、こっちはまだ何の準備もしてないぜ！」

「……落ち着け、俺が相手と話して時間を稼ぐ。お前達はそのうちに準備を進めろ……」
「話し合いが通じるかもわかんねえだろ！」

「……単に襲撃が目的ならば、ハナから攻撃してきたはずだ。一時的とはいえこちらに連絡を取ろうとした以上、話し合いの余地はあるはずだ……」

「そ、そりやそうかもしんねえけど」

浜面は焦るが、文句を言っている暇はない。見知らぬ侵入者は今もこちらに向かつてきているのだ。そいつに感づかれないように、もしもの為の罾を張る必要もある。リーダーを残していくのはかなり気がかりであつたが仕方がない、どうか物騒な奴でいなくてくれよと浜面は内心祈りながら駒場を残し部屋をあとにした。

衛宮士郎は廃ビルの中をずんずんと突き進んでいた。先程から周りを取り囲んでいる少年達はまるつきり無視している。武器をこちらに向けて今にも向かつてきそうな形相であつたが、衛宮士郎にとっては大して脅威ではなかつた。この程度の人数と武器ならばたとえ不意打ちをされても、難なく対処できる自信がある。

(それにしても、数は矢鱈と多いな)

衛宮士郎が辺りを見回してそう感想を漏らす、それも無理は無い。様々な年齢の男女が、それこそ菓子に群がる蟻の如くわらわらとこちらの様子を伺っている。だがそれも衛宮士郎にとっては幸いであつた。駒場というリーダーの居場所は正確に知っている訳でもないが、幸いそういった少年達が多数いたため彼らを頼りに奥まで辿り着く事が出来たのだ。

更にここに来るまでに、まだ分かった事もあった。まずは先程から得宮士郎が感じていた様に、その集団の人数の多さ。廃ビルに辿り着くまでに結構な数の男女を見かけており、周りに潜んでいた人数まで含めるとその数は更に増えるであろう。

次に集団の統制が予想以上に執れているという事。衛宮士郎が路地を通るたびに連絡員のようなものが逐一報告にいっている事から、かなりの統率が執れていると判断する。

これは『スキルアウト』という集団の評価を上方修正する必要があるし、と心の内で呟く。もしかしたら当たりを引いたのかもしれないと衛宮士郎は考えた。

「ここにいるのか？」

そのうちに、たいして時間も掛けずに、それらしい部屋へとたどり着く。部屋の前には黒っぽい服を着た少年が立っていた。

「アンタか。駒場のリーダーに用があるって言う奴は」

「そうだ。『スキルアウト』のリーダーに用がある」

「……入れ」

特に何も言う事もなく、黒い服の少年が前を空ける。さつさと部屋に入れと暗に言っている様だった。衛宮士郎も何か返事を返す事なく、部屋へと足を踏み入れる。事前の解析により、廃ビルの構造は全て把握してある。部屋の中には特に罠もなく、廃ビルに

特殊な施設がない事も確認した上での一歩だ。歩みに迷いはない。そうして部屋に入ってみればその中には一人、人がいるだけであった。但しかなりの大男であり、屈強な体つきをしている。

「……お前が侵入者か……」

「侵入者、とは失礼だな。私はきちんと君に用事があつてここに来たのだがね」

「……そんな話は聞いた覚えがないな……」

「無論、事後承諾だ。まあ、ビジネスの話だからな。そちらが聞いておいて損はないと思うが」

衛宮士郎は自分の嘘がばれている事が前提で話を進める。ここまで来た以上、互いに確認をする必要などありはしない。駒場もそれがわかつているのか、まるでコピー用紙をそのまま吐き出しているかのような口調で話す。

先程ビジネスと衛宮士郎は言ったが、それは勿論学園都市の出入りに関しての事だ。本来はこんな不良達に出す話ではないが、『スキルアウト』はただの不良集団にしては余りに規模が大きく、統制も執れ過ぎていた。それにリーダーにしても話せないような人物ではなかったたので、こうしてために話を持ちかける事にしたのである

「……ビジネス、ときたか。貴様が我々に何を要求するかは知らんが、それなりのものを持つているようには見えんな……」

「心配は無用だ。報酬はきちんと用意してある」

「……言うだけ言ってみろ」

トントンと懐を叩く衛宮士郎にそれなりに興味を引かれたのか、駒場が衛宮士郎をじっと見つめる。

但し駒場は警戒心を解いたわけではない。むしろ油断ならぬと逆に強めてさえいる。

「単刀直入に言うと、私は学園都市を出たいのだよ」

「……言っている意味がわからんな。勝手に出て行けばいいだろう……」

「ところがそうもいかん。訳あつて、表にそうそう顔を出せない身でな。出来る限り秘密に出たいのだ」

「……つまり、学園都市を『外』とのゲートを潜らず抜け出る方法を教えろと……」

「そういう事だ」

衛宮士郎の意外な要求に駒場はらしくもなくため息をつく。一つは予想以上に警戒する必要も感じられないほどの事だったこと。そしてもう一つは……、

「……貴様はいくつか勘違いをしている……」

「ほう、なんだねそれは。今後の為に、是非とも教えて貰いたいものだな」

駒場の陰鬱な言葉に、衛宮士郎が口を皮肉気に吊り上げながら言葉を返す。

「……一つ、我々はあくまで学園都市内での活動を主にしている。目的はあれども『外』

とは関係がない。それゆえ、そのようなゲートの事情には詳しくはないし、興味もない」
「それはそれは、私がここまで足を運んだ事は無駄足だったか」

やれやれと肩をすくめる衛宮士郎を睨みつけながら、駒場は言葉を続ける。

「……二つ、我々は何でも屋ではない。金さえ出せばなんでもしてくるような、便利屋と勘違いされては困る……」

衛宮士郎が口を挟む前に、駒場は更に言葉を畳み掛ける。

「……三つ、そうしてのこのこやってきた間抜けを金も取らず、何もせずに帰すほど、お人好しでもないという事だ……」

駒場の言葉が終わるか終わらないかのタイミングで、ドンツという轟音ととも、いきなり部屋の両脇の壁が崩れ落ちた。後ろのドアも音を立て勢いよく開き、かなりの人数が部屋へとなだれ込んで来る。駒場がため息をついたもう一つの理由。それは衛宮士郎の余りの無防備さへの呆れか。

「やれやれ、荒事は遠慮したかったのだがな」

だがそんな状況にもかかわらず、衛宮士郎は落ち着き払った様子で懐に手を入れる。衛宮士郎は決して無防備などではなかった。彼の戦闘には油断もなければ敗北もない。衛宮士郎が無防備に見えてしまったのなら、それは衛宮士郎という人物を大きく見誤ってしまったという事。

巻き起こる土埃は、まさに開戦の合図か。
今ここに、衛宮士郎と『スキルアウト』の戦いが始まったのだった。

交渉Ⅰ

(……………まずいな……………)

件の侵入者と対峙した駒場利徳は、余裕そうに見えて実は冷や汗をかいていた。予想以上に早く相手がやってきた為、自身の体を『ハイドレービング発条包帯』で補強している暇もなかったのだ。だが問題はそこではない。いやある意味では、それが一番の問題であるのかもしれないが、

(……………)

駒場もかなり鍛えている方だ、実戦経験の数も半端ではない。だからこそ分かる事がある。

そう、部屋に入ってきた侵入者。廃ビルの薄暗い明かりに照らされたその姿は、どこか威圧感がある。そして眼鏡越しでもわかるほどの、まるで猛禽類のように鋭い目。明らかに堅気の者ではないし、子供を守るといふ使命を抱えた警備員ジャッジメントがこんな目付きをするはずもない。相当鍛え上げられているのであろう事が分かる。こんな相手に対して、自分は確な装備も出来ていないのだ。相手の年の頃は大学生かそれ以上か。能力者で無い可能性も考えられるが、それは無いだろうと考える。

(……装備のレベルを上げるべきか……)

侵入者と対峙しつつ、相手に気付かれないように、部屋の外で待機している構成員にサインを送った。すなわち戦闘要員の増加、装備の強化。相手がどんな能力を持っているのか判明していない以上、用心にこした事はない。そもそも武装集団である『スキルアウト』に一人ではぼ手ぶらの状態のまま乗り込んでいる時点で、能力は非常に戦闘向きなものだろう。そうでなければこんな愚考は犯すまい。

能力が強力なものである場合、更に厄介なのが先に挙げた身体能力だ。能力が強い輩ほど素の体方面は低いのが常套であるのだが、こいつは両面において優れている可能性もある。適当な会話で時間を稼ぎつつ様子を伺うが、見れば見るほど怪しい男だった。

駒場は決して侵入者を侮ってなどいなかったし、油断もしていなかった。口では相手を間抜けと言いつつ放ちあたたかも侮っているかのようにため息を吐きつつも、どうにかして攻撃のタイミングを見計らう。

そして……、

「……お人好しでもないという事だ……」

相手に分からねぬよう細かい仕草による突入の合図。轟音とともに壁を崩しながら、構成員達が三方から雪崩れ込んでくる。元は廃ビルであり、あらかじめ細工も施してあるので破壊もたやすい。警棒から、はてはマグナムまで装備した面々で男を取り囲んだ。

男の前には駒場、背後と左右には大勢の構成員達。武装した十数人に囲まれるなどというこの状況、普通に考えればよほど高レベルの能力者でもない限り手詰まりだ。

しかし、それでも。

それでも四方を囲まれたこの場においてさえ、なお男は不敵な笑みを浮かべる。

男が懐に手を入れたかとおもうと、刃渡り90cmほどの剣を三本、指の間に挟んで取り出してきた。

(……武器だと？　しかし、どこから？……)

駒場の疑問も当然。見た限り男には服の間に武器を隠せるような隙間など、どこにも無かったはずである。それ以前に遠隔で事前にサーチを掛けたときには、金属製の武器など何一つ持っていなかったのに。

てつきり何らかの能力で対抗してくると思った駒場は、剣という意外な近接武器の登場に驚く。予測が外れた駒場だが、更なる男の行動に再び驚く事となる。

「……………むう!!」

あろうことか男は、その唯一の武器であろう剣を三本とも駒場に投げつけてきたのだ。上半身をひねる事で何とか剣を回避した駒場だったが、男はさらに剣を投げたのほぼ同じタイミングで駒場の方へ突っ込んできた。

(……………投擲用の剣だったか。だが……)

ここまでではない、と己を落ち着かせる駒場。元々必要以上に武装させた構成員で三方を囲ませたのも、一番手薄であろう駒場の方へと男を誘導させる為である。第一、彼らは『無能力者』なのだ。高位の能力者とまともにやり合うなら、まずもって準備が必要になる。準備が出来ていない内に、そいつらとかち合った時点で既に状況は不利だ。

駒場が今最優先しているのは勿論未知の侵入者の撃破でもあるが、それと同じくらい仲間には被害が及ばないようにする事も重要視していた。駒場なら、大抵の事には対応できる自信がある。

現に、不意打ちに近い剣の投擲も避けて見せた。

(……………からが本番だ……………)

敵に、自分の方へ意識を向ける事は成功した。あとは駒場次第。こちらが圧倒的な大人数と言えど決して油断せず慢心せず確実に相手を仕留めるため、駒場は突っ込んできた侵入者へと手を伸ばした。

(囲まれたな……………)

四方を囲まれたそんな状況とは裏腹に、落ち着いた様子で辺りを観察する衛宮士郎。現時点では既に『スキルアウト』との交渉の余地は無い。別段その事に落ち込んでい

訳ではないが、周りを囲んでいる不良達には少々目に付く点があった。

ある違和感。最初からなんとなく彼らに感じていた違和感が、それを見て氷解する。その原因を確認した衛宮士郎はどうしてももう一度、駒場と交渉したくなかった。だがそれにはまず、この状況から脱する必要がある。ならばさっさと行動すべし。

まるで懐から取り出したかのように見せて黒鍵を投影した衛宮士郎は、駒場が避けられる程度に時間を掛けてそれを投げる。勿論それでもとても打ち落とせるような速度ではなかったが、衛宮士郎の予測通りに駒場は身をかかわして黒鍵を素早く避けた。かわされた黒鍵は三本とも深々と壁に突き刺さる。

(なるほど、見かけ倒しではないようだな)

駒場の動きに彼の評価を上方修正しつつ、他の構成員が何かアクションを起こす前にそのまま前方へと突っ込む。その巨体に似合わぬ敏捷さで駒場が手を伸ばしてくるが、衛宮士郎はその手をすろりと掻い潜りさらに前へと進んだ。

駒場のほうは敵に後ろを取られる事を警戒し、体の向きを変えつつばつと部屋の中央へと下がる。その隙に衛宮士郎は、駒場が避けたおかげで壁に突き刺さったままの黒鍵を基点に、壁に鋭い蹴りを放った。

砲弾の如き勢いの蹴りが、黒鍵の柄へと叩き込まれる。元々老朽化していた壁の上に黒鍵のせいで大きくヒビの入っていたその壁は、衛宮士郎の蹴りで轟音を立てて崩れ落

ちた。壁を蹴り砕いた先には数人の構成員達がいたが、まさか壁を砕いて部屋から出てくるとは予想だにしていなかった様子で、ぽかんと口を開けている。

「う、うわっ!？」

「すまんな、少し使わせてもらおうぞ」

衛宮士郎はそのうちの一人に近づきその手をとると、先ほど崩れた壁からこちらにやっこようとしていた駒場達の方へと加減をして放り投げた。まるでボールのようにポンと投げられた少年は、そのまま頭から壁に突っ込まんとする。

「……………」

まさか仲間を落とすわけにもいかない駒場は、放り投げられた構成員を受け止めた。そうして再び隙を突いた衛宮士郎は、向かってくる構成員を全て無視して廃ビルを駆け回る。そのまま予め解析で探っておいた廃ビルの窓へと走り寄ると、走り込んだ勢いのまま体を外に投げ出したのだった。

「ア、アイツ飛び降りやがった!!」

飛び降りた男の姿を見た浜面が、声を上げて窓へと近づく。侵入者の足の速さに大分引き離されてはいたが、なんとか目で追いビルの下を見下ろした。しかし男は完全に逃

げた様子で、既にその陰も形もない。まさか六階ほどの高さから飛び降りるとは、思ってもみなかった。

「どうする駒場のリーダー。追うか？」

黒い服を着込んだ少年、半蔵が駒場に指示を仰ぐが、駒場は首を横に振った。

「……よせ。逃げたならいい……」

「おいおい、リーダー。あの野郎ほつとくのかよー！」

浜面はてつきり侵入者を追いかけるものだと思っていたので、駒場の意外な言葉に驚く。

「……けが人が出ないだけ僥倖だ……」

「でもよう、そしたらこっちはこのままじゃ舐められっぱなしだぜ！」

「……………」

「よせよ浜面。駒場のリーダーがいいって言ってんだ。ほつときやいいだろう」

「……………」

「わーった、わーった。わかったよ」

無言でこちらを睨み続ける駒場のプレッシャーに堪えかね、浜面はおどけたように両手を挙げた。浜面としては『スキルアウト』を舐め腐りやがった野郎を何としてもぶちのめしたかったが、駒場に睨まれ半蔵に窘められては引き下がるしかないのだった。

その後、三人は別の部屋で会議を行っていた。会議といっても簡単な話し合いで、主に次の移転先についての話であった。

他の構成員には全員総出で、下の階で既に移転の準備をさせている。三人は部屋の中に机を据えて、各々適当な椅子に座っていた。

「なんでもう拠点を移すんだよりリーダー。まだここは警備員ジャッジメントの連中には撤去されそうにもなつてないぜ？」

「……予想外の襲撃があつた以上、早めに拠点を移すべきだ……」

「襲撃つて……、あんなの馬鹿が勝手にやってきて勝手に逃げただけじゃねえか」

「……駒場のリーダーは、どうしてアイツをそんなに危険視するんだ？」

駒場と浜面が言い合っている中に、半蔵が口を挟む。浜面が拠点を手放すのを渋るのも駒場がさっさと拠点を移そうとするのもわかるが、半蔵としては駒場のいつにない用心ぶりが気に掛かっていた。半蔵の言葉に、駒場は侵入者の男の事を思い返しながその重い口を開く。

「……目、か……」

「目？ あいつの目が一体どうしたつてんだよ？」

「……どうと言われてもな。とにかくあいつの目を見た時、深追いはするべきじゃないと思つた。それだけだ……」

なんじやそりやと浜面が呆れたような声を出す。が、駒場も正直同じ気持ちだった。何故自分がこれほどまでにあの男を危険視するか、自分でも分からないのだ。唯一つ言えるのは、あの男は相当に危険だと言う事。

あの場で侵入者と直接対峙した駒場だからこそ分かる。彼の一種の勘の様な物が、男の目を見ただけで危険信号を発してた事を。駒場にとって一番印象的なのが男の目であつたのだ。まるで猛禽類の様な、鋭く在る目。俺達があそこまでの目付きが出来るものかと、駒場は一人考える。とにかく『スキルアウト』としてはあの男に深く関わる必要は無いというのが駒場の出した結論であつた。

まあ浜面もいつも以上に思わせぶりの駒場に若干の不満を感じてはいたが、確かに男の投剣の様子だけ見てもかなりの力量を持っているのは事実。投げた剣が綺麗に真っ直ぐ飛び、壁に突き刺さるのは相当な技量が必要のはずだ。刺さっていたはずの剣は、いつの間にかどこにも見当たらなかつたし。対する半蔵も心配しすぎだとは思つたが、ここまで駒場が推すのなら仕方がなかつた。

「まあ駒場のリーダーがそうまで言うんならしようがねえって浜面」

「はあ……。仕方ねえが、移転先を考えるか」

半蔵にも説得されて、漸く諦める浜面。そもそも、男を追つた所でこちらに何かメリットがある訳でもない。言うなればはじめの話であるので、特にこだわる必要もな

かったのではあるが。

結局の所、駒場の言う通りに拠点を移す事に決めた三人。移転先の候補について情報収集してくるかと思面が腰を上げたその時、コンと一回部屋の扉がノックされる。

「おう、誰だ……つて、あ？」

ちょうど立っていた思面がドアへと近づき、扉を開けるが外には何故か誰もいなかった。なんか扉にぶつかつたかと一旦外に出て辺りを見渡すが、特に変わった様子もない。

「なんだつたんだ一体……」

思面は首をかしげながらそのまま部屋へと戻ろうとし、

「ぐがッ!？」

「思面!!」

部屋に入る直前に、いきなり何者かに後ろから首を絞められた。

「全員、動かないで貰おうか」

「て——、メエ!!」

低く抑えた声が、思面の背後から上がる。その影に思わず立ち上がった半蔵は気炎を上げるが、この状況ではどうする事も出来なかつた。駒場もとつきの出来事に反応が遅れて、椅子に腰掛けたままである。そんな二人を前に悠々とした表情で思面を抑えてい

るのは先程の侵入者、衛宮士郎その人であった。

「……どうやってここまで戻ってきた……」

「さて、な。君らの御想像にお任せする」

「……なにが目的だ……」

「先ほど言つたはずだが？ 情報がほしい、ただそれだけだ」

いきなりの侵入者の再登場に、人質まで取られては身動きが出来ない二人。衛宮士郎は二人を牽制しながら部屋に入ると、そつと扉を閉めた。

先程の話、どうやって衛宮士郎がこの廃ビルに戻つて来られたのかという事はそう複雑な話ではない。廃ビルの窓から飛び降りたあと、地面に落ちる前に階下の別の窓から再びビルの中へ入つただけの事である。

解析により、既にビルの構造は頭に叩き込んである。飛び込んだ部屋の窓硝子が既に割れていて、侵入の際に大した音も立てなくて済むであろう事。特に老朽化が進んでいた部屋であった事から、誰も使っていないだろうと当たりをつけられた事。要因は様々あつたが確信は無く、まあ一種の賭けでもあつた。

元とは言えば数ある脱出手段の一つであつたが、成功したのは運が良かったなど衛宮士郎は思い返す。その後廃ビルの中が落ち着いたのを見計らつて、構成員に見つからないようにトップのメンバーがいる部屋を探し出したのだ。

部屋を見つけること自体は、やはりそう難しいことではない。前と同じように周りの話を聞きつつ、地道に探し回った。廃ビルゆえに薄暗く、使われていない部屋が案外多かった事も幸いしたのだろう。見つけた後は三人のいる部屋の前の天井に張り付きながら待機、そして不意打ち。

結果は先の通りである。衛宮士郎は人質を一人手に収めた状態で、再び交渉の席に立つ事に成功していた。予想だにしない状況下、駒場は憎々しげな目で衛宮士郎を見つめている。

「……俺達『スキルアウト』はただの不良の集まりだ。そんな高度な情報を知っているはずもなからう……」

「ほう、最近の不良集団はこんなおもちゃも使うのかね？」

低く唸るような駒場の言葉に、衛宮士郎は浜面を締め上げたまま懐から鈍く光る銃を取り出した。途中、構成員が保管していたものを拝借した大口径のマグナムだ。腕で締め上げる代わりに、浜面にその銃を突きつけつつ続ける。

「こんなもの、そこらの不良では手に入るまい。それとも学園都市では銃が市販されているのかな」

「……………」

「別に君らが私を直接案内する必要はないのだよ。ただどういうルートでこれを手に入

れたか、それだけ教えて貰えればそれでいい」

「……武器の密売と、学園都市の出入りが関係するの？……」

「するとも。あの手の輩は、必ず横に繋がりがあがる」

幾ら広いとはいえ、所詮物理的に壁で囲まれて制限されている学園都市。どうしても、そういった後ろめたいルートは限られてくる。それゆえ犯罪者同士で繋がりがなければとてもではないが密売などは不可能だろうと、衛宮士郎は踏んでいたのだ。

たとえここで学園都市の出入りに関する情報が出てこなくとも、遠回りだが犯罪者の伝を辿ればいつか必ず目的の業者に辿り着く。しかも場合によっては外道も潰せて一石二鳥(?)である。

当初は本当に『スキルアウト』を刺激しない内にただ逃げる事が目的だったが、構成員の装備がやけに上等だったのを見てこのような強硬手段に訴えたのだ。

優位な状況に立っていても、油断なく二人を警戒しつつ話を続ける衛宮士郎に舌打ちしつつ、駒場は陰鬱な声でそれに答える。

「……たえそうだとしても、情報を話したあとの俺達に貴様が危害を加えないという保障はどこにもない……」

「安全の保障を交渉するつもりか？ それを言うなら私は君達の構成員に怪我一つ負わせていないと思うが」

「そんなの理由になるかよ!!」

今まで黙っていた半蔵が耐えかねて声を上げる。彼としては早く浜面を救い出してやりたかったが、浜面は銃を背に突きつけられて全く動けない様子だ。駒場も衛宮士郎を睨みつけるが、打開策がどうしても思い浮かばない。だが衛宮士郎にしてみても、相手が喋らない限り状況の進展のしようがないのだ。

この場の全員が動かぬまま、さつさと情報を引き出した衛宮士郎と浜面を含めた自分達の安全を保障したい駒場達で、一種の膠着状態に陥ってしまった。しばらく、両者の無言の睨み合いが続く。

が、このままではいざれ他の構成員が異変に気付き不利になると考えた衛宮士郎が、仕方なく打開策を提示し始めた。

「……………ではこうしよう。そら」

「うおっ!?!」

ドン、と衛宮士郎が浜面の背中を銃身で押し出す。急に背中を押された浜面は、よろけつつもしっかりとした足取りで駒場たちの元へと走り寄った。訳の分からない衛宮士郎の行動に、駒場が訝しげに眉を上げる。

「……………何のつもりだ……………」

「言っただろう、荒事は遠慮したいと。本来ならこういう手は使いたくなかったのだが

な」

古人曰く、押して駄目なら引いてみる。浜面を突き放した衛宮士郎がポケットから取り出したのは、

「……携帯電話?」

「生憎、これくらいしか策がなくてな」

そう言うのと衛宮士郎は片手で携帯のダイヤルをプッシュし始める。もう片方の手では相変わらずこちらに銃で照準を合わせていたので、身動きできない駒場達だったが電話先への衛宮士郎の言葉に三人とも凍りついた。

「もしもし、警備員アンチスキルですか!」

「なっ!」

「第七学区の……、はい、そうです。そこで武装した大勢の『スキルアウト』に囲まれて!……。はい、大至急お願いします」

今にも倒れそうな、息も絶え絶えのフリをして電話を続ける衛宮士郎。そうしてこの場所を告げ通話を終えた衛宮士郎は、携帯電話をポケットにしまった。

「お、お前……」

「さて、タイムリミットは……。そうだな、約10分といった所か」

余りの展開に呆然とする駒場達の前に、衛宮士郎は再び銃を突きつける。

「どうする?」早く喋らないと警備員アンチスキルが来て、お仲間ごと逮捕・連行されてしまうぞ」
 下の階にいる奴らは通報があったなんて知らないだろうしなと、衛宮士郎は続ける。
 ギリギリと悔しそうに齒を鳴らす浜面と半蔵だが、このままでは本当に全員まとめて逮捕だ。

今は特殊な武装をしている訳でもないの、衛宮士郎が突きつけている銃のせいはこちらはもとにも身動きが取れない。しかも、目の前の野郎は救助される側と来ている。ここで時間稼ぎしていても、事態は悪化する一方。下手をしたら今まで貯めていた軍資金さえ、隠しきれずに没収されてしまう可能性がある。

しかし逆にさっさと情報を話してしまいさえすれば、幸い既に撤退の準備中だったため警備員アンチスキルの到着にはどうにか間に合うかもしれない。もはやどっちに転んでも悪い様にならなければならないなら、被害を最小限に食い止める事しか駒場に選択の余地はなかった。

「……判った、話そう……」

「リーダー!!」

「聞き分けがいいようでは何よりだ」

駒場の声を聞いた衛宮士郎が、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。浜面が思わず叫ぶが、この状況ではどうしようもなかった。そんな浜面を横目に、衛宮士郎は確認の為に駒場に問いかける。

「まさかとは思うが、嘘の情報をお教えたりはしまいか？」

「……そしたら、どうする……」

「何、君達が情報を持つていっているという事はわかったのだ。真実を教えてください。訪ね続けるだけさ。今度はそれなりのお返しを持つてな」

「……つまり、話したら……」

「ああ、もう『スキルアウト』には関わらんよ」

関わる理由もないしなと言おう衛宮士郎に、駒場は素直に安堵する。正直、こんな得体の知れない妙な男にこちらも二度と関わりたくはなかった。この状況で大人しく話が付けられるなら、それに越した事は無い。

ここで一旦この男を帰しておいて、あとから徹底的に報復をすると浜面辺りは言いそらうであったが、そんなのは駒場にとっては以ての外だ。下手に動いて、計画を学園都市に嗅ぎ付けられても困る。色々引つ掻き回されはしたが、もともと『スキルアウト』の計画を知っているようには見えないし、学園都市側の人間にも見えない。

ここらでこちら側が引き下がるのが潮時かと、結局駒場は判断した。そうしてコピー用紙をそのまま吐き出したような口調で、駒場は密売のルートに関する情報を吐き出したのだった。

もう空が白み始めている時間帯。サイレンの音を耳にしながら、衛宮士郎は上条の学生寮へと向かっていた。正直な話、今回の収穫は上々と言っても言い過ぎでない程の大量の収穫であり、十分な情報入手する事が出来た。まさか初日の探索でここまで上手くいくとは思っても見なかったのも、衛宮士郎自身も若干驚いてはいるが。

だが、反省点もまた多い。いくら早く学園都市を出るためとはいえ、いきなりあのようにろくに調べもせず組織に首を突っ込むのはもう遠慮したかった。今回が上手く言ったからといって、次が上手くいく保障もない。

あの時、駒場たちに見せた携帯電話。アレは実は投影品であり、中身のないただの張りぼてである。あの時は電話するフリをしていただけだったのだ。そもそも衛宮士郎は警備員への連絡方法も知らないし、下手に警備員側アンチスキルに通話記録や自分の肉声を残されても困る。学園都市の科学力では、そこからどんな情報が読み取れるかも想像もつかないからだ。

それに今度から相手にするのは、『スキルアウト』のような不良の集まりではない。真正銘、重度の犯罪者達だ。

これからはもつと情報を煮詰めて攻めていく必要があるなど、衛宮士郎は再確認したのだった。

朝方、上条は目覚ましの音で目を覚ます。夏真つ盛りのこの時期ではいつまでも布団の中で燻っているなんて事はまずないが、それでもやはり朝起きるのは辛い。それが月曜の朝となれば猶更だ。

(だるい……)

宿題を片付けるのにそこそこ掛かってしまった為、完全に疲れの取れていない上条。だがふと、上条家のいつもの朝にそぐわぬいい匂いが鼻につく。

「……………」

何故こんな匂いが？と上条は寝ぼけ眼で起き上がった。匂いの元を目と鼻で追うと、そこには台所に立っているエプロン姿の大きな背中。一瞬誰かと思つたが、そういえば昨日から同居人が一人増えたのだという事を思い出す。

「ああ、起きたか当麻。おはよう」

「……………おはようございます」

いつの間に帰ってきたかは知らないが、自分が起きる前に朝ごはんの準備をしてくれていた衛宮士郎にどこことなく上条は申し訳なくなる。衛宮士郎からしてみれば、ただで同居させてもらっている以上、せめて家事くらい担当するのは当たり前だったのだが。

「ありがとな。朝ごはんの準備」

「何を言う、これくらい当然だ」

さあ冷めないうちに食べると言う衛宮士郎の言葉に、上条は素直に椅子に座る。机の上にはごく一般的な和風の朝食が乗っかっていた。どれもこれもがなんだかいつもの朝食より美味しそうに見えるのは、きつと気のせいではないだろう。前日から気付いてはいたが、やはり衛宮士郎の料理スキルが半端ではない事を上条は再認識する。

「いただきます」

「いただきます」

勿論、衛宮士郎も一緒に食べるので二人揃って食べ始める。衛宮士郎は未だ学園都市の知識が大幅に不足しているので、食事中の会話の内容も自然とそちらよりの話になった。

「……つてことで学園都市の天気予報は、『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』のおかげで百発百中なんだよ」

「そんなものまであるとは……」

上条の説明で、衛宮士郎も学園都市のものはや異常とも呼べる科学力を再認識させられる。あとは学食レストランだの、大覇星祭だの興味深い話は沢山あった。科学力の他にもまたその閉鎖性にも驚かされたが、どうもやり過ぎではないかという感想が残ってし

まう。まあ、学園都市の特性上仕方無い話であるとは分かってはいるのだが。

「あー、時間がそろそろ……」

「む、そうだな」

そうして他にも色々話をしているうちに、そろそろ時間の方がヤバくなってきた上条。せつかく衛宮士郎のおかげで貴重な朝の時間を朝食を作らなければいけない分短縮出来たというのに、それで遅刻などしては元も子もない。

「話の続きは、また夜にな」

「うむ、洗い物などは私が全部やっておこう」

その言葉にさんきゅ、と軽く礼を言つて上条は学校へ出かけていった。

それから数日は、特に異変もなく二人とも日常(?)を過ごした。上条はいつもどおりに学校へ行き、夏休み前の最後の一週間を気合で乗り越える。衛宮士郎は、昼は上条の家でネットを使った情報収集、夜は外で第七学区以外を含めた地理の把握と一日一日を有意義に使っていた。二、三日もすれば衛宮士郎も学園都市の勝手を大分把握出来る。

途中、上条が学園都市の第三位と夜中に追いかけてこをしたり、その愚痴をこぼされ

たりする事も間々あつたが、全部笑い話で扱つたのは御愛嬌。他にも上条の不幸體質について衛宮士郎が今更知つて、そのアクセントの話を聞いたりするなどはあつたが比較的平和な日々を過ごす。

そして、日付は運命の日の二日前、七月十八日を迎えた。

City walk

七月十八日、夏休みの二日前。いつもの様に上条を学校へと送り出した衛宮士郎は、自分の黒いスーツケースの中を^{あらた}検めていた。二段底になっているスーツケースの下の段の方は実は『スキルアウト』と交渉した次の日、つまり月曜日に上条が学校へ行っている間に確認済みだったのだが、

「やはり、他に情報はないか……」

言葉の割には特に落ち込んだ様子も無く衛宮士郎は呟く。何か見落としたところはないかと今でもこうしてたまにその中身を確認しているのだが、やはり特に収穫はない。

スーツケースの隠しスペースに入っていた物については色々とおつたが、主なものといえば魔力が籠っている寶石が数粒、赤い大粒の寶石がついたペンダント、赤い聖骸布製のコート、戦場でもよく身につけていたボディーマー等々。

よくもまあここまで色々詰め込んだものだと思つたが、その内の一点。衛宮士郎にとつては現状を探る重要な手がかりと成り得る物が入っていた。

「寶石……、か」

魔力の籠った宝石、衛宮士郎はその一粒を取り出してじつと見つめる。誰が自分を平行世界へと飛ばしたのかあれから色々と考えてはいたが、この宝石でおおよその見当がついた。まあ衛宮士郎の知り合いに第二魔法に関連している人物などそう多くはなく、元々候補は少なかった訳だが。

「凜……………」

口の中で、その響きを転がす。

ともに聖杯戦争を乗り越えた戦友であり、かつては恋人でもあつて、今は決別してしまつた女性。勿論衛宮士郎も、この世界に来る前に彼女と一体何があつたのか必死で思ひ出そうとしたのだ。だが相も変わらず記憶は混濁しているようで、彼女との思い出を思い返そうにも上手く纏まらない。

記憶の混濁についてはこの数日の経験から言うとうも波があるようで、ちょうど波間に浮かぶ浮き木の様に思い出す事が出来たり出来なかつたりする。

正直どうして彼女が自分を平行世界へ送つたかも分からないし、この世界へ来る直前の事も全くといって良いほど思い出す事も出来ない。

ままならんなど呟くと、衛宮士郎はスーツケースを再び閉めた。

聖骸布や宝石などは、とてもではないが迂闊に上条に見せる事は出来なかつた。余計な疑いを掛けられる恐れもあるが、一番は上条自身の能力もある。下手をしたら、右手

に宿る『イマジジンレイカー幻想殺し』によつて全てお釈迦にされてしまう可能性まであるのだ。嚴重に保管しておかなければならないながら、衛宮士郎はスーツケースに鍵を掛けるのだった。

昼を過ぎ夕方に差し掛かった頃、衛宮士郎はいつもの変装を自身に施し外へ出た。本来ならば日中はあまり出歩きたくないのだが、上条の方が何やら用事があるらしく近くの量販店の前で待ち合わせの約束をしているのだ。

そうして衛宮士郎が量販店の前で相手を待つこと数分、通りの向こう側から上条がこちらへ向かつてくるのが見えた。学校からそのまま来たようで、制服姿で肩にかばんを引つ下げている。上条は衛宮士郎に気付くと急ぎ足でこちらに駆け寄ってきた。

「よお、待つたか？」

「いや、殆ど待つていない。それで、用事と言うのは何なのだ？」

「ああ、それはな……」

ほらと上条は鞆から一枚の紙を取り出すと、それを衛宮士郎に渡した。その紙はよくあるような広告で、色鮮やかに目立つ様な作りをしている。詳しく見るとそれは携帯電話の広告であり、見開き一杯に様々な機種が載っていた。

「……？　これが一体どうしたんだ？」

「……見ろよ」

衛宮士郎の疑問に答えるように、上条は広告のある一点を指す。そこには『0円ケータイ』の大きな文字が。

「ほら、士郎と俺との間で全く連絡手段がないのは流石にちよつと困るかなと思つてさ」「それは確かにそうだが……。いいのか当麻？ 私は身分証がないから当麻名義になると思うが」

「別に。どうせタダだし、通話とメールしか出来ないやつだからな」

士郎がそれでいいなら用意するけどどうする？と上条は衛宮士郎に確認を取る。衛宮士郎としても何一つ連絡手段がないのは確かに不安であつたし、実際に使う使わないは別として持っているだけなら構わないかと考えていた。結局数分考えた末に、上条に了解の意を伝える。

「……では宜しく頼む。本当にすまないな、何から何まで」

「気にすんなつて。さつきも言ったけど、タダなんだからよ」

上条の気楽な声に、衛宮士郎は逆になんだか申し訳なくなつた。いつかは別れる間柄である筈なのに、ここまでしてくれる上条の人の良さに心底感謝する。衛宮士郎は何があつても上条だけには火の粉が掛からないようにしなければと改めて自身に誓いながら、二人で携帯電話のサービス店へと向かうのだった。

「で、選んだのがそれか」

「うむ、あまりゴテゴテした物は好まなくな」

今二人がいる場所は、例の携帯電話の広告を出していた店の前。二人で歩きながら携帯の機能の確認や、電話帳への登録などを行っていた。

あれから然程経っていないにも拘らず、既に衛宮士郎の手には携帯電話が握られている。0円ケータイといっても様々なフォルムがあるので、何を選ぶにしろそこそこの時間が掛かるかと上条は踏んでいたのだが、衛宮士郎は割かしあっさり決めてしまったのだ。おそらく店に入ってから出るまで、20分と掛かっていないだろう。

衛宮士郎が選んだ携帯は、形はいたってシンプルで特に模様もない普通の携帯電話だ。

……形は。

「でも、なんで赤色なんだ……」

上条が衛宮士郎の手にある携帯を見て、そんな感想を漏らす。衛宮士郎の手の中にあるのは、真っ赤で派手な色をした携帯。上条のイメージとしてはもっとシックな感じの携帯を選ぶと思っていたのだが、意外にも衛宮士郎が選んだ携帯の色は鮮やかな赤色

だった。角ばったフォルムに真紅のカラーでキメていて、何だかホストが持っている様な携帯に見える。

「なんとなく、これが目に付いてな」

「確かに目立つけどよ」

イメージとちよつと違うね？ と上条は思うわけであるが、本人が気に入っているなら仕方がない。選ぶのは本人次第である訳だし。……本来なら赤は衛宮士郎にとつて色々な意味でお似合いの色なのだが、あくまでスーツ姿しか知らない上条がそこまで思い至らない事は当然ではある。

そうして意外と早く用事を終えてしまった二人には、特にすることもなかった。だから、あとはさっさと帰るか、二人が家路に着こうとした時、

「む……」

「ん、どうした？」

道端で衛宮士郎が急に立ち止まる。何やら一点を見つめている様子なので、上条もその目線の先を追った。するとそこには小学生くらいの女の子が、道の真ん中で右往左往している。

「あれはまさか迷子か？ 一人でこんな所で立ち止まっているなど、親とはぐれてしまったのかもしれない」

「まさか、ここは学園都市だぜ」

基本的に小学校も全寮制だよという上条の言葉に、衛宮士郎はふむと頷くと女の子の方へ近づいていった。

「どうしたんだ？」

「……え？」

突然衛宮士郎に話しかけられて驚いたのか、女の子は少しきよとんとした顔をしている。衛宮士郎もその事は承知しているようで、なるべく気さくな感じの笑顔を作って女の子と視線を合わせた。

「いやなに、君のような子供がこの第七学区の繁華街にいるのが珍しくてね」

「そうそう、俺達この学生だから道に迷ったなら案内してやるよ」

それでも衛宮士郎だけだとどことなく雰囲気が強くなってしまっているので、上条も一緒になって女の子に笑いかける。『俺達』というには衛宮士郎は少々老け過ぎている様な気がしないでもないが、そこは流れて押し通す。そんな二人に女の子は不思議そうな顔をしていたが、やがてこんな言葉を口にした。

「……もしかして、なんぼってやつ？」

「はあ?」

衝撃の事実! 上条当麻と衛宮士郎はロリコンだった!! ……まあそんな事はあり

得る訳も無く、女の子の口にした意外過ぎる言葉に口を開ける上条。確かに二人が女の子にかけた言葉だけ取ればナンパに聞こえるかもしれないが、それは言葉だけの話だ。小学生をナンパなど、下手したらお縄頂戴である。

「いやいやこんな小さい子をナンパなんてしたら、完全に口の字が付く人になっちゃうじゃねえか!!」

慌てて否定する上条だが、慌てている分余計に怪しく見えた。なんとなく上条はクラスメイトの青髪ピアスを思い浮かべてしまったが、さすがのアイツもここまでストライクゾーン広くないだろうと考え直す。……もしアイツがそこまでの特殊な嗜好の持ち主であるのならば、交友関係を改めないといけないなと上条がこっさり決意したのは自分だけの秘密である。

衛宮士郎はというと、そんな上条と女の子のやりとりをクククと笑っていたが彼女の目線までしゃがみこむと、その頭の上にポンと手の平を乗せた。

「そういうことはもう少し大人になってから言うものだ。まあ、君は今でも十分かわいらしいがね」

「えへへ、ありがとう」

「ところで、君はどうして道の真ん中で立ち止まっていたんだ？」

「えっと、それはね……………」

それからしばらくして、三人は一緒に通りを歩いていった。どうも話を聞けば女の子は第七学区にある洋服店まで服を買いに来たらしく、折角だからそこまで上条達が案内してあげる事になったのだ。

「……でね、オシャレな人はそこに行くってテレビで言ってたの」

「なるほど、身だしなみを気にするのは女性としては当然の事だな」

「みだしなみ？」

「あー、まあ、要は綺麗な服を着たいってことさ」

そんな会話を三人で続けていると、目的の洋服店に到着した。店頭には様々な彩の服が飾られており、『セブンスミスト』の看板が掲げられている。

ただどうも女性用の服が多いようで、なかなか男性だけでは入っていけないような雰囲気醸し出されていた。

「……………」

「ほら、着いたぞ」

流石にそんな店にまで入っていく勇氣は無かったので、上条と衛宮士郎は店の前で女の子を見送る。女の子の方も二人にありがとーと礼を言いながら、とたとたと走りなが

ら店の中に入っていった。……ついでに上条の手を引つ張りながら。

「ちよちよちよ、なんで俺まで店に！」

「だってこういう店でえすこーとするのは男の人だって、テレビで言ってたんだもん」

「エスコートって……」

上条はどうかして女の子の魔手から逃れようとするが、一向に離してくれる気配がない。どうかしてくれと上条が衛宮士郎に目線で救援を頼むと、衛宮士郎もまかせると言った様子で女の子にこんなアドバイスを出した。

「ふむ、おそらく当麻は恥ずかしがっているのだよ」

「えー、なんで？」

「当麻は恥ずかしがりやさんだからな。きっと女の子と一緒にお店に入るのに照れているんだろう」

「そうなの？」

「ああ、だから逆に君が当麻を案内してあげるといい。どうか当麻をよろしく頼むぞ」

「うん、わかった！」

私、頑張るねと続ける女の子に、うむうむと衛宮士郎は満足そうに頷く。逆に焦るのは上条だ。まさか救援コールが逆効果になるとは思いもしなかった。

「士郎！ テメー、絶対楽しんでやるだろ!!」

「さて、何のことかな？」

そんな上条の叫びに、私には見当もつかないかと返す衛宮士郎だったが、明らかに目が笑っている。そうしてそのまま、店内に連れられていく上条を見送ったのだった。

(それにしても……)

上条だけ店に放り込んでおくのは流石に無責任だなと衛宮士郎も思ったので、結局自身も店に入って遠巻きに二人を眺めていたのだが、

(こういうところはあまり変わらないのだな)

学園都市ではどうもその発達した科学力ばかりに眼が行ってしまうのだが、どうやらこういった洋服店といったものはそうは変化がないらしい。

衛宮士郎は別に洋服店にそう足を運ぶ方ではないのだが、元の世界と大差がないのは彼でも分かった。学校帰りなのか、特に制服姿の少女達が多い。青春真っ盛りの女性達が自身を綺麗に着飾ろうと努力している姿は、衛宮士郎には何となく平穏な日常を感じさせた。

衛宮士郎は当初、学園都市の学生達は毎日必死で勉強尽くしなのだろうかと心配した時もあったのだ。だが上条を見ている限りではそうでもないし、外で普通の学生達を見

るにつけても改めてそう感じさせられた。世界が変わっても学生は学生だなと衛宮士郎が安心したその時、

「む、これは……」

足元近くに、財布が一つ落ちていたのを見つける。見た所女性が使いそうなデザインをした財布であり、おそらく店内にいる誰かが落としたのだろうと予測をつけた。衛宮士郎が落とした人物を探そうと辺りを見渡せば、何やら床に視線を向けながら歩いている中学生の女子が二人。

(たぶん、あの娘達のものなのだろうな)

当然衛宮士郎はそう考えると、財布を渡す為に女の子の方へ近づいていく。そうしてしゃがんでいる女子中学生の片割れ、頭に花飾りをつけている女の子の肩を軽く叩いた。

「ひゃい!？」

落とした財布を捜して親友の佐天涙子と店内を歩き回っていた初春飾利は、突然背後から肩を叩かれて跳び上がった。しかも同時になんか変な声まで出してしまふ始末だ。その事に顔を赤くしながら初春が後ろを振り向くと、そこには見知らぬ男性が立っ

た。男性の方は背も高く、初春は上から見下ろされるような形になっている。おまけにどこと無く気難しそうな顔をしているので、初春が何となく恐怖を感じてしまうのも無理は無かった。若干顔を引きつらせながらも、何の御用ですかと初春が男性に話し掛けようとした時、

「この財布は君のものではないのか」

「え？」

男性がスツと右手を差し出す。その手の先には見覚えのある財布が握られていた。まさかと思つてよく見れば、それは確かに先程から初春が探していた彼女の財布である。

「あ、そうです！ それ、私が落とした財布です!!」

中々見つからなくて正直諦めかけていたのだが、意外な形で見つかったことに喜ぶ初春。男性から財布を受け取ると、しっかりと胸に抱き安堵のため息を漏らした。

「良かったあ、もう見つからないかと思いましたが。ありがとうございます！ わざわざ届けて下さって」

「まあ礼を言われるほどの事ではないさ。それより、中身を確認してくれ」

「え？ 中身ですか？」

「ああ、念のためな。不足分があったら警備員アンチスキルに届け出た方がいいだろう？」

「わ、分かりました」

男性の言葉に、初春は財布の中身を確認する。特に変わった様子も無く、紙幣が減っている訳でも何かが無くなっている訳でもなかった。その事に再び安堵しながら、初春は財布を閉じて仕舞う。

「大丈夫です。特に何かが無くなった様子はありませんでしたよ」

「そうか、それは良かった」

確認を聞いた男性の方も安心したような声を出した。まるで自分の事のように、男性は息を付く。そんな心の底から安堵している様な男性の様子に、初春は彼の人の良さを感じた。

先程は恐怖感を少し感じていたが、よくよく見れば結構優しそうな人でもある。初春は男性が財布を拾ってくれた事になにかお礼でもした方がいいのかなと考えていたが、男性はではと言って既に踵をそうとしている。あ、と初春が呼び止めようとしたそんな時、初春の背後から聞き慣れた声が聞こえてきた。

「あー、初春がナンパされてる!!」

そんな事を言いながら二人の方に駆け寄って来たのは、初春と一緒に財布を探していた佐天涙子である。ち、違いますよと初春が否定すると共に、去りかけていた男性もその足を止めた。佐天はと言うと、ニヤニヤしながら男性にびしっと指を突きつける。

「残念でしたね、お兄さん！ この佐天涙子の目が黒い内には、初春に変な虫は付けさせませんよ!!」

「……………」

いきなりそんな言葉を口にした佐天を男性はぼかんとした様子で見つめていたが、やがてクスクスと笑い始めた。大声こそ出さないが、口元を押さえて笑いを堪えようとしている。

「な、何がおかしいんですか!!」

それに焦ったのは佐天だ。もっと別の反応を予想していたのに、男性に笑われると逆に自分がからかわれた様な気分になった。初春の方も、急に笑い始めるなんて一体どうしたのかと男性に尋ねる。

「ど、どうしたんですか?」

「悪い。失礼だったな」

まさかここでもナンパと言われるとは。そんな事を考えていた男性であったが、二人は知る由もない。今日はどうも愉快な日らしいと続ける男性にぼかんとしていた初春だったが、やがて佐天が男性に話しかけた。

「で、結局の所、本当にナンパしようとしてたんですか?」

「だから違うんですよ佐天さん！ この人は私の財布を見つけてくれた人なんです」

「あれ、そうなの？　っていかか財布見つかったんだ！」

良かったじゃんと喜ぶ佐天に初春もえへへと笑いを返すが、男性が未だににこにここと笑いながらこちらを見ているのに気付く。

「えつと、すいません。その……、失礼な事を言って」

「なに気にするな、そういう事もあるさ」

ついでに私はナンパではなく従兄弟とこの店に来ていたのだがなと続ける男性に、佐天はへーと納得する。どう見ても高校生以上に見える男性がどうしてこういった女物中心の洋服店に来ているのか不思議だったが、初春もなるほどと頷く。

従兄弟さんの洋服選びなんですけどねと二人は納得するが、少々誤解している事には気付かない。……まあ従兄弟といっても男で、見知らぬ女の子をここまで案内したついでに店に入ってみただなんて思いつくはずもないのだが。

「おや？」

「どうしたんですか？」

「いつのまにか連れの様子を見失ってしまったようだ」

まいったなどと呟く男性。そうして佐天達の方を向くと、ではまた機会があつたらと言つて足早に店の入り口のほうへと歩いていってしまった。その姿を見送つてから、初春ははつと気付く。

「あ……、結局お礼できなかつたな……」

「あちやー、ごめんね。私が余計なちよつかいかけちゃつて」

あのままいけばいい雰囲気になれたかもしれないなかつたけどねーと反省しているのかいないのか分からない佐天の様子に、初春はもうと頬を膨らました。そうしてため息をつくと、男性が去つていった方を見てポツリと呟く。

「……でもなんか変わつてましたね」

「そう?」

初春の言葉に佐天はそうかなあと首を傾げた。彼女から見たら確かに面白い男性ではあったが、変わつているというほどでもなかつたはずだ。

「だつてあの伊達眼鏡でしたよ」

「うそ、それ本当?」

「本当ですよ!」

眼鏡越しの背景に違和感がありませんでしたものと主張する初春に、流石は『ジャッジメント風紀委員』注意力が違うわねーと感心する佐天。……まあそこまで分かるほど相手の顔を見ていたことには、佐天は温情で突つ込まない事にする。

その後暫く二人は洋服を見ていたが、いつのまにか御坂美琴が小さな女の子と一緒にいるのを見つけると、二人でそちらのほうへ歩いていったのだった。

「当麻」

「ああ、士郎か」

どうしたと続ける上条に衛宮士郎は近づく。二人は今『セブンスミスト』の入り口に立っていた。あの後衛宮士郎が店の入り口まで出て行くと、そこでぼうつとした表情で立っている上条を見つけたのだ。

「当麻、あの女の子はどうした？」

「なんか別の知り合いがいてさ、今はそいつが付き合ってる」

ついでに俺は追い出されちまったよと笑う上条の様子に、それなら大丈夫かと衛宮士郎も安心する。

「追い出されたといっていたな」

「……なんか俺に、異様に突っかかってくる奴でさ。さつきも勝負しろー、とか言ってるな」

こんな店中で小さな女の子もいるのになに考えてんだかと呆れる上条に、衛宮士郎もそれは災難だったなと返す。

「しかし、そんな物騒な奴もいるのだな」

「そうなんだよ！ このあいだなんかさー……」

そうしてしばらく二人で話をしていると（大半が上条の愚痴だった）、不意に店内が騒がしくなってきた。勿論今迄だつて騒がしかったが、先程までとは騒がしさの質が違ふ。所々悲鳴の様な物も聞こえてきて、人の顔には余裕が無かつた。かなり緊迫した空気が流れ、客も皆入り口の方へと駆け寄つてきている。

「……どうしたんだ？」

「まて、よく聞け」

二人が店の中を注視していると、先ほどの少女達が避難誘導の手伝いをしている事に気付く。何か事件が起きたらしいというのはわかつたが、騒がしすぎて二人にはよく聞こえない。

「……私は事情を聞いてくる、当麻はあの子を探してきてくれ」

「オーケー、まかせとけ」

あのここまで案内をした女の子が店の外に出た様子がないので、とりあえず二人で手分けして店内を探す事にした。衛宮士郎は店内で何があつたのかを聞くために、花飾りの少女の方へと近づいてゆく。

「あ、さっきの……」

「何があつたんだ？」

少女の方もこちらに気がついたようで、衛宮士郎の方を向いた。手には通話中の携帯電話が握られており、緊急事態であることが容易に判断が付く。先程はよく見てなかったが、少女の腕には風紀委員ジャアツジメントの腕章がつけられていた。

「ついさつき、衛星が重力子の爆発的加速をこの店で観測したんです！ 危ないですからあなたも早く避難を……!!」
グラビトン

「ちっ、最近うわさの『連続虚空爆破事件』か！」

少女の口から出てきた物騒な言葉に、衛宮士郎は舌打ちする。

『連続虚空爆破事件』

一週間ほど前からニュースになっている事件で、衛宮士郎もネットやテレビでよく見かけていた。能力者が起こしている事件とされていて、原因はアルミを基点として重力子の速度を急激に増加させ、それを一気に周囲に撒き散らす事で起こる爆発である。

ようは『アルミを爆弾に変える』能力といったところか。最近ではアルミ製のスプーンをぬいぐるみや子供用の鞆といった警戒心を削ぐ物に仕込み爆弾とするため、非常に悪質なものとなってきていた。

「そうです！ だから早く避難してください！」

焦った様子で避難を促す少女だが、衛宮士郎はその言葉に頭を振る。衛宮士郎には、どうしても見捨てて置けないものがあつた。

「そういうわけにもいかん。まだ知り合いが出てきていない」

「知り合いって従兄妹さんですか？」

「小学生くらいの女の子だ」

会話にズレはあれど、緊急事態。訂正している暇もない。衛宮士郎は少女の横を抜けると、店内に女の子を捜しに行った。

(どこだ、どこにいる！)

そこそこ広い店内であっても、避難誘導のおかげで人はほとんどないのに向に見つからない。既に店内に残っている客は、上条達を含めて2、3人。トイレにでも行っているのかと、焦りを抑えて探しているその時、

「逃げてください!! あれが爆弾ですっ!!!!」

店内に、大きな声が響き渡る。衛宮士郎がそちらの方へ目を向けると、上条と中学生くらいの少女。そのそばにはあの小学生の女の子を抱きかかえてしゃがんでいる、花飾りの少女が。

そして、メキメキと音を立てながら歪んでいくカエルのぬいぐるみ。

(あれが、爆弾!!)

衛宮士郎は周りの目など気にせず全力で駆けるが、感覚で理解する。

これは、間に合わない。

距離が離れすぎている、体に強化をかける暇もない。

追いつかない、追いつけない、届かない。

(私はまた……、救えないのかっ!!)

間に合わないかと判っていても、何かを掬い取るように右手を伸ばし駆ける衛宮士郎。右手は何も掴むことなくただ虚空へ延ばす事になるだけなのかと、奥歯を砕けるほどに噛み締めた。

だが、衛宮士郎は失念していた。

『彼』のことを。

彼の右手を。

どんなに強力な『幻想』だろうと、かならずぶち壊すその男を。

爆発寸前の瞬間、衛宮士郎が見かけたのは爆心地へと右手を伸ばす上条の姿。その右手は、衛宮士郎が捨てかけていた一抹の希望を掬い取る。

それは誰もが傷つかない事。

完全無欠の幸せな結末。

そうして爆音と共に広がる衝撃波は、ちょうどその右手のところから綺麗に打ち消された。

『幻想殺し』
イマジンブレイカー

その名のとおり、上条の右手は完全に爆風を殺し尽くす。結局凶悪極まりないその爆弾は、ただの一人も傷つける事はなかった。

「当麻……」

「士郎！ 無事だったか!!」

爆発が収束してすぐに、衛宮士郎は上条の下へと駆け寄った。ケガねえか？と心配そうにこちらを見る上条に、衛宮士郎は大きいため息をつく。

「それはこちらの台詞だと思うがな、当麻。全く無茶をする」

「いやー、あん時はこれくらいしか手がなかっただろ?」

ケガ人もいないようだし良かった良かったと頷く上条に、衛宮士郎は再び大きいため息をついた。行動力のある奴だとは思ってはいたが、まさかここまで無茶をするとは。タイミングを間違えれば大怪我では済まされなかったというのに、その威勢の良さには衛宮士郎も脱帽した。

「はあ……、まあ良い。当麻はあの女の子の世話をしやってくれ」

「ああ、もちろんするけど……」

士郎はこれからどうするんだ？と聞く上条に、衛宮士郎は口の端を吊り上げながら返

す。

「私か、私はな……」

ちよつと野暮用を思い出したよと言いなながら、衛宮士郎は店の外へと出て行つた。

第七学区の繁華街。様々な洋服店やレストランが立ち並ぶその通りは、かなり騒がしくなっていた。それもそのはず、先ほどとある洋服店で爆発事故が起き、これが噂の連続爆発事件かと多くの野次馬達が集まっていたのだ。野次馬達は洋服店の前に集まり、写真を撮ったりがやがやと事件についておしゃべりなどをしている。

そんな野次馬達の中から少年が一人、店に背を向け薄暗い路地裏へと入っていった。眼鏡をかけた少年は、薄気味悪い笑みを浮かべながらぶつぶつとなにやら呟いている。

この少年の名は、介旅初矢。

彼こそ一連の『連続虚空爆破事件グラビトンの犯人であり、『量子変速シンクロトロン』の能力者である。本来ならレベル2程度の能力者であるはずなのだが、ある事情で今はレベル4相当の能力を保有していた。

それゆえ今まで、学園都市の全ての能力データを管理している『書庫バンク』による検索にも引つかかることなく、ここまで犯罪を重ねる事ができたのだ。

(いいぞ、今度こそ逝つただろう)

自身の能力がどれほどの被害を出している事になど目も向けず、顔を歪める介旅。

何故、彼がこんな凶行を行っているのか。その真意を一言で表すのならそれは「逆恨み」、その言葉に尽きる。介旅は普段、イジメや不良に絡まれる生活を送っていた。そんな介旅が最も恨んでいるのは誰か？その怒り恨みの矛先は、どういうわけか『風紀委員』に向いていたのである。

介旅の考えるところによれば、自分がそういった被害に遭うのは対応の遅い『風紀委員』のせいであり、彼らが無能だからであるという事らしい。

それゆえ介旅は自身の能力によって『風紀委員』を排除する事を目的として、連続爆破事件を起こしていたのだ。今回の爆破事件も、偶々通りで見かけた『風紀委員』の腕章をつけている初春飾利を標的としたものであった。

「スゴイツ！ スバラシイぞ、僕の力!!」

段々と強力な力を使いこなせるようになって行く自分に酔いしれ、歓喜の声を上げる介旅。このまま行けばきつと、更に多くの無能な『風紀委員』を吹き飛ばす事が出来る
と暗い笑みを浮かべる。

「もうすぐだ！ あと少し数をこなせば、無能な『風紀委員』もアイツラもみんなまとめて……」

「みんなまとめて、どうするのだ」

「ッ!!!」

不意に後ろから聞こえてきた低い声に、介旅はぎよつと後ろを振り向く。

そこには長身の男が一人、立っていた。薄暗い路地裏であるはずなのに、その眼鏡の奥で本当に光っているかの様に錯覚させる眼光は、刺すほどの鋭さを持つて介旅の顔を射抜く。

たつたそれだけで、介旅の背筋に怖気が走る。

直感的に理解する。本能が理解させてしまう。コイツはヤバイと。

衛宮士郎が常に追い求めているのは正義の味方だ。たとえ世界が変わろうと、それだけは決して変わらない、変わるはずがない彼の『理想』。

衛宮士郎が発するプレッシャーで介旅の心臓が縮み上がるかのように震えていても、彼はあくまで正義の味方を目指す者。

かくして『正義』は『悪』を討つ。

衛宮士郎は己の信念に従い、静かにその右手を振り上げた。

不運な奴ら

爆発事故でのけが人が全くいないことを確認すると、衛宮士郎はすぐに店内から出た。店の前は元々店内にいた人たちに加え、通りで歩いていた野次馬も多く集まっていたのでひどい混雑である。

衛宮士郎はその野次馬達を、一人として見落としがないように注意深く観察する。放火魔や爆弾魔といった愉快犯が自分の成果を確認する為に、犯行後にこうした野次馬達に混じって現場を覗いているなんて言うのはよくある話だからだ。

しばらく野次馬を見渡していた衛宮士郎は、そこで一人の少年に目を付ける。

その少年は眼鏡を掛けており、うつむき加減で店の方を見ながら薄暗い笑みを浮かべていた。ニヤニヤとした顔で一人立っており、どこかこの出来事に愉悦さえ感じている様にも見える。他の野次馬達はただただ白昼堂々で行われた非道な事件に驚くばかりで、不謹慎にもそんな笑みを浮かべているような人物は他にはいなかった。

衛宮士郎がその少年に焦点を絞って見つめていると、少年はクルリと後ろを向いて店の反対方向にある薄暗い路地裏へと入って行く。衛宮士郎はそれを確認すると、気付かれぬようにそっと後をつけた。

自身の気配を消し、付かず離れずの距離を保ちながら様子を伺う。すると少年は店から離れるにつれて、ぼそぼそと何事かを呟くようになってきた。

(ビング、か……)

耳で拾った少年の独り言の内容から察するに、コイツが例の爆弾魔で間違いはなさそうだ。しかも、まだ凶行を続けるつもりらしい。衛宮士郎がそう確信するほど、少年の言葉は黒い悪意で満ちていた。少年は人混みから離れてきて油断したのか、次第に独り言の声も大きくなっていく。

「もうすぐだ！ あと少し数をこなせば、無能な『ジャッジメント風紀委員』もアイツらもみんなまとめて……」

「みんなまとめて、どうするのだ」

勝手に一人でテンションが上がっている少年の背に、衛宮士郎は冷ややかな声を掛けた。少年はまさか背後に人がいるとは思ってもいかなかった様子で、ヒツと声を上げながら後ずさる。その姿を確認して、衛宮士郎は心の中で一人嘆いた。

(ただの学生ではないか……)

そう。少年、介旅初矢は本当にどこにでもいそうな、ただの学生だった。少々暗い雰囲気や纏つてはいるが不良にも見ええないし、ぱつと見では誰も彼が犯罪者であるなどと夢にも思わないような普通の少年。

衛宮士郎が嘆いたのは、そんな学生がどんな事情があれども殺人を意図的に行おうとしていたという事実。よもやあの爆発力で殺意がなかったなどといった戯けた考えを肯定するほど、衛宮士郎は気楽な想像力を持っていなかった。

あれは確実に致死レベルの爆発だ。上条が機転を利かせなければ、下手をすると4人も死んでいた可能性がある。その上この少年は、更に無関係な人達に血を流させることを計画していたのだ。

少年に対する怒りと嘆きが入り混じった何とも言えない感情が、衛宮士郎の胸に渦巻く。今この場で唯一つ言える事は、このままこの少年を放っておくと更なる被害者が出るという事だった。衛宮士郎は正義の味方を目指している。ここでこの少年を見逃すという選択肢は、ありえない。少年は無意識のうちに放っていた衛宮士郎の圧力に押し潰されたかのようで、いつの間にか地べたにへたり込んでいた。ガクガクと口を開き、その表情を絶望の一角で染め上げている。不思議と、警備員ジャッジメントに引き渡すという発想がこの時の衛宮士郎には思い浮かばなかった。それは長らくまともな法治国家にいなかったせいか、それとも衛宮士郎自身が持つてしまった性さが故か。

「……………」

石の能面を被るが如く無表情で、衛宮士郎が右腕を静かに上げたその時、

「なにやってんのよ!!」

突然、衛宮士郎は後ろから声を掛けられた。ゆつくりと後ろを振り向けば、そこにいるのは先程の爆発事件の時に上条の隣に立っていた中学生。

いきなりだが、衛宮士郎は幾度も修羅場を越えた謂わば戦場のプロだ。当然、気配丸出しの彼女の接近にも気付いていた。

……気付いていたはずなのに、その手を何故か少年へと振り上げていたのだ。

「そいつ、もう戦意がないじゃない!! なんでアンタは手を上げてるワケ?!」

「……そのようだな」

少女は自身の腰に手を当て、仁王立ちして衛宮士郎の行いを諫める。彼女の言葉に、まるでそのことに気付いたかのように呟いて手を下げる衛宮士郎。少年に戦意がない事すら、彼にはその手を上げる前から判っていたのに。

(何をやってるんだ私は……)

いつの間にもここまで短気になってしまったのかと、衛宮士郎は自嘲する。だって相手はただの学生だ。いくら人を殺そうとしても、それでも未遂は未遂である。そんな相手に問答無用で手を上げようとしていたという事実。果たしてその行いは衛宮士郎が目指す、正義の味方であったか否か。余りに短絡的な自身の行動に、衛宮士郎は深くため息をつく。

そうして少し心を落ち着かせて少女の方を顧みれば、彼女は爆弾魔に向かって何かを

話していた。どうやら少女の方も爆弾魔を追ってここまで来たらしい。衛宮士郎が爆破事件の犯人であるという誤解は生じていなかったようだが、少年はすっかりおびえきつた様子でガタガタと震えていた。それでも顔に赤みがある分、顔面蒼白であった先程よりは幾分かマシになったと言えるだろう。少女が何を話したかは詳しく聞いていなかったが、暗く沈んでいた彼の瞳にはなんとなく少し光が灯っている様に見えた。

衛宮士郎はそんな少女の顔を横目で見つめる。正義感溢れる、とでも言うのか。意志の強そうな顔立ちに、少女の瞳にはこの場の誰よりも強い光が宿っている。

今の衛宮士郎には、こうした学生の存在だけでもありがたかった。この爆弾魔のような人物はあくまでマイノリティで上条やこの少女のような学生の方が多く在るのだと、衛宮士郎にそう錯覚させてくれる。たとえそれが幻想だったとしても、ここに上条達のような存在がいるのは変わりがないのだから。

しばらくして爆弾魔が落ち着いたところで、少女がきてと、と声を上げた。

「さあ、さつさとそいつを『風紀委員』ジャッジメントに引き渡すわよ」

「……そうだな、頼んだ」

「はあ!? アンタはどうするのよ!」

「……………これでも急ぎの用事があつてね。犯人逮捕の名誉は、君に譲つてあげよう」

未だ震える少年の様子に、もう誰かに危害を加えるような心配はないと読み取る。だ

から衛宮士郎は後処理を全部、少女に任せる事にした。彼女ならその言葉通りきちんと風紀委員に少年を引き渡すだろう。別に今さつき出会ったばかりの間柄ではあるが、それでもこの場では信用に値するほどの存在だという事を、彼女はその身をもつて示してくれた。まあ、衛宮士郎が警備員アシスキルなどに関わりたくないというのも勿論あったが。

だが一番には、衛宮士郎自身に自分の心を落ち着ける時間が必要だった。今更何をと
いう話ではあるが、あの爆弾魔の存在が衛宮士郎に学園都市の在り方について再考させるきっかけとなったのだ。超能力の事、学生の事。今一度考えるべき要素は沢山ある。そうして衛宮士郎は頭の中で考えを巡らせながら、別にそんな事で犯人を捕まえたわけじゃないっ！ と怒る少女を残して路地裏の奥へさつきと消えていった。

しばらく店から離れるようにして歩いていると、買ったばかりの携帯が震えているのに衛宮士郎は気付く。

「もしもし」

『よお、士郎。早速携帯が役に立ったな』

当然と言うべきか、電話の相手は上条だった。万が一に備えて衛宮士郎は携帯電話には余り情報を入れてはいないが、そもそもこの携帯の番号を知っているのが上条だけである。

「当麻か」

『ああ。士郎は今どこにいるんだ？』

「私か？ 私は今……、図書館にいるよ」

『図書館？ 何でそんなところに？』

「それが、なんとなく見た事があるような建物だと思ってな」

『お、もしかして記憶が戻ってきたのか』

「いや、どうやら思い違いだったらしい」

『なんだ……、そいつは残念だったな』

勿論、図書館云々はデタラメだが。こうでも言い訳しておかないと、後で下手に勘繰られても困る。

「当麻の方は今どこに？」

『俺はもう女の子とは別れて、寮の方に向かっているけど』

「そうか、私もすぐに帰るよ」

ではなど言つて電話を切る。先ほどの事件で衛宮士郎は思うところも色々あつたが、とりあえずは上条の待つ寮の部屋へと帰ることにした。

「ただいま」

「おう、おかえり」

衛宮士郎が靴を脱いで部屋に上がると、上条は既に私服だった。夏の暑さで汗だくになった学生服は洗濯物を入れておく籠の中に放り込まれている。

衛宮士郎がこの部屋に住み始めてから、上条の部屋はかなり綺麗になっていた。床に散らばっていたはずの本の類は全部本棚に納まっており、台所や風呂場も染み一つ無く輝いている様に感じられる。基本的に夜中に屋外で活動する衛宮士郎は、日中はそれこそ上条の部屋で引きこもっている事しか出来ない。ネットを使っての情報収集に限界がある訳ではないが、合間を縫って家事をこなしていたらいつの間にかここまで綺麗になつてしまつていたので。

正直上条は衛宮士郎の家事能力がここまで凄いとは思つてもいなかった。彼の中では衛宮士郎の記憶喪失前の職業は完全に執事で固定されていた。だって違和感もない上に、この学園都市にはそういった職種専用の学校もある。もしかしたら偉い所の執事さんだったのでは、と上条が考えるのも無理は無いであろう。それにしても鍵開けなどの妙な一芸を持つていたりするのは気になるが。

一旦お茶を淹れて休憩をした二人は、先ほどの事件について話し合ったりしながら時間を潰していた。

「……まさか、当麻の『イマジンブレイカー幻想殺し』があそこまでのものだとは思わなかったな」

「まあ、ああいう時くらいじゃねえと使い道ないしな」

「何を言うか。君は人の命を救ったのだぞ」

もつと誇つてもいいと続ける衛宮士郎に、上条はそうか？と少し照れる。

「しかし、今回の件で改めて超能力の存在を思い知らされたな」

「……そういや士郎はまだ、まともに超能力を見てなかつたんだな」

「ああ。すごいものだな、アレは」

「あそこまでの威力が出せる奴なんて、そんなにいないけどな」

上条の言葉にしろな、と衛宮士郎は頷く。あんなものが230万人もいたら、それ

こそ大変である。

だが、それでも、

「それでも、学生が持つには大きすぎる力ではないかね？」

「いやいや、アレでもましな方だつて」

「……どういうことだ？」

まだ凄いのがいるのか、と驚く衛宮士郎。情報収集の際に、学園都市には七人のレベル5と言われる『超能力者』がいるという事は知ってはいた。

が、あくまでその存在を指し示すものばかりで、その実態についてはあまり詳しい情報は得ていない。

「俺、実はその中のビリビリ女に追い回されてさ」

ほら店の中でも見ただろと言う上条に、衛宮士郎はもしやと思いつく。

「あの爆発の時に、君の隣にいた中学生か!？」

「そうそう、そいつだよ！」

「あの娘が……」

爆弾魔を追い詰めたときに鉢合わせた少女が、そんな人物であるとは知らなかった。内心、衛宮士郎は再び驚く。

「アイツなんか手から電撃出せたり、磁力操って砂鉄の剣作れたりするんだぜ!!」

しかもソレを俺に向けるし！ と上条はうがーつと唸る。それを聞いて衛宮士郎はもしや人選を間違えたか？とも考えたが、

（まあ、今更気にしてもな）

……特に気にしないことにした。『ジャッジメント風紀委員』も呼んでおいたし大丈夫だろうと衛宮

士郎は一人納得したのであった。

「そうだ、今のうちに言っておくべき事があつたな」

「ん、どうした？」

話の途中で衛宮士郎がそうだったといった感じに頷く。

「いや、今日の夜から明後日の夕方くらいまで私は少し出かけてくるからな」

「は？ 二日も掛けて一体なにするんだ？」

「なに、そろそろ本格的に学園都市を歩き回ってみようかと思つてゐるのだ」

今まで夜しか活動してなかつたしと言う衛宮士郎。上条はふーんと何とも無しに聞いているが、ふと疑問に思つたことがあつた。

「二日つてことは夕飯とかは……」

「ああ、いらぬ。だが心配するな、明日の朝と夕飯の分は私が作り置きしておいてやる」

「おお、さんきゅー」

食事の話、上条からしてみれば結構重要な話でもある。一人暮らしが長い故に上条自身も結構な家事・料理スキルを持つてゐるが、衛宮士郎のソレは上条を上回る。加えて朝の準備がいらない分、登校までの時間に余裕が出来てゐた。今ではそのリズムに合わせていた所であつたので、上条としても飯の作り置きはありがたかつたのだ。

その後二人で話し込んでゐるうちに夕飯の時間になり、やがて衛宮士郎がいつも外に出る時間になる。そうして衛宮士郎は上条の邪魔にならないよう、外へと足を運ぶのだった。

七月十九日、夏休みの前日。

午前中で終わる学校が多いのか、辺りには学生の姿が大勢あった。誰も彼もが明日からの夏休みに、心浮かれている様に見える。

そんな学生達を眺めながら衛宮士郎は一人、ファミレスで昼食を摂っていた。『スキルアウト』から得た情報を元に次から次へと犯罪者達のルートを辿っている最中であったが、情報を纏めるついでに昼食も摂ってしまったおうとこのファミレスに来たのであった。

往來を行く学生たちを見つめて、衛宮士郎はため息をついた。

「あれらの学生は皆、何かしらの能力を持っているとはな……」

衛宮士郎が彼らを見ながら思い返しているのは、昨日の光景。爆発により黒焦げになった壁に、大きく抉れた床。その凄惨な状況は、爆発の威力を視覚で切実に訴えかけてくる。

あれほどの被害を、ただの学生が出したと言うのだから驚きだ。後に上条に聞いたが、あれくらいならレベル4に認定される威力であったという。

そんな学生が、この学園都市にはまだゴロゴロ存在するのだ。これではいくらセキユリティーや防犯の技術が進んだ所で、それを超える技術、いや能力の持ち主が大勢いるのなら焼け石に水だ。

ネットで情報をかき集めているときに、やけに少年少女の犯罪率が多いのはここが学園都市でそのほとんどが学生だからかと衛宮士郎は考えていたが今では少々考えを変えている。常軌を逸した力を手にした人間が、暴走すると言うのはよくある話なのだ。

今回の場合、それが超能力であったという事。学園都市が未熟な学生達を相手に超能力を開発し続ける限り、同じ様な事件は今までもこれからも、幾らでも起こり得るだろう。

「……超能力、ね」

衛宮士郎が今までの学園都市での生活を振り返って呟く。確かに学園都市では目を見張るほどの技術があちこちに生かされており、学生達は皆それらを利用してゐる。

しかし、超能力は？

上条が言うには学園都市の学生でもその六割近くは『無能力者』であり、上位のレベルに進むに連れてその人数は少なくなっていくという。おまけに日常で便利と言う程度の超能力者で、やっと『異能力者』のレベル2であるらしい。

つまり、約半数以上の学生は超能力など日常でほとんど使うことなく生活している。学園都市が科学技術の発達に焦点を置き、それを重視した生活や時間割りを学生達に強要するのはわかる。

だが、超能力とは？

確かにある種の超能力の持ち主ならば、それを研究する事で医学、物理学、宇宙科学、様々な分野に貢献できるかもしれない。

しかし、しかしだ。それはあくまで一定のレベルを超えた能力者だけに限定される話である。たとえば能力者全体の六割を占める無能力者など、衛宮士郎からしてみれば研究の役に立つようには思えない。そして『無能力者』認定された学生をいつまでも学園都市に留めておく必要性もないように思える。

そして学園都市の異常とも言える情報の秘匿性。いくら情報を統制したいからといって、物理的に都市全体を囲んでしまうなど普通では考えられないであろう。

衛宮士郎は最初、そうすることで技術の独占により巨額の利益を得る為かと考えていた。だが、どうも腑に落ちない点がいくつもある。

先ほど考えたように、利益を生まぬ能力者をいつまでも囲っておく事。どうしても技術の漏洩が気になると言うのなら仕方ないが、所詮は『無能力者』だ。そこまで重要な情報を握っているとは、考えづらい。

極端な話、半分以上を占める『無能力者』を学園都市から追放してしまえば、余計な出費もかなり減るはずだ。『無能力者』ゆえ、学園都市外で超能力を使った犯罪を起こされる事もなく、学園都市内での犯罪も減る。ソレをしないのは何故か？

考えれば考えるほど、妙に実態を掴めないこの都市。衛宮士郎は、学園都市が段々と

きな臭く感じ始めていた。明らかに異常なこの学園都市で、その上層部は一体なにが目的なのか？

………学園都市の目的として掲げられているのに『人間を超えた身体を手にする』とで神様の答えに辿り着く』というものがあつた。

一般人がこれを聞けば、なんとオカルトチックな目的であろうかと思うかもしれない。

しかし、衛宮士郎はこの一文になんとなく違和感を覚えた。特に、『人間を超えた体を手にし、神様の答えに辿り着く』という謳い文句。

衛宮士郎の知る、ナニカに酷似している気がする。

ナニカ。

それはつまり、

「魔術師の最終目標。根源の渦への到達……」

ある一つの万能な答えに辿り着く、という点で両者はひどく酷似している気がするのだ。元の世界で全ての魔術師が求めていたものに、この世界では科学がソレを目標としている。論理が飛躍しすぎている気がしないでもないが、学園都市の異常性を省みるに妥当ではないかという思いもあつた。

偶然？ それにしたって出来過ぎている。

それとも、行き過ぎた技術というものは須らく真理へと帰結するものなのか。

ほんのわずか、一抹にも満たぬものだが、衛宮士郎は学園都市と魔術の関係性を感じ取った。魔術云々もそうだが学園都市そのものについても洗ってみる必要があるなど、衛宮士郎は心に決めたのだった。

夜になり、学園都市巡りを再開した衛宮士郎。今は、大手デパートの清掃室にいた。

清掃室と言っても大幅に改造が施されており、小洒落たバーのような内装をしている。ここは『スキルアウト』からの情報を元に辿り着いた、いわゆる裏稼業という部類に含まれる店の一つ。

普段誰も使わない、誰の目にも留まらないような、施錠されっぱなしの部屋を利用して商売をしている輩だ。

人材派遣という通り名を持つこの男に接触する為に、衛宮士郎はここへ来たのだ。勿論、事前にアポイントを取って専用の鍵も貰っている。

「……つてこと。確かに俺はスナイパーとかも紹介したりはするぜ」

「なるほど」

まあ、紹介料だけで70万する奴もいるけどな、と人材派遣は続けた。チャラチャラ

した格好をしているがその仕事ぶりは本物のようで、他にも様々な商品を見せ付けられる。衛宮士郎の方は、ようやくここまで辿り着けたかと内心うんざりしていた。裏稼業同士の横の繋がりを把握するには相当の苦勞をしている。業者から業者へと、何度伝つていったか分からなかった。ここまで来るのにそれなり以上の手間と金が掛かつていたのである。

だが、それだけに確かに成果もあつた。衛宮士郎がここで漸く成果を得たと思つたその理由。それはこの男の人材派遣と言う業種にある。必要ならどんな奴でも引つ張れると言う辺り、自分の仕事に自信もある事が分かつた。そしてスナイパーを「外」から呼び寄せる事が出来るという事は、学園都市外からの人物運搬専用のルートも把握しているという事だ。

この男からどうにかしてそのルートを聞き出さなければと決意し、衛宮士郎が口を開きかけたその時、

「うおっ！　なんだあ!!」

「……む」

突然、部屋の電気が消えて辺り一面暗闇に染まる。衛宮士郎は敵襲を予想し反射的に身構えたが、特に何か起こる気配もない。人材派遣もカウマネジメントンターの近くでしゃがみ込んでいたが、何のアクシデントも無かつた。

「……停電、のようだな」

「くそつ、マジかよー!」

マネジメント
人材派遣が悪態をつく。そのままカウンターで何やらゴソゴソとやっていたかと思うと、ぱつと明かりが再び点いた。どうやら非常用の電源でもあったようで、なんとか電力を復旧させたらしい。

そこらを見回し特に異常がない事を確認すると、マネジメント
人材派遣は安心したかのようにほつと息をついた。そうして、衛宮士郎の方へ顔を向ける。

「おい、あんた。悪いが今日はもう店仕舞いだ」

「何だと?」

「今の停電で色々と面倒な事になっちまった。商品データは飛んじまったし、セキュリティにも穴が開いた。下手したらここがばれちまうぜ」

マネジメント
あんたも警備員のお世話にはなりたくないだろ?と言う人材派遣に衛宮士郎は舌打ちをする。後一步のところまで来ていただけに、ここで打ち切るのは非常に惜しかった。だが、チャンスがなくなつたわけではないのだ。ここで焦ってもどうしようもない。

「いいだろう、また後日に取引は延期させてもらおう」

「ああ、それがいいぜ」

衛宮士郎はとりあえず後日の再取引に關しての確約を取り付けると、人目につかないようにさつさと部屋を出て行くのであった。

………勿論、衛宮士郎はさっきの停電が上条に關係があるとは知る由もない。

上条当麻を相手にした、学園都市第三位『超電磁砲』の御坂美琴。彼女の人間相手では初めてとなる全力を出した落雷が、この停電を引き起こしたのであると知ったら、衛宮士郎はどんな顔を浮かべるのであろうか。

夜道を歩きながら、衛宮士郎は最近の出来事を思い返して呟く。

「らしくないな、全く……」

先ほどの交渉。この世界にくる前であつたら、どうにかして情報を引きずり出してははずだ。戦場にいた頃はとにかく時間が惜しくて、一人でも多く救いたくて、ひっきりなしに駆け巡っていた。

昨日だつて背後に誰かがいると知りながら、あそこまで無防備な姿を見せた事も今までなかった。

「日常に浸かり過ぎたか……」

そもそも、衛宮士郎がこんな安穩な生活を送っている事が、既にイレギュラーなのだ。自分は正義の味方を目指す以前に、こんな普通の生活を送る権利などないはずなのだと自問する。

だって人々を絶えず救い続ける事が、あの火事、大災害で生き残った衛宮士郎に課せられた義務であるはずなのに。

「どうかしているよ、俺は」

そうして呟く声は、誰に聞こえることなく夜空に溶けた。

七月二十日。夏休み初日。もう夜になるような時間帯。

衛宮士郎は一人、第七学区の通りを上条の待っているはずの学生寮へ向かって歩いていった。

「案外、遅くなってしまったな……」

昨日とはまた別の場所の情報収集をしていたところ、第七学区から離れていた事もあって随分と予定より遅くなってしまっていた。

(本来なら夕方には帰り着いていたのだが)

軽くため息をつく衛宮士郎であったが、先程からやたらとサイレンの音がうるさいのに気付く。どこかで火事でも起きたかと考えていたが、学生寮に向かって歩くにつけその音は大きくなってきた。

(まさか……!)

悪い予感がする。

最悪の事態を考え、学生寮へと急ぐ衛宮士郎。通りを走りその次の角を曲がれば、学生寮が見えるところまで来た。

嫌な予感を振り切るように、曲がり角を急いで曲がった衛宮士郎が目にしたのは、

「くそっ!!」

大勢の野次馬に囲まれた、上条当麻の暮らす学生寮だった。

衛宮士郎は思わず悪態をついて、急いで学生寮に近づく。消防車やら救急車やらが集まっていたが、どうやら火は既に消し止めていたらしく緊迫した空気でもない。

野次馬達からの会話から察するに、特にけが人も出ていないようであった。とりあえず、そのことに衛宮士郎はほっと胸をなでおろす。

あとは上条を探すだけだ。まさかまだ学生寮に居残っているはずもないので、野次馬の中に紛れているのかと辺りを見渡す。

しかし、

「い、ない………?」

何故か、上条の姿が見当たらない。少し心配になった衛宮士郎は、近くにいた消防隊員に尋ねる。

「すまないが、この学生寮に住んでいるはずの少年を一人見なかったか?」

こう、ツンツンした髪形をしているのだがと聞くが、消防隊員は首を横に振った。

「いやあ、見てないな」

「まさか。火事の時にはここにいたはずなんだが？」

「そんなこと言われてもなあ」

実際にけが一人出てないわけだしと答える消防隊員だったが、何かを思い出したかのようにそういえばと声を上げる。

「なんだか知らないけど、今回の火事は不思議な点が多くてさ」

「不思議な点？」

「ああ。焼け跡からみて、相当な高温で焼けたのは間違いないが、不思議な事に被害がほとんど出ていないんだよ」

一部の廊下と壁にしか焼け跡がなくなつて他はほぼ無傷なんだよと語る消防隊員に、言い知れぬ不安を覚える衛宮士郎。もつと色々と聞こうとしたが、その消防隊員も事後処理があるそうで学生寮の中へと入つていった。どうにかして上条を探そうと決めた衛宮士郎だったが、ある重要な事に気付く。

「何をやっているんだ私は……」

そう呻きながら額を抑え、ポケットからあるものを取り出す。

それは、

「携帯電話を昨日買ったではないか」

買ったばかりの赤い携帯電話だった。こんな便利なものの存在を今まで忘れていた、自分の迂闊さに呆れてしまう。

これでは何のために携帯を買ったのか判らなくなるところだったなと衛宮士郎が反省しながら上条に連絡を取ろうとしたその時、不意に携帯電話がぶるぶると震えだした。

start line

上条当麻は学生寮近くの路地裏にある、公衆電話の前に立っていた。

ケータイは上条自身が朝、踏みつけて壊していたのだ。だが上条はどうして今、こんなところにいるのか？ 一体誰に電話を掛けようとしているのか？

その答えは偏に、上条が抱きかかえている少女にある。

白い肌に緑色の瞳、絹糸のような長い銀髪。歳は十四、五歳くらいで、明らかに日本人ではない。おまけに純白の修道服を着込んでいて、まるで教会のシスターの様に見える。

インデックス 禁書目録と名乗ったその少女は、今朝方、上条が知らない間に部屋のベランダにある手すりにぶら下がっていたのだ。上条は何やらデジャブの様な物を密かに感じながら彼女を介抱し、その話を聞いた。

それによると彼女は魔術組織とかいうシロモノに追われているらしく、それから逃げている途中に上条の部屋のベランダに引つかかかってしまったというのだ。にわかには信じられない話であったが紆余曲折あり、結果としては上条が学校へ行くと同時にそのまま別れたはずである。

はずだったのだが……。

「おい、インデックス!! もう少しの間、我慢してろよ」

焦った様な声でインデックスを励ます上条。だがインデックスからの返事は、ない。それもそのはず、インデックスの背中——ほとんど腰に近い辺り——には大きな刃物の傷があり、そこから血液がだらだらと漏れ出しているのだ。上条が学校から帰ってきた時には、インデックスは既にこの大怪我を負っていた。

大怪我を負ったインデックスが部屋の前で倒れているのを見つけた時は上条も本当に驚いたのだが、大変なのはその後だった。なんとインデックスを追っていた魔術師と顔を鉢合わせてしまい、そいつが襲い掛かってきたのである。

上条は何とか撃退したが、インデックスをそのまま病院に連れて行くには問題があった。当然本来ならば一刻も早く病院に駆け込まなければならぬほどの大怪我であるのだが、『組織』である敵に居場所を突き止められてそこを襲撃されればそれでおしまいだ。それにインデックスは、衛宮士郎と同じく不法侵入の可能性も高い。

先ほど上条が戦った、ステイルⅡマグヌスと名乗る魔術師。超能力なしに炎を操り、明らかに『異常』な空気を纏っていた。見た感じとても年下の相手とは思えないほどの猛攻を受けた上条だったが、土壇場の発想でどうにか打ち勝つ事が出来たのだ。だが、おそらく二度も同じ手が通用する相手ではないだろう。ステイルはルーン文字を印刷

した大量のカードを利用して上条を追い詰めてきた。魔術師が学生寮中に貼り付けたルーンをそのインクごと火災報知機のシャワーで洗い流したのは良かったが、次は対策を施されてしまうはずだ。下手に病院で治療をしてもらっていないと碌な防御手段もない故、被害も拡大しかねない。

では一体どうするのか？それがインデックスによれば、回復する手段がまだ一つ残っているのだとか。

実はインデックスはその禁書目録の名が指し示す通り10万3000冊もの魔道書を完全に記憶しており、彼女がこんな大ケガを負っている理由もそれを欲した魔術師の攻撃によるものだという話だ。つまり、誰かがその魔道書を利用して回復魔術を扱えばよいのだ。何なら、一番近くにいる上条が扱えばいい。こんなケガなど直ぐに治してしまいう位の情報が、彼女の頭にはインプットされているのだから。

だが、そこには大きな問題が一つあった。10万3000冊の魔道書の管理人たるインデックス曰く、魔術とは『才能ない人間』の為に作られたシステムであると。

結論だけ言えば、上条では駄目なのだ。上条達『超能力者』は、薬や電極を使って脳の回路を無理矢理に拡張している。たとえ最弱であっても、能力者というだけで一般人とは身体の作りが違っていた。つまり、この学園都市に住む学生は、誰一人としてインデックスを救えない。助かる手段はあるのに、救えないのだ。

……そう、『学生』は。

逆説的に云えば、『才能ない人間』なら誰でも魔術が扱えるということだ。インデックスも、多少の危険はあれども『一般人』ならサポートさえあれば回復魔術の行使は可能であると断言した。

そこで上条が真つ先に頭に浮かべたのは、つい最近一緒に住み始めたばかりの同居人。学園都市の能力とは縁が遠いはずの人間である衛宮士郎だ。衛宮士郎ならば、一般人である彼ならば魔術が使えるはずだと、上条は今急いで公衆電話で彼に連絡を取っているのである。幸いにして、一昨日に一緒に携帯電話を買ったばかりである。電源さえ入っていれば、電話は繋がる。

「頼む、出てくれ……」

もはや祈るようにして、受話器を耳に押し当てる上条。衛宮士郎が出なければ、今度こそ手詰まりになってしまう。何度か発信音が鳴り続き、駄目か？ と上条が諦めかけた時、

『もしもし、当麻か？』

繋がった。

とにかく繋がったという事実感謝し、慌てて上条は返事をした。

「士郎!? 良かった、繋がった……」

『一体どうしたのだ、当麻！ 帰ってみれば学生寮は火事だし、君の姿も見当たらない』
何かあったのか？ と心配そうに聞いてくる衛宮士郎に上条は、どう説明しようかと頭で考えを巡らす。だがここで曖昧な事を言つて不思議がられてもどうしようもないし、問答をしている暇はない。とりあえずここに来てもらうことにしようとして上条は決めた。

「士郎、悪いがこつちは説明している暇もねえ。緊急事態なんだ、今すぐこつちに来てくれ!!」

『……ッ!! 判つた。直ぐに向かおう』

上条の焦る声に何か事情を察したのか、何も聞かずに返事をする衛宮士郎。上条は衛宮士郎の察しのよさに感謝しながら、とにかくこの場所を伝えたのだった。

既に学生寮の近くまで来ていたので、上条が指定したところまで衛宮士郎は10分と掛らずに辿り着く事が出来た。公衆電話の近くに上条の姿を確認すると、走つて駆け寄る。衛宮士郎には遠目からでも、上条が何か人のようなものを背負っている事が分かつた。

「士郎！」

「一体何があつた当麻。その背中の娘は？」

よくよく見てみれば、どうやら上条が背負っているのは白い服を着た少女であつた。ただし腰の辺りに無残な傷があり、大量に出血していて非常に危険な状態にあると推測される。血を流しすぎたのか、少女は完全に気絶していた。

「いや、さつきも言つたけど説明している暇がないんだ。今は何も聞かずに、こいつの言う事を聞いてくれ！」

「しかし、その娘は凄い大怪我ではないか！　まずはその傷を治さなければ!!」

「そうだけど、こいつ見た目どおり宗教やっててさ。宗教上の理由とか何とかで治療をする前にちよつとどうしても儀式をしないとイケないんだよ！　途中で魔術とかよくわかんない事を言うかもしんねえけど、あんま気にしないでこいつの言う事を聞いてやつてくれよ!!」

「魔術、だと……!!」

シスターの様子を見ながら上条の話を聞いていた衛宮士郎は、その一言に凍りつく。聞き慣れた、しかし学園都市の人間からは決して出てこないであろう言葉が上条の口から漏れたのだ。

魔術。

彼が今一番気に掛けていた言葉であり、同時にこの場で一番聞きたくなかった言葉で

もあつた。それとなく上条が背負っている少女に手を触れてよく解析してみれば、彼女の着ている修道服が一級品の概念武装であつた事が分かる。何故か今はその力が失われてはいるが、相当な力を持つていた痕跡は残つていた。言い逃れの仕様が無い『魔術』の証拠に、衛宮士郎は息を呑んだ。

そんな衛宮士郎の様子には気付かず、上条は話を続けようとする。

「ああ、でもとにかく……」

「当麻、その娘は魔術師なのか」

「いや、本人はそう言つてるけど実際……」

「重要な事だ！ 頼む、答えてくれ当麻!! もしかして君は、魔術関連の厄介ごとに出くわしてしまつたのか!？」

「……? そ、そうだけど」

魔術という言葉にそこまで食いつかれるとは思つてなかつたのか、衛宮士郎の詰問口調に戸惑いながら答える上条。そんな上条を尻目に、衛宮士郎は額に手を当てて呻いていた。

(まさか……、まさか魔術とはな)

分かりきつていた結果を今一度確認して、衛宮士郎は思わず自分の不運を呪いたくつた。衛宮士郎がこの世界で魔術を使える以上、ある程度は魔術関連の事が存在し、

発展している可能性は以前から考えていたし、それを確かめる為に今まで学園都市から出ようと策していたのだ。別にその存在が確認された事自体には大して驚きは無い。

問題は、それがここで、上条当麻の周りで起きたという事だ。

まさかこんな形で魔術と接触するとは、衛宮士郎には思いもよらなかった。もしかしたら自分が原因なのではと衛宮士郎は勘繰ってしまふ。もし自分が原因で上条が魔術に巻き込まれてしまったのなら、衛宮士郎は何としても上条を魔術の脅威から守りきらねばなるまい。どの道上条が魔術の存在を知ったなら、これ以上自分が魔術師である事を隠し通すのは不可能であろうと衛宮士郎は考えた。

「ここらが潮時かと、衛宮士郎は軽くため息をつく。

「いいか、当麻。落ち着いて聞けよ」

「だから、早くしないとインデックスが……………」

「私は魔術師だ」

「……………は？」

衛宮士郎の口から出てきた予想外過ぎる言葉に、上条は口を開けて固まってしまった。呆然とした目で衛宮士郎を見ていて、現状を理解し切れていない気がする。それもそうであろう。魔術とは無縁だと思っていた同居人が、いきなり自分が魔術師であるなどとカミングアウトしたのだから。

「詳しい事情は、後で必ず話す。問題は私が普通の魔術が使えない特殊な魔術師であるという事だ」

上条の返事を待たず、言葉が続ける衛宮士郎。確証はないが、おそらく衛宮士郎はこの世界の術式を扱えないだろう。勿論試してみた事はないけれども、魔術基盤が違う恐れがあるし、下手に失敗すれば何が起こるか判らない。ここでこの世界の魔術を使うのは、あまりにハイリスク過ぎた。

「し、士郎。お前、なに言ってる……」

「当麻、君が混乱するのは分かる。だが今は時間がないのだろうか？」

そう強く言って、衛宮士郎は血濡れのインデックスに視線を向ける。上条も釣られてインデックスに視線を向け、ごくりとつばを飲んだ。

真つ青な顔をしたインデックス。白い修道服は血で無残にも紅に染まっている。おそらく、このまま放っておいては数時間もしない内にインデックスは失血死してしまうであろう。

そんなインデックスの様子を今一度見て、上条は何か耐えるかのように目を閉じて拳を握り締めた。正直短時間の間に様々な事が起き過ぎて、上条は色々と整理が出来ていないのが現状だ。だが一つだけ確かな事があるとすれば、それは時間があまり残されていないという事。今ここで上条の心の内をぶちまけても、何の解決にもならないなら

ば……。

「……わかった。言いたい事はすげー色々あるけど、今は全部飲み込んでやる！ 教えてくれ、どうすりゃインデックスは助かる!!」

上条は覚悟を決めた。

数日の間一緒に暮らしているだけであつたが、上条は衛宮士郎の人格を既に認めている。

衛宮士郎は信頼出来る。

信頼出来るはずだ。

たとえ衛宮士郎が今まで自分が魔術師であることを隠していたとしても、上条の彼への印象がそれで全部ひっくり返るわけでもない。だって彼らがこれまで過ごした日々は、決して嘘ではなかったのだから。

上条は継る様な、だが覚悟を秘めた目で衛宮士郎を見つめた。覚悟は決めた、だから協力してくれと、その目が衛宮士郎に訴えかける。衛宮士郎はその決意を確かに認めると、よしと頷いて改めて上条に聞いた。

「インデックスとやらが言う、回復魔術には一体何が必要なのだ？」

「インデックス自身が魔道図書館らしいから、特に『才能』が必要なわけじゃないらしい。

ようは『一般人』なら誰でも良いそうだ」

「つまり、超能力者たる学生は駄目という事か……」

至極簡略的な話を上条から聞き、衛宮士郎はうむむと唸る。学園都市はその人口の八割が学生であるという非常に特殊な街だ。この場合、超能力者である学生同士の友人関係など何の役にも立たないのである。逆に言えば、残りの二割に知り合いがいれば良いわけであるが。

「生憎、私にそんな知り合いはいない。私に出来るのは……」

これ位だなど、意識を自身の内側へ集中させる衛宮士郎。

思い描くのは彼の半身とも言える存在。在るだけで持ち主の傷を癒し、老化を停止させるという伝説の宝具。

騎士王の鞘。全て遠き理想郷

長い間ともに戦場を歩んだその宝具だけは、二十数年この体に宿っていた為かほとんど負担を掛けずとも投影出来る。

出来るはずだったのだが、

「投影、開……始?！」

突然の衝撃。

全て遠き理想郷の投影を始めたとしたん、強烈な鈍痛が全身を襲う。まるで内から何か飛び出してくるかのような痛みが、衛宮士郎の全身の神経を苛んだ。

「ぐうつ、あがつ!」

「士郎!」

上条が心配そうに声を掛けるが、返事をするのも辛いほどの痛みが衛宮士郎を苦しめる。単なる身体の痛みだけではない。吐き気や頭痛、ありとあらゆる衝動が衛宮士郎の身体の内をぐちゃぐちゃに掻き回した。

（何、故だ？ 他の投影や魔術を行使する時には、こんな事起こって、は、いないのに……!）

今までこの世界に来て幾度となく投影自体は行使している。宝具だつて最初の一日に破戒^{ルールブックレイカー}すべき全ての符を投影し、真名解放までしているのだ。それなのに投影しただけでこのような衝撃が走るの、こちらでは衛宮士郎にとっては初めての経験であつた。しかも意識を手放してしまいそうになるほどの激痛は、時を経るに連れ段々と増して行く。

しかしそれでも、衛宮士郎も然る者。

ただ己でイメージする。

この投影の成功を。

元よりただそれだけに特化した魔術回路、決して衛宮士郎には不可能ではないはずだ。

強引にその強靱な精神力によって痛みをねじ伏せ、何とか投影を完遂させる。

「はあつ…、はあつ……」

「そ、それは？」

いきなり衛宮士郎の手に現れた、鞄のようなものの上条は目を丸くする。ついさつきまで魔術の存在を信じてはいなかった上条にとって、何も無い虚空から物が出てくるなんてオカルト以外の何物でも無い。衛宮士郎はがくとその場に膝を突いたが、どうか意識は保てていた。

「気休め程度に、しかならん、がな、私が使える、唯一の回復魔術、とでも言うか……」
息も絶え絶えになりながら、鞄をインデックスに押し付ける。

全て遠き理想郷はその本来の持ち主が現界してこそ始めて、その加護による効力を発揮できる宝具だ。真名解放による効力は、あくまで衛宮士郎にしか効果を及ぼさない。今のままでは、あまり意味を成していないと言えよう。現にインデックスの顔色には、目に見えた変化はなかった。インデックスの方もぐったりとしていて、鞄や衛宮士郎に気付いた様子もない。

「だが、無いよりは、マシなはずだ」

未だに続く激痛を抑えながら答える衛宮士郎に、上条が心配そうに見上げる。

「お、おい。大丈夫か、士郎？」

「私のことは、いい。それより、誰か心当たりのある人物は、思い、ついたか……」

衛宮士郎はとにかくその事を気にしていたが、その言葉に上条はああと力強く頷く。

「小萌先生。教師なら、能力開発も受けていない、『一般人』のはずだ」

あの先生、この時間でもう眠ってるなんて言わねーだろうかと、上条は笑うのだった。

上条のクラスメイトから小萌先生の住所を聞きだして路地裏から十五分ほど歩くと、三人は小萌先生のアパートに着いた。ちなみにインデックスは、今は衛宮士郎が背負っている。

「……か……」

「なんとというか……、随分と古いな」

二人が驚くのも無理は無い。そこは東京大空襲も乗り切りましたという感じの、超ボロい木造二階建てのアパートだった。洗濯機も外に出ている、風呂場の概念がなさそうな年代モノ。ここだけ学園都市から昭和に、タイムスリップしてしまっているかのような印象を受ける。

だが、今はそれについて文句を言っている暇も無い。とにかくインデックスの治療をするのが先だという事で、二人で手分けして小萌先生の部屋を探す。幸いにしてアパー

ト自体がそう大きいものでもなく、嚴重なセキユリティーが敷かれている訳でもなかった。すぐに見つけることが出来た。

所々が錆びている鉄製の階段を上った先。二階の一番奥の部屋に、ひらがなで『つくよみこもえ』のプレートが掲げられている。ちなみに小萌先生の部屋が見つかった時点で全て速き理想郷は消してあるが、衛宮士郎は未だに激しい痛みに襲われていた。しかも、それとは別に先程から何か内側から張り裂けそうな痛みも全身を襲っている。だが上条に心配を掛けない様に、衛宮士郎はどうにか気丈に振舞っていた。ただこのまま小萌先生の部屋に入ると、以前変装した状態で彼女とは顔を合わせている為に色々と面倒な事になりそうであるので、衛宮士郎は変装を既に全て解いている。

「どうする?」

「当麻、君がまずチャイムを鳴らせ。後は、強引に押し切ろう」

あの教師ならば子供を邪険に扱ったりはしないだろうと、先日会った小萌先生を思い出しながら衛宮士郎が提案した。上条はそれに頷くと、チャイムを二回ほど鳴らす。……が、全く反応が無いので仕方なく思いつきドアを蹴破る事にした。

ドゴン!と上条の足がドア板に激突し、凄まじい音を立てる。だがドアはびくともしない。御近所さんが騒音に文句を言いにくることもなく、代わりに上条の足の親指からグキリと妙な音が響いた気がした。上条は足を抑えて飛び上がり、床をごろごろと転が

りまわっている。

「~~~~ツ!!」

「……何をやっているのだ、当麻」

衛宮士郎が呆れたようにため息をついたその時、

「はいはいはい、对新聞屋さん用にドアだけ頑丈なんですー。今開けますよー?」
のんきな声と共にがちやりとドアが開き、緑色のパジャマを着た小萌先生が顔を出した。若干タバコ臭いのが、何やら嫌な予感を思い起こさせる。

「うわ、上条ちゃん? と、えと……」

だ、誰ですかー?と疑問詞を頭に浮かべている小萌先生を前に、上条はなんとか足の痛みから回復して正面に立つ。

「ちよつと色々困ってるんで、入らせてもらいますよ先生」

「ちよ、ちよちよちよつとーっ!」

部屋に強引に入ろうとする上条の侵入を防ぐかのように、慌てて立ちふさがる小萌先生。

「せ、先生困ります、いきなり部屋に上がられるというのは。いえそのっ!」

「申し訳ないが、押し問答をしている暇も無いのだ」

「や、だめですーっ!!」

小萌先生の言う事を皆まで聞かず、上条と先生の二人を同時に押し出す形で衛宮士郎は部屋に入り込んだ。

正直な所不法侵入なのだが、細かい事を気にしている場合ではない。あわあわとうろたえている小萌先生を無視し、勝手に押し入ったのだが、

「チツ……」

「……うわぁ」

衛宮士郎は舌打ちをし、上条は呆れた様な幻滅した様な声を上げる。それもそのはず、ポロポロの畳にはいくつものビールの缶が転がっており、銀色の灰皿にはタバコが山盛りにされていた。これで競馬新聞でも転がっていれば完全におっさんの部屋である。とてもではないが、お世辞にも整理整頓された衛生的な環境とは言い難かった。

「あ、あの〜」

「当麻、説明は任せた」

「お、俺かよ!？」

上条が驚いた様に声を上げるが、当然だろうと衛宮士郎が言葉を返す。衛宮士郎は小萌先生と知り合いと言うわけではないし（以前会ったときは変装をしていた）、上条が適切だろうと考えたからだ。小萌先生の方は二人に恐る恐る声を掛けようとして、衛宮士郎の背中に背負われている血だらけのインデックスにようやく気がついたのか青い顔

をしていた。

上条が小萌先生を相手に色々事情を説明している間に、衛宮士郎は軽く辺りの掃除をする。空き缶をまとめて捨てて、煙草の灰皿も片付けた。そうして部屋を綺麗にする。インデックスの傷が床に触れない様に、注意してうつ伏せに寝かせる。流れ出た血が固まって服まで体に張り付いてしまつては色々邪魔になるので、衛宮士郎はインデックスの背中の部分の服を取り除いた。

「……………」

血塗れた傷を見て、衛宮士郎はその顔を歪める。背中への傷は想像以上にひどかった。腰に走っている深い切れ込みには、ピンクの筋肉や黄色い脂肪、果ては白い背骨のようなものさえ見えている。傷口の周りも、真っ青な唇の如く青色に変色していた。どうしたものかと衛宮士郎が考え込んでいると、突然インデックスがその目を見開く。

「——出血に伴い、血液中にある生命^マ力^ナが流出しつつあります」

まるで機械が喋っているかの様な、トーンの変わらぬ不気味な声。二人で話していた上条と小萌先生も、ギョツとした顔でインデックスの方を向く。衛宮士郎もそんなインデックスをじつと見つめて観察していた。

インデックスは大怪我を負っている人間とは思えない、完全に『冷静』な瞳で口を動かす。

「——警告、第二章第六節。出血による生命量の流出が一定量を超えたため、強制的に

『自動書記』ヨハネのペンで覚醒めます。……現状を維持すれば、ロンドンの時計塔が示す国際標準時

間に換算して、およそ十五分後に私の体は必要最低限の生命力を失い、絶命します。これから私の行う指示に従って、適切な処置を施していただければ幸いです」

「……………君の治療に必要な人員は何人だ」

「超能力者でない『一般人』一人で充分です。他の方々は退出して貰って構いません」
「わかった」

衛宮士郎との短い会話を終え、それきり目を開いたまま黙ってしまうインデックス。そのなんともいえぬ迫力に気圧されたのか、上条と小萌先生は固まっている。そんな二人に喝を入れるが如く、衛宮士郎が声を上げた。ここで重要なのはこの二人だ。一刻も早く治療が必要であるのに、固まっただけでは元も子もない。

「当麻、しつかりしろ。彼女が言うには、まだ間に合うらしい」

「あ、ああ」

「私はいったん外に出ている。治療が終わるか、必要な事があつたら呼んでくれ」

そう言つて衛宮士郎はドアを開け、アパートの通路に出る。一般人に出来る回復魔術という事は、衛宮士郎の助力はとりあえずは必要ないという事でもあるのだ。

それにそれよりも重要な懸念が、衛宮士郎にはまだあつた。上条から詳しい事情を聞

いたわけではないが、インデックスが斬られていて病院に行くでもなくあんな裏路地にいたという事は、少なくとも敵がまだ存在するはずなのだ。一応、追跡されているかないかは小萌先生のアパートに来るまでに確認をしていたが、念には念を入れてインデックスの治療が終わるまで衛宮士郎は辺りを見張る事にしていた。

「ぐっ……」

上条の手前何とか倒れることは我慢していたが、衛宮士郎を苛む痛みは段々と酷くなってきている。倒れそうになる体を壁で支え、強化を施した目で隅々まで見渡した。（今のところ、特に異常はなしか）

追跡の気配もなく、見張られている感じもない。そのまましばらく見張っていると、アパートの扉が開いて上条が出てきた。

「どうなった？」

「ああ、なんとかなるだろ。小萌先生には、インデックスは何かの宗教に入ってるって言うておいた」

「妥当だな」

まさか魔術の事を説明するわけにもいくまいと、衛宮士郎は頷く。上条はしばらく黙っていたが、やがてゆつくりと口を開いた。

「説明してくれんだろ」

何をとは言うまでもない。衛宮士郎が魔術を知っている理由、それを今まで隠していた理由。聞きたいことは山ほどある。それら全てに答えてくれと、上条は口を開いた。

「士郎。記憶喪失って言うのは嘘だったのか？」

「……嘘では、ない。私は確かに記憶喪失だ」

自分が魔術師であるという事以外はほとんど何も覚えてないよと、衛宮士郎は静かに上条に真実を語り始めようとした。

「君の部屋で目覚めた時、私は本当に……………っ!!」

「士郎!」

しかし衛宮士郎が話し始めたその時、突然その体が前のめりに崩れ落ちる。ガツンと頭を揺さぶられる様な衝撃が、突如として衛宮士郎を襲ったのだ。まるで穴の中を落ちているが如く、急激に意識が薄れていく感覚。先ほどからずっと続いている痛みが、ここにきて一瞬でも気が緩んでしまったのか一気に増していった。もはやどうしようもなく崩れ落ちる衛宮士郎を、上条はどうにか支えようとするが重過ぎて支えきれない。

二人の体格が違い過ぎるのだ。

(原因は、なんだ？ 全て遠き理想郷の、投影か……………?)

それしか考えられないのが現状であるが、どうにも今の状態では考えを纏める事も難しかった。上条が何事かを叫んでいる事は判ったが、朦朧とした意識ではその言葉を捉

える事が出来ない。

結局上条に真実を話す事なく、衛宮士郎はその意識を手放してしまった。

彼は彼女と共に

夜も遅く、街角の隅のほうでひっそりと経営している一軒のバーがある。落ち着いた雰囲気音楽が流れ、店の中にいる人達も街の喧騒を逃れられるこの一時を楽しんでいた。

そんな店の奥の席に、一組の男女が座っている。女性はルビーのように真つ赤なカクテルを傾けているが、男性の方には琥珀色の液体が注がれたグラスが置かれている。不思議な雰囲気を持つ二人であったが、どうしてか店内に居る誰もがその二人組を気に掛けてはいなかった。

店員までもが、だ。

片割れの見目麗しい女性はグラスから口を離すと、その唇から艶やかな息を吐いた。

「どうだった、久しぶりの日本は？」

「どうもこうもない。相変わらず好きになれん国だよ、此処は」

男性は気に食わなさそうにふんと鼻を鳴らす。女性はその様子にクスクスと笑った。

「あらあら、せっかくの里帰りだつていうのに。つれないのね」

「勘違いするな、私は恩人に久しぶりに会ってきただけだ」

男性——ロードⅡエルメロイⅡ世は口角を上げ抗議するが、その声に刺々しさは含まれていない。むしろどこか嬉しそうな口調だ。その視線の先には、小さな紙袋が二つ。

「そつちの、老夫妻からのお土産はまだわかるけど、」

女性——遠坂凜は、呆れたような目をする。

「何でゲームなんかでニヤニヤしてるわけ、アンタ？」

「なんかとはなんだ、なんかとは」

二つの紙袋のうち一つは、マッケンジー夫妻からの贈り物。ロードⅡエルメロイⅡ世は第四次聖杯戦争以来、世話になった夫妻とはずつと連絡を取り合ってはいたが、この度久しぶりに再会したのだ。

そしてもう一つの紙袋には、横側に色鮮やかなロゴが描かれている。中身はいわゆる戦略ゲーと言われる種類のゲームソフト、その初回限定版である。ロードⅡエルメロイⅡ世はこういったゲームをするのがひそかな趣味であるわけだが、今回日本に来る日程とソフトの発売日がちょうど重なったのでわざわざ買ってきたのだ。

正直な所ロードⅡエルメロイⅡ世は早くゲームをやってみたいと思っっているのだが、彼らが日本に来た目的はそれがメインではない。

「それより、君のほうこそ大丈夫だったのかね？」

「当たり前じゃない」

私を誰だと思っているの？ と、遠坂凜は胸を張った。ロードⅡエルメロイⅡ世がそこらをほつつき歩いている間に、遠坂凜は自宅や様々な場所へと寄っていたのだ。衛宮士郎を解放するための下準備。封印指定の魔術師に連絡をとり、人形を入手する為の商談を纏める事は出来た。残るは足りない資料を倫敦へ持っていくだけ。第二魔法の資料は、既に全て倫敦へ持ち込んだのである。

では足りない資料と言うのは、

「第二架空要素に関する研究は、遠坂よりも間桐やアインツベルンの方が詳しいからね」
そう足りなかったのは第二架空要素、つまり魂の運営に関する資料だった。衛宮士郎を本当の意味で救うために必要な、もう一つの鍵。

魂は魔術的には非常に扱いが難しいものとされていて、魔術による干渉はあくまで「内容を調べるモノ」や「器に移し替えるモノ」に限られている。

では一体、彼女達はその魂を使って何をしようと言うのだろうか？ 此度の実験で主に利用するのは「器の移し替え」である。

いや、移し替えと言うより追加と言った方が正しいか。

「しかしまあ、君らが優秀だと言うのは知っているがな」

ロードⅡエルメロイⅡ世は彼女達から初めて計画を聞いた時を思い出して、深く息を

ついた。

「まさか、騎士王を衛宮士郎に降ろそうとするとは……」

無茶をするにも程があると呆れた様な表情だ。そんなロード・エルメロイⅡ世に、遠坂凜は何を今更といった顔をした。

「もう計画はほとんど準備できてるのよ。あなただって、全て納得した上で協力してくれているんでしょ」

「まあ、そうだが……」

「士郎にセイバーを降ろして、平行世界に跳ばす。これくらいしないと駄目なのよ、アイツは」

「随分と買っているのだな。騎士王を」

当然でしょと遠坂凜は心なしか自慢げに答える。

騎士王。

アルトリア・ペンドラゴン。

最優のサーヴァントたるセイバーのクラスにて、第五次聖杯戦争で召喚された英霊の一人だ。聖杯戦争においては衛宮士郎のサーヴァントとして活躍し、遠坂凜にとっては戦友でもある。期間としては数週間しか共に暮らしてはいないが、もはや今の衛宮士郎を救えるのは彼女しかいないと遠坂凜は確信していた。

自分達では止められなかった、救えなかった衛宮士郎。

このままだけ封印指定から解放しても、どうせ彼は同じ過ちを繰り返してしまう。それは住む世界を変えた所で一緒だろう。衛宮士郎の、『正義の味方』の持つ異常な歪みは、世界が変わった程度で救われるほど生温くない。ゆえに衛宮士郎には必要なのだ。常に彼の傍にいて、彼をぶん殴つてでも押しとどめられるそんな存在。

本音を言うならば遠坂凜も衛宮士郎についていって、セイバーと一緒に彼を支えたかった。しかし彼女達の不完全な第二魔法では、せいぜい一人分の『孔』を開けるのが精一杯。十全に考えた上での、これがベストの選択なのだ。だがそこまで話を聞いても、ロードIIエルメロイII世は納得のいつていない様な唸り声を上げる。計画を全て聞いた上で、彼にはまだ不可解な点があった。

「大丈夫なのか？ 一人の肉体に、二人分の魂を入れてしまうなんて」

そう、ロードIIエルメロイII世が気にしている点は此処にあった。確かにアインツベルンや間桐といった第三魔法に関して研究を続けてきた大家の力を借りれば、魂の移し替えは可能なものかもしれない。

しかしそれは、例えば空の人形に魂を移すかのように、あらかじめ空っぽの器に魂を入れるからこそ成立するものでもある。既に魂が入っている器に、さらにもう一つの魂を入れて衛宮士郎は果たして無事でいられるのか。下手をしたら廃人になってしまう

可能性もあるだろう。

そんなロードⅡエルメロイⅡ世の不安に遠坂凜は、心配は要らないわよと妙に確信めいた口調で話す。

「アイツは今、ある事情で『器』が常人より大きくなっている。肥大化した器なら、魂の二人分くらい入ると思うわ」

「二人分と言つても片や英霊だぞ。ただの人間に英霊の魂が入るのか？」

「ただの『人間』じゃなきゃいいのよ。ギリギリだけど何とかなるわ」

「ギリギリか……」

「うっさい。そんな事はいいでしょ、入ればいいんだもの」

桜の見立てに寄れば大丈夫なんだからと、口を尖らせる遠坂凜。ロードⅡエルメロイⅡ世はその無謀さに若干頭痛がしてきたが、ブランドーを煽って誤魔化した。

実はその「ある事情」というのが、衛宮士郎をどうあつても平行世界へ跳ばさなければならぬ理由でもあるのだが。

「イリヤの遺した研究、桜の資料、最高位の人形使い製の人形、第二魔法の準備、必要なフアクターはほとんど全て揃ったわ」

「残すは衛宮士郎自身、という訳だな」

その最後の一つが、一番重要でかつ難関な要素でもある。それさえ手に入れば、騎

士王を確実に呼び出すための触媒もまた一緒に手に入れることが出来る。

「もう一息よ。でもこれからが、」

「正念場、と言う奴か」

ロードⅡエルメロイⅡ世が、遠坂凜の言葉を継ぐ。長い年月を掛けて、彼女達はこのためだけに準備してきた。既に計画は、ほぼ終盤にある。あと少し、あと少しなのだ。決して失敗はしない。必ず衛宮士郎を救つてみせると、彼女達は誓つたのだ。

そう、自分達の手で衛宮士郎の封印指定を執行した、あの日に。

夢を見ている。

一人の少女の夢を。

まだうら若き少女が、選定の剣を抜いて王となった。

民の求められるままに理想に殉じ、戦い続ける彼女の一生。

だがしかし、いつの日か王は彼女の騎士達に言われてしまう。

『王は人の心がわからぬ』と。

情に流される事無く、ただただ公正に公平に人を裁き続ける王に、騎士達は何を思つたのか。

やがてその円卓は二つに裂け、王も自らの手で息子を葬る。人の身に余る理想を抱き討ち果てた、その慟哭は誰に聞こえる事なく紅に染まった戦場を駆け抜けた。

この夢は、いつか垣間見た騎士王の……、

(……………、…………ウ)

歪む、歪む、視界が歪む。

(……………、…………ロウ)

夢が終わりを迎えていると、頭のどこかが言っている。

(……………、…………ロウ！)

ならば醒めねばならぬ。醒めぬ夢など、無いのだから。

(……………、シロウ！)

声は頭に、否、魂に響く。そう、この声は。あの運命の夜に聞いた……、

『シロウ!!』

「……………ッ！」

起きた。

衛宮士郎は横になっていた体を勢い良く起こし、ぱつと辺りを見渡す。狭いアパートに、人が四人。月詠小萌、上条当麻、衛宮士郎、そしてインデックス。みんなぐっすり眠っていた。

他に心配は、ない。

では、あの声は？

二度と聞けぬはずの声を、衛宮士郎は確かに聞いた。たとえ幾年経とうとも、決して聞き間違える事の無い声を。だがそれだけに、衛宮士郎はいつに無く戸惑う。だって彼女とは、彼女とはもう……、

「一体……、」

『シロウ、返事をしてください！』

「……………!!」

今度こそ、衛宮士郎は跳ね起きた。傍で寝ている上条が身じろぎするが今は気にして
いる場合ではない。まさかの、まさかの出来事に衛宮士郎は恐る恐る呟く。

「セイ、バー?」

『はい、何でしょうかシロウ?』

「……………」

あの日別れたはずの少女の声が、衛宮士郎の頭の中で響く。あまりの衝撃に、衛宮士郎は言葉が出ない。ありえない、決してありえない事が今、衛宮士郎の身に起こっている。夢かと思つて頬を抓むが、痛いだけで景色に変化は無い。はつきりと聞こえる声
が、幻聴の可能性すら否定した。

信じられない事ではあるが、衛宮士郎は今、あのセイバーと、アルトリア・ペンドラゴンと再び会話をしているらしい。混乱する頭を整理しながら、衛宮士郎はどうか声を絞り出した。

「本当に、セイバーなのか？」

『無論です。私は第五次聖杯戦争にて、あなたに召喚されたサーヴァント。真名はアーサー王。まだ信用していただけませんか？』

なんならその結末についても詳しく語っても構わないのですがと続けるセイバーに、衛宮士郎は首を振る。

「いや、いい。わかった。すまなかったなセイバー、疑って悪かった」

『気にかけていませんよ、シロウ。それより口に出して会話しては、皆を起こしてしまします。頭の中で会話するように喋ってみてください』

『………こうか』

『ええ、上出来です』

一々口に出して会話をするのと周りの皆を起こしてしまう可能性があったので、頭の中で語りかけるようにしてセイバーと会話する。どうやら上手くいつているようで、衛宮士郎もセイバーも互いの声をきちんと聞き取る事が出来ていた。色々と戸惑ってはいるが、とりあえず衛宮士郎は自分の気を落ち着かせる。

憧れていた存在に再会出来た嬉しさも勿論あるが、なんといつても異常なこの状況。どうしても情報整理が必要だった。

(体に特に異常はない。いつのまにか、全身の痛みも消えている)

全て遠き理想郷を投影したときから続いていた、全身に走る激痛も今は無い。セイバーとの二重人格もどきになっている以外は、特に身体におかしな点も無いようだ。黒い肌、くすんだ銀色の髪。手足も問題なく動かせた。セイバーの声が自分の妄想の産物だという可能性も捨てきれないが、妄想でここまでのはつきりとした会話は出来まい。だがそうと決まれば色々と衛宮士郎はセイバーに聞かなければならない事があった。

『今は声しか聞こえないのだが。セイバー、君は一体どこにいるのだ?』

『どこ、と言われましても……。しいて言うのであればシロウの中とでも表現しましょうか』

『俺の……、中?』

『ええ、今の私には実体がありません。かと言って霊体と言う訳でもなく、意識だけがあなたの中に存在しているような状態です』

『どうしてセイバーがこの世界に、いや私の中にいるのだ?』

『すいません。私もまだ現状を上手く理解出来ていなくて……。私が目覚めた時には、既にこの状態でしたので』

『……そうか。では、セイバーはいつから気付いていたんだ？』
『気付く、と言うと？』

『いつから意識があつたのか、という事だ』

まさか自分が気付かなかつただけで、こちらの世界にきたときからずっとセイバーは自分の意識があつたのではあるまいかと衛宮士郎は勘繰つたのだ。

別にそれがどうしたと言う話ではあるが、もしもそうであるならなんとなく気恥ずかしい。そうした衛宮士郎の疑問に、セイバーはふむと考える。

『そうですね。……シロウは、夢を見ましたか？』

『夢？』

『私の夢です。騎士王としての、生涯の夢。私はその夢を見た後に、こうして意識が覚醒しました』

『……………』

確かに衛宮士郎は目覚める直前、そんな夢を見ていた。聖杯戦争のときにも見た、あの夢。その始まりから終わりには、少しも変わっていないかった。

しかし夢の後に起きたという事は、セイバーの意識が覚醒したのはここ二、三時間と言ふ事になる。

『セイバーは、何か原因は思いつかないか？ こう、なんというか、今のような状況に

なった原因を』

『……そうですね。申し訳ありませんが、先程も言った様に私は今起きたばかりですの
で、これと言つて原因は思いつきませんが……』

『なるほどな……』

となると、衛宮士郎に思い当たる原因は一つしかない。

(やはり、全て遠き理想郷の投影が原因か……)

そもそも衛宮士郎が倒れてしまったのも、投影した後から始まった、痛みが原因であ
る。以前、破戒すべき全ての符を投影したときは、別になんとも無かった。どう考えて
も、全て遠き理想郷の投影のせいであろう。

そうやって衛宮士郎が異変の原因について自身の中で考察を続けていると、セイバー
が遠慮がちに話しかけてきた。

『シロウ、少しいいですか?』

『ん? どうした、セイバー?』

『いえ、今のうちに言っておかなければならないことが、その、ありました』

『ああ、今なら大丈夫だが』

『ええと、あのですね……』

しかし、なかなか言い出さないセイバー。

彼女にしては、随分と齒切れが悪い。

『なんだ？ どこか調子でも悪いのか？』

『同じ体なのですし、そういう訳ではないのですが……』

やがて観念したかのように、ため息をつくセイバー。どこか諦めのついた声で、衛宮士郎に話しかける。

『……説明するより実践した方が早いですね。シロウ、ちょっと覚悟をして下さい』

『な、なんだ』

一体なにをと衛宮士郎が答える前に、一瞬だけふつと意識が遠のいた。その後すぐに意識は覚醒したが、なんだか身体の様子がおかしい。

体と言うか、意識がどうにもふわふわしていて定まらない。というか、体が自分で動かせない。自分でもよく分からない妙な状況に衛宮士郎が混乱していると、急に視点が勝手に動いた。

『なっ!?!』

驚いて声を上げてしまいそうになったが、言葉を発したはずなのに口が開かない。その代わりに自分の頭の中で声が響いた。そのまま身体はすつと立ち上がり、衛宮士郎の意志に関係なく勝手に洗面所の方に歩いてゆく。気のせいか、視点がだいぶ下がっているような気がした。

そうして洗面所に入ると、鏡の方へゆっくりと視点を向けさせられる。

『……………』

啞然。

言葉が出ない。

いや、先ほどから口に出そうとしても出ない状態ではあったのだが。なんと驚くべき事に、鏡の中に映っているのは金髪の少女であった。

もつと簡単に言えば、鏡にはセイバーの姿が映っているのだ。

『シロウ。大丈夫ですか？』

鏡を見たきり黙ってしまった衛宮士郎に、セイバーが心配そうに声を掛ける。すると当然のように鏡の中のセイバーも心配そうな顔をした。

衛宮士郎はあまりの状況にしばらく黙っていたが、ややあつて落ち着いたのかゆつくりと頭の中でセイバーに語りかけた。

『……………これは、どういうことだ？』

『まあ率直に言いますと、士郎の肉体が私の肉体に変わっていますね』

肉体の主導権もこちらにあるようですとセイバーは確認するかの様に、その手を鏡の前にかざす。今、この体を動かしているのは、衛宮士郎の意思に拠るものではない。どうやら、セイバーが体を動かしているようだ。

『何が一体どうなっている……』

『混乱するのもわかりませんが、シロウ。とりあえず貴方に一度、主導権をお返しします』
そういつて、セイバーはすつと目を閉じた。それと同時に先程の様な、意識が一瞬だけ落ちる感覚が衛宮士郎に走る。次に目を開けて意識が覚醒した時には、鏡の前に立っているのは衛宮士郎であつた。

「……もはや意味がわからんな」

衛宮士郎は呆れたようにため息をつく。と体の調子を確認する。どこにもおかしな点は無く、昨夜には激痛で呻いたのが嘘のようだ。さつきまでと違い、今度は体を自由に動かせる。

『理解できましたか、シロウ』

『ああ、なんとなくな』

今までの事から推測するにつまり、今回、衛宮士郎の体に起こった異変は二つ。

一つ目は、いつのまにか衛宮士郎の中にセイバー、アルトリア・ペンドラゴンの意識が宿っていたと言う事。

二つ目は、まるで二重人格者が人格を切り替えるかのように、二人の間で肉体の主導権のやり取りが出来ていて、それと同時に肉体そのものも変化してしまうと言う事。

「どうしてこんな事に……」

思わず頭を抱えて叫びだしたくなるような衝動に駆られるが、そこは大人。ぐっと我慢して押さえ込む。自分の体が一般人よりおかしくて、ついでに厄介な代物も持っているという事は自覚していたが、ここまでデタラメな事が起こるともはや諦観して受け入れざるを得ない。

悩んでいても仕方がないと思ったのか、先ほどから気になっていた事を衛宮士郎はセイバーに聞く事にした。

『ふむ、セイバー』

『なんででしょうか、シロウ』

『どうしてセイバーはこの事を知っていたのだ？』

この事とは肉体の入れ替えについて。目覚めたばかりのセイバーがどうしてこんな重要な事を知っているのか疑問に思っていたのだが、答えはあっさりしたものであった。

『それならば、私がシロウより先に目覚めたからですよ』

『先に？』

『ええ。シロウが起きるより一時間ほど早く私は目覚めましたので、色々と体の確認をしていたのです。初めはいきなりこんな状態に放り出されましたので、ひどく混乱しましたが……』

我がスキル、直感Aが役に立ちましたと胸を張っている(ように思える)セイバー。直感にそんな使い方があったか? と衛宮士郎としては甚だ疑問であったが、細かい事を気にしても仕方がないので何も言わないでおく。

『そこで、私なりに考えてみたのです。このようなことになった原因を』

『セイバーが俺の体についてのまにか入ってきていた事か?』

『いえ、そちらではありません』

『では、何の事だ?』

衛宮士郎の疑問に、肉体の主導権の交換における体そのものの変化についてですと答えるセイバー。衛宮士郎からしてみても、確かにこの現状は不可解なものではあった。二重人格ともまた違った、聞いた事も無い様な現象。長い間魔術には深く関わっていない衛宮士郎であったので、素直にセイバーの見解には興味もある。衛宮士郎が話を促すように相槌を打つと、セイバーも話を続け始めた。

『私にはしっかりとした自我、そして記憶が存在する事は、今までの会話からシロウも分かりますよね』

『ああ、確かに君はオレの知っているセイバーだ。自我も記憶もちゃんとあると思う』

『ありがとうございます。私の予想も主にその事について関わってくるのですが、私としてはこの『記憶が存在している』という点が非常に重要な所だと思うのです』

『と言うと?』

『シロウも魔術師であるのなら、記憶、魔術回路などは本来、肉体ではなく魂にあるという事は御存知でしょう』

『……聞いた事があるような気がするな』

正直魔術師としての衛宮士郎は決して優秀とは言えなかったもので、どうしても返答は曖昧になってしまふ。時計塔でそういつた類の事を学んだような気はあるが。

『つまり私の意識が記憶ごとこの身体に宿っているという事は、この体にはシロウの魂と私の魂。二つの魂が一つの器に入っている状態であるとも考えられるのではないでしょうか』

『ほう』

少々以上に強引な説ではあるが、衛宮士郎にとつて納得出来ない訳ではなかった。第一それ以外にこの状況を説明できるような説を、衛宮士郎は思い浮かばない。だが、

『だがそれがどうしたら、こんな肉体の変化に繋がるのだ?』

そう、それが一番の問題であった。セイバーが衛宮士郎の中に宿っていた事は何となく理解出来る。しかし身体ごと変化する理由が、衛宮士郎には分からなかった。その疑問に答えるが如く、セイバーは口を開く。

『ここからは、先程以上に憶測の域となりますが……。『世界』というのは矛盾を嫌うは

ずでしたよね』

確かめる様なセイバーの口調に、衛宮士郎は頷いた。世界が矛盾を嫌うというのは衛宮士郎も知っている。なにより聖杯戦争に於いてあの弓兵が衛宮士郎を殺そうとしたのも、自分殺しという矛盾を誘うためであつたはずだ。

『私の考えでは、表に出る人格が変化するのは肉体で表面化する魂の変化であるとも思ふのです。つまり……、』

『つまり人格として表に出て来る魂が変化する度に、世界から修正を受けているという事か?』

セイバーの話を経く様に、衛宮士郎が言葉を続ける。矛盾を嫌う世界の修正によって、魂に合わせて肉体が変化するなど衛宮士郎は聞いた事もない。信じられんなど衛宮士郎は首を振るが、そもそもセイバーの見解はあくまで憶測でしかないのだ。深く考えた所で何か分かる訳でもなかった。

会話が途切れ、しばらく二人の間に沈黙が降りる。だがやがて、セイバーがゆっくりとその口を開いた。

『それより、私の方も聞きたい事がたくさんあります』

『……だろ?』

今までの事、この世界の事。もう二度と会えないと思つていた彼女に、説明する事は

たくさんある。むしろ、ありすぎて語り切れないくらいだった。本来なら真つ先に出るはずなのだが、今までその話題が出てこなかったのが不思議でならない。

『話してくれますか、貴方が今、ここで何をしているのかを』

『勿論いいとも。だが、長くなるぞ』

『構いませんよ』

時間だけは沢山ありますからと、セイバーは笑みを浮かべたのだった。

『そんな事が、あつたのですか……』

聖杯戦争の後から、ここに至るまで。この世界の事も、学園都市の事も含めた全て。結構な時間を掛けて語り終えた時、既に窓の外には日が昇っているのが見えた。今にも、夜が明けようとしているのが分かる。

衛宮士郎が彼の思い出せる限りの全てを語って聞かせている間、セイバーは何も言わずにただ黙って話を聞いていた。互いに頭の中で会話をする事なら出来るが、考えている事までは分からない。

衛宮士郎が全てを語り終えた今、セイバーは一体何を考えているのか。

信念に従って生きてきた。

理想に殉じて生きてきた。

その生き方そのものに、後悔は無い。あるとすれば救えなかった、その手から零れ落ちてしまった者達に対する物。

語りきり、何も言わない衛宮士郎にセイバーはぽつりと呟く。

『貴方は……』

『……』

『貴方は今までずっと、ずっとそうして生きてきたのですか？』

衛宮士郎は答えない。黙って前を見据えている。その目はどこを向いているのか。己の過去か、全ての始まりであるあの光景か。

沈黙を肯定と受け取り、セイバーは続ける。

『リンやサクラやタイガも皆置いていって、ただ人を救うためだけに？』

『……』

『何故です！ 貴方達はあの時誓ったはずだ!! リンは貴方に決して道を間違えさせないようにすると！ 貴方もリンに、二人でともに歩んでいくと!! その貴方達が、どうして今こんな事になっているのです!!』

ただ叫ぶ。

断片的でも衛宮士郎の過去を知ったセイバーには、今の彼が、いや彼らが許せなかつ

た。互いに誓ったはずなのに。聖杯戦争の終わり、あの誓いは嘘だったと言うのか。セイバーはあの遠坂凛ですら、衛宮士郎を止められなかったという事が信じられなかった。

彼女ほどの人物ですらその身を懸けてさえ、衛宮士郎を引き止める事が出来なかったという事実。

衛宮士郎という人物の歪みは、聖杯戦争のときに充分に認識していたはずであった。己の身より他人の身を第一に考える、その在り方。自己というものが欠落していて、命を捨てているとさえ言えるその異常性。ともすればサーヴァントであるはずの自分すら庇いかねない衛宮士郎に、セイバー自身何度やきもきした事か。

それでもあの少女と一緒にいれば、リン達さえ一緒にいるならば、いつかきつと、彼も自分を見つめなおすだろう。そう確信して、セイバーは英霊の座へと戻ったはずだった。

だが、今はどうだ。

この衛宮士郎という男の歪みは、何一つ変わってはいない。

それどころか驚くべき事に、今の衛宮士郎の容姿はあの弓兵にそっくりだ。投影の使い過ぎで変色した浅黒い肌に、鈍色の髪。

まさに遠坂凛が危惧した通りに、行く着く所まで行き着きつつある衛宮士郎。

戦争が終わってから十年近く、未だに彼は変わらない。その在り方を、セイバーは恐ろしいと感じた。

(そして、この状況……)

何者かによつて平行世界へ跳ばされ、おまけに自分と言う存在までもが、衛宮士郎についている。一体誰が、何故こんな事をしたのか。衛宮士郎が言うには、遠坂凛でほぼ間違いないという。

ではなぜ彼女がこんな事をしたのか、幾ら考えても今のセイバーには結論が出せなかった。

『……焦っていたんだ』

『シロウ?』

セイバーが考えを巡らせていると、今まで黙っていた衛宮士郎が急にぼそりと喋りだす。

『時計塔で凜達と暮らしていて、それはすごく充実していたのだと思う』

『……ならば何故、』

『でもそれは、俺が受け取っていいものじゃなかった』

『……………』

衛宮士郎が語りだしたその口調は、いつのまにかあの頃のものに戻っていた。

『あいつらと一緒に暮らしている内に、気付いたんだ。俺はこうして普通に暮らしているけど、それはあの災害で生き残った、じいさんの跡をついだ俺が享受するものじゃないんだって事に』

『……シロウが出て行った時、リンは追いかけてこなかったのですか？』

『さあ、よく覚えてないんだ。覚えているのは、俺が黙って時計塔を離れてからすぐに戦場に飛び込んだ事かな』

そしたらいつの間にかこの世界に跳ばされていたよと、衛宮士郎は自嘲する。後悔はしていないはずなのに、今さら手放したものの大切さに気付いたかの様に。そうしてふつと鼻で笑うと、衛宮士郎は腰を上げた。

『……とりあえず、そういつたことはまた今度にしようセイバー。今は、』

『敵に関する対処が先、と言う訳ですか』

相も変わらず自分の異変より他人を優先させる衛宮士郎にセイバーはため息をつきたくなるが、そこは彼の言うとおりでもある。何らかの敵から攻撃を受けているのなら、まずはその排除を最優先にすべきであろう。

二人で落ち着いて話す時間は、幾らでもある。

それからでも、遅くはないだろう。

遅くはない、はずだ。

遠坂凜が何を考えているかは知らないが、こうした状況になっている以上は自分が衛宮士郎を引きとめ続けねばなるまい。

そう密かに決意して、セイバーはこれからの事に思いを巡らすのであった。

watched&watching

『で、現状は？』

『そうですね……』

セイバーは再び洗面台の前に立っていた。体の調子を確かめるかの様に軽く全身を動かす。勿論未だ眠っている他の三人を起こさぬよう、そつとだ。

『特に支障はありません。戦闘も問題ないでしょう』

『ふむ』

別に、どこか体の調子が悪いといった様子はなさそうだった。ただ、彼女に問題があるとするれば、

『流石に、クラス特性であった対魔力や騎乗といったスキルは失われていませんね』

『それだけか？』

『……約束された勝利の剣エックスマスカリバも使えないようです。聖剣の召喚すら出来ません』

『それは……、痛いな……』

衛宮士郎の嘆きに、全くですとため息をつくセイバー。彼女としては聖剣を湖の精霊に返還した覚えはないのだが、実際に使えないのだからどうしようもない。

『まあ、インレシフル・エア風王結界は無事なのが救いですね』

そう言つてセイバーは手の内でほんの少しの風を起こす。ヒュルヒュルと手の内で渦巻く風は、現状ではセイバーの一番の武器だ。

セイバー自身が今は剣を一振りも持つていないが、そこは衛宮士郎の投影が役に立つ。この世界に於いて武器に困る事はないのは大きかった。いざとなつたら衛宮士郎が投影する、勝利すべき黄金の剣もある。投影の件で思いついたのか、ふと衛宮士郎がセイバーに尋ねた。

『そういえばセイバー。その姿で投影は出来るのか？』

『無茶を言わないでほしい、シロウ。私は魔術師ではないのですよ、出来るはずがないでしょう』

『そういえばそうだったな』

セイバーは魔力炉心を保有しているおかげで、魔術回路が無くとも体内で魔力を生成する事が出来る。だが決して彼女自身が魔術師と言うわけではないのだ。セイバーには魔術が使えない。インレシフル・エア風王結界やら何やら、セイバーは魔術じみた事もやってのけていたので、衛宮士郎はどうやら本気で忘れていたらしかった。スマンと謝る衛宮士郎に、気にしないでくださいと返すセイバー。

若干バツが悪そうなのは、さつき衛宮士郎に気付かれないように小声で、トレース・オ

ンなどと呟いていた事とは関係がない。

もしかしたら使えるかもとか考えて呪文を唱えても、何も起こらなかったのが恥ずかしかつたなんて事を隠している事とも関係がない。

たぶん。

きつと。

上条当麻が小萌先生のアパートで目を覚ました時、衛宮士郎は既に起きていた。上条が布団から身体を起こすと、昨夜以上に綺麗になった部屋が目につく。どうやら衛宮士郎は朝起きてからも部屋の掃除をしたらしかった。彼のいる台所からは朝食のいい匂いがふわふわと漂ってくる。寝起きの若干ぼんやりとした頭で、上条は衛宮士郎に何となく声を掛けた。

「……なに作ってたんだ？」

「卵粥だ。傷が塞がったのなら、次は体力を回復させないといけないからな」

よく見れば、心なしか部屋のあちこちも整理整頓されている気がする。具体的に言えば、あれほどあったタバコの吸殻やビールの空き缶も全部なくなっていた。どうやら衛宮士郎が全て片付けたらしい。

「あれほど汚いと、朝飯を作る前にまず掃除をしたくなつてな」
だそうで。そして小萌先生の姿が何故か見えない。

「士郎、小萌先生はどこに行つてんだ？」

「彼女は外だ」

「外？　なんでまた」

「タバコが吸いたいそうだ」

「なるほど」

そんな会話をしていると、部屋のドアが開いて小萌先生が外から戻ってきた。

「なんで先生の家なのに、ウチでタバコが吸えないんですー？」

「馬鹿者、当たり前だ。ここには未成年の学生に怪我人もいるんだぞ」

部屋に帰つてきて、開口一番にぶー垂れる小萌先生。だが衛宮士郎が涙目の彼女に返

す声はにべもない。どうやら衛宮士郎が小萌先生を追い出したらしい。

「仮にも教師が、生徒の前でタバコを吸うのはどうかと思うがな」

「仮にもって……」

先生れつきとした教師なんですけどー！　と抗議の声を上げる小萌先生だが、衛宮士郎からして見れば子供にしか見えない。この容姿でタバコを吸うなんて、少年少女にいろんな意味でも悪影響だと思う。

皆で軽く朝飯を摂った後、上条達はインデックスの看病をする事になった。一夜明けたインデックスには風邪と似たような症状が出ていて、朝になっても高熱と頭痛でぶつ倒れていた。熱のせいか肌は桜色に上気し、暑苦しそうに片足を布団からはみ出させている。実は下半身は、パンツしか穿いていないのだが。

衛宮士郎は台所で食器の片づけをし、小萌先生はインデックスのおでこに乗つけていた濡れタオルが温くなったので、洗面器の水につけてジャブジャブと洗っている。

「ところで上条ちゃん、結局この人たちは上条ちゃんの何様なんです？」
「妹と兄」

「大嘘にも程があります。二人ともモロ外人さんです！」

「……インデックスはともかく、士郎は日本人なだけど」

「う、嘘です！ こんな色黒で、銀髪の日本人なんて先生信じません!!」

「本人の前で言うのはどうかと思うのだが……」

あんまりと言えばあんまりな物言いに、衛宮士郎が思わずツツコミを入れた。本人も一応、あの弓兵にそっくりな容姿になってきている事を実は気にしていたりする。おかげで、鏡の前で自分の姿を見るなりなんか苛々するのだ。

少しの間皆でインデックスの看病を続けていると、小萌先生が上条のほうへ顔を向けた。

「上条ちゃん」

突然、小萌先生の口調が変わった様な気がした。今までのおちやらけた雰囲気ではなく、身に纏うのは教師のソレだ。どうやら真剣な話をしようというらしいと、衛宮士郎には予想がついた。

「当麻、私は外の様子を見てくる」

その場の空気を感じ取って、衛宮士郎が立ち上がる。これから先は生徒と教師の話だ。

ある意味部外者である衛宮士郎が軽々しく聞くものではない。そう判断して、部屋を出る衛宮士郎。流石にインデックスをつれていく訳にもいかないのに、衛宮士郎は外で二人の話が終わるのを待つ事にした。

ついでに言うと、セイバーは今眠りについている状態である。基本的に表に出ていない方は常時眠っているのだが、いざという時や呼び掛けさえすればすぐに起きるので大した問題は無かった。眠っている間についての出来事も片方に聞けば解決するし、そもそもそんなにこころごとに入れ替わる必要も無い。真昼である現時点では敵からの襲撃の可能性も低いので、わざわざセイバーが起きていなくとも良かった。

そうして衛宮士郎が部屋の外に出ると、都会の夏らしい湿った風がその頬を撫でる。本音を言えば、月詠小萌を魔術の厄介ごとに巻き込みたくはないのだ。ほとんど何も説

明しない事が最善なのだ、そこは上条に任せる事にした。

今回の事件の中心にいるのは、あくまで上条当麻なのだ。無責任かもしれないが、それにたとえ月詠小萌が魔術に関わる事となったとしても、衛宮士郎が護るべき人が増えるだけの話。それ自体は衛宮士郎にとって苦にはならない。

ただ、彼女の人生が変わってしまう事だけが不安だった。魔術と言う異端を知った以上、その騒動にいずれ巻き込まれるのは必至だ。特に今回のような、敵の攻撃に現在進行形で晒されている場合にそのリスクは跳ね上がる。敵の襲撃と言えば、上条はどうやら一人で魔術師を相手にしたらしい。特殊な力を持つとはいえ、戦闘のプロであるはずの魔術師にどう対処したのか、衛宮士郎には非常に興味があつた。

(あとで、当麻から詳しく聞いておくべきだな)

どうやって敵の魔術師から逃げ切ったかはわからないが、出来るだけ情報がほしい衛宮士郎にとっては、せめて敵の容姿くらいは掴んでおきたい。そうすれば、こうして外の様子を見るときにも大分役に立つというものである。

そんな事を考えていると、不意にドアが開き小萌先生が出てきた。どうやら話し合いは終わったらしい。財布を手を持っているところを見ると、買い物にでも出かけるところなのだろうか。衛宮士郎は、そのまま入れ替わりで部屋の中に入ろうとして、

「ちよつと待つて下さい。」

小萌先生に、呼び止められた。衛宮士郎が小萌先生のほうを向くと、先程までの様子からは考えられない様な毅然とした眼差しでこちらをじつと見ている。

「上条ちゃんとあなたがどういふ関係なのかは、今は聞きません」

「……………」

でも、と月詠小萌は衛宮士郎の顔を見据えて、こう言い放った。

「もしもあなたのせいで上条ちゃんが傷ついたとしたら、先生はあなたを絶対に、絶対に許しません！」

「……………そうか」

「はっ」

その澄ました顔をぶん殴ってやりますと小萌先生は続けた。意志は強く、目に宿る光は衛宮士郎の心を射抜く。その言葉には決して嘘偽りなどないのだろう。月詠小萌はそう言うのと、衛宮士郎の返事を聞かずに去っていった。それだけで、衛宮士郎にも分かった。彼女がどれほど生徒思いなのか、どれほど大切に思っているかを。そう感じさせるには充分すぎるほど、ただ一言から感じ取った。

しかし、そんな心配は衛宮士郎には今更の話だ。

何故ならそれは、

「もとより……………、そのつもりだからな」

衛宮士郎にとっては当たり前。ただ当然のこと。

たとえ己の命を捨ててでも、彼の正義は見知らぬ誰かのためにある。それでも小萌先生の言葉は、戦場の感覚を、誰かを護りながら戦う感覚を取り戻すにはいい気付けだった。ここ最近ろくな戦闘もなく、ぬるま湯に浸かっていた身にはちようどいい。それにも聞かないと言う事は、少なくとも上条の安全を任せるくらいは月詠小萌が衛宮士郎を信用しているという事でもあった。

その事実やその他様々な配意に感謝し、衛宮士郎は彼女が去っていった方向に頭を下げる。そうして今度こそ部屋に戻ろうとして、

「……………ッ!!」

再び、その足を止めた。信じがたい景色を、衛宮士郎は目にしたからだ。衛宮士郎の目の端に写ったのは、ある一組の男女だった。

とにかく衛宮士郎は部屋には入らず、懐から携帯電話を取り出して操作してるフリをする。このアパートから600mほど離れた雑居ビルの屋上に、その男女は突っ立っていた。

別にそれだけならなんの問題はないのだが、重要なのは彼らが明らかにこちらを観察しているという事である。片割れの男の方は双眼鏡を持ってこちらを見ているのが分かった。

衛宮士郎の数少ない誇れる才能の一つに、異常なまでの目の良さというものがある。強化を掛ければkm単位で、たとえ掛けずともかなりの距離を視認する事が可能だ。600mほど離れた雑居ビルの屋上程度なら、衛宮士郎はその口の動きまで判別出来る。特にその男女は一際異彩を放つ格好をしているので、傍目にも怪しさ丸出しであった。

男の方はどうやら白人らしい肌の色に、髪は夕焼けのような赤色に染め上げられている。二メートル近い身長で、神父のような漆黒の修道服を着ているくせに、ピアスに指輪にタバコ、さらには右目のまぶたの下にバーコードの形をした刺青までもが刻んでいた。おまけに意外と童顔で、歳は十四、五歳に見える。神父と不良をごっちゃにしたような格好に、流石の衛宮士郎も軽く引いた。

だが女の方も負けず劣らずのおかしな格好をしているのだ。歳は十七、八だろうか。男よりも頭一つ分ほど背は低いが、日本人にしては十分高い方だろう。腰まで届くほどの黒髪のポニーテールに、着古したジーンズと白い半袖のTシャツといったラフな格好をしていた。ジーンズは左脚の方だけ何故か太腿の根元からばっさり斬られ、Tシャツは脇腹の方で余分な布を縛ってヘソが見えるようにしてある。足には膝まであるブーツ、2m以上ある日本刀は拳銃のホルスターの様な革のベルトに挟まれていた。

(おそらく神父の方が上条を襲った魔術師、そして女の方がインデックスを斬った魔術師か)

男女の装備から、二人の働きに大体の当たりをつける衛宮士郎。そうして今度はその二人に対して読唇術を試みる。携帯電話を見るフリをしながら唇の動きを読むのは決して簡単な事ではないが、これほど近ければ衛宮士郎にとっては結構余裕があった。

読唇術。

唇の動きで相手が何を喋っているかを解説する技術であり、お世辞にも普通の魔術が上手くなくて代わりに視力だけは矢鱈と良い衛宮士郎にとってはこれほど役に立つものはない。会話の途中からであるが、男女の言っている言葉も大体を理解する事が出来た。

まさか魔術もなしに会話を聞かれているとは思ってもいないのか、思いの外その二人は饒舌である。どうやら上条の幻想殺しは予想以上に警戒されているらしく、なんらかの魔術組織がバックアップについているのではないかと誤解しているようだ。

そしてこの諜報の一番の収穫は、

「増援はナシ、か。それはいい事を聞いた」

そう、どうやら相手方には増援がないらしい。つまり敵は目の前にいる唯二人のみ。しかも会話の途中で出てきた『ルーン』というキーワードを聞く限り、男の方はルーン魔術の使い手であるという事まで判ってしまった。ここまで都合よく情報をべらべらと喋っている姿を見ると、もしや罠かと疑ってしまうが、

(まあ、それはないだろうな)

衛宮士郎はそう断定する。その主な理由としては、衛宮士郎があゝの二人を発見できたのは唯の偶然だからである。誤情報をばら撒くつもりなら、もっとわかりやすい位置、見つけやすい位置でこちらを張っているだろう。そしてその誤情報をこの状況で撒くつもりであるならば、衛宮士郎が魔術師であつて、しかも遠視が得意であるという事も予想出来ないといけないのだ。彼らの前でまだ一度もまともに魔術を使つていない衛宮士郎が、そこまで実力を看破されているとは考えづらい。だから衛宮士郎は彼らの言っている事が全部本当の事であろうと判断したので。

しばらくの間、衛宮士郎は二人の会話を聞き続けて、時間的にそろそろ潮時かと携帯電話をしまつてその目を逸らす。欲しい情報はまだまだ不足しているが、流石にこれ以上長い間見続けているとバレてしまう可能性がある。あくまで衛宮士郎の感覚的な話になるが、女剣士の方はその立ち振る舞いからいつてもかなり戦闘に特化した魔術師のはずだ。手錬相手には警戒するに越した事はない。そうして衛宮士郎は踵を返すと、部屋の中へと戻つていった。

「……………何をしている」

「ああ、士郎！ ヘルプ、ヘルプミー!!」

部屋に戻った衛宮士郎は、目に入った光景に呆れたような声を出す。大人しく話をしているかと思っていたら、何故かインデックスが上条の頭に嘯り付いていて暴れていたのだ。これでは追跡している方も気が抜けるだろうなど、あの男女を少し気の毒に思っ
てしまったくらいである。

衛宮士郎はため息を一つつくと、未だ暴れている二人を強引に引っぱがした。

「当麻はともかく、君はまだ体力を回復させていないといけないのだから大人しくしているのだな」

「へぶっ!？」

そうしてインデックスを手加減して布団の中に押し込む。なにやらインデックスは恨めしそうな顔でこちらを睨みつけているが、無視した。

「……まあ、暴れられるほどに体力が回復したという事でもあるか」

「だからって人様の頭に嘯み付くのはどうかと、ワタクシは思うのです」

「一緒になって暴れていた当麻が言う台詞かね?」

「……………すいません」

ついでに上条の頭を引っぱたき、衛宮士郎は二人を落ち着かせる。とりあえず衛宮士郎は、自分が外に出ている間の上条と小萌先生の話を確認する事にした。

「で、小萌先生は説得出来たのか？」

「まあ説得と言うか、気を遣わせてしまったというか……」

とりあえず今回の事は不問みたいな？ と話を纏めた上条に衛宮士郎は内心一安心する。一般人がこんな騒ぎに巻き込まれる必要はない。小萌先生が巻き込まれないのなら、それがベストだ。

そして彼女が外に出た事で、漸く三人でこれからについて話し合えるようになった。まさか一般人がいる目の前で魔術だ何だと話す訳にもいかなかったので、実は彼らは昨夜以降何も話し合っていないのである。小萌先生がいつまで外に出ているかは分からないが、とにかく今の内に色々と作戦を練ることにした。インデックスは横になったままだが、会話する分には支障は無い。

「ところで、あなたは何者なの？」

話し合いに入る前に衛宮士郎がお茶の準備をしていると、インデックスから声が掛かった。今更ながら、彼女は衛宮士郎という魔術師の情報を知る気になつたらしい。衛宮士郎としても手に入った情報を纏めて相談し合おうとしていたので、自己紹介という意味も含めて改めて自分の立場を説明する機会が必要だった。

「そうだな。では情報の共有も兼ねて、私のことも少し話すか」

お茶の用意をした衛宮士郎が、ちゃぶ台に湯飲みを三つ置く。インデックスが早め

に、普通に会話出来るほどの状態に回復したのは幸いだった。

「まず私の名前は衛宮士郎、魔術師だ。今は当麻の家に厄介になっている」

「……やっぱり魔術師なんだ。でも、なんであなたが回復魔術を使わなかったの？」

インデックスは昨夜の事を余り覚えてはいないが、上条から先程聞いた限りではこの衛宮士郎という人物も魔術師だという事は知っている。でも魔術師ならばどうして昨夜、彼が回復魔術を使わなかったのだろうか。結果的には成功したが、一般人よりも魔術師のほうがインデックスとしても術式を構築し易かったのは事実である。

それにインデックスからしてみれば、上条や小萌先生は自分への関わりようが理解でき二人だった。上条は自分を救ってくれた超能力者だし、小萌先生は上条の教師で一般人。

それなら分かる。

でも衛宮士郎は彼女にとって全くのイレギュラーだ。この科学が支配する学園都市という街に存在する、魔術師という異物。自分のように迷い込んだ風にも見えないし、インデックスという魔道書を狙っている訳でもなかった。勿論学生でもなければ、ましてや教師でもない。何故彼がここにいるのかが、彼女にとっては疑問だった。

もつと言ってしまうのならば、正直インデックスは衛宮士郎を疑っているのだ。衛宮士郎が魔術師である以上、インデックスは彼にとって莫大な価値を持つ道具であるは

ず。言うなれば宝箱が隣に転がっているのと同じ状況である。それなのにこの衛宮士郎という男は、その宝箱に一切の手をつけなかった。自分の価値を良くも悪くも把握しているインデックスにとって、このような現状で衛宮士郎を疑い、その目的を探ろうとするのは当たり前の事であるのだ。実際今もインデックスは、衛宮士郎のその一挙一動に目を光らせていた。

インデックスがそんな事を考えているのを知ってか知らずか、衛宮士郎は先ほどの彼女の疑問にあっさり答える。

「私は少々特殊な魔術師でね。いわゆる普通の魔術という奴がほとんど使えない。だからあの場では小萌先生に任せるしかなかったのだ」

「私は一〇万三〇〇〇冊の魔道書を完璧に記憶している魔道図書館だよ？ そのサポートがあっても使えないって言うの？」

「残念ながらな。感覚的には超能力者と同じだと思ってくれればいい」
「ふうん」

変な珍獣を見るような目で、衛宮士郎を見つめるインデックス。衛宮士郎の答えは意外なものであったが、だからといって彼女の疑いが全て晴れるのに十分な返答でもなかった。だがしかし、普通の魔術が使えないという事はつまり、

「もしかしなくても、あなたは魔道書が使えないの？」

「そうなるな。正直君の持つ10万3000冊の魔道書は、私にとってはあまり意味を持たないものだな」

だがそれがどうした?と真顔で聞いてくる衛宮士郎に、インデックスはなんだが気の抜けた思いであった。確かにインデックスもさつきから直球の質問をぶつけてはいるが、まさか衛宮士郎がそんなにストレートに答えるとは思ひもなかったのだ。それによくよく考えてみれば、ここで衛宮士郎が嘘をつく理由が彼女には分からない。というより嘘をつく必要が無いのだ。インデックスを連れ去る機会など、それこそ今まで山ほどあったはずだ。それらを全て見逃してまで、衛宮士郎がここに居残る理由など無い。だが逆に衛宮士郎が嘘をついていないのなら、インデックスにはもう一つの疑問が湧いてきた。

「じゃあ、なんであなたは私を助けたの?」

「なんで? 君は魔術師に追われて困っていた。おまけに当麻もそれに絡んでいる。逆に、私が君を助けない理由が無いと思うが……」

助けを求める人を救うのは当然であろう?と意外そうな顔で言う衛宮士郎に、今度こそインデックスは気が抜けてしまった。

「ねえ、とうま。この人、本当に魔術師?」

「いや、俺に聞くなよ……」

ひそひそ声のインデックスに答えを求められた上条も困った顔で返すが、インデックスの疑問もまた当然である。魔術師とは本来、何事も自分のためになる事しかしないような人種だ。彼らが組織に入るのも、その方が見返りも大きく自分の目的を達成しやすいからであり、決して組織に入る事自体が目的ではない。何の利益にもならないのに困っているというだけで人助けをするなど、衛宮士郎が魔術師であるかどうかすらインデックスは疑ってしまう。まあだが現状としては、とにかく衛宮士郎を警戒し続ける必要は無いとインデックスは判断したのだった。

そうしてこそこそ話していた二人に、衛宮士郎はもういいか？と声を掛ける。

「次は情報整理だ。まずもってこちら側が守ってばかりでは埒が明かない。インデックス、君はどうすればその身元の安全が保証できる？」

「どうすれば私が助かるのかって事？ ……それなら私は英国式の十字教、イギリス清教に所属してるから、英国式の教会に保護して貰えればいいと思う。そこまでは他の魔術結社も入って来られないはずだし」

「つまりその教会が見つかるまでインデックスを保護していければ俺達の勝ち、奪われたら負けか」

うむむと唸る上条に、衛宮士郎が聞く。

「当麻、この学園都市にそもそも教会があるのか？」

「……一つくらいならあるかもしれないねえな」

それが英国式かは判らないけど、と続ける上条。

「下手をしたら、学園都市から出なければならぬ必要もあるか」

「今更だどこかなり厳しいんだな……」

男二人揃って声が沈むが、文句を言っている場合ではない。

「インデックスの方からは応援は望めないのか？ 組織からのバックアップがあれば、かなり楽になると思うのだが」

衛宮士郎の言葉にそれは無理、とインデックスはふるふると首を振る。

「なんでだよ？ イギリス清教にとつてもお前は重要なんだろ。何とか連絡して、匿って貰えばいいじゃん」

「ううん、それが出来れば一番なんだけどね。私はその連絡方法も分からないんだよ。私が日本に来たのも一年ぐらい前から、らしいし」

「らしい？」

曖昧な表現に上条が眉を顰めた所で、

「うん。一年ぐらい前から、記憶がなくなっちゃってるからね」

インデックスの口から、そんな言葉が零れた。

記憶が、無い。

その事を何でもないかの様に話すインデックス。インデックスは完璧な笑みを浮かべているが、注意して見ずとも理解出来た。

彼女のその笑みの裏にある、焦りや辛さ。やがてインデックスはポツリポツリと語りだす。最初に目を覚ましたのが路地裏である事。自分の事さえ分からずに、ただただ逃げる事だけを考えた事。まだ幼き少女が、見知らぬ土地で唯一人。それはどれほど、どれほど心細い事だろうか。

否、心細いなどと言う話ではない。魔術の知識だけが頭を巡り、見えない敵から追われる生活だ。それを一年も続けるなど、きつとだれにも理解出来ないほどの不安が彼女を襲っていたはず。上条はそんなインデックスの話を聞いて、何とも言えない感想を胸に抱きながらその重い口を開いた。

「……じゃあ、どうして記憶をなくしちゃったのかも分かんねーって訳か」

うんというインデックスの答えに、上条と衛宮士郎は黙り込む。衛宮士郎が今覚えているのは、静かな怒り。

衛宮士郎が怒っているのは、どうして彼女が記憶を失っているのかななどではない。何故インデックスが一年もの歳月の間、イギリス清教の誰にも助けてもらえずに彷徨う羽目になったのか。ただその事に、衛宮士郎は憤慨していた。

元々、衛宮士郎は組織と言うものを信用していない。それは前の世界における経験か

ら起因するものであるが、彼が信じるのはあくまで個人までだ。組織そのものを完全に信用する事は、衛宮士郎にとってはありえない。

そもそもたった一人の少女に一〇万三〇〇〇冊もの魔道書を記憶させている時点で、イギリス清教として信用が置けるものではなかった。しかもそのくせ一年間も彼女を放置しているのだ。確かに向こうにも事情があるのかもしれない。インデックスを助けに来られない何らかの事情が。だがそんな事は衛宮士郎にとっては関係が無かった。いくら組織側に事情云々があろうとも、彼らがインデックスに手を差し出さなかったのは事実なのだから。

そしてインデックスのその話を聞いた事で、衛宮士郎のもう一つの疑問も氷解していた。そう、それは上条とインデックスの間柄についての事である。出会って間もないはずなのに、どうしてインデックスが上条にここまで懐いているのか衛宮士郎にはどうしても分からなかった。

しかしインデックスが一年間も一人だったというのなら納得も出来る。一年彷徨い続け、漸く出会った唯一一人の味方。それが上条ならば、人格的にもインデックスが短期間であそこまで懐いているには理解が及ぶのだ。

だが同時に、その問題点も一つ思い浮かぶ。

(インデックスの引渡しそのものも、また問題……か)

この事件が解決したとして、はたしてインデックスをそのままイギリス清教に引き渡して良いものかと衛宮士郎は考えるのだ。しかし今は敵襲されている最中であるのも事実。とにかく今は目先の厄介事に集中しようと、衛宮士郎は心に決めたのだった。

「……必要悪の教会と言ったな。それはなんだ？」

とりあえず、インデックスの話で気になった事を衛宮士郎は尋ねる。

必要悪の教会。

先程のインデックスの話に出てきていた魔術関連の組織で、彼女が本来所属しているイギリス清教の部署の一つらしい。だがどうやらこの世界の魔術師にとってはその組織はかなり有名らしく、そんな衛宮士郎の質問にインデックスは目を丸くした。

「そ、そんな事も知らないの？ やっぱりあなた、本当に魔術師？」

「魔術師さ。常識知らずではあるがね」

さして気にせずさらりと答える衛宮士郎に、上条がこっそり耳打ちする。

「なあ、素直に記憶喪失だって言えばいいんじゃない？」

「駄目だ。出来る限り情報は制限した方がいい」

「はあ」

衛宮士郎のその情報制限の徹底振りを上条は不思議に思ったが、本人が隠しているならしょうがないかと言葉を飲み込む。衛宮士郎が心配しているのは、何もイン

デックスを警戒しているからではない。もしもインデックスがイギリス清教に帰るとしたら、彼女は当然今までの出来事について説明を求められるだろう。上条の事や、衛宮士郎の事。事細かに聞かれるに違いない。

たとえ彼女が助けてもらった恩義から詳しい説明を避けようとしたとしても、強引に魔術によつて口を割らせるかもしれない。だがそうなった場合、困るのだ。衛宮士郎の情報について少しでも相手側に知られるというのは。

これからこの事件がどんな結末を迎えるのかまだ分からないが、イギリス清教という魔術組織と関わつてゆく可能性がある以上その対策は必須。ゆえに衛宮士郎は己の情報、些細な事すら漏れる事を固辞したのだ。

そして衛宮士郎の無知さには呆れていたインデックスであつたが、しかたないなあとため息をつきながらも質問にはきちんと言答してくれた。

「……もうとうまには説明したんだけど、もう一回説明するね」
「よろしく頼む」

頭を下げる衛宮士郎に、インデックスは上条にしたのと同じ説明を繰り返す。つまりこの世界の十字教の教会というのは、国によつて大きく分かれているという事。

大きく区分すれば、ローマ正教、イギリス清教、ロシア成教。それらの勢力を合わせて魔術側の勢力図は形成されており、各々の『個性』も違っている。

ローマ正教は『世界の管理と運営』、ロシア成教は『非現実オカルトの検閲と削除』。そしてイギリス清教は、

「イギリスは、魔術の国だから」

インデックスはわずかに言葉を詰まらせる。それがまるで、苦い思い出であるかのよう、

「……イギリスは魔女狩りや宗教裁判——そういう『対魔術師』用の文化・技術が異常に発達したんだよ」

そうしてその内にある様々な部署の一つに、魔術師を討つ為に魔術を調べ上げて対抗策を練るのに特化した必要悪ネセサリーウズの教会があるという。

「つまり、対魔術師のエキスパートという事か」

「うん、私もそこに所属してる……、事になってる」

「成程、理解した。つまり敵は、インデックスの頭の中にある魔道書を狙う魔術結社という訳だ」

「魔術結社、ねえ」

上条は、昨日闘った魔術師のことを思い出す。

スタイルⅡマグヌス。あいつはそう名乗っていた。

昨日を振り返って上条がスタイルについて考えていると、ちょうど衛宮士郎もその事

を上条に聞いてきた。

「当麻、君は昨日魔術師の一人と闘ったのだろうか？ その時の事、詳しく話してくれないか」

「そう、だな」

昨日の魔術師を思い出すと段々胸がムカムカしてきたが、とにかくステイルの特徴を話す上条。しかし話せば話すほど、衛宮士郎の顔が険しくなっていくのが上条にも分かる。

「設置型のルーンを扱う魔術師、か」

「ああ、昨日はインデックスが仕組みを教えてくれたから何とか勝てただけだな」

今度は分かんねえ、と上条は続ける。事実、ステイルは相当手強かった。油断と弱点をつけたから良かったものの、次はそうはいかないだろう。

だが衛宮士郎からしてみれば、素人の癖にそこまで行動し、挙句の果てに魔術師を撃破して見せた上条の戦闘センスに驚いていた。虚空^{グラビトン}爆破事件の時もそうだが、上条はここぞという時にかなり強いらしい。勿論だからと言って、上条に戦闘を任す気など衛宮士郎にはさらさらないが。そして重要な事に、上条が話した男の特徴はそのまんま先ほど見かけた神父もどきに当てはまっていた。

(ピンゴ。あとは一人か)

魔術師といえど、いや魔術師であるからこそ戦法や特徴さえ分かればその対策を立てるのは容易い。それに上条が対処できる程度の相手という事は、攻撃力云々は置いておいて速度的には充分奇襲も可能であると衛宮士郎は結論付けた。

「もう一人のほうは、何か情報は無いのか？」

「もう一人？」

「ああ、最低でもあと一人。インデックスの背中を斬り裂いた奴がいるはずだろう」

なにか心当たりはないか、と衛宮士郎は二人に尋ねる。本当は、最低でもあと一人ではなく、真実あと一人しかないのだが。敵の応援が無いという事は一応伏せておく衛宮士郎。変に二人に油断されても困るからだ。敵が畏を張って待ち構えているのなら、出来れば二人には常に辺りを警戒して欲しいという話でもある。

しかし結局、二人には残りの一人に關しては心当たりが無かった。上条はそもそも遭遇していないし、インデックスも背中から斬られたので顔を見てはいない。敵の情報は、一人分のみ。

それでも、今の衛宮士郎にとっては大変有難い。

そうして三人は結局、小萌先生が帰ってくるまで話し合いを続けたのだった。

戦いを告げる

八月二十二日。上条当麻、インデックス、衛宮士郎の三人で情報を整理した次の日。衛宮士郎は小萌先生のアパートの近くにある、小さな公園のベンチに座っていた。その傍らには大きな鞆が、そして片方の手には缶飲料が握られている。

「この学園都市にはまともな飲み物は無いのか……」

衛宮士郎はそんな文句を漏らしながら伊達眼鏡を外し、夏の熱気で曇ったレンズを拭いた。さしもの衛宮士郎も都会らしい蒸した様な暑さには参り、喉を潤す為の飲み物を自販機で買った訳だが、

『黒糖サイダー』はまだマシだが、『いちごおでん』など一体どこに需要があるというのだ」

自販機の商品群を思い出しながら、衛宮士郎はそんな感想を呟く。実はその『いちごおでん』、ある風紀委員ジャッジメントが愛飲しているのだが、そんな事は衛宮士郎には関係ない。これがまともに商品化される事はまず無いだろうなと思いつながら、衛宮士郎は『いちごおでん』を啜った。

流石に街の至る所に実験品が溢れている学園都市だけあって、自動販売機のライン

ナツプにも中々に凄まじいものがある。

衛宮士郎も当初は一番まともそうな『ヤシの実サイダー』などを飲もうと思っていたのだが、生憎『いちごおでん』以外は売り切れていたので仕方なくそれを選んだのだ。

そうしてべたつきそうな苺の甘さに衛宮士郎が苦戦していると、頭の片隅から声が聞こえてきた。

『しかしシロウ、私としては先程の『カツサンドドリンク』も飲んでみたいと思うのですが』

『……いつの間にか起きていたんだセイバー』

『少し前に、シロウが自販機で飲み物を選んでいた時ですね』

既に手馴れた様子で、周りに聞こえぬように頭の中で会話をする二人。衛宮士郎の頭に響く女性の声は、彼の相棒たるセイバーのものだ。基本的に片方が表に出てきている間はもう片方は眠っているのだが、たまにこうして起きている事がある。

昨日の朝方以来、衛宮士郎はセイバーを表に出した事はなかったが、セイバーはちよくちよく起きては衛宮士郎に学園都市についての事を聞いていた。

『しかし想像以上にすごいものですね、学園都市というものは』

『ああ、まさか超能力が科学の領域になっているとは……。オレも初めは驚きの連続だったよ』

『なんと、カツサンド味の飲み物を実現するとは！』

『……セイバー』

感心するのはそこか？ と衛宮士郎はこっそりツツコミを入れたが、セイバーは聞いてはいない。

『どうでしょうシロウ。ここは見識を広める為にも、あの自販機で今一度『カツサンドドリンク』なるものを買ってみては？』

『こんな邪道極まりないものを？ どうみても地雷だぞ、これは』

『いえ、ものは試しと言いますし』

『それに、もう既に私は飲み物を買っているのだが』

『いちごおでん』を振りながら無駄遣いはしたくないと言う衛宮士郎に、セイバーは諦めずに続ける。

『シロウ、あなたはもつと視野を広く持ったほうがいい。固定概念に囚われては、出来る事も出来なくなってしまうですよ』

『そんな大げさな……』

『大げさではありません！ こういった日常的な所から改善していかないとですね……』

いつになく熱弁するセイバーに若干引きながら、衛宮士郎はいやいやと口を開いた。

『だからオレは既にこの『いちごおでん』を……』

『故に！ ここは是非とも、この『カツサンドドリンク』を買ってみてはいかがですか？』

『いや……』

『買ってみては？』

『……わかったよ』

ずずいと迫ってくる（？）セイバーに、衛宮士郎は結局折れた。ゆつくりとベンチから立ち上がりながら、はたしてあのセイバーはこんなにも食い意地が張っていたのか？と薄れる記憶を掘り返す。

衛宮士郎の覚えている限りでは、もつとこう、清廉で凜とした佇まいの少女だったよ。うな気がするのだが。知らぬ内に記憶を美化していたのかなーと思いつた衛宮士郎の目頭が、ほんの少し熱くなったのは秘密。そうしてもはや無言で財布から小銭を取り出し、自販機に入れる。ボタンを押して出てきた『カツサンドドリンク』は、なんだかやけに冷たかった。

『で、何をしていたのです？ シロウ』

『ああ、当麻の学生寮に当分の荷物と着替えを取りに行っていたのだ』

セイバーの疑問に答えつつ、片手に持った鞆を上げる衛宮士郎。鞆の中身は上条の着替えに衛宮士郎の持つ聖骸布等々だ。インデックスが目を覚ましたとはいえ、未だ体力が回復しきっていないのも事実である。学生寮はステイルⅡマグヌスの襲撃のせいで、人が三人も住めるような状況ではなかった。それに一度襲撃があった場所で、もう何日か過ごせるほど衛宮士郎の神経は凶太くない。

結局数日、少なくともインデックスが完全に回復するまでは、三人で小萌先生の家で世話になる事となったのだ。インデックスの服は小萌先生のサイズが合うからいいとして、流石に男物の服は自前で調達しないとイケない。

そういう事で学生寮の様子見も兼ねて、衛宮士郎が上条の服を取りに行っていたのだった。当初は魔術師からの昼間の襲撃を心配していた衛宮士郎であったが、インデックスによればこの世界の魔術師も魔術の秘匿には気をつけるそうなので、ある程度安心して出かけることが出来た。

日中に戦闘が行われる可能性が低いと言うのは、衛宮士郎としても有難い話である。インデックスと情報交換していた時は何とか誤魔化したのが、衛宮士郎の使う魔術は普通の魔術ではない。彼の魔術は向こうの世界でさえ異質な魔術であったのだ。この世界においても言わずもがなであろう。自分が目立つような真似は、極力しないのが一番いい。

(問題は夜か……)

昨日の夜は、実は衛宮士郎が一晩中起きて警戒に当たっていた。敵には居場所もバレていて、おまけにこちら側は碌な身動きが取れないというこの状況。衛宮士郎は敵が必ず襲ってくるであろうと相当警戒していたのだが、不思議な事に何の異変も無く一晩過ぎたのであった。

(やはり、向こう側の勘違いが尾を引いているのか?)

そう考える衛宮士郎が思い返すのは、昨日盗み聞きした魔術師たちの会話である。絶好の条件下で襲って来ないという事は、何らかの事情が向こう側にあったという事だ。衛宮士郎が出した結論としては、向こう側は未だ情報収集の最中なのだろうと予想をつけたのだ。

昨日衛宮士郎が魔術師二人の会話を盗み聞きした限りでは、どうやら上条には何らかの魔術組織が味方についていると相手側は考えているらしい。おそらく、その真偽でも確認しているのだろう。組織相手に魔術師二人では、相手方も心許無いはずだ。(だが確認にそう時間は掛かるまい。今日明日には襲撃してくるだろうな)

それも万全の準備を以って。対してこちらの取れる選択肢としては、その襲撃を迎撃するしか手段がないのだ。

(襲われると分かっているながら、それをただ待っているのはなんとも遺憾だな)

襲われる前にこちらから奇襲を掛けるといふ策も衛宮士郎は考えてはみたが、実は今の所はその方法は使えなかった。事実上の戦力は衛宮士郎だけであるし、上条の能力も拠点防衛には向いてはいない。そして何より相手側の居場所も判明していないのだ。どうしても上条達が後手に回ってしまふのは仕方がない話である。詰まる所、進展は相次第であるのが現状であった。

(アレもおそらく敵の手によるものだろうしな……)

衛宮士郎はポケットから手帳とペンを取り出し、適当なページを開く。衛宮士郎の言うアレとは、アパートの周りを散策している時にあちこちで見かけたカードの事だ。

魔術師二人の会話を聞いていた時に耳にした、十六万四〇〇〇枚もの刻印を周囲二キロに亘って配置したという情報。それと上条が実際に戦ったときの話を元に、衛宮士郎は学生寮の確認がてら街を散策していたのだ。

そうして注意して見れば、あるわあるわ。様々な場所で完全に人目に付かぬよう配置されているカードの群。

上条に敗北した時の経験を生かした対策であろうか、御丁寧に全てのカードにはラミネート加工されていた。無論、触るなどする事はしなかったが、衛宮士郎の視力ならばその描かれた文様位は離れた所からでも充分確認出来る。模倣は衛宮士郎の得意とするものだ。遠目から見て記憶した刻印を、衛宮士郎はそのまま正確に手帳に書き写し

た。

ルーン魔術は門外漢の衛宮士郎だが、こちらにはインデックスという魔術知識の宝庫がいる。彼女から意見を貰う事で、魔術師達への対策くらい立てられればという考えがあった。

しかし逆に言えば、今の衛宮士郎に出来る事はそれ位しかないのだ。打って出る事は難しく、周囲を巻き込んでしまうと知りながらもただ敵襲を待つ事しか出来ない。その歯痒さに、思わず舌打ちしてしまう衛宮士郎。そんな衛宮士郎に、セイバーがあまり気に掛け過ぎないようにと声を掛ける。

『まあ、ここで悩んでいても仕方ありませんし、一旦コモエのアパートに戻っては？』

『そうだな………、む？』

『どうしましたシロウ？』

急に何かに気を取られ、セイバーの呼び掛けに上の空で反応したままで衛宮士郎はじつとどこかを見つめている。その視線の先には、先程飲みきった空き缶が。衛宮士郎はしばらくそれをまじまじと見ていると、ふむと頷いた。

『思いついたぞ』

『は？…何をです？』

脈絡の無い衛宮士郎の言動に、何がなんだか分からないセイバーは疑問の声を上げ

る。そんなセイバーの疑問には答えず、衛宮士郎は口元に笑みを浮かべながら立ち上がる。そうして手元の空き缶を放り投げ、数メートル離れたゴミ箱に捨てた。さらに辺りを見渡すと、何かを見つけたのか衛宮士郎はその笑みを深めて、ようやくセイバーに言葉を返す。

『何、ただの魔術師対策を閃いただけだ。ちよつとしたな』

そんな事を言った衛宮士郎は、アパートとは別方向へと足を進めたのだった。

『ところでシロウ、私のカツサンドドリンクはいつ飲めば？』

『……また、後でな』

学園都市のとある場所。数多くの監視カメラにも映らぬような死角の空間。

そこに一組の男女が、影に紛れて潜んでいた。一人はステイルマグヌス。ルーン魔術を扱う長身の神父。タバコを口の先でゆらゆらと揺らしながら、紙の資料を見つめている。

もう一人は神裂火織。長い刀を下げた女性の『聖人』。二人は揃って、視線を手元の資

料へと落としていた。

何故この二人はこんな所で額を突き合わせているのか？それは彼らが学園都市外部の人間であるからという理由もあるが、この方が色々と都合がいいのも事実である。インデックスを匿っている学生が何らかの魔術組織に関わっているという可能性が出た以上、彼らはそれを調査する必要があった。だが幾ら調査しても、ただの学生以上の情報が出てこない。おまけにインデックスの傷を治癒したはずの魔術師については、その存在すら掴めていない状況であった。埒らない調査に、ため息の一つもつきたくなる。

だが、そこで立ち止まってもいられない。彼らにはタイムリミットが迫っているのだ。相手が組織にしろ何にしろ、二人は準備が出来次第叩くつもりであった。

「首尾の方はどうですかステイル？」

「ああ、順調さ。明日の夜前には終わる」

ステイルの言う準備とは、あらかじめアパート周辺に配置して置くルーンの刻印の事。彼は前回の敗北の反省を踏まえて、ルーンのカードにラミネート加工による防水性を施した上で、それを周囲二キロにわたって配置している最中なのである。その使用枚数、なんと十六万四〇〇〇枚。六十時間ほど掛けて、ようやく配置し終わるほどの量であった。

実は彼らがすぐに上条達に襲撃を仕掛けてこない理由の一つが、ここにある。彼らの

扱う魔術は一見簡単そうに見えて、実は裏で膨大な量の準備を必要とするのである。

ステイルの扱う炎の魔術も本来は、『一〇年間月明かりを溜めた銀狼の牙で……』などという代物なので、これでも達人級の速度と言える。

その万全を以って敵を叩く。たとえ、敵の戦力が未知数だとしても関係が無い。出来るだけの自信も、彼らにはあった。

「それで、同居人のほうですが……」

次の話題に切り替える様に、神裂が話し出す。彼女が今見ているのは上条当麻の資料では無く、その周りの人達の事。

具体的に言えば、今現在、上条と同居している状態にある月詠小萌と衛宮士郎についての情報である。彼らについては、二人は一般人という事で納得していた。

魔術師であるという記録もないし、今までの行動にも特に怪しい物はない。衛宮士郎についての情報が異様に少ないのが気かりであるが、どうせ学園都市が秘匿しているであろうと二人は推測していた。

この世界に於ける世界の勢力は『科学』と『魔術』、二つのサイドにしっかりと分かれている。無論一般人にはつきりと分かるようにではないが、裏の世界においてそういった区分が為されているのは確かであった。

その二つの勢力の均衡を保つ為に、勢力間には暗黙の了解とも言うべき約束事があ

る。それは、互いの勢力が支配する分野に無闇に手を出さないという事。科学と魔術は互いに不可侵という『条約』。明確なラインが定まっているわけではないが、厳守すべき規律があるのは事実なのだ。実際にこの『条約』に抵触したせいで、魔術師が自身の術式を使用不可にされてしまった例などいくつも存在する。

二人はこの衛宮士郎なる人物が、科学サイドにおいて重要な働きをしているが故にここまで情報が制限されているのであろうと勘違いしてしまったのだ。しかしそれも無理は無い。何せ魔術サイドには衛宮士郎という人物については、情報が欠片も存在していなかったのだし、学生である上条と違って彼はれつきとした大人に見える。学園都市にいる以上、何らかの研究職についていると思われるも仕方がなかったのだ。

「その二人についてはもういいだろう。魔術師であるという報告も結局無かった訳だし、この際一般人など無視していい」

「そう、ですね……」

ステイルはそう結論付けるが、神裂にはなんだかしこりの様な物が、喉に突つかかっている思いであった。インデックスを治療した者の存在が未だ判別しないのもそうだし、何よりこの衛宮士郎という男が気に掛かる。

遠目で観察すれば隙だらけの一般人に見えたが、どうも違和感を覚えた。いや違和感というより、むしろわざとらしさ。神裂ほどの域に達した武人だけが分かる、戦場特有

の雰囲気のような物である。それにあの男の体は相当鍛え上げられている様に見えるし、とても学者肌の人間とは思えなかった。むしろ、自分達と同類の臭いもする。

しかし、

(この極東にそこまでの兵が全くないわけではありませんが……。しかし少なくとも、この男の特徴に一致するような人物を私は知らない)

神裂も元は日本で活動していた魔術師だ。日本における魔術事情も、それなりに精通しているつもりである。その神裂をして記憶にないのなら、それは魔術師として小物か、もしくは魔術師ですらないという事。どちらにしてもこの二人の魔術師にとつては、あの男は例の学生以上の脅威には為り得ない。

やはり取り越し苦労かと思ひ直し、神裂はボタンと資料を閉じたのであった。

八月二十四日。昼を過ぎて、完全にインデックスは動けるようになっていた。

インデックスはすっかり上条に懐いた様子で、先ほどから上条に絡んでばかりいる。何があつたか知らないが、まあ元氣になつて良かったと衛宮士郎は単純にその回復振りを喜んでた。二人でじゃれあつている(?) 光景は、見てて微笑ましい物がある。

そんな二人を衛宮士郎は何かこう、生温かい目線で見守っていたのだが、どうやら話

を聞いている限りでは上条とインデックスは共に銭湯に行く事になったらしい。衛宮士郎はアパートの風呂を使えばいいじゃないかと思っただが、驚くべき事にこの科学に突出した学園都市において、このアパートには未だに風呂と言う概念が存在していないのだという話だ。どれ程ボロいのかと衛宮士郎は呆れ返ったが、無いものはないので仕方がない。

「士郎はどうするんだ？」

「勿論ついていく。何があるか分からないしな」

インデックスが元気になった今、自由に歩き回れる様になったのは大変結構な事だが、その分相手の事も警戒しないといけないのだ。特にこの夜の時間帯に外に出ては敵に狙って下さいと言っている様なものでもあったが、いつまでも引きこもっていても仕方がない。

（いつかは打って出なければならぬと思っていたしな……）

どうせなら今、このタイミングで決着を付けたい。相手に応援が来ないことがわかっているのなら、余計な連絡を入れられる前に叩く。

それが、衛宮士郎がこの二、三日で考え出した結論だった。幸いにして相手の戦力の半分は割れていて、対策も考えてある。

準備は、出来ている。

「当麻」

「ん?」

となれば、上条にもある程度は敵襲の覚悟をしていて貰いたかった。出かける準備を整えている上条に、衛宮士郎は話しかける。

「……この際言うが、おそらく銭湯に行く時か、その帰りに敵襲があるだろう」

「は!? て、敵襲って!!」

「我々がこのアパートに来た次の日には、既に敵に居場所が掴まれていた。インデックスが完全に回復した今、奴らが襲撃してくる可能性はかなり高い」

「ちよ、ちよつと待てよ。居場所が掴まれてたつて、何でそんな事士郎が知つて……!」

衛宮士郎の突然の宣告に、上条は手をわたわたと振つて慌てた。にわかには漂ってきた荒事の臭いに上条は思わずインデックスの方を伺うが、彼女は久しぶりに風呂に入れるのが嬉しいのか、元気良くはしゃいでいてこちらの会話に気付いた様子はない。衛宮士郎もインデックスには気付かれないようにしながら、声を抑えて上条に訳を話した。

「私達は見張られていたんだ。私はそれを、敵に気付かれないように察知した」

「……………!!」

「敵戦力は二人。君の倒した炎を扱う魔術師と日本刀を下げた女の魔術師だ」

敵の情報を伝える衛宮士郎の言葉に、上条は怒りでぐつと拳を握り締めた。

「ステイルⅡマグヌスだったか……。アイツまだインデックスを狙ってんのか!」

この先に追跡者が待ち構えている。その事実が、インデックスがまだ追われる身であるという事を上条に再認識させた。しかし上条がそこで感じたのが恐怖ではなく憤りだという辺り、彼の人格を表していると言えよう。

下手をすれば死の危険すらある状況に居るなど、一般人にとつてはとてもではないが耐えられないはずだ。それを理解した上でこの事態に適応しているのなら、いよいよもつて上条は常人ではないと衛宮士郎は思った。そんな事を考えている衛宮士郎を余所に、上条はだったらこれからどうするかについて口を開く。

「それで、どうすんだ? やっぱり、銭湯に行くのは止めたほうが……」

「いや、この機会に打って出る」

「打って出るって、どうやって?」

「いいか、敵はこちらが偵察に気付いているとは知らない。ついでに私が魔術師であるという事もな」

「そうなのか?」

衛宮士郎の言葉に上条が意外そうな顔をする。てつきりそこまでばれてしまっているのだと上条は思い込んでいたのだが、そこは衛宮士郎がその足取りを執拗に消していたおかげで、彼の情報は敵方にほとんど判明してはいないのだ。

「だからおそらく、敵の注意は当麻に集中するだろう」

「俺に!？」

「そうだ」

驚きで顔をひくつかせる上条に、当然だろう?と衛宮士郎が返した。彼からしてみても、いくら幻想殺しがあつたからとはいえ、魔術師一人をただの学生が打ち倒したという事実は驚愕に値する。

その衝撃は敵側においては尚更であろう。そんな危険因子である上条と、あくまでただの一般人と見られている衛宮士郎。どちらの排除を優先するかと聞かれれば、誰だつて前者を選ぶはずだ。

「出来る事ならば同時に撃破が望ましいが、それは難しいだろう。だからまず、不意打ちで一人撃破したい」

「不意打ちで一人?」

「ああ、チャンスはそうある訳ではないからな。敵が当麻に気を惹かれている間に、あくまで一人だ」

「じゃあ、一人はそれでいいとして、もう一人の方はどうすんだ?」

「……そちらはタイマンだろうな。一対一でけりを着ける事になるだろう」

「……………」

目を閉じて静かに答える衛宮士郎に、上条が心配そうな視線を向ける。

「大丈夫なのか？ その、敵の魔術師と一対一だなんて……」

「なに、心配はいらん」

だが衛宮士郎は上条の不安を打ち消すようにクククと笑うと、さも自信有り気にその口の端を上げた。

「こう見えても腕には多少の自信がある。そこらの魔術師程度には、遅れを取らんさ」

しばらくして三人は、小萌先生のアパートを離れて銭湯への道程を歩いていった。パジャマから修道服へと着替えたインデックスは、機嫌良さそうにおっふる♪おっふる♪と歌っている。その様子では体調はすっかり良くなった様で、彼女の足取りは軽く弾んでいた。対する上条はそんなインデックスの方を気に掛けながら、落ち着きが無さそうにきよろきよろと辺りを見渡している。

「当麻、周囲が気になるのは分かるが、あまり不自然になりすぎるなよ」

相手に気付かれるかもしれないからと続ける衛宮士郎に、そうだけどさーと上条は返した。

「でも、あんなこと言われたら気になるって。敵が襲ってくるかもしれないんだろ」

「あくまで可能性の話だ。……限りなく高いが」

「だあーっ、やっぱ気になるじゃねーか!!」

衛宮士郎の余計な最後のフレーズに、敵襲の予感をひしひしと感じながら上条は声を上げる。そんな上条の様子を衛宮士郎が横目で見てみると、その頭の中で声が響いた。

『どうですか？ 周りの様子は』

『まだ特に変化は無いな。嫌な視線も感じてはいない』

セイバーの声に、衛宮士郎は辺りを警戒しながら答える。アパートを出る直前からセイバーを起こしておいたのだが、今の所、衛宮士郎は彼女を戦わせる気は無かった。セイバーを起こしたのは、あくまで助言者としての役割が目的だ。夜とはいえ監視カメラの目など学園都市にはどこにでもある。あくまで極力魔術を使いたくない衛宮士郎にとって、セイバーの事がバレてしまうなど以ての外だ。結局こうして、セイバーは影から支援する事ぐらいしか出来ないのである。

そうこうしているうちに、上条達は片側三車線の大通りに出た。デパートに近いその通りは普段は大勢の人が歩いているのだが、夜遅いせいかな今は一人もいない。

車は一台も走っておらず、辺りは不気味なほどの静けさだ。路面から生えた街灯の光だけが、チカチカと道を照らす。人がいないと言うだけで、見慣れた光景はこんなにも雰囲気を変えるのかと上条は内心驚く。

……だが、本当に？

時間は午後八時ジャスト。まだまだ人が寝入る時間ではないはずだ。幾らなんでもこの時間帯にこの大通りに、人つ子一人もいないのは流石におかしい。

人がいないというだけで、こんなにも『日常』は顔を変えるものなのか？

「当麻……」

「ああ」

衛宮士郎も異変に気付いたのか、その目を鋭く細めている。

（人払いの結界か……）

似たような現象を、衛宮士郎は何度も見た事があった。いや、経験した事があると
いった方が正しい。

いつのまにか結界を張られて周りを囲まれているのは、衛宮士郎自身がかつて対魔術師で何度も追い込まれた状況だ。自然、二人、特にインデックスを庇うように体の位置を直す。

不意に、飄と一陣の風が上条の耳元を通り過ぎたような気がした。少し遅れて、ギギギと歪な音が辺りに響く。

「避けろっ！」

衛宮士郎が片手でインデックスを抱え込み、もう片方の手で上条を突き飛ばした。一

瞬の間隔を空けて、つい先ほどまで上条がいた場所に何かが落ちてくる。轟音と共に落ちてきたそれは、根元からちぎれた街灯。ちょうど上条と、インデックスを抱えた衛宮士郎の間を裂く様に雪崩れ込んで来た。

「とうまー!!」

インデックスが叫び、急いで上条の元へ駆け寄ろうとしたその時、

「駄目だ、下がれインデックス!!」

上条の声が終わるか終わらないかの瞬間、轟と激しい勢いの炎がまるで生き物の様に三人を分断する。衛宮士郎が寸での所で手を引いたため、インデックスは炎に焼かれる事なく衛宮士郎がいる方へと倒れこんだ。

「くそっ、分断されたかー」

思わず舌打ちをし、炎の壁を睨みつける衛宮士郎。道路を二分し三人を裂いた炎は反対側が見えなくなるほど高くそびえ、その行く手を阻む。

なんとか向こう側にいけないかと衛宮士郎が打開策を模索していると、突然、炎で出来た剣が二人に一直線に迫ってきた。

インデックスを抱え込んだまま、衛宮士郎は大きく跳躍してそれを避ける。

「あーあ、避けられたか」

赤い炎の光を背に、夜の闇の中から声が聞こえてきた。だが残念そうな台詞とは裏腹

に、その声色は大して落ち込んでいない。

衛宮士郎達から数メートル離れた所に、彼はいた。

炎の魔術師、ステイルⅡマグヌス。

闇夜に溶け込むような漆黒の修道服に身を包み、口先でタバコを揺らしながら近づいてくる赤毛の神父。成程確かに上条から聞いた通り、長身の癖にまだ上条よりも幼さを感じさせる顔で、ステイルはそこに立っていた。

片手に炎の剣、隣には炎の巨人。

(あれが『魔女狩りの王』か……)

ステイルの方を向く衛宮士郎の視線の先には、真つ赤に焼き爛れた炎の人型が蠢いている。インデックスの情報に依れば、ルーンによる補助がある限り幻想殺しでさえ消滅し尽くせないと言う。そんな怪物には、衛宮士郎でも正面からやり合うのは得策とは言えなかった。ステイルの様子を注意深く観察しながら、衛宮士郎は戦略を組み立てる。「君達には残念だけど、あんまり時間を掛けたくないんだ。だから、最初から切り札を切らせてもらったよ」

ステイルの方はニヤニヤとした笑みを浮かべながら、ゆつくりとこちらへ近づいて来た。足取りは遅く、その表情からは余裕も感じさせる。だが逆に言えば、そこに付け込む隙があるという事。油断している間に叩いてしまうのが一番だと、衛宮士郎は結論

付けた。

「気をつけて、あれは本体じゃない。どこかに刻んであるルーンを破壊しないと!」

そうしなければ攻撃は届かないと、インデックスが衛宮士郎に忠告する。衛宮士郎もそれは分かっているのか、インデックスを庇うように軽く構えを取った。

戦う意志を見せた二人の姿を目に入れたステイルは、余裕の笑みを更に深める。

「足掻いても無駄だよ。君らはアイツみたいなデタラメな存在じゃないだろう? 素人が粋がった所で、この魔女狩りの王」の前には無意味さ」

ステイルの言うアイツとは上条の事であろうか。敗北を思い出したのか一瞬だけステイルは顔を歪めるが、それでもその顔には笑みが張り付いている。そして傍らに炎の巨人を侍らせながら、懐からカードを取り出し口を開いた。

「それでも一応礼儀だからね、これだけは名乗らせて貰おうかな。——Fort

is931、これが僕の魔法名さ」

告げた魔法名は殺戮の始まり。

今ここで魔術師ステイルの宣戦布告と共に、夜中の戦いが始まったのであった。

夜戦で廻る

魔術師、ステイルⅡマグヌスはつまらなさそうに手に持った炎剣を振るっていた。彼がその手を動かすたびに、炎が踊り闇夜を照らす。

眼前には炎の巨人、魔女狩りイノケンテイウスの王に追われながら走っている男女が一組。神裂が切り倒した街灯で分断された三人の内、インデックスがいる方をステイルは追っていた。

あの馬鹿げた高校生の方は神裂が対処するらしく、ステイルはインデックスの捕縛の役目を任されているのだ。ステイルからしてみれば先の戦闘での反省を踏まえて弱点をカバーした術式で、是非ともあの高校生を消し炭に変えたかったのだが。

「それにしてもよく逃げるね、全く」

逃げる二人を追いかけながら、ステイルは呆れたような声を出した。インデックスを傷つけぬように、連れの男だけを黒焦げにするよう調整した魔女狩りイノケンテイウスの王で徹底的に追い回しているのだが、これが中々どうして捕まらない。上手いところ袋小路にでも逃げ込んでくれれば補足しやすいのだが、そう単純にはいかないようである。右に左に、角に差し掛かるたびにジグザグに逃げて行く二人。

追っ手を撒こうとしているのであろうが、しかしその行為は今のステイルの前には無

意味だ。この周囲には、わざわざこの時のために六〇時間も掛けて造ったステイルの境界が張ってあった。周囲ニキロにも渡って張られたその中にいる限り、彼らは決して逃げ切れる事は無い。追うステイルと追われる二人、しばらく追いかけていくが、相手が走って逃げていくのだが、こちらは魔女狩りの王で追っているのだ。わざわざ自分が直接追って走る必要も無いと考え、ステイル自身はある程度の距離をとって追跡していた。

今のインデックス達と魔女狩りの王の間の距離が五メートルくらいなら、ステイルと魔女狩りの王は二〇メートルほど離れているだろうか。それでも、この状況での追跡には十分な距離である。

だが、

(うざったいな……)

本当にうざったらしいと、ステイルはこの有利な状況にありながらフラストレーションを溜め込んでいた。その訳は先程からステイルの方へと飛んでくる、数々のゴミのせいだ。相手が一向に捕まらないのも勿論そうだが、せめてもの抵抗のつもりか、男の方がステイルにちよくちよく物を投げつけていたのである。

ほんぽんと飛んでくる得体の知れないゴミを、ステイルは炎剣で悉く燃やし尽くす。別に一々炎剣で払う必要は無いのだが、何故かその全てがステイルに吸い込まれるかの

ような正確さでこちらの方に飛んでくるのだから仕方がなかった。二〇メートル以上離れている自分に、よくもここまで正確に物を当てられるなどステイルも感心はしたが、特に魔術を使った気配もないので気にせずに進んで行く。

飛んでくるゴミはアルミ缶であったり、スチール缶であったり。およそ魔術的に意味があるでもなく、たとえ当たったとしても無害なものばかり。

そんなものだから、ステイルはしばらくして飛んできた妙に真つ黒い缶も、なんとも無しに炎剣で払ったのだった。

衛宮士郎はインデックスの手を引きながら狭い路地を走っていた。背後から迫り来る炎の巨人が、後ろ髪にじりじりと熱を感じさせる。

「こ、このままじゃいつか追いつかれるよっ!!」

インデックスがぜえぜえと息を荒げながら声を上げた。傷が完治したとはいえ病み上がりの体に全力疾走はキツイのか、ほとんど衛宮士郎に引つ張られるような形で彼女は走っているのだ。引っぱられている腕は肩の付け根からひりひりと痛みを訴えているが、だからと言って足を止める訳にもいかない。

今の二人と魔女狩りの王との差は、わずか五メートルほどしか離れていないのだ。こ

のままではいずれ限界が来て、炎の巨人に追いつかれてしまう事も必至であった。確かに一年間組織から逃げ続けていたインデックスの逃走術も並ではないが、それはあくまで彼女一人での話。どうにか対策を練ろうにも、二人分の逃走手段など彼女には思い浮かばない。それに衛宮士郎の方を頼りにしようにも、彼もまたインデックスと一緒に逃げているばかりであった。

途中途中で衛宮士郎が後方へ何かを投げつけているのはインデックスにも分かっていたが、今の所それが役に立った効果も無いのだ。ここに来て捕まってしまうかもしれないと、彼女の不安が募るのも無理は無かった。

逃走開始直後も彼女一人なら逃げ切れる自信があつたのだが、衛宮士郎がいたせいでの方法も使えない。インデックスからしてみれば、衛宮士郎には悪いが現時点では彼は足手纏いであつた。

そもそも前も言つた通り、インデックスは衛宮士郎という人物を良く知らない。精々自分が上条家に落ちてくるよりも前に居候となつている人物で、家事が非常にに上手な男であるという事くらいであつた。小萌先生のアパートでは忙しなく家事をしたり掃除をしたりしていたのを、インデックスは横になりながらぼんやりと見ていた事もあ

る。
だが、それだけだ。

魔術師だと言っても、衛宮士郎が魔術を使っている所を見た事も無い。普通の魔術が使えないとはどういう事かと本人に聞いてみた事もあったが、その度に上手くはぐらかされてしまっていた。

結局の所なんだかよく分からない人物というのが、この二、三日でのインデックスの感想であつた。

走りながらそんな事を考えていたインデックスだったが、衛宮士郎の自分を呼ぶ声にふと現実に戻る。何事かと思ひ衛宮士郎の方を見てみれば、その手には彼女も知つていとある小物が握られていた。

何で今この時にこんなものをとインデックスは目を丸くするが、衛宮士郎はそれを気にした風も無く、その小物をインデックスの手に押し付ける。

「え、これ、いつの間に、ていうかどうして!？」

「いいか、私が後ろを向いたら、すぐにそれを使って物陰に隠れている」

「え、え!？」

突然の指示にインデックスは慌てるが、どうやら文句を言っている暇も無いらしい。有無を言わさぬ衛宮士郎の口調に、インデックスは慌てながらもコクコクと頷く。その様子を衛宮士郎は確認すると、懐から何かを取り出しステイルに向かつて投げつけた。

そうして衛宮士郎が後ろを振り向いたのを機に、インデックスは路地の影に飛び込ん

だのだった。

衛宮士郎はインデックスを連れて夜中の路地裏を走っていた。

時折近くのゴミ箱から空き缶やらなんやらを掠め取っては、飽きもせずステイルにそれを投げつける。当然最初は警戒していたステイルも、投げつけられた投擲物には特に何か細工してある訳でもない事に気付いたのか、次第にその扱いがぞんざいになってきている事に衛宮士郎は気づいていた。

今では詳しく確認もせず、ただ炎剣で払っているだけだ。

(いい感じに離れてきたな……)

二人で逃げ出した直後は魔女狩りの王とステイルの間の距離が近かったが、今ではそれなりの距離を保っているのが分かる。

(この距離なら、いけるか?)

そろそろ頃合かと判断した衛宮士郎は、懐に手を入れて目当ての物を探った。そうして手の内に固い金属の感触を感じながら、今一度後ろを振り返ってステイルや魔女狩りの王との距離を測る。

炎の巨人との距離は五メートル、ステイルとの距離は二十五メートル。魔女狩りの王

より早くステイルの元へ切迫するには、衛宮士郎にとっては十分な距離だった。

衛宮士郎は今が好機だと考えると、インデックスにある投影品を押し付けて隠れるように指示する。そうして足を止めずに、振り向き際に手に持った黒い物体を投げつけた。缶状の黒いそれは、くるくると廻りながら弧を描いて空を飛ぶ。

それが魔女狩りの王を越えてステイルに迫り、そのまま彼が炎剣で払い落とそうとした瞬間、

「——ツツ!?!」

世界が、光に包まれた。

衛宮士郎の投げた物体から強烈な閃光が発生し、一瞬だけ真昼のように辺りを照らす。

スタングレネード。

強烈な音と光で相手に衝撃を与え、敵を無力化する武器の一つである。

それが至近距離で炸裂すれば、相当の衝撃を人体の五感に与えるのは必死であった。衛宮士郎が今使った物は、どうしてか光しか出ずにその分威力も低くなっているが、無防備なステイルに衝撃を与えるには充分である。

事前にインデックスと自分用に特殊なサングラスを投影して、強烈な光に備えていた衛宮士郎には効果が無かったが、投擲物を既に警戒していなかったステイルは不意打ち

をもちに受ける形となり、その視界が奪われた。

その一瞬の隙を突き、衛宮士郎は夜道を駆ける。

炎の巨人は敵を燃やし尽くさんと襲い掛かってくるが、衛宮士郎はその腕かみこをすりりと潜り避けた。

魔女狩りの王は確かに強力な魔術である。

恐ろしい程の数を重ねたルーンにより脅威の再生力を誇り、超高温の体は触れるもの全てを焼き尽くして跡も残さない。まともに剣でやり合おうとしたならば、衛宮士郎にとつて相当に不利な相手になるだろう。

遠距離射撃の出来ないこの状況で、衛宮士郎の主たる武器は剣に限られている。名だたる魔剣ならまだしも、ただの剣では炎の巨人を切る事など出来はしない。それに、たとえ魔女狩りの王に剣戟を当てたとしても、その高温で逆にこちらの手が焼かれてしまふのは想像に難くない。

第一、衛宮士郎はこの時点で、投影魔術という自分のカードの一つを敵に見せる気もなかったのだ。

いまだ未知数な敵と対峙するであろう次の戦いに備えて、魔力を温存しておく必要もあつたのも事実。

だから衛宮士郎は、魔女狩りの王をまともに相手にしない事に最初から決めていた。

先の戦いの事情を詳しく聞けば、上条は、学生寮の内部で炎の巨人からしばらくの間逃げ回っていたと言うではないか。魔女狩りの王がいくら強力な攻撃力を持つていようとも、所詮、素人である上条ですら、ぎりぎりにせよ対応出来てしまうほどの機動力しか持たないのなら話は別である。

それは言外に、ある程度の身体能力さえあれば魔女狩りの王の攻撃は充分に回避可能である事を意味しているのだ。魔術師である衛宮士郎が、反射神経や筋力そのものを強化して避けるに徹したならば、当然その回避は容易かつた。

炎の巨人とのすれ違いざま、頬に熱を感じながら衛宮士郎はその巨体をやり過ぎす。そのまま勢いをつけて、未だ目を押さえているステイルが何らかの反応を示す前に、衛宮士郎は二〇メートルの距離を一気に詰めた。

背後からは魔女狩りの王が追ってきているが、今の衛宮士郎の早さには到底追いつけない。

「ふっ」

そうしてステイルの眼前に迫り、その手に手刀を打ち込んで炎剣を叩き落とす。ステイルは思わず呻いて手を押さえるが、衛宮士郎はその手をそのまま後ろに回すと、体ごと地面に叩きつけた。ばたばたと暴れるステイルの身体を抑えて、投影したナイフをその首に突き付ける。

ステイルは冷たい金属の感触を肌で感じ取ったのか、ぎしりとその体の動きを止めた。その様子を確認した衛宮士郎は、ステイルの耳元に口を寄せてぼそりと囁く。

「魔女狩りの王を解け。でなければ……………」

分かるな？と衛宮士郎は刃で軽くステイルの首を搔いた。小さな血の珠が首筋に膨れ上がり、ステイルの唾を飲む音が聞こえる。

この状況下では、ステイルが圧倒的に不利なのは確かだ。頼みの魔女狩りの王との距離は離され、炎剣も手元に無い。新たに反撃しようにも、ステイルが口を開くよりも早く衛宮士郎はその手を動かすだろう。結局、ステイルⅡマグヌスには衛宮士郎の指示に従う他道がなかった。

悔しそうに顔を歪めたステイルがぶつぶつと何事か唱えると、遠くで魔女狩りの王が小さくなってゆく。

「よし……………」

それを確認した衛宮士郎は、今度はナイフでステイルの修道服を裂くと、黒衣の布切れを二切れほど手に残した。

「一体、何を!?!」

「黙れ」

衛宮士郎の予期せぬ行動に焦るステイルを再び強く押さえつけると、その口に無理矢

理に布を詰め込む。そうして残りの布で猿轡を噛ませると、再び修道服を裂いて目隠しをし、その足を縛り上げた。

小さく裂いた布切れは防音用の強化を施し、ステイルの耳に詰め込む。持っていたルーンのカードや、果ては煙草すら全て取り上げる徹底的な武装解除。

『……そこまで用心しなければならぬのですか?』

『ああ。こいつが何を使って何が出来るか、完全に把握しているわけではないからな』

セイバーの疑問の声に、衛宮士郎は言葉を返した。

衛宮士郎はこの世界の魔術師を良く知らない。だがインデックスに聞いた限りでは、元の世界の魔術より相当自由度が高いらしいと判断したのだ。

故に何をすることも出来ないくらいに相手の選択を封じる事が、今の衛宮士郎に出来る唯一の魔術対策であった。本当なら素っ裸にしてそこらへんに転がしておくのがベストだが、流石に倫理的にも見た目的にも色々アウトなので、修道服は着せたままにしておく。

一通り辺りの片をつけ、衛宮士郎がルーンのカードを破り捨てていると、インデックスが急いで駆け寄ってきた。スタングレネードの閃光を防ぐのに使ったであろうサングラスを衛宮士郎に返し、地面に転がっているステイルを見てはびくつと震える。

「お、終わったの?」

「こっちはな」

ステイルの様子を見ようとして、敵に近づこうとするインデックスを、衛宮士郎は手で制した。

「まだ気絶させていない。無闇に近づくな」

無力化はしたが気絶はさせていない。本来なら意識を落とした方が良いに決まっているのだが、ここではそうしない理由が衛宮士郎にはあった。

「なんで気絶させてないの？」

「結界だ」

「結界？」

「大方、人払いのものでも張ってあるのだろう。こいつが気絶したら、その結界まで解除されるかもしれないからな」

「でも、そんなの張りなおせばいいんじゃない？」

「解除されていない、という事実が重要なのだ。こいつか、もしくは向こうの女、どつちが人払いの結界を張ったのかは知らんが、一度結界を解除してしまうと、張りなおすまでのタイムラグや術式の違いで片割れに気付かれる可能性があるだろう？」

「あー……、そっか」

出来ればステイルが倒されたという情報を、相手に伝えたくは無いらしい。ステイルが倒さ

れた事が相方に伝わってしまったえば、相手は警戒度を上げるに違いないし、下手をしたら上条に危険が及ぶ可能性もあるのだ。

奇襲を仕掛けるにしても、こちらの方が衛宮士郎には好都合なのは当たり前である。話を聞いていたインデックスは、その戦略に気付いて、思わずぶるりと身体を震わせた。

衛宮士郎のそれは、単なる魔術師というよりも戦闘に特化した者の発想である。ステイルを魔術なしで打ち倒しては、衛宮士郎が考えているのは既に次の戦闘の事。奇襲前提で作戦を立てるその顔には微塵も躊躇いが無く、淡々と作業をしている衛宮士郎の何と冷静な事か。

結局インデックスは気付かなかったが、衛宮士郎がスタングレネードを強力な光だけが出る仕様に改造したのは、ステイルを脅す時にその聴覚までもを失わせたくなかつたからである。

魔術を極力使用しないのも、情報制限以上に、ステイルよりも女魔術師の方を警戒し、そのために魔力を温存しているからであった。

衛宮士郎からしてみれば、ある程度情報が判明している敵に対して対策を講じているのは当然の事だが、そこは流石に戦術のプロと素人を比べるのは酷であろう。インデックスは魔術のプロであつても戦闘のプロではないのだ。

ちなみにスタングレネードは、この二、三日の間に衛宮士郎が裏のルートを使って準備したものである。急に必要になった為一つしか用意できなかったが、これだけ早く入手できたのは、事前に人材派遣と連絡を取っていたからだ。

本来ならば学園都市脱出用のルートを探る為の情報源に過ぎなかったのだが、意外な所で役に立つ事となったのである。

しばらくして一頻りの準備を整えた衛宮士郎は、簀巻きにしたステイルを持ち上げた。

「私はこのまま当麻を助けに行く、きみはアパートに帰つてるといい」

「な!? 私だつてとうまを助けに行きたいんだけど!」

「きみが行つて何が出来ると言うんだ。大人しく月詠小萌のアパートに帰れ」

「私は一〇万三〇〇〇冊の魔道書の知識があるんだよ。相手がどんな魔術師かだつてすぐにわかるもん」

「敵の本来の標的が、のこのこと目の前に出て行つてどうする? それに、場合によっては当麻も援護しないといけなくなる。きみを庇っている暇も無いかもしれないのだぞ?」

「うう……、でも……」

私だつてとうまを助けたいんだもん、頭を下げて項垂れるインデックス。

衛宮士郎の言っている事は確かに正論だ。

いくら敵の情報が分かるとはいえ、わざわざインデックスがそこまで行く必要は無い。でも逆にインデックスからしてみれば、恩人である上条を少しでも助けたいと思うのは当然の事なのだ。

そこに理屈は無く、感情論でしかないのはインデックスとて分かっている。それでも、それでもインデックスは上条の元に行きたかった。

足手纏いにならなくとも、衛宮士郎に迷惑をかけようとも、上条を助けたいと、彼女は切に願うのだ。噛り付いてでもついていくと、インデックスが衛宮士郎を見上げた所で、

「あいたつー！」

衛宮士郎のでこピンが、軽くインデックスの額にヒットする。インデックスが涙目で顔を上げると、衛宮士郎の目には呆れたような色が浮かんでいた。

「いきなり、なにすんの!!」

「当麻の事を考えるならな……」

衛宮士郎は話しながらスタイルを肩に上げる。気絶こそしてはいないが、身動きも取れないよう、スタイルの体は嚴重に縛ってあった。

そうして今度は、衛宮士郎がインデックスの目をまっすぐに見つめる。

「それこそ、きみは帰るべきだ。インデックス、きみは当麻の今までの行いを全部無に返したいのか？」

「う、うう……」

インデックスは言葉に詰まった。上条の事を引き合いに出されては、流石の彼女も引き下がるしかない。

こういう時に何も出来ない自分の無力さに、悔しそうに目に涙を浮かべ、顔をしかめるインデックス。そんなインデックスに衛宮士郎は苦笑いし、安心させるような言葉を掛けた。

「心配するな、当麻は私がちゃんと連れて帰る」

「……………約束、だからね」

インデックスはぐぐと拳に力を込め、衛宮士郎を睨みつける。自分が何も出来ないならば、衛宮士郎に託すしかない。

悔しいが、今のインデックスにはそうするしかなかった。

そうして彼女は、上条の無事を祈りながら、アパートの方へ走り出すのであった。

走っている衛宮士郎がその場を視界に入れた時、場面はおよそ彼の考えうる限りで最悪の一手手前であったと言えよう。血だらけで地面に崩れ落ちている上条に、返り血だらうか、顔面が赤く彩られた女魔術師。

(一足遅かったか……!!)

八〇〇メートル程手前で、衛宮士郎は身を隠しながら相手の様子を伺う。だがどうやら上条はまだ生きていますようで、倒れた背中が一定のリズムで上下しているのが確認出来ました。

兎に角その事に安堵した衛宮士郎ではあるが、状況的には予断を許さないのは間違いない。見れば上条は相当出血しているようで、路面が赤黒く染まっているのが見えた。

その顔は青ざめ、意識は既に落ちていようだ。突っ立っている女魔術師の様子も詳しく観察するが、何故だか放心状態にあるようで、横に転がっている日本刀を手に取るうともしていない。

『様子が、妙ですね』

「……………」

チャンス。
好機。

セイバーの言う通り、あの女魔術師の様子がおかしいのは確かだろう。状況を完全に

把握できてはいないが、これは絶好のチャンスだと衛宮士郎は直感する。衛宮士郎は急いで辺りを見回し、道路が限なく見渡せて、ある程度背の低いビルに当たりをつけた。

そうして強化した足でビルの側面を蹴りながら駆け上がり、屋上に一時陣取る。この程度の距離ならば、衛宮士郎には確実に敵に矢を中てる自信があった。

ステイルを横に転がして監視カメラの有無を確認した後、衛宮士郎は黒塗りの弓矢を投影する。黒塗りの矢は闇に紛れ、その視認すら困難にさせるのだ。夜の奇襲には、打って付けの物であった。

今、衛宮士郎が優先すべきなのはとにかく上条の命。敵よりも早く上条の元に辿り着くのは、現時点ではどう足掻いても不可能だ。ならば衛宮士郎が取れる手段はただ一つ、敵の無力化のみである。

この場で狙うは機動力の要、足。素早く弓を引き絞り、鷹の目は敵を見据える。いつもの通り、ただただ無心で腕を上げた。

中るイメージは、既に見えている。

後はこの手を離すのみ。

張られた弦がキリリと啼き、鋭い鍔が月明かりで光る。

次の一瞬、衛宮士郎の手には何も握られてはいなかった。闇を裂く黒き一筋が、真っ直ぐに夜を射抜く。

音よりも早いその一矢は、矢羽が空を引き裂く音を置き去りにして、女魔術師の足元に吸いこまれていった。

女魔術師、神裂火織は倒れこんだ上条当麻を呆然と見つめていた。

神裂の頭の中では、上条の言葉が何度も繰り返されている。

『守りたいモノがあるから、力を手に入れんだろうが！』

そうだ、神裂火織には守りたいものがあつたはずだ。

『テメエは、何のために力をつけた？』

救われぬ者に救いの手を、それが彼女の魔法名。

『テメエは、その手で誰を守りたかつた!?!』

ほんの少しでも自分以外の誰かを幸せにするために、幸福でない万人のために、力を振るうと誓つたのではなかつたのか。

だのに目の前で倒れているのは、血に塗れた高校生。

彼もまた、インデックスの幸せを願ひ、彼女の為を思い動いていたはずなのだ。彼と自分で何が違うのか。

あるとすれば、それは諦観。彼女達は既にあきらめてしまっているのだ。

インデックスを、本当の意味で救う事を。そもそも神裂やステイルはインデックスの敵ではない。

インデックスは彼女達の元同僚にして——大切な、親友なのだ。

完全記憶能力を持つインデックスは、その脳の八五%以上を使い、一〇万三〇〇〇冊の魔道書を一字一句漏らさず記憶している。だがそれほどの能力を持っているのに、どうして彼女は、一年より前の出来事を記憶していないのか。

そこに生じる、大きな矛盾。

その答えこそが、本来仲間であるはずのインデックスを神裂達が追っている事に繋がっている。

インデックスが脳の八五%を使って魔道書を記憶しているならば、残りの十五%は一体何に使われているのか。驚くべき事に神裂達の見立てに寄れば、インデックスはそれたった十五%の力で日常生活の全てを補っているはずなのだ。

しかし、本当にたった十五%の力で日常生活を満足に送れるのか？

答えはNOだ。それだけの力しか使えない人間が、日常生活を常人と同じように健全に送れるはずが無い。

並の人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまうのだ。完全記憶能力によって『忘れる』事の出来ないインデックスは、どうでも良いゴミのような

記憶さえ『忘れる』ことで脳の中を整理する事すら出来ない。

それは脳の十五%の力しか使えない彼女にとつては、致命的な問題であった。自分で『忘れる』事の出来ない彼女が生きていくには、誰かの力を借りて『忘れる』以外道がないのだ。

記憶の消去は一年周期で行われている。インデックスが一年より以前の記憶が無いのは、魔術によって忘れさせられたに他ならない。

今回もそのために、神裂達はインデックスを追っていたのだ。一年の周期が過ぎる前に、彼女の脳が壊れてしまう前に、彼女を死から救うために。

それでも、それでも彼女達が救いを諦めてしまっているという事もまた、一つの真実であった。

一年おきに記憶を消すのではなく、もっと根本的な解決。そもそもの記憶を失わなくて済む様なそんな結末を、彼女達は当の昔に諦めていたのだ。

彼女が今動揺しているのは、その事を上条当麻に再認識させられたから。誰よりも足掻いたがゆえに、上条の言葉は彼女の心に突き刺さっていた。

だが彼女には、呆然としている暇さえ与えられない。
なぜならば、ここは既に戦場。

今なおこの瞬間にも、神裂火織は凶弾に狙われているのだから。

剣閃の小夜曲

『聖人』。

世界に二十人といないとされる、生れた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間。彼らは『偶像の理論』により、聖人の証である『聖痕』ステイグマを開放する事で、一時的に神の力の一端をその身に宿せる。

神裂火織はその『聖人』の一人だ。莫大な量のテレズマを身に宿す事で、五感を含む身体機能は大幅に強化されており、使える魔術の規模も圧倒的である。加えて先天的な加護のような物も存在し、言うなれば常人よりも幸運なのだ。

だから神裂がその一撃を避ける事が出来たのは、半ば必然でもあったと言える。

上条との戦いを終え、呆然としていた神裂であったが、突如背筋に悪寒が走った。第六感とも言うべきか、何者かに狙われている感覚。このままここには危ないと、直感が警報を告げている――。

「……………ッ!!」

危険を知らせる直感に従い、神裂はすぐさまその場を飛びのいた。直後、空を裂くような音と共に、一瞬程の間も置かず地面が抉れる。

飛びのいた神裂が横目でその場を確認すれば、そこには深く鋭い穴が空いていた。そしてその中心には、

「弓、矢？」

そう、どこから飛んできたのか、漆黒の矢が深々と突き刺さっている。

神裂はそれを見て冷や汗を流した。あれが自分の足に突き刺さっていたら、貫通どころでは済まされない。間違いなく、足ごと吹き飛んでいたであろう。

その威力に怖気を覚えながら、飛びのいた先にある日本刀を取り、第二射に対処すべく即座に体制を整えた。

が、何故か二射目は来ない。警戒を解かずに矢の飛来した方向を注視すれば、八〇〇メートルほど離れたビルに男が一人。

（あの男は、あの時、上条当麻と一緒にいた——）

神裂の視力は8・0を誇り、五〇〇m先でも望遠鏡なしで物事を確認出来る。だから神裂には、その男があのアパートにいた男だという事が分かった。

ステイルと一緒に情報収集をした限りでは、あの男には特に注意すべき点は無かつたはずだ。神裂が妙な違和感は覚えたものの、ただの一般人として判断していた。それが、その男が無事で立っているという事はつまり、あの時の神裂の嫌な予感は的中してしまつたらしい。

そして、ステイルに任せたはずのあの男が五体満足で動き回っているという事は、当のステイルは撃破されたという事だ。アスファルトを砕く矢の一撃にしても、一般人が出せる威力ではない。明らかに、魔術側こちらがわの人間。

神裂はその事実にも、奥歯が割れてもおかしくないほどの強い力で、その歯を食い縛つた。先程の問答で、目の前で倒れている高校生がインデックスの事を真摯に考えて行動していたのは明白である。

しかし魔術師が一緒となると、話は別だ。この高校生はまだしも、魔術師がインデックスと一緒にいる理由など、一つしか思いつかない。

すなわち、一〇万三〇〇〇冊を誇る禁書目録インデックスを利用する為。

偵察していた段階では、高校生もインデックスもあの男と普通に仲良く接していた。男の方にも特に不自然な点が無く、それが神裂の違和感を自身で否定する一つのフアクターであつたのだ。

けれどももしもそれが、インデックスを守りたいと願う高校生を利用してまで、禁書目録インデックスを己の手中に収めんとするための演技だとしたら？

そこまで考えて、神裂は反吐が出るような思いに駆られる。あの男が、他人の思いさえ自分の為に利用しようとする唾棄すべき類の人間であるならば、それは最悪だ。

しかしその可能性が高いのもまた事実。世界最高の魔道図書館たる禁書目録インデックスは、そう

いう人間にこそ非常に多く狙われるのだから。

だがそうなると、神裂には気掛かりな点が一つ。

(インデックスは一体どこに？ あの男と一緒にいたはずでは……)

そう、神裂がああ三人を分断した時、確かインデックスはあの男と一緒に方向に逃げて行ったはずだ。それが今、彼女がああ男の傍にいないというのが、神裂にまたしても嫌な予感を実感させる。ああ高校生すら利用しているかもしれない男の事だ、既にインデックスは拘束されている可能性すらあった。

そして撃破されたはずのステイルが見当たらないというのも、………つまりそういう事なのであろう。敵に倒された魔術師の如何など、決まっている。

(外道が……っ!!)

激情を視線に込めて、思わず神裂はビルの上に立つ男を睨みつけた。すると男は表情こそ確認出来ないが、片手に持った弓でゆっくりと数回、近くのビルの屋上を指し示した。

「………誘っているのか？」

傍から見ても、明らかに神裂を誘っているのが分かる挙動である。そうして男は、神裂の挙動を待たずに、そのビルの屋上へと飛び移って行く。その挑発的な態度が、さらに神裂の癪に障った。

「……いいでしょう。その誘い、乗らせて貰いますー!」

ステイルやインデックスの動向、あの男の真意、問い詰めたい事は幾らでもある。それにもし、神裂がここであの男を取り逃がしてしまったとしたら、その時は非常にまずい展開になる。

インデックス自身が持つ時間制限もそうだが、もう二度と敵を補足出来なくなってしまう可能性も高かった。あの男がイギリス清教から完全に情報を隠し通せるほど、隠匿性に優れた魔術師ならば尚更である。

ここは学園都市、神裂達にとつては決してベストな環境ではない。魔術関連のごたごたに、科学側が足を突っ込んでくる事は避けなければ無いのだ。失敗は許されない、即ち敗北は許されない。

だが神裂として『聖人』にして、ロンドンで十の指に入るほどの実力者だ。極東の辺境にいる名も無き魔術師などに負けるはずも無いし、負ける気も無い。だから彼女は絶対の自信と自負を持って、夜の街を駆けるのであった。

衛宮士郎はビルの屋上でため息をついていた。放った矢に、手にしていた弓も、既にその場から消し去っている。

縛ったままのステイルは、狙撃をしたビルの屋上に置いてきたままだ。一応は簡単には見つからないように、カモフラージュをしてはあるが。

その衛宮士郎は、相手の予想以上の実力に戦術の立て直しを図られていたのであった。

「まさかアレを避けるとはな……」

先程、衛宮士郎が放った矢は、曲がりなりにも音速を超えていたはずだ。初速でもライフル弾並みのスピードを出していたはずなのに、あの相手は傷一つ無く回避して見せた。女魔術師の身体能力が、相当に高いことが伺われる一端である。

『私が相手をしましょうか？』

その方がやり易いのでは？ とセイバーが尋ねてくるが、衛宮士郎は首を横に振った。

『まだそこまでカードを切る必要はない。それに目標は一応達成したしな』

『……そうですか』

珍しい事にセイバーは大人しく引き下がったが、確かに彼女もそこまで手札を見せるのはやりすぎかもしれないとは感じていた。相手との相性次第では、衛宮士郎が相手をした方がいい場合もあるのだ。

そしてその衛宮士郎の言う目標とはつまり、上条と神裂火織を引き離す事。あの場で

女魔術師がこちらの誘いに乗っかり、狙いを衛宮士郎に定めたのはまさに僥倖であった。下手をしたら上条を人質に取られるか、最悪そのまま殺されてしまう可能性まであったのだから。

だが状況的には既に、怪我を負った上条を直ぐにでも病院へ連れて行かなければならない分、時間制限があるこちらが不利だ。いくら命に別状はなさそうに見えても、長期戦には極力持ち込みたくなかった。

『しかし、本当に凄い身体能力だな……』

『確かに、かなりの腕であると思受けられます』

ビルの屋上を飛び跳ねながら、こちらへ迫ってくる女魔術師に感心する二人。長い黒髪をたなびかせながら、神裂火織はぐんぐんこちらへ近づいてくる。

『これは流石に使わざるを得んか』

『……干将・莫耶ですか』

『出来るだけ宝具……、いや、投影は使いたくなかったのだが、止むを得ないか』

衛宮士郎が執拗に宝具を投影しようとしなのは、彼の特異性を知られたくないが為である。特に魔術師が相手の場合、その宝具に秘められた魔力量などから怪しまれる可能性が非常に高いからだ。

だが、今回はそうも言ってはいられないらしいと、衛宮士郎は覚悟した。相当な腕を

持つであろう劍士を相手に、不慣れた武器で戦うのは悪手である。

懐に手を入れ、まるで外套から取り出したかのようにカモフラージュしながら、干将・莫耶を投影する。手に感じる、ずしりと重い金属の感覚が、衛宮士郎に戦場を思い起こさせた。

幾度と無く供に窮地を乗り越えた、衛宮士郎の相棒とも言える宝具。この一組の陰陽劍を衛宮士郎は久方ぶりに手に取ったが、たかが一週間程度では、骨の髄まで染み付いた戦場の感覚は消えないらしい。問題なく劍を振り回せる事に、安堵と嫌悪を覚える。

『……消えないものだな、やはり』

『シロウ……』

平和を求めて劍を振るう、矛盾とも言える行為だが衛宮士郎にはこれしかない。戦場で人の命を救うには、自らも武器を持って立ち向かうしか彼には出来なかった。セイバーも似たような立場にはあるが、衛宮士郎の戦場は余りにも広すぎたのだ。

振るえど振るえど一向に終結する気配のない戦争に身を任せながら、それでもより多くを救う為に孤軍奮闘した記憶が脳裏を走る。霧が掛かった記憶も、何故か凄惨な戦場だけは、鮮明な映像で衛宮士郎を攻め立てた。

殺める事でしか救えない現実、理想を抱えた男は一体何が出来たのか。自分にもつと力があれば、より人を救えたのではないか。記憶を掘り返そうとすればするほど、思

考はどろどろと深みへ嵌っていく。

『シロウ、そろそろ』

『ああ……、すまない』

セイバーの呼び掛けに、衛宮士郎は意識を現実に戻した。彼にはらしくなく、少し呆けていたようだ。見れば、女魔術師はもうすぐそこまで来ていた。

そこそこ広いビルの屋上。軽快な動作で、神裂火織はその上に降り立った。憎悪を孕んだかのような鋭い目つきでこちらを睨んでいるのが分かる。だが刺さるほどの視線を受けても、衛宮士郎は揺るがない。

その程度の悪意の視線、幾度と無く受けてきたし、その度に背負ってきた。助けたはずの人々から罵声と供に追い立てられるのに比べたら、敵から送られる憎悪など何の事は無い。

とりあえず、様子見も兼ねて衛宮士郎は声を掛けた。

「そう睨んでくれるな、気恥ずかしさで逃げ出したくなる」

「誘ったあなたがいますか、それを」

「さて、確かに誘いをかけたがな、そこまで睨まれては、その気も失せると言うものだ」

「……別に構いませんよ。あなたがどうであれ、私がやる事は決まっていますから」

中々に刺々しい返事。理由は分からないが、既に悪感情を持たれている事ぐらいは容

易に想像出来た。軽いやり取りの後、神裂は刀の柄に手を添える。

「二応名乗っておきますが、私の名前は神裂火織。そして『聖人』です」

あなたも魔術師なら、その意味が分かりますよね、と続ける神裂。衛宮士郎にとっては聞き慣れない単語であつたが、神裂のその自信振りから、何か特殊な人間である事は判断がついた。

対して神裂は、『聖人』と言う情報に何の反応も示さない衛宮士郎をいぶかしみながらも、その言葉を続ける。

「魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが、どうでしょうか」

「それこそ、今更君がそれを聞くかね？」

「最後の確認です。こちらとしても、後味が悪い結末にはしたくないものですから」

衛宮士郎はそれに答えず、ふっと軽く鼻で笑うと、干将・莫耶を下げて構えた。最後通告にも応じず、交渉決裂と考えた神裂もそれに応じ、無言で刀を構える。

感情に任せて剣を振るうほど、神裂は素人ではない。先程まで感じていた憤りも静め、既にその心境は止水に至っている。

屋上の気温が一気に下がったのかと錯覚する程、張り詰められた空気。両者が睨み合い、息をつくことも許さぬ緊張感が辺りに走る。

瞬間、神裂の右手がブレて消えた。轟！ という風の唸りと共に、何か真空波のよう

な物が衛宮士郎に向かって襲い掛かる。

「……………っ！」

一瞬の煌きが夜空に映え、あたかも斬撃が飛んだかのような錯覚を覚えた。

コンクリートの床は裂け、屋上に設置されていたエアダクトの類が宙を舞う。神裂火織を中心として、円状にそれは広がっていった。目には見えない斬撃が、周囲のものを手当たり次第切り裂いていく。まるで嵐の如き蹂躪に、たちまち屋上は廃墟と化した。

何かに切り裂かれた勢いで、拳大のコンクリの塊が衛宮士郎に向かって次々と飛んでくるが、それら全てを打ち落とす。切り裂くのではなく、柄で、峰で、叩き落すようにして飛来物を粉々にした。振るう二刀は衛宮士郎に襲い掛かる障害物の、その悉くを切り伏せる。

大風でコンクリの粉塵が舞い起こり、落とすきれない小さな礫が衛宮士郎にびしびしと当たった。

だが衛宮士郎は動かない。顔すら動かさず、眼だけで宙を走り、迫り来る何かを追う。そして攻撃を避けようとする代わりに、ちやうど斬撃が衛宮士郎に襲い掛かってきたタイミングで、何かを斬る様に数回ほど剣を振った。

衛宮士郎が剣を振ると、キン！ と、何か張り詰めた糸が切れたかの如く、妙に甲高い金属音が辺りに響き渡る。そうして一陣の風が通り過ぎれば、そこには立ち位置の

変わらぬ二人に、一瞬の間にぼろぼろになってしまった屋上。

しかし何故か、衛宮士郎の付近の床にだけは傷がない。その様子と、手に残った感覚から、神裂は苦い顔をして衛宮士郎を睨んだ。

「……『七閃』を、斬ったのですか」

「はて、何のことかな？」

神裂の疑問に、とぼけて答える衛宮士郎。だが神裂には分かっていた。この男があの出来事の間で神裂の技を見切り、切り伏せたのだという事を。

先程の神裂の攻撃、名を『七閃』と言う。神速の居合いにより、一瞬の内に七度の斬撃を繰り出す技。……ではなく、それと見せかけた動きの裏で七本の鋼糸を操り、敵を裂く事で相手の裏を突く技である。

左文字の銘を受け継ぐ名匠が作った国宝級の鋼糸を軽々と斬り裂いた事もそうだが、神裂は何より、初見で『七閃』を見切る衛宮士郎のその眼力を警戒した。銃弾の速度を遥かに越えたスピード、遥かに見えにくい細さの『七閃』を見切るなど、並みの魔術師では有得ない。

目の前の男も又、自分と同じ戦闘特化の魔術師であると確信する。だがこれ以上『七閃』を使っても仕方がないと判断するも、この男が神裂の真説たる『唯閃』に耐え得るほどの者かは分からない。

『唯閃』は間違ひなく神裂火織をしての本気の一撃だ。『聖人』である神裂の能力が十分に發揮されるよう組まれた、最高の術式を持つて放つ一撃。並みの人間では耐えられない、安易に放てば必ず死ぬ。

だがそれは駄目だ。神裂にとつて、敵を殺す事はタブーであつた。とある事情により、彼女は敵を殺す事を必要以上に忌避する癖がある。

殺めずに倒す、それが彼女の戦闘方法。ならばと、神裂は刀を抜き放つた。『七閃』も『唯閃』使えないのならば、その高い身体能力で圧倒するまで。そう結論付けた神裂は、七天七刀を正眼に構え衛宮士郎へと斬りかかつて行つた。

対する衛宮士郎も、神裂の技量には舌を巻いていた。先程の『七閃』という技も、衛宮士郎の目ならば追えるものであつたために何とか対処できたものの、敵の劍撃はそれ以上に重い。二刀故、手数はこちらが勝つてゐるが、一撃の威力は神裂の方が遥かに強い。その『七閃』にも劣らぬ嵐のような連撃を、衛宮士郎は干将・莫耶を持つて受け流し、時に受け止める。二人の劍閃が奏でる金属音は、常に途切れることなく辺りに響き渡つた。もしも周りに誰か人がいたならば、誰もがこう思うであろう。とても、人の業わざには見えぬと。

両者が足を踏み込めば、地面にはその度にひびが入り、小さな破片が弾けた。元々、神裂の『七閃』で脆くなつた屋上の床である。足が床を蹴る度に屋上は軽く陥没し、既に穴だらけの状況であつた。互いに切り結び、文字通り火花を散らす衛宮士郎と神裂火織。その一振りが風を起こし、二振りで空を裂く。

成程、互角のように見える状況ではある。が、よく見れば衛宮士郎のほうが押されていた。打ち合う毎に散る火花が、暗闇の中で衛宮士郎の表情を照らす。衛宮士郎は平然とした顔をしているが、その身体は徐々に神裂の攻勢に押されていた。神裂の方はその華奢な体に見合わぬ豪腕さで、二メートルを超える日本刀を軽々と振るっている。

(純粹な劍の腕ならば、完全に相手が上手か……)

神裂と数合打ち合つてみて、衛宮士郎が抱いた感想がそれであつた。間違はなく、劍の才能では上回られている。おそらく、純粹な身体能力にしても。

それを認識しながらも、それでも衛宮士郎は劍を振るつた。衛宮士郎もここで引ける訳にもいかないし、元より引く気も無い。互いに負けられぬ理由があり、折れぬ信念があつた。こと戦闘における精神面メンタルにおいては、両者に差はあまり無い。

そして殆どにおいて劣る衛宮士郎が、唯一神裂に勝っている物があるとすれば、それは経験であつた。

幾多の戦場に身を投じた膨大な戦闘経験と戦術理論に裏打ちされたその實力は、決し

て偽物ではない。心眼（真）すら持ち得た衛宮士郎の剣は、こと防御においては相当な固さを誇る。

神裂の剣がまさに才能の為せる、鋭く重い剛の剣であるとするならば、衛宮士郎のそれは二刀を以ってあらゆる攻撃を受け流すが故に、鋼の如き堅牢さを為す柔の剣。

剣の才能を感じこそさせなくとも、莫大な修練によつて獲得したそれには、打ち合っている神裂にも素直に男に対する敬意を感じた。派手さは無くとも堅実なその剣は、神裂も嫌いではなかった。

だがそれとこれとは話が別。これで駄目ならさらに速度を上げるまでと、神裂は更に剣撃を激しくさせる。

そうしてついに、両者の剣閃は音の速さを超えた。普通ならば視認する事すら間々ならない一撃を、片や打ち込み、片や受け流しながら屋上で踊る。もはや完全に人の範疇を越えている両者の戦いは、それでも次第に激しさを増していった。

二人の戦いを俯瞰しながら、セイバーは妙な不安に襲われていた。別に衛宮士郎が負けそうだとか、そういった類の不安ではない。

彼女の心境に影を落としているのは、衛宮士郎のその戦い方。合いも変わらず自身の

犠牲を気にしていない所は、あの頃から何も変わっていないのですねと、彼女は一人思
い返す。

先程も上条を救うためだけに、衛宮士郎は格上の相手に対して挑発をして見せた。今
だって、セイバーからしてみれば衛宮士郎はかなり危ない戦い方をしているのだ。

隙を敵にわざと晒し、相手の行動を逆に制限する戦法。年月が経ち外見が変わって
も、根本は殆ど変わっていない事を実感させられる。それどころか力量が上がった分、
抱えている歪みはさらに助長されているような気がしてならないのだ。

(このままではいずれ……)

彼のように■■■■に至ってしまうのではないか。そんなセイバーの不安を余所に、戦い
は佳境に入ろうとしていた。

神裂からしてみれば、まさかここまで相手に食い下がられるとは考えてもいなかった。
『聖人』である自分とまともに打ち合えている衛宮士郎の技量には、本当に感心す
る。

それでも神裂は、自分が負けるとは微塵も思っていないなかった。そう確信する理由
は、先程から衛宮士郎との剣閃の合間に浮き出る致命的な隙。神裂の攻撃を受け切れて

いないのだろう、大きな隙が時折、衛宮士郎に出来ているのだ。

しかし、

(しかし、これでは……!!)

神裂は内心呻いていた。このままでは、その隙を突く事が出来ない。神裂が隙を突く事を躊躇う理由。それはその隙が大きすぎるが故に。

あまりにも致命的過ぎて、そこを突いたら衛宮士郎が致命傷を負ってしまう程の物であるせいで、あえて神裂にはそこを斬る事は出来なかつた。敵を殺すために戦っているのではない神裂にとって、その隙は余りに無防備すぎたのだ。

しかもその隙だけは大きくせに、衛宮士郎自身の技量が決して低いものでないから性質が悪い。生半可な形で斬ろうものなら、即座に反撃されるだろう。けれども隙が顕著に現れているだけに、両者の差を十分に表現していると神裂は感じていた。隙を突けないのなら、強引に押し切るまで。力押しで攻めれば、いずれ敵は墜ちる。そう神裂は確信していた。

だが、そう考えながらも打ち合う事数分、意外な形で決着は着く事となった。

「……………ッ」

「くっ!!」

一撃だけ、急に重い衝撃が神裂の腕に響く。余程力を込めたのか、今までの攻撃を上

回る威力に思わず神裂は距離を取った。そのまますぐに詰め寄りうとした神裂であったが、突如その動きが止まる。

「……何のつもりです?」

神裂の視線の先には、どうしてか剣を下げている衛宮士郎。腕を下ろし、厳しい目付きで神裂を見つめている。神裂とは一定の距離を保ちながらも、何故かその剣先からは敵意が薄れていた。

「何のつもりとはこちらの台詞だ、何故、私の隙を突かないのだ?」

「は?」

一体この男は何を言っているのか? 予想外の男の台詞に、神裂はぼかんと口を空ける。そんな神裂の様子を観察しながら、衛宮士郎は言葉を続けた。

「何故、手を抜いているのかと聞いているのだ。君ほどの技量があれば、私を殺す隙など幾らでもあつたと思うが」

「な、何を言っているのです!?!」

「事実だろう。私を上回る実力を持つていながら、君は私を殺そうとはしていない。真剣勝負のこの場で、ああまであからさまに手を抜かれては、私とて気に入らん」

それとも私を弄んで、からかっているのかねと続ける衛宮士郎。神裂はぐうと言葉を飲み込むが、別に彼女は手を抜いていた訳ではない。神裂は衛宮士郎に、力押しで全力

を以つて衛宮士郎に勝とうとしただけなのだ。ただその戦法が、衛宮士郎を誤解させたのは言うまでもない。あえて隙を突かずに戦うなど、普通なら舐められていると考へてもおかしくは無いであろう。

そして衛宮士郎がその事に気付いたのは、彼の戦闘方法に原因があつた。

元より彼には剣の才がない。弛まぬ鍛錬の果てに、今ではかつてのアーチャーに匹敵せん程の技量を手に入れた衛宮士郎ではある。が、勿論そこに辿り着くまでには相当な修練を必要としていた。格上の相手とも戦う事が多く、そういつた敵には積極的に隙を突く事が厳しい。

それ故に衛宮士郎は、剣閃の合間にわざと致命的な隙を作る事で、そこに敵の攻撃を誘い込む事にしていた。そうしてあらかじめ自分の思い通りに敵を誘導する事で、逆に相手の動きを把握し、隙を作るといふ事を戦術としたのだ。

一つ間違えればそのまま死に直結しかねない、危険な賭け。歪み壊れた衛宮士郎だからこそ、積極的に取れる戦い方でもある。そしてそんな戦法を取っている衛宮士郎だからこそ理解する事が出来た。神裂が、わざと隙を突いていないという事に。

一回二回なら見逃しという事も有り得る。だがそれが、戦闘の間にずっと続けばどうだ？　そもそもあれ程の技量を持ちながらも隙を見逃すという事態が、衛宮士郎には違和感を覚えさせていた。

そうして二刀を振る隙を誘っている内に、その違和感は確信に変わる。この女は、わざと殺さないように剣を振るっている、と。それに気付いたからこそ、衛宮士郎は剣を止めたのだ。

「そもそも君には初めからおかしなところがあつたな。当麻の前で刀を手放し、呆然としていたのも気になっていた」

「……………」

続く追求に神裂は口を閉ざす。その様子を見ていた衛宮士郎は、いよいよ神裂の事を怪しんだ。

もしも今までの疑念全てが、彼女の性格や信念に関わってくるとするならば、そんな人間が幼い少女を狙うような真似をするのだろうか？ それとも組織に命に従い、澁々この任に就いているだけなのか。

どちらにせよ彼女がこの一連の出来事に、私情を挟んでいることは間違いない。そう判断した衛宮士郎は、彼女に何か事情があるのかと、直接問い質す事にした。剣を下げ敵意も下げながら神裂に尋ねる。

「二応聞いておくが、何故インデックスを狙うのだ？」

よほど深刻な理由でもあるのかと言う衛宮士郎に、神裂は今度こそ耐えかね、ぐつと歯を食い縛り衛宮士郎を睨んだ。

「あなたこそ、何故インデックスを狙うのです!」

「何?」

「とぼけても無駄ですよ! あの高校生を拐かし、インデックス禁書目録を利用してしようとしている事くらい、こちらにも予想はついています!!」

まるで自分達はインデックスを守っているのだと言わんばかりの言い様に、衛宮士郎は眉を顰める。何か、互いに重大な勘違いをしているような気がするが、とりあえず今は相手の事情を量ることにした。

「……仮にそうだとしても、君らとてインデックス禁書目録を狙っているのだから、人の事は言えまい」

わざと誤解させるような言い分を口にする事で、相手の反応を窺う衛宮士郎。そんな衛宮士郎の言葉に、神裂はその顔を歪ませた。そうしてぐつと拳を握りこむと、搾り出すような声を出す。

「……確かに、私達はインデックスを追っています。でも、それはっ! あの娘を助ける為です!! そうしないと、あの娘は死んでしまうからっ!!」

「……何だと?」

後半は殆ど叫ぶような形で、神裂は口を開いていた。その意外な告白に、衛宮士郎は目を見開く。

「私は彼女と同じ、必要悪ネセサリウスの教会に所属する者です。……………彼女とは、親友だった事もあるんですよ」

それなのにこうして今、彼女を追い回さなければいけないのが悔しくて仕方がないという、今にも血を吐きそうな様子で声を零す神裂。衛宮士郎は想定外の事態に驚いたが、何とか動揺を顔に出さずには済んだ。

衛宮士郎とて敵の事について、何の予想もしていなかった訳ではない。ただ、神裂の様子から、インデックスへの強襲には気が乗っていないのではないかと考えてはいたが、まさか同僚だとは思っても寄らなかったのである。一緒に話を聞いていたセイバーも、思い掛けない真実に驚愕しているようであった。とにかく、今はその話を詳しく聞かなければならない。嘘の可能性も否定出来ないのだが、やはり話を聞かない事には始まらなかった。相手が再び口を開く前に、衛宮士郎は神裂に事情を聞いた。だす。

「待て、詳しく説明しろ。どうして同僚が彼女を狙うのだ？ それにその話が本当ならば、何故インデックスが同僚から逃げる必要がある？」

「……………いいでしょう。この際、全て説明してあげましょう」

あの少年にも説明した事ですからと神裂は続け、そうして静かに彼女達の事情を語り始めたのだった。

Reason

衛宮士郎は学園都市の通りを走っていた。血だらけの上条を抱え、出来る限りの全速力で月詠小萌のアパートを目指す。

上条当麻の身体は命に別状はないにしろ、やはり重態であった。痣だらけ、などというレベルではない。右腕ははずたはずたに裂かれ、骨が折れている部分もあった。まさに満身創痍という言葉がぴったりな様相である。そんなものだから、衛宮士郎も慎重に上条の身体を運ばざるを得なかった。揺らさぬように、振動を与えないように。歩幅は大きく、飛ぶ様に道を駆けた。

『シロウ、先程の魔術師の話ですが……』

『……インデックスの記憶の事か』

衛宮士郎が走っていると、セイバーが遠慮がちに話しかけてくる。ついさつきまで衛宮士郎は、あの神裂火織と名乗った女魔術師の話を聞いていたのだが、その話は二人に衝撃を与えるには十分な内容であった。本当に苦しそうに、事の真相を話す神裂の顔を思い返ししながら、セイバーは言葉を続ける。

『私は、……あの魔術師の言っていた事は、真実だと思います』

『理由を、聞かせてくれるか?』

『確たる根拠——、確証がある訳ではありません。……ただ、あれほどまでに真摯な思

いをぶつけられては、それが真実だと否応にも思い知らされませんでしたか? 彼女の

あの様相は、本当にインデックスを助けたいというのだという気概が、直接伝わってくるようでした。……私には、とても彼女が嘘を言っているようには見えなかつたので

す』

『嘘を言っているようには見えなかつた、か』

セイバーの話聞いて、衛宮士郎はぼそりと呟いた。彼とて、神裂の話を含く信じていない訳ではない。ただ、敵の話の頭から信じるのもどうかと思つたので、セイバーの意見を聞いてみたかっただけなのだ。

正直な話、衛宮士郎自身も神裂の話には信憑性を大分感じていた。神裂の話が本当ならば、インデックスの記憶喪失の話など、色々と合点がいく事も多い。何よりセイバーの言う通り、神裂が嘘を言っているようには見えなかつたのもまた事実。逆にあの状況で嘘をつけていたのならば、それは相当な腹黒でないと、そんな事は出来ようがなかつた。あの場で初対面であるならばまだしも、事前に神裂が上条を見逃しているのを見てしまっている分、彼女がそんな性分だとは信じ難い。結局の所、二人揃つて神裂の主張を暗に認めているという事であつた。

頭の中がどうしても神裂の話の方に寄ってしまっている事を自覚しながら、衛宮士郎はその考えを切り捨てる。確かに神裂の話も重要だが、今はそれ所ではなかった。

『どちらにせよ、今は当麻の事が最優先だ。あの魔術師の話の真偽など、その後でも充分出来るだろう?』

『そう、ですな』

セイバーも頷くように同意する。一刻を争うほどの状態ではないが、長引けば危険なのは変わらない。そうして慎重ながらも飛びに飛び、数分後には小萌先生のアパートの前に辿り着いていた。

扉をノックもせず勢いよく開けば、そこには驚いた様な顔をした小萌先生にインデックス。上条のいきなりの帰還に、状況が上手く読み込めていないのか、二人とも固まってしまっている。

「上条ちゃん!!」

それでもやはりと云うか、最初に動いたのは小萌先生だった。衛宮士郎が背負っている上条の存在に気がついたのだろう、叫び声に近い悲痛な声を上げながら駆け寄ってくる。

「か、上条ちゃんが血だらけじゃないですかっ! 一体どうしてこんなことに……ッ!?!」
「落ち着け。今はとにかく応急処置だ。包帯や治療用のセットくらいはあるだろう?」

衛宮士郎のその声に、あわあわとうろたえていた小萌先生は応急処置用の道具を探し始めた。だが、しばらくして、ふと顔を上げて眩く。

「でも、急いで病院に運んだ方がいいんじゃない？」

「……………む」

確かに、小萌先生の意見も最もであった。これだけの大怪我なら、病院で処置した方がずっと確実だ。このままでは、下手をすれば障害だって残ってしまうかもしれない。だが、この科学が発展した学園都市ならば、その医療機関に世話になればそういった心配もないのだ。衛宮士郎も、上条のために救急車を呼ぶのは大賛成だった。

ただ、ネットクがあるとすればそれは……、

(あの傷を、どう説明すべきか……)

そう、上条の右腕に刻まれている切り傷の事。明らかに尋常でない状態で、至る所が血塗れているのだ。事件性すら臭わすこの傷について、病院側が言及しないはずがない。そうなった場合に、一体どう言い訳するのか。それが一番の問題であった。

『まさか、事故をでっち上げるわけにもいくまいしな』

『この際、正直に話してみるといのはどうでしょうか？ 事故でなく、何者かに襲われ

たということにすれば……』

『それだと警備員アンチスキルと関わりあう事になってしまう。出来れば、もっと良い言い分を考え

ておきたいのだが』

『しかし、あれほどの傷、そうそう日常生活で付くものではありません。下手に言い訳をするよりも、そちらの方が確実かと』

『……………』

セイバーの意見に、衛宮士郎はううむと唸る。現状ではどうやっても追求は間逃れない状況であるのだが、衛宮士郎としてはなるべくリスクを回避したかった。

ここは普通の街ではない。科学技術が発達し、あらゆるオカルトが鼻で笑われてしまう学園都市なのだ。そんな中で、もしも上条が魔術という科学での説明がつかない異端に触れた事が分かってしまったら。穏便に事を済ませなければ、上条にも様々な制約が掛かる可能性だってある。長い期間監禁されて、魔術について事情を聞かれる恐れもあった。

(どうするべきかな……。馬鹿正直に話すのは、本来なら避けるべきではあるうが……………)

だが、そうやって衛宮士郎が考えていると、今まで黙っていたインデックスが不意にポツリと声を上げた。

「とうまを、病院に連れて行ってあげてよ……」

囁く様な掠れた声で、そう口を開いたインデックス。その顔は俯いていて、彼女の表

情をはつきりと確認する事は出来ない。ただ、白く小さな手をぎゅつと握り締めて、身体はふるふると震えているのが分かった。そうして下を向いたままだった顔を上げ、衛宮士郎に訴える様に言葉を続ける。

「私のせいで、あなたがとうまを病院に連れて行くのを躊躇っているのなら、気にしなくていいから」

「……………」

「そのせいで私が捕まる事になったって、構わないから！——私の事は、どうなったっていいから!!」

だから、とうまを病院に連れて行ってあげてよと、彼女は声を絞り上げた。頬は涙で塗れ、唇も真っ青だ。心なしか青褪めている様にも見え、瞳は乾く事を知らない。だがその顔は、彼女のその顔は決して、悲壮に暮れるそれではなかった。大切な誰かの為に動く覚悟。その意志が、インデックスの表情からは読み取れる。

別にインデックスのせいで、衛宮士郎は上条を病院に連れて行く事を迷っている訳ではないのだが、彼女は自分が原因だと感じたらしい。確かに、この現状を考えれば仕方がないのだろう。大怪我をした上条を衛宮士郎が背負って来たのだから、敵と何らかの抗戦があったのは予想するのも難くない。

——実際はあんな事があったのだと、いったい誰が考えよう？ ……結論から

言えば、衛宮士郎は既に敵方の魔術師については全く考慮に入れていなかった。衛宮士郎は、敵襲がもはや無い事を、断定に近い自信を持って確信していたのだ。

その上で、上条の如何について考えていたのだが、流石のインデックスもそこまでは考えていなかったらしい。自分が犠牲になつてでもいいから、上条当麻を助けたい。だがそのおかげで、思いもよらぬ形で彼女の心の内を、衛宮士郎は聞く事が出来た。

色々今後について考えてはいたが、そうまでインデックスに覚悟を決められては、こちらとて仕方がない。

「……分かった。君がそこまで言うのなら、そうしよう。すまないが小萌先生、救急車を呼んでくれないか」

「あ、……はいっ」

今まで呆然とした表情で二人の会話を聞いていた小萌先生は、跳ねるようにして電話に飛びつく。そうしてジコジコと黒電話のダイヤルを回し、慌てながらもしっかりと様子で救急の番号に繋げた。どうやら病院側にもきちんと繋がったらしく、上条の状態を細かく伝える小萌先生。インデックスも顔をぐしぐしと拭き、とりあえずは落ち着いた様子を見せる。そんな二人の様子を見ながら、衛宮士郎はふうとため息を一つつけた。一旦は場が落ち着いたと思つたのか、そんな衛宮士郎にセイバーが声を掛ける。

『シロウ、それでは病院の方には、トウマの傷についてどう説明を？』

『仕方ない、聞かれたならば正直に話すさ。幸い今のインデックスとのやり取りで、一応のあてもついた』

『あて？ 何か、病院側の矛先を上手くかわす方法でも思いついたのですか』

『ああ。こちらからどうすることも出来ないのならば、向こうの連中の自浄作用に任せようと思つてね』

衛宮士郎の「向こうの連中」という言葉に、セイバーは一瞬だけ考えるそぶりを見せたが、直ぐにその内容に思い至ったかの様に口を開いた。

『……向こうの連中と言うと、先程の魔術師たちの事ですよね』

確認するようなセイバーの声に、衛宮士郎はそうだと頷く。

『インデックスに以前聞いたのだが、こちらの魔術師にも元の世界と同様に、ある程度の魔術の秘匿義務があるらしい。いっその事、彼らが病院側の記憶改竄なり何なり、それなりの対応してくれるのを期待しようと考えたのさ』

『確かに、それならば魔術についての心配は必要ありませんが……。しかし、都合よくいくものですかね？ 何の伝もないのに、勝手にこちらの証拠を隠匿してくれるなど考えづらいのですが』

『伝ならば、こちらにはインデックスがいる。それに元々あちら側から仕掛けてきたんだからな。これくらい利用しても罰は当たるまいよ』

『……言われればその通りですがね』

あまり合点がいつていないような声色のセイバーではあるが、上条に治療が必要なのは間違いない。結局その後、三人で上条とともに病院へ向かったのであった。

「手術中」の赤い光が、蛍光灯の白光に混じってぼんやりと輝く。

ここは学園都市のとある病院、その手術室に繋がる廊下。インデックス、衛宮士郎、小萌先生の三人は、そこにある黒い長椅子に腰掛けていた。他に人気はなく、ただ彼ら三人だけが長い廊下に陣取っている。辺りには病院らしい薬品の匂いが漂い、静寂がその場を支配していた。衛宮士郎は腕を組んで目を瞑っており、小萌先生はじつと俯いている。インデックスはシスターらしく祈っているのだろう。手を組んで、静かに瞑想していた。まさに三者三様、各々静かに、上条が手術室から出てくるのを待っているのだ。

上条は病院に救急車で搬送された後、直ぐに手術を受ける事となった。全身の大ケガもそうだが、どうやら血液が足りなくなっているらしい。輸血や一部の骨折の治療など、やはり入院も間逃れなかった。手術についてはカエルの様な顔をした医者曰く、上条は絶対に助かると豪語されたのだが、それでも三人は手術室の外で待っている事にしたのだ。

カチ、カチと、時計特有の冷たい音がやけに耳に残る。項垂れた三人が並ぶ中、不意に小萌先生が声を上げた。

「どうして、こんなことになったんですか……」

随分と泣き腫らしたのであろう、真つ赤な目に加えて目元に涙の筋がついた顔を衛宮士郎のほうに向けて、彼女はそう口を開いた。衛宮士郎を攻めるといふよりも上条が傷ついた事の方が悲しい、そんな目をしている。

「――」

対する衛宮士郎は答えない、というより答えられないといった方が正しいか。まさか魔術が原因だなどとは言えるはずもないのだ。彼女は一般人、巻き込みたくはない。

説明を求める声にも黙秘を貫く衛宮士郎に、小萌先生はぐすりと鼻を噉った。彼女と馬鹿ではない、こんななりをしているがれつきとした大人の女性だ。インデックスや衛宮士郎のような非日常的な存在に、わけのわからない事件に上条が首を突っ込んでいることぐらい分かっている。

それでも月詠小萌は教師なのだ。教師が生徒の心配をするのは当然、至極当たり前のこと。手間の掛かる生徒ほどそういう傾向がある小萌先生にとって、上条は非常に気に掛かる存在だ。そんな生徒が大怪我をした。これをなんとも思わない方がどうかしているだろう。本当なら衛宮士郎に問い詰めたい、何があつたのか、どうして上条がこん

な怪我を負ったのか。だがそれで何かが解決するわけではないのだ。上条が直ぐに元気になるわけでもないし、きつと彼女自身がこの事件に協力できるわけでもないのだろう。それにこれ以上踏み込んで、自分を巻き込まないようにと、上条の配慮も裏切る事になる。結局、今の月詠小萌には、こうして生徒の無事を祈ることしかできないのだ。そう、隣で手を組んでいる小さなシスターのように。……そうして月詠小萌もまた、上条の無事を祈るのであった。

そんな風に俯き続ける小萌先生に、衛宮士郎の内心は身を切るほどの思いで満たされていた。——まさに、後悔。悔やんでも悔やみきれぬといった表現がこれほど似合う心情もない。衛宮士郎は只単に上条に大怪我をさせただけではない、月詠小萌との約束、上条を傷つけないという約束さえも守れていないのだから。後先立たぬ後悔は、その身を苛まなまいことを知らない。二人の祈りとは対象に、衛宮士郎は己を攻めて付けていた。

そのまま長いとも短いとも言えない時間が経つ。のっぺりとした白い壁を見据えて、蛍光灯の光は相変わらず三人を照らしていた。先程までは時折聞こえていたコツコツという靴音も、今では殆ど耳にしない。

病院の静けさと言うものは、待つ身にとっては辛いものだ。時間が長引けば長引くほど、ぐるぐると思考は巡る。あの時ああすれば、もつと事は上手く運んだのではないか。いまさらIFを考えてもどうしようもない事だが、それでも考えられずにはいられないのが人の性だ。それは衛宮士郎とて、例外ではない。彼の頭は今、上条のことがひっきりなしに渦巻いている。

『ステイルⅡマグヌス相手に魔術を出し渋るべきではなかった。もつと早く当麻の元に辿りつけていれば、ここまでひどい怪我ではなかったはずだ』

『……果たして本当にそうでしょうか？』

満足とは言えない結果に己を攻める衛宮士郎に、セイバーは反論した。

『シロウが遅れたからこそ、トウマの怪我がアレほどで済んだとも考えられませんか？』

『……どういう事だ？』

『仮にシロウがああ神父を全力で打倒し、トウマと魔術師の戦いに途中から乱入したとします』

その場合を考えてみてくださいとセイバーは続ける。

『二対一という不利な状況にもちこまれる前に、魔術師がとりあえずは目の前の敵、——つまりトウマをさっさと殺してしまおうと考える可能性があったとは思いませんか？』

『……………』

『それにあの魔術師、とてもシロウが魔力を消費した状態で、余裕を持つて相手に出来る敵ではなかったでしょう。……それに、シロウのとった選択肢の結果として、トウマは障害もなく回復することが出来る。私は、あなたの判断が過ちであったとは考えませんよ』

それよりも今後のことを考えましよう、セイバーはそう締めくくった。

暴論だな、と衛宮士郎はそう思う。仮定に次ぐ仮定で成り立っている、まさに机上の空論。そもそも神裂火織は人を殺める事に抵抗がある節であったし、それならばまず上条と分断されたこと自体が失敗だ。だが、らしくないほどに論理的ではないが故に、衛宮士郎にはセイバーが自分を気遣っている事に気がついていて、その選択が間違っていないかったと強調する事で衛宮士郎を励ます、彼女なりの配慮なのだろう。

(並行世界に移ってまで、俺は彼女に気を遣わせるか……)

衛宮士郎はそんな自分に呆れた。なんとも情けない話ではあるが、実際にそうであるから仕方がない。それに確かに、終わったことをいつまでも考えていても、どうしようもない事ではあるのだ。

(このまま悩んでいても、周りに無駄に心配を掛けるだけか……)

こういうときこそ、自分がしっかりとしておくべきだなと衛宮士郎は反省した。不安

や後悔が伝播し、周囲に悪影響を与えては元も子もないのだ。衛宮士郎は、はあと一息つくくと、それよりこれからの事でも考えていくかと決めたのだった。

とりあえずは前向きになつた衛宮士郎を見て、セイバーはほつと胸を撫で下ろしていた。確かに先程の衛宮士郎の行動には、反省すべき点は多々あるだろう。しかしだからこそ、セイバーは衛宮士郎には前を向いてもらいたいのだ。

……彼女はよく知っている。衛宮士郎には、明らかに自分を責めすぎるきらいがある事を。そうして一人で背負い込んでいった結果がああなるならば、セイバーはそれを断固として防がなければならなかつた。何故自分がこんな所にいるのかなど分からない。どうして衛宮士郎と共にいるのかなんて知らない。ただ衛宮士郎の最悪の結末を回避する、それが自分に出来る事だと、セイバーは直感していた。

表立つて動く事ができない現状ならば、せめて彼を励ますくらいはしてあげたい。常に一緒にいるならば、共に歩んでいけるなら。痛みを分かち合い、心の澱を掬うことも出来よう。そう考えながらセイバーは、衛宮士郎と共に上条が手術室から出てくるのを一晩中待ち続けていた。

次の日、衛宮士郎は上条の病室で本を読んでいた。本の内容は、人間の脳の構造に関する医学書であつたり論文であつたり。昨日から通して読んでいたのであろう、上条のベッドの横には、そういった類のもので小山が出来ていた。

昨日の今日だけあつて、上条自身は未だ目を覚まさず、深い眠りにについている。昨夜の手術は成功し、後遺症の心配もないといった出来ではあるが、体力は回復している訳ではないのだ。下手をしたら三日は目を覚まさないかもね、とはカエル顔の医師の談である。

しばらく静かに本を読んでいた衛宮士郎ではあるが、その一冊を読み終わったのかそつと本を閉じた。幸いと言うべきか、この病室には上条以外の入院患者がいないので、衛宮士郎が一人で長時間病室に居座つていても咎める様な人はいない。そんな衛宮士郎のタイミングを見計らっていたのか、本を読み終わると同時にセイバーが話しかけてきた。

『結局、事情は聞かれませんでしたね……』

『そうだな。ケガについてどころか、その原因まで聞かれたいとは思つてもいかなかった』
衛宮士郎は思案顔で言葉を返したが、その顔は浮かない。昨夜、上条を病院に連れて行つた時、てつきり事情を色々聞かれると思つてそれなりに身構えていたのだが、何

故か全く問われる事がなかったのだ。明らかに異様な怪我をしているのに、その訳すら聞かれない。これがどれほど異常な事か。通常の病院なら事件性を感じさせる怪我を負った患者が運ばれてきた場合、必ずその怪我の要因を聞くはずである。警察機構への報告義務もあるはずだ。

『可能性としては、あの魔術師達が手を打ったという可能性もなくはないが……』

『それにしても手際が良すぎます。彼らとて、そう簡単に事を成すことが出来るのでしょうか?』

『……そもそも、この学園都市の連中は魔術の存在を全く把握していないのか?』

『と、言うところ?』

『もしかしたら、一部の上層部は魔術の存在を知っているのかもしれない』

衛宮士郎の口から漏れた意外な言葉に、セイバーは驚いたように声を上げた。

『まさか!? 一般人が魔術の存在を認識しているなどそんな事——!』

『どうしてないと言い切れる? ここは元の世界とは違う。もしかしたら、そういった可能性もあるかもしれない』

『だとしても、どうしてシロウはそのような考えに至ったのですか?』

『よく考えればおかしな点はいくつもあつたはずだ。今回の怪我の事もそうだが、これだけ嚴重に閉鎖された学園都市に、部外者たる魔術師が一体どうして侵入できたのだ?』

当麻や月詠小萌の事だって、詳しく調べるのならば学園都市側の協力は不可欠なはず。学園都市が彼らに協力していなければ、どれもこれも容易に出来ない事ばかりだろうよ』

『……確かに、そうですね。幾らなんでも、彼らは自由に動きすぎている気がします。昨夜の戦闘で破壊された機器も、決して安いものではないはず……』

考えれば考えるほど、学園都市側の関与が確実なものとなってくる現状に、セイバーも眉を顰める。しかし、だとすれば、

『だとすれば我々は、非常にまずい現状にあるのでは？』

そう言葉を重ねたセイバーに、衛宮士郎もああと頷いた。

『もしも、あの魔術師達が学園都市側と通じているのならば、確実に俺達の事も学園都市に割れているだろうな』

『……私達にとつては、嫌な状態ですね』

『今更な話だ。ここまで手を出した以上、何があっても当麻だけは守ってみせるさ』

『……インデックスの事は、どう説明しましょうか』

『……そう、だな』

とりあえず、今一番重要なのはインデックスの事である。彼女の記憶の事について、どう対処するべきか。衛宮士郎だけでは、結論を出す事は出来ない。インデックス以外

では一番の当事者たる上条が目覚めぬ今、下手な行動を打つのも良くはなかった。今後、一体どう事を運んでいくか。そんな事も考えながら、衛宮士郎は昨夜の出来事、あの魔術師との会話を思い返したのであった。

「——同僚だと？ 君らと、インデックスが!?」

「そうです。我々も、彼女と同じ必要悪の教会ネセサリウスに所属している魔術師なんですよ」

学園都市の夜に、衛宮士郎の声が通る。ここは、衛宮士郎と神裂火織が戦っていたビルの屋上。二人は既に武器を納め、互いの声が聞こえる距離で、向き合って言葉を交わしていた。あの一戦の後、互いに違和感を覚えていた二人は結局、一旦互いの事情を説明する事になったのだ。

とりあえず衛宮士郎は、自分がインデックスを狙ってはいない事、ステイルも殺してはいない事を話し、逆に神裂火織からはインデックスの記憶の事、その事情について軽く話を聞かされた。そうして意外な話を聞いた衛宮士郎は、表面にこそ出してはいないが、内心では驚きが隠せていなかった。それについてはセイバーも同じのようで、先程からずっと黙って神裂の話を聞いている。

「しかし、仲間ならば何故インデックスを斬ったのだ。間違いなく命に関わるほどの傷

だったぞ、あれは」

「……それについては完全にこちらの責任です。まさか、「歩く教会」が無効化されているなんて、思いもよりませんでしたから」

「あの、インデックスが来ていた法衣の事か」

「あれには本来、法王級の魔術的な加護が掛かっているはずでした。聖ジョージの伝説に出てくる竜ドラゴンブレスの息吹並みの魔術でなければ、とても突破出来ないほどの代物です。……おそらく、あの少年の右手に打ち消されてしまったのでしょね」

それを考慮に入れていなかったのは、私の落ち度でしたと、神裂は続ける。そんな神裂の様子をじつと見ていた衛宮士郎であったが、今度は神裂の方から衛宮士郎に疑問が投げかけられた。

「それより、あなたは一体なんなのですか？ 魔術師の癖に学園都市に住み着き、こうしてここで暮らしている。インデックスと一緒にいる理由も、是非とも聞いておきたいのですが」

神裂が口を開くその口調は、未だ固い。衛宮士郎もそうだが、二人とも相手の話を鵜呑みにするほど安直な人間ではないのだ。依然互いを警戒しながら会話を続けるのは、むしろ当然の事であった。そんな中で、衛宮士郎が神裂の疑問に答えるべく口を開く。「理由、と聞かれてもな。インデックスにも言ったが、困っているから助けたのだ。それ

以外に他意はない」

「そんな馬鹿な！ あなたは魔術師なのでしょ！？ 何か見返りを求めて、彼女から知識を得る為に行動しているのではないのですか？」

「……まったく、くだいな。強いて言うなら、当麻にも助けを求められたからだ。」

——それとも人を助けるのに、何か理由が必要なのか？」

「——ッ!!」

ばつさりと、自分の言葉を切って捨てた衛宮士郎に、神裂火織は絶句した。助けたいから助けるのだと。そこに理屈はなく、ただ人を救いたいから動くのだと、目の前の男はそう言ったのだ。その理念は、奇しくも彼女自身の魔法名、『救われぬものに救いの手をSalvare000』に通じる何かが確かにあった。

……似ていると、ほんの少し、ほんの少しだが神裂は感じる。自分とこの男は、何かが似ていると。しかしそれでいて、決定的に何かが違うとも思った。初対面に近い相手に何をとは神裂自身も感じてはいるが、一戦剣を交えたせいであろうか、何故かそんな事を考えてしまうのだ。

驚愕している神裂を余所に、衛宮士郎はちらりと上条の方を見た。思いがけず神裂と口を交わす事になったが、本来はそんな事をしている暇もない。未だ血を流しながら倒れている上条を視界に入れた衛宮士郎は、そろそろ話を切り上げようと心に決めた。そ

うして先程から何やら考え込んでいる神裂に向かつて、今回はここで互いに引くよう声を掛ける。

「とにかく、今は互いに一時休戦という事で構わないな？ 私としても、早く当麻を治療したいのだが」

「……分かりました。今日は我々も引きましょう。ところで、心得ているとは思いますが、インデックスに残された制限時間タイムリミットは……」

「三日、だろう。分かっているさ」

神裂の確認するような声に、衛宮士郎も相槌を打つ。そう、神裂達が言うには、インデックスの記憶消去の一年周期——、つまり彼女の脳が限界を迎えるまでは、あと三日ほどしかないらしいのだ。神裂がそれをこちらに知らせたのも、その期限が彼らにとつての限界である事を知らせる為であろう。インデックスの記憶を消すのには、それより遅くとも早くともいけないと、神裂はさらに語った。それはつまり言外に、「こちらの代わりにそれまでインデックスを逃がさないようにしておけ」
 《……………》、という事でもある。抜かりの無い事だと、衛宮士郎は考えながら、神裂と別れ、上条のほうへ飛んで行ったのであった。

そして現在。昨夜の事を考えていた衛宮士郎は、病室の戸が開く音と共に、意識を今へと戻した。入り口の方を見れば、インデックスが両手で鞆を抱えながら、上条が寝ているベッドへと歩いてきている。

「受け取つてきたか」

「うん。こもえが言うには、これで全部のハズだつて」

そう言いながら、彼女は抱えていた鞆をベッドの脇へ下ろした。インデックスには、病院の玄関まで上条の荷物を取りに行つて貰つていたので。上条の入院が決まった後、衛宮士郎は小萌先生に頼んで、彼女のアパートに運んでいた上条の諸々の荷物を、全てこの病院に運んでくれるように言つていた。

別にそれを受け取るだけなら衛宮士郎が病院の入り口まで降りていっても構わなかったのだが、インデックスが余りに沈んでいたので彼女の気分転換も兼ねて、荷物を取りに行かせたのである。

どうやらインデックスも上条の怪我は自分のせいだと思ひ込んでいる節があつたので、衛宮士郎としてはそれを見越しての配慮をしたのだ。まあ、荷物を取りに行くだけにしてはやけに時間が掛かっていたので、病院の一階でしばらく小萌先生と話をしたのであろう。

今ではインデックスも、昨夜よりは落ち込んでいないようには見えた。

そんな風に、既に上条の事を随分と気に掛けていているインデックスを見て、衛宮士郎は内心、ふうと息を漏らす。

『当麻を餌にインデックスの逃亡をも防ぐ、か。中々どうして、えげつない事をする』

『それだけ彼らが、彼女を大切に思っているという事でしょう。悪役に徹する事で、インデックスの苦しみを和らげたいのだと思いますよ』

『……その割には、当麻に猶予をくれたがな。今の内に、せいぜい別れの準備でもしておけという事か』

セイバーの意見に、衛宮士郎はぼそりと返した。神裂達としては、インデックスにはどうしても逃げられたくないのだと言う。ただインデックスを監禁しただけでは、イギリス清教の追跡から一年も逃げ切った逃走の達人たる彼女なら、もしかしたらまた脱出されるかもしれない。それ防ぐ為に、あえて「上条当麻」と言う枷を彼女につけたのだろう。現状では効果覲面などと、衛宮士郎は一人ごちた。

そうして結局、上条当麻が目覚めぬままに、徒に時は過ぎていく。起き上がる事なく眠り続ける上条を見ながら、インデックスと衛宮士郎は病院で一日を過ごしたのであった。

何故に彼らは剣を持つ？

「……………」

衛宮士郎は、上条が入院している病院の病室で一人、静かに本を読んでいた。先程までインデックスも一緒にいたのだが、彼女は小萌先生と一緒に昼食を摂りに行っている。衛宮士郎が今読んでいるのは、脳医学に関する本だ。ネットもフルに活用し、出来る限りの脳——特に記憶の分野に関する情報を掻き集めた衛宮士郎は、それを殆ど休むことなく読み続けていた。

『やはり、おかしいな』

『何がおかしいのです、シロウ？』

読み終えた本を閉じて、そう呟いた衛宮士郎にセイバーが尋ねる。衛宮士郎は一旦本を脇に置くと、彼がインデックスの記憶に関する説明に覚えた違和感を語り始めた。

『神裂たちが言うには、インデックスは完全記憶能力を持っていて、それを利用して多くの魔道書を丸ごと記憶しているという話だったな。そして、その魔道書の記憶に脳の八十五%を使用しているがために、記憶が一年しかもたないと』

『ええ、そうです。だから彼女は脳が色んな情報でパンクしないうちに、一年周期で記憶

を消す必要があるという話でしたが——、』

それが一体どうしたのです？ と続けるセイバーに、衛宮士郎は本の山から一つの医学書を引っ張り出しながら答える。

『妙だとは思はないか？ 完全記憶能力は確かに非常に珍しい性質だが、何もこの世でインデックス一人という訳ではあるまい。彼らが皆、一年分の記憶を保管するのに脳の15%も使っているとするならば、一体インデックス以外の完全記憶能力者はどうやって生活しているというのだ？ 一年で15%なら、七年も生きればパンクしてしまうはずだろう。完全記憶能力を持つ人間が、そんなに短命だなんて事はどの文献にも書いてはいない』

衛宮士郎の意見に、セイバーはひとしきり考えを巡らしてから、ふむと口を開いた。『……確かに矛盾が生じます。完全記憶能力とやらが本当にそこまで絶望的な能力ならば、インデックス以外の彼らはどうやって何十年も生きているのでしょうか？ ……それより、科学に疎いはずのカンザキたちは、一体誰から八十五%なんて聞いたのでしょうか？』

『きな臭くなってきたな……』

衛宮士郎は引っ張り出した本のページを捲りながら、そう言葉を漏らす。そして目的のページを見つけ出したのか、本を見開いて膝の上に置いた。

『見ろ、セイバー。ここには「人間の脳は一四〇年分の記憶が可能」だと書いてある。そして言葉や知識を司る記憶と、思い出を司る記憶が別物だという事もな』

『つまり、いくら知識を詰め込んだところで、それが要因で思い出が圧迫されるなんて事はありえない、と?』

『そういう事だ』

セイバーが自分なりに意見を纏めれば、衛宮士郎はそれに同意で返す。そのまま再び本を片付けながら、今度は衛宮士郎からセイバーに問い掛けた。

『では、どうしてインデックスは一年しか記憶が持たないのだと思う?』

『……まさか、何らかの外的要因が関わっているのではないでしょうか?』

『それ以外に無いだろう。これオレの推測だが、インデックス自体に何らかの魔術的な拘束を掛けているのではないかと思うのだ。いくらなんでも、一年は短過ぎると言わざるを得ない』

インデックスが魔術側の人間である以上、科学を使って記憶を制限されている可能性は低い。そして科学的に制限が掛けられているならまだしも、魔術によつて制限が掛かっているのならば、衛宮士郎にも手の出しようがあるのだ。

一旦、周囲を確かめるようにして見渡した衛宮士郎は、まずは監視カメラの有無を確認する。流石に病室だからか、あからさまな監視カメラは無かったが、それでも油断は

禁物。衛宮士郎は服の内側などを利用して、出来るだけ人目につかないようにしてから彼の内面へと意識を向けた。

こういう時に役に立つものを、衛宮士郎は知っている。対魔術としては、これ以上に無いほどの代物。それを思いつくのに、彼の内側に登録してある劍群からわざわざ検索するまでも無かった。

「投影開始」

小声で、ぼそりと呟くようにして呪を紡げば、そこにあるのは歪んだ形をしたナイフ。

契約破りの短剣。裏切りの魔女の象徴。

『破戒すべき全ての符……』

見覚えのある小さな剣に、セイバーは確かめるようにその真名を口にする。そして投影した短剣を懐に注意深くしまい込む衛宮士郎に向かって、一応ながら問い掛けた。

『それを、インデックスに使うのですか？ こちらの解呪の魔術が相手方に効くとは限りませんが……』

『その事は当麻で確認済みだ。当麻の幻想殺しが俺の強化に通じるのなら、これもおそらく効くだろう』

まあ推測だがなと付け加える衛宮士郎だが、もしこれでインデックスに掛けられた何らかの魔術を解くことが出来るのならそれに越した事は無い。そんな事を考えながら、

セイバーと二人でインデックスの帰りを待つのであった。

『——で、駄目でしたと』

『……………何故だろうな』

どこことなく肩を落として語る衛宮士郎の声は——低い。

結果から言えば、衛宮士郎の試みは全て徒労に終わってしまった。インデックスを呼び寄せてから、試したい事があると云って『破戒すべき全ての符』を使ったまではないものの、宝具はうんともすんとも反応しない。一応インデックスの後頭部に突き立てるようにして『破戒すべき全ての符』を発動させたのだが、何の手ごたえも無かったのだ。

当然、衛宮士郎が何をしているのか分からないインデックスは、終始はてなマークを頭から浮かべていた。何をしたのかと彼女にしつこく尋ねられたが、衛宮士郎はそれのらりくらりとかわし、どうにか矛先を逸らしていたのだ。まあ、実際に宝具が発動したわけでもなく、尚且つインデックスには見えないように後ろから使ったので、彼女に『破戒すべき全ての符』について突っ込まれることは無かったが。

結局、何の成果も得る事はなく、衛宮士郎はとりあえずインデックスを置いて病室を出た。そうして病院の休憩室にて適当な椅子に腰掛けると、再びセイバーと衛宮士郎の

二人でその原因を追究することにしたのだ。

『しかし、一体何故反応しなかったのでしょうか？ やはり『破戒^ルすべき^ル全ての符^イ』はこの世界の魔術に通用しないのでは……』

『それもそうかもしれないが、もしかしたら他に原因があるかもしれないな』

『宝具以外の要因と言うと、そもそもインデックスに魔術が掛かっていないという可能性もありますね』

『そうだな、よくよく考えてみれば『幻想殺^{イマジネーション}し』もインデックス自身には何の反応も示さなかったはずだ』

セイバーの言葉に、衛宮士郎が先日^イの出来事を思い出しながら答える。小萌先生のアパートであの二人が騒いでいた時も、確かに上条の右手は何の反応も示してはいなかった。あの取っ組み合いで、上条の右手がインデックスに触れていないはずがないのに。それから考えると、そもそもインデックスには魔術が掛かっていないという可能性もあろうるのだ。

『だが、魔術以外が原因となると……』

『科学的に何か問題があるということかもしれないですね。実はインデックスは完全記憶能力の他に何か脳に障害を持っている、とか』

もつと根本的な、彼女自身の脳の構造上の問題もありえます、と続けるセイバー。衛

宮士郎もそれに賛同するように頷いた。

『もしくは先天的なものでなく、意図的にそういった障害を引き起こさせたかだな』

『……意図的に、ですか』

『向こう側に科学に精通している奴がいなくても限らない。科学的に記憶障害を引き起こす事だつて、不可能ではないだろう?』

衛宮士郎はそう話すが、その顔は厳しい。だつて科学にしる魔術にしる、人の脳を勝手に弄繰り回すなど人権侵害などというレベルではない。衛宮士郎が憤りを覚えるのも、無理も無い話であつた。

それは勿論、セイバーとて同様だ。彼女は弱き民衆の為に、その剣を振るつた王。その彼女がそんな暴挙を許せるはずも無い。

『……このまま、インデックスを必要悪の教会に返してしまうのは危険ではないでしょうか。私には、それが彼女の為になるとは思えません』

セイバーはそう口を開くが、衛宮士郎は首を横に振つた。

『だとしても、今彼女を匿うのは早計だ。せめて記憶の事をどうにかしなくては……』

『記憶障害の原因がもしも科学的なものであるとするならば、この学園都市ならば治療する事も可能なのではないでしょうか? 脳についての研究も進んでいるはずです』

『……俺には現状、研究者への伝が無い。せめて当麻から小萌先生に言ってくればい

いが』

『インデックス自身を説得する必要がありますね』

二人は既に、インデックスの記憶障害の原因が科学的なものではないかと考えを固めていた。『幻想殺し』や『破戒すべき全ての符』も効果が無かったということもあるし、魔術が原因ならばあのステイルや神裂たちが対処しているはずと考えたからだ。

『問題は時間だな。インデックスに残された制限時間が明日の午前零時だ。……治療しようにも時間そのものが足りない』

『では、インデックスは……』

『——正直、今回は諦める必要があるかもしれない。まあ、専門的なことはよくわからないが』

残念そうな顔をする衛宮士郎だが、彼の正義の味方としての本質はあくまで『命』の救済だ。それに『心』は含まれておらず、故に衛宮士郎はインデックスの落命の危険性をなくすことを最優先とする。今回の記憶消去は防ぐ事が出来ずとも、次回にそれが起こらなければ、記憶をわざわざ消去する必要がなくなればそれでいい。それが今の衛宮士郎のスタンスだった。

『しかし、それではトウマは……』

『納得しないだろう。あいつは、どうにかしてインデックスを助けようとあがくに決

まってる』

まあ、それが当麻の美点でもあるのだけどなくクククと笑いながら言う衛宮士郎に、セイバーは呆れたように返す。

『シロウは随分とトウマを買っているんですね。それとも何か思う所でもあるのですか？』

『……………さて、な。オレ自身、なんでここまで当麻に惹かれているのやら』

相変わらず口の端に笑みを浮かべている衛宮士郎だが、上条当麻が妙な魅力を持つているのは確かだった。ここ少しの間を共に過ごしたが、上条には人を惹き付ける何かがあると衛宮士郎は思っていた。彼を見ていると自然と周りに人が集まってくる、何故かそんな気がするのだ。

そしてそれだけに、衛宮士郎はどうにかしてインデックスを救ってみせたかった。上条がインデックスを助けたいと望むなら、衛宮士郎とて協力は惜しまない。勿論インデックス自身のためでもあるが、そのためにだって今は色々調べているのだ。セイバーも衛宮士郎も、人を助ける事が生き甲斐の様な人間である。上条やインデックスのために一日中動き回りながらも、その上条は目覚めぬままに再び一日が過ぎたのだった。

そして次の日。

インデックスの記憶の限界である七月二十七日になった。

衛宮士郎は、インデックス自身には神裂の事や記憶のリミットの事などを一切伝えてはいない。必要もないし、むやみに混乱させるわけにもいくまいとの考えからであった。何よりその方が、インデックスだけでなく神裂たちにとつても都合が良いはずである。

言ってしまうえば衛宮士郎はもう、インデックスの今回の記憶については諦めていたのだ。原因も分からないし、時間もない。ならば一旦リセットされたあとで、時間を掛けて治療すれば良いという事。

ただ、命さえ助かれればそれでいいと考えている衛宮士郎にとつて、心残りなのは上条のことだ。今日の内に上条が目覚まさないければ、次に彼がインデックスに会った時は全てが終わった後なのである。それでは、あまりに酷いではないか。

この三日間、インデックスは甲斐甲斐しく上条の世話をしていたといつてもいい。濡れたタオルで汗を拭き、身体をぬぐう。面会可能な時間のギリギリまで、彼女は病院で粘っていた。

それだけ上条に懐いていたインデックスが目の前から消え、その記憶にすら残らな

い。ならばせめて、別れの時間ぐらいは用意してやりたいと思うのが人の情だ。眠り続ける上条を前に、衛宮士郎も歯噛みしていた。

(いつまで寝ている気だ、当麻。このままでは、何もかもが終わってしまふぞッ——！)

インデックスも不安そうに見つめてはいるが、上条は一向に起きる気配がない。医者の話では長くて三日ということなので、そろそろ起きるはずなのだが……。

「……………」

衛宮士郎は無言のまま、意識を取り戻さない上条をじつと見つめていた。

既に昼前だ。

インデックスに残された時間は——少ない。

このまま日が過ぎれば、やがて夜になり、インデックスは記憶を失う。そのまま二度と、上条当麻とインデックスが会うことは無いはずだ。衛宮士郎も上条には早く目覚めて欲しいとは願ってはいるものの、こればかりはどうしようもない。

そうしてそのまま時は過ぎ、いつの間にか正午になってしまったので、衛宮士郎は昼ごはんを買いに行くことになった。上条のことはインデックスに任せ、食品を求めて病院の近くを歩き回る。あまり時間を掛けるわけにもいかないので、衛宮士郎はコンビニで適当に物を買った。

気まぐれで煙草も買ったので、病院に入る前に一服する。衛宮士郎は自分が以前タバコを吸ったのは、もう随分と前のような気がしていた。箱の裏をトントンと叩き、タバコの中身を詰める。封を空けると、タバコ特有の香りが鼻をついた。手初めに吸った一本は、喫煙自体が久しぶりなせいとか、衛宮士郎に軽いヤニ酔いを覚えさせる。

『シロウ、あまり吸いすぎると口と服に臭いが残りますが……』

『わかっているさ。ほどほどに吸ったらガムでも噛むよ』

心なしかジト目で見つめているような気がするセイバーの声に、衛宮士郎は苦笑した。彼女の時代にタバコがあつたかどうかは知らないが、あつたならばきつと玉座で苦い顔をしていたに違いない。まあ円卓の騎士達が喫煙をしながら会議しているなんて、全く想像も出来ないが。

そうして衛宮士郎は二本ほどタバコを吸い終わると、病院の中へ入ろうとして、

「……………むっ？」

ちようど目の前の歩道の先から、一組の男女がこちらに歩いてくるのが見えた。神父に剣士という非常に目立つ二人組み。当然、ステイルⅡマグヌスと神裂火織のことである。普通ならばとても人目を引きそうな組み合わせであるはずのだが、何らかの魔術を使っているのか周囲の視線は彼らの方を向いてはいなかった。そうしてそのまま、病院の入り口——つまり、衛宮士郎がいる方へと近づいてくる。

「出迎えとは恐れ入るね」

「……客人を招いた記憶は無いがな。一体何の用だ？」

ステイルが薄笑いを浮かべながら近寄ってくるのに対し、衛宮士郎のそれはそつけなかった。念のために二人を警戒しながら、わざわざ病院にやってきた理由を問う。

「何の用といわれましても、あの少年が目覚めたようなので、私たちからも色々釘を刺しておきたかったのですが」

「なに？」

上条が目を覚ましたというニュースは、衛宮士郎にとっては初耳であった。どうやら衛宮士郎が出かけている間に目を覚ましたらしいが、神裂たちがその情報をより早く掴んでいたという事はつまり、

(病院を見張っていたか、それとも病院が知らせたか)

どちらにせよ、あまり気分のいいものではない。神裂たちと学園都市が繋がっている可能性は以前から考えてはいたが、確かに病院側にも不審な点があった。ただ、まさかここまでとは思っていなかったのだ。ともすれば、一体どこから情報が漏れるのか油断も隙も無い。

「出来れば、きみに案内して貰えるとありがたいのだけどね」

そんな衛宮士郎の心情を知ってか知らずか、ステイルはそう提案してきた。よく見れ

ばその笑みが若干引きつっているのは、上条だけでなく衛宮士郎にまでも撃破されたのが尾を引いているのか。

「別に構わんがね、一体どう当麻に釘を指すというのだ？」

「危害を加えるつもりはありません。ただタイムリミットが迫っていることを知らせて、逃げ場が既に無い事を教えるだけです」

「ついでにインデックスの様子も見ておきたい、か？」

「……………否定はしませんよ。あの子の事が心配なのは確かですから」

目を伏せて話す神裂に、衛宮士郎は問いを一つ投げかける。

「聞くが、インデックスの記憶の事は誰に聞いたのだ？」

「記憶の事？ あの子の記憶が一年しか保てないことですか？」

「いや、インデックスが脳の15%しか使えないということだ」

「…………それが一体どうしたというのです。あなたには関係の無い話では」

「なに、その情報は本当に真実なのかと思つてね」

「まどろっこしいな。一体何が言いたいんだい？」

回りくどく話す衛宮士郎に、ステイルが苛立たしげに聞き返した。ただでさえインデックスのことでピリピリしているのに、ここで衛宮士郎にこんな言い方をされればいらいらも増す。神裂も衛宮士郎の言葉に眉を顰めながら、その顔をいぶかしげな目で見

つめていた。そんな二人の様子に、衛宮士郎はため息を吐きながら、その口を開く。

「人間の脳はそんなに柔ではないという事だ。先日きのうの神裂の説明にしろ、矛盾点も多すぎる」

そんな風に語り始めた衛宮士郎は、神裂たちにこの二日で彼が調べ上げた事を説明した。つまり、完全記憶能力に対する神裂の説明の矛盾。人間本来の持つ脳の容量の大きさ。なにより、インデックスの記憶が一年しか持たないのは幾らなんでも妙だという事。そうして衛宮士郎の話が進むに連れて、神裂たちの纏う雰囲気も堅くなっていく。

「——魔術方面に関しては、君らがインデックスを調べたのだろうか？ だから、科学側からアプローチ出来ないものかと私は考えているのだが……」

「——それには及びません」

「……なんだと？」

衛宮士郎がそうやって説明していると、突然、神裂がその言葉を途中で止めた。声は鋭く、目には静かな怒りを湛えている。

「それには及ばないと言ったのです。あなたの話は、信じるに値しない」

「……………」

「そもそもきみは、自分の話が信用して貰えるとも思っていたのかい？ あれだけ僕らと敵対しておいて？」

ステイルもまた、神裂の言葉に被せる様にして衛宮士郎を睨み付けた。衛宮士郎をその目で射止めながら、神裂は話を続ける。

「そして、あなたの言うことが真実だという保障はどこにもありません。——確かに、私たちも一時期はそういうことを考えていたこともありましたが」

正直な話、魔術側に出来なかつた事が科学側に出来る筈がないという自負があると神裂は言つた。インデックスが科学に犯される姿を見たくないとも。

「なにより私たちは今までずっと、そうやってあの子を守り続けてきました。それを今更、科学側に任せろと言うのですか？」

「つまり、お前達は……」

衛宮士郎がじろりと二人を見つめると、ステイルはその視線を真正面から受け止めながら答える。あくまで真つ直ぐに、彼らなりにインデックスのためを思つて。

「ああそうだとも。僕らはあの子を科学側に任せる気なんて一切無い。なにより、そんなものをこちら側は望んでいない」

そうしてはつきりと、目の前の魔術師達は断言した。可能性があるかもしれないのに、たとえ蜘蛛の糸ほど細くとも、そこには確かにインデックスが助かる可能性が存在するのに。それを捨てると断言した。訳の分からぬものに任せるくらいなら、このまま自分達で記憶を消去し続けた方がよいと。

「……所詮、骨の髄まで魔術師だったというだけの話か」

そんな二人の態度に、衛宮士郎は吐き捨てるように口を開いた。元の世界と魔術師達とは違うかもしれないと思っていたのに、あれだけ仲間のためにその身を削れるのなら、もしかしたらと思っていたのに。

確かに彼らは他^{インデックス}人のために動けるのかもしれない。しかし、それは結局自分自身の為でもあつたのだ。彼ら自身が怖かつたから。思い出を失うことが、インデックスの笑顔を見続けることが。何度も何度も繰り返して、ついに彼らは折れてしまったのだから。

その事が、衛宮士郎には許せなかつた。立てた誓いを折るなんて、自分の道を違えるなんて。まるで、自分の理想に押しつぶされたあの男のようではないか。

その場では三人の間の空気が、一気に数度も下がったような感覚を覚えさせた。殺気、怒気、嫌気。様々な種類の思惑が、三人の間でぐるぐると渦巻く。そうして待つ事数分、

最初に口を開いたのは衛宮士郎であつた。

「……お前達の考えている事はよく分かつた。さあ、さつさと当麻の病室に行けばいい。受付で聞けば、部屋の番号ぐらいは教えてもらえるだろうよ」

「それで、あなたも私たちの邪魔をするつもりですか？　みすみすあの子を危険な目に

あわせると?」

「現時点ではどうしようともおもっていないさ。インデックスには時間がないのも確かだからな」

「どこまで、本当やらね……」

衛宮士郎の言葉に、ステイルは鼻をふんと鳴らしながら、神裂は無言で病院の中に入ってしまった。おそらく、そのまま上条の病室へと向かうのだろう。その背を見ながら、衛宮士郎はタバコをしまったのだった。

『予想以上に、相手も頑なでしたね』

『てつきり、インデックスを助ける為ならなんでもするよな気がしていたが』

一部始終を黙って聞いていたセイバーに、衛宮士郎は言葉を返す。あの二人が上条の部屋を訪れ終わった後に、衛宮士郎はその病室に戻るつもりであった。近くのベンチに腰を下ろし、コンビニで買ったおにぎりを食べながら衛宮士郎はセイバーと今後の事を話し合う。

『それで、どうするのです? 向こう側は全く協力してくれそうな気配はありませんでしたが……』

『とりあえず、インデックスの記憶が一年しか持たないことは、彼女の完全記憶能力以外の何かが原因である事とは確かだ。それは間違いないだろう』

『そうですね。問題はそれが魔術的なものか、科学的なものかですが』

『——さうらうか』

『はっ。』

突然衛宮士郎の口から漏れてきた物騒な言葉に、セイバーは一瞬固まってしまった。一体何を言っているのかと驚いたセイバーは、この真意を衛宮士郎に再び聞き返す。

『な、何を言っているのですシロウ？ インデックスを、……さうらう!?!』

『記憶の処理が終わった後でな。そうすれば、彼女の制限時間も一年延びる。その間に、科学側から治療できればそれがいいのではないかと思っただが……』

『いくらなんでも暴論過ぎませんか？ それに先程シロウは自分で言っていたではないですか、自分には科学者たちへの伝がないと』

妙な事を言い出した衛宮士郎をセイバーは慌てて止めるが、衛宮士郎自身はそれをそれほど暴論だとは思ってはいない。むしろ、上条や小萌先生の協力如何では十分に実現可能なことだと思っていた。

『しかしセイバー、これ以外に上等な案はあるか？ あの魔術師たちの説得など、少なくとも俺には不可能だと思うぞ』

『ですが……』

それでも実現性は薄いですよと、セイバーは言葉が続ける。なにより、そのインデックスをさらうというのも一苦勞以上の手間が掛かるのだ。相手は神裂火織にステイルⅡマグヌス、下手をすればそれ以上を相手取らなくてはならないかもしれない。幾ら衛宮士郎でもそれらを同時に、しかもインデックスをさらうという事を念頭に入れて動くのは相当辛いはずだ。だが現状、他にどうしようもないという話でもある。

そうして二人で頭を悩ませていると、しばらくして神裂とステイルが病院から出て行くのが見えた。どうやら、上条との面会は終わったらしい。二人は衛宮士郎に気付いていないのか、こちらを向くことなく街の雑踏へと消えていった。

『……戻るか』

『そうですね。トウマがあのだ二人に何を言われたのかという事も気になりますし』

遠目で見える限りは、二人の様子に変わったものは無かった。だが、彼らは心から安心したに違いないのだ。インデックスの無事を喜び、本当ならばずっと傍にいてやりたいのかもしれない。

衛宮士郎も彼らについてはとやかく言ったが、彼らがその気持ちを抑えに抑えて、インデックスとあくまで敵として接する精神力は素直に評価していた。そんな芸当は、よほど彼女を大切に思っていないければ出来る事ではない。しかしだからこそ、衛宮士郎は

彼らが一抹の可能性を捨ててしまった事が気に食わないのだが。

その後も衛宮士郎とセイバーは上条の病室に戻るまでの少しの間に色々話し合ったが、結局結論を出せないままに、二人はそのドアを開けたのだった。

彼は立ちふさがる

少し時間を置いて衛宮士郎が病室のドアを開けたとき、そこには既に起き上がっている上条と、それとは逆にベッドに倒れるようにして眠ってしまっているインデックスの姿があった。衛宮士郎が入ってきた事に気付いた上条は、なんとも言えないような顔をそちらに向ける。

「もう起きていたのか、当麻」

「ああ、士郎か。……おう、さつき目が覚めたところだぜ」

大分眠ってたみたいだなと続ける上条に、衛宮士郎は近くのイスを引つ張って座った。ちらりとインデックスのほうを見てみれば、彼女は上条のベッドに上半身を乗せて座りながら眠っている。彼女にはここ三日間、緊張しながら過ごしていたような節があった。

それが今では頬に涙のあとが残りながらも、ぐっすりとした感じで眠っている。その原因が先程の魔術師達と上条の会話にあると考えるのは、想像に難くなかった。

「それで、魔術師たちに何と言われたんだ？ まあ、大方の予想はついてはいるがね」

「知ってたのか？ さつきあいつらがここにいた事を」

上条が驚いたような声を上げるが、衛宮士郎はつまらなさそうにそれに返す。

「病院の入り口で会つてな。——なに、意味の無い会話をしただけだ」

上条には心なしか衛宮士郎が不機嫌そうに見えたが、今はそれを追求している場合ではない。何しろ上条はさつき起きたばかりだ。ステイルや神裂と言葉は交わしたものの、現状を完全に把握できているわけではなかった。

「俺の話もそうだけど、とりあえず今がどういふ状況なのか教えてくれ。この三日間に何があつたんだ？」

「……そうだな、そつちを先に説明すべきか」

上条のもつともな疑問に答えるべく、衛宮士郎はまず今のこの状況に至つた経緯を説明する事にした。即ち、上条が神裂火織に敗れてから、この病室に至るまで。衛宮士郎が神裂と少し戦つた事。その後、上条を病院へ連れて行つた事。インデックスの記憶についての自分なりの見解こそ話してはいないものの、この三日のことを衛宮士郎は話さず。

そして大まかではあるが全てを説明し終えた後、衛宮士郎は突然上条に向かつてばつと頭を下げた。

「すまない」

「……………はさ…」

いきなりの事に対して、ぼかんとした表情で上条は目を丸くするが、衛宮士郎はそれに構わず頭を下げ続ける。

「私をもっと早く当麻の元に行つていれば、ここまで重態にはならなかつたはずだ。」

——君の事を守れなくて、本当に申し訳ない」

謝つて済むことではないがなと付け加える衛宮士郎に、いやいやいやと上条は手を振りながら答えた。

「何言つてんだよ士郎！ さっきの話じゃ、士郎がいなきや俺はそもそも死んでただろうが！ 病院まで運べたのも士郎のおかげなんだろう？ 俺が感謝する理由^{ワケ}はあつても、恨む理由^{ワケ}なんかねえよ」

「しかし、もっと早ければ……」

「だあーっ、しかしもクソもあるか！ 俺はお前に感謝してんの！ もう、それでいいだろうが！」

「……………わかつた。当麻がそう言うなら、もうこの話は止めにしよう」・

まだ起きたばかりだというのに大声を上げてそんな事を言う上条に、衛宮士郎はなんだか少し救われたような気がした。ほつとしたというか、なんというか。少なくとも、気が多少楽になつたのは間違いない。そんな自分の心情の変化に衛宮士郎はクスツと笑うと、今度は上条の話を促した。

「さあ、今度は当麻の番だぞ。大体でも構わないから、あの魔術師達と何を話したのか教えてくれ」

「……つつてもなあー。改めて釘を刺されたというか、逃げ場がないと宣告されたつていうか」

そう語りながら、上条は先程のやり取りを思い返す。上条を庇うようにして魔術師二人の前に立ちちはだかるインデックスに、それをほんの一瞬だが、凄く悲しそうな目で見つめる彼ら。元は『仲間』だったはずの彼らが、ああしてインデックスに視線を向けられるのは、一体どれほどの苦しみだろうか。上条とて、それが察せないほど鈍くはない。

——そして、その場で真実を言えるほどの度胸もなかったのだ。当の本人たちが辛さに耐えて必死に『演技』をしているのに、どうして他人がそれを壊せよう。少なくとも、上条には不可能だった。インデックスに、目の前にいる二人は、本当はお前の仲間なんだと。

結局彼らはそのまま帰り、インデックスは緊張の糸が切れたのか直ぐに眠ってしまった。そんな様子を見ながら、上条にはインデックスに声を掛ける事もできなかったのだ。

そんな事を思い返しながらい通り返し終えた上条に、衛宮士郎はふむと頷いた。

「つまり当麻はもう知っているのだろうか？ 彼らがインデックスの本当の仲間だとい

事を」

「……ああ、あの夜に神裂つて奴から聞いたよ」

それこそ全部をな、と続ける上条に、衛宮士郎はそれなら話が早いと口を開く。

「ならば聞いたはずだな。インデックスの記憶の事を」

「インデックスの記憶は一年しか持たないって奴か。そんで、一年周期に記憶を消費さなきゃ、……………脳がパンクして、こいつは死んじまうって話だな」

上条の確認するような声に、衛宮士郎はそうだと頷いた。

「そして彼らが言うには、インデックスは脳の八十五%を魔道書の記憶に使っているという話も聞いたはずだ」

「……聞いたさ。だから常人の十五%しか、あいつは脳が使えないんだろう?」

「彼らが言うにはな。———だが私は、それは間違っていると考えている」

「は?」

「ここを見てくれ」

意外な言葉に口を開けて驚く上条に、衛宮士郎は上条のベッドの隣に山のように積んである医学書から一冊の本を引っ張り出し、あるページを開いてそれを上条に見せる。そこには人間の脳の働きや完全記憶能力について詳しく記されており、つまり要約すれば完全記憶で脳がパンクする事はありえないという事が書かれていた。

上条はその文章に一通り目を通すと、未だに眠っているインデックスの方を向いて呆然と眩く。

「つまり、こいつは……」

「そうだ。インデックスの記憶が一年しか持たないのは完全記憶能力のせいではない。おそらく他の何か、魔術にしろ、科学にしろ、外的要因のせいだ」

「——ッ!!」

衛宮士郎の言葉に、上条は目を見開いて息を呑んだ。そうして今一度確かめるようにして、衛宮士郎に問い掛ける。

「そのことは、……本当か? インデックスの記憶障害は、完全記憶能力のせいじゃないってことは?」

「確かだ。この本以外にも、様々な文献を遣って調べた」

見るか? と本を差し出す衛宮士郎に、上条はそれらをとって自分の目で確かめた。そしてそこに書かれている情報は、どれも衛宮士郎の見解が正しいと示すものばかり。ここに来て上条も確信せざるを得なくなった、インデックスの記憶障害が他にあるという事。医学書を読み漁っただけの二人だが、それを断言し得るだけのものがそこにはあったのだ。

「——は、」

そこまで考えて、上条は気がついた。記憶障害の原因が完全記憶能力にないのなら、それは一体どこにあるのか？ インデックスが記憶障害を起こす事で、彼女は一年おきに必ず教会の元へと帰らなければならない。たとえ彼女が何らかの理由で逃げ出そうが、その事は絶対なのだ。

では、それで誰が一番得をする？ 膨大な知識を有した歩く魔道図書館、禁書目録インデックス。彼女がどれだけ離れようが、どれほど身を隠すのが上手かろうが、必ず帰らなければならない場所そしきがあるならば。それは、その場所そしきにとって一番有利に決まっているはず。

「——イギリス、清、教」

そう、そんな存在は、教会以外に有り得ない。彼女を有する教会が、彼女を繋ぎ止めておく為に作り出した枷こそが、この記憶障害、一年周期の強制記憶消去だとしたら。

「……そういうことだ。あの二人はおそらく、真実を聞かされていないのだろうな」

呆然とする上条に、衛宮士郎が静かに告げる。上条はしばらく黙って考え込んでいたが、不意に気がついたかのように口を開いた。

「……このことはあの二人には言ったのか？ その、インデックスの記憶についての話を？」

「勿論言ったさ。当麻と奴らが話す直前にな」

だが聞く耳持たなかったよ、と続ける衛宮士郎に上条は、な……、と口を開いた。

「そんな！　だつてインデックスが助かるかもしれないんだぞ！　またあいつらがインデックスと笑いあえる日が来るかもしれないねえつてのに！」

「私の事を信用できないそうさ。……まあ、彼らがどう動こうが私には関係ないがな」

ふう、と息を吐く衛宮士郎だが、そのまま間髪いれずに上条に尋ねる。

「で、当麻はどうする気だ？　彼らの言うとおりに、大人しくインデックスが記憶を消され続けるのを認めるのか？　それとも、」

それとも、私と一緒に對抗策を考えるか？　と問い掛ける衛宮士郎。それに対する上条の答えは一つしかない。

「決まってるあー！　どんな手を使ってでも、絶対にこいつを救つてやる！」

まるで自分自身に誓うような上条の答え。いい返事だ、と衛宮士郎はにやりと笑うのだった。

「それで、士郎はどつちが原因だと思つてんだ？」

科学側　か？　魔術側か？　と聞く上条に、衛宮士郎はそうだなと返す。

「私としては、科学側が原因ではないかと思つている。……ここの科学技術で、そういった事が可能かどうかは知らないが」

「それは、なんでだ？」

なんか確証があんのかと上条は尋ねるが、それに対する衛宮士郎の答えは何だかぱつとしなかった。

「まあ、何と言うか、私なりにインデックスに解呪を試みたのだが、どうも上手くいかなくてな。だから、もしかしたら科学的な要因ではないかと考えたのだが」

正直絶対に自信があるわけではない、と言う衛宮士郎。上条自身もふーんと頷きながらも、どこか納得がいかない様子でインデックスの方を観察する。突つ伏したように眠っている彼女は、相変わらず起きる気配がなかった。二人ともインデックスを起ささないように気を遣ってはいるが、そうでなくとも起きないであろうほど、彼女はすやすやと眠っている。

「……でも、少なくとも俺は能力なしにそんなことが出来る技術は知らねえ。それに魔術にどっぷり使っている教会が、最先端の科学技術なんか扱えんのか？」

「本来ならそうなのだが……、やはりまだ情報が足りないか」

うむむと悩む衛宮士郎だが、上条は上条で今までのことを考えていた。上条の右手に宿る幻想殺しは、イマジネーション異能の力ならそれが超能力だろうが魔術だろうが、問答無用で打ち消せる力を持っている。

今までにも、上条は何度もその右手でインデックスの身体に触れたことがあった。し

かし何度も何度も触れたのに、それでもインデックス自身に右手が反応した事はないのだ。

(やっぱ、魔術が原因じゃないのか?)

衛宮士郎はその可能性を考えているようだが、上条としてはどうも腑に落ちない。学園都市外でそこまでの脳の研究が進んでいるなんて聞いたことはないし、なにより彼らは魔術のプロなのだ。どうして得意分野でなしに、わざわざ科学技術に頼る必要がある? 魔術のプロならばプロなりに、な同業者かに気付かれないような細工の方法だってあるはず。

(……何か見逃しているはずだ。何か、もっと重要な事を)

上条当麻は考える、幻想殺しが聞かない理由を。どんな魔術でも触れれば解呪できるので出ていない。それはつまり、実は触れていなかったということに他ならないのではないか?

上条はインデックスを起こさないように、そつとその頭に右手を置いた。やはり右手は反応することなく、ただただ髪の毛の柔らかな感触が残るだけだ。魔術に関してはド素人の上条だが、記憶に関する魔術ならば普通は頭付近にかかっているはずだ……と、思う。

しかしもしも、もしも脳や頭蓋骨なんかに直接刻んであるようなものならば、上条には手が出せない。さすがの幻想殺しも骨肉なんて貫通しないし、もしそうならば大規模

な外科手術が必要となってくるだろう。

「……………おい、いくらなんでも静か過ぎやしないか？」

「——え、」

どうすれば頭の中まで幻想殺しが届くか考えていた上条に、不意に衛宮士郎の声が届いた。見れば、衛宮士郎はインデックスの顔を険しい顔で見つめている。

「さつきからインデックスが全く動かん……」

そう言いながら、衛宮士郎はインデックスの額に手を伸ばした。ひやりとした温度……ではなく、どこか熱っぽいぬくもりが指先から伝わってくる。心なしか、息も荒い気がした。

「制限時間が近づいてきた証かもしれない……。果たして今日の夜までに、原因が分

かるかどうか……」

「くそっ……………」

衛宮士郎の言葉に、上条はもどかしさから舌打ちする。こんな時に、何も出来ない自分が悔しい。神のシステムさえ打ち消せるだけの力が右手に宿っているくせに、目の前の少女さえ救えない自分が。

しかしたとえば脳に何かが刻まれていたとして、上条にどうにかできるものなのか。そもそも手術するにしろ、いまから間に合うのかも分からないし、伝もない。問題は、山

積みだった。上条はインデックスの顔を見ながら、髪をくしゃくしゃと掻きあげる。

「だいたい、まだ魔術が原因かすらも確信できねえのに——」

そうして言葉を紡ごうとした上条の表情が、止まった。上条の目がある一点に集中する。それは、浅い呼吸を繰り返すインデックスの唇。そしてさらにその奥にある、奥の奥。何か彼女の身体に不釣り合いな、赤黒いものが見えたのに気がついたのだ。

「——」

「おい、当麻？ 一体何をして……」

衛宮士郎の疑問には言葉を返すことなく、上条はインデックスの口に手を当てる。そこまでしても起きようともしないインデックスにはやはり何かしらの異常を感じるが、今はそんな事を気にしている場合ではない。歯と歯の間に強引に手を入れ、その口をこじ開けた。

「——あつた」

黒い紋章^{マーク}が。彼女を取り巻く災厄の、全ての元凶が。喉の奥にぬらぬらと光り轟く影、漫画か何かで見えるような紋様が、そこに刻まれていた。

「見えたぜ、士郎。こいつの終わらねえ連鎖の、その終結《エンディング》が！」

語気を上げて笑うようにして宣言する上条に誘われ、インデックスの喉奥を覗き込んだ衛宮士郎にも漸く合点がいった。そしてそのままその紋様を触ろうとする上条を引

き止める。

「何で止めんだよ！ こいつを消せば、インデックスは助かるんだぞ！」

「そいつの正体を調べるのが先だ当麻。いきなりそれに触れるのは軽率すぎる」

「でもこいつさえ消せば……！」

「落ち着け！ 何か罠が仕掛けられていられるかもしれないが！ ここは病院だぞ。この場で何が起きるか分からない以上、軽々と行動することなどできん！」

そう、こういったものには罠が仕掛けられている事は定石だ。禁書目録インデックスのように、イギリス清教が気を掛けている存在なら尚更である。

「とりあえず、描かれている紋章を写し取るぞ。両手でインデックスの口を押さええておいてくれ」

「……わかったよ」

衛宮士郎の指示に、渋々ながら従う上条。なるべく力を入れないようにしながら、そつとインデックスの口を空けた状態で固定する。

衛宮士郎はこの世界の魔術にこそ疎いが、それでも魔術師の端くれである。たとえ世界が違えども魔術の元となる歴史さえ一緒ならば、ある程度の大まかな予想くらいは立てられるのだ。メモ帳を片手に待つこと数十秒、驚くほどの速さで衛宮士郎は紋章を描き写した。

「随分早いんだな」

「複製にはそれなりに自信がある。……もう手を離していいぞ、当麻」

上条はその手を離し、衛宮士郎が写した紋章を覗き込む。そこには上条では理解できない、テレビの星占いで見るような図形が描かれていた。顎に手を当てながら考え込んだ衛宮士郎に、しばらくして上条が声を掛ける。

「なんか分かるか、士郎？」

「……複雑な術式だ。おそらくこの一文字で、いくつかの結界を重ねてあるに違いない」
それがどんなものかは分からんがな、と付け加える衛宮士郎。そもそもこういった魔術に詳しいわけではない彼に、読み取れるのはここまでだった。それでも、この紋様を見つけたこと自体が既に大きな収穫だ。これさえ分かれば後は幻想殺しでどうにでもなる。

「しかし、随分といやらしい位置に刻んだものだ……。当麻の手は届くか？」

「この距離なら届くだろ。……インデックスにはちよつと無理させちまうけど」

「それは仕方あるまい。問題は、どこで解呪するかだが……」

悩む衛宮士郎だが、元より選択肢がそんなに多いわけでもない。近場で、衛宮士郎が人払い出来るくらいの規模の場所など、一箇所しかないのだから。

「やっば、小萌先生のアパートを借りるしかないんじゃないかねえの。あそこなら色々都

合もいいし」

「それに一時の間なら、あいつらの目もごまかせるか……」

そう、この強行において一番のネックとなるのがあの魔術師二人のことだ。下手にインデックスを妙な場所、たとえば人気のいないビルだか工場だかに連れて行つて解呪をしようとしても、あの二人が異変に感じて邪魔をしてくる可能性は高い。

いまさらこちらの話を信じてもらえとも思わないし、いかにも上条が退院して家に帰るかのように見せかけるならば、小萌先生のアパートはちようどいいのである。

「インデックスは私が背負つていくとして……、当麻はもう動けるか？」

「あー、ちよつときついかな。まだ体がふわふわしてて、ぼうつとした感じだ」

「……………ならば移動はもう少し暗くなってからだな。人目にもつかないし、病院も抜け出しやすいだろう」

上条の体調から、結局三人が小萌先生のアパートに移るのは暗くなってからという事に決まった。インデックスの体調も気がかりだが、タイムリミット現実性を求めるならば致し方ない。夜中の十二時までが制限時間なら、少なくともその時間までは無事だという事でもあるのだ。こうして二人は、外の風景が闇に染まるまで病室で待機していたのであった。

夜、時刻は九時を過ぎた頃であろうか。病院の入り口から影が二つ、歩道に向かつて

足を進めていた。一つは勿論上条当麻。体中に包帯を巻きながら、ゆっくりとしたスピードで歩いている。もう一人は衛宮士郎。インデックスを背負いながら、上条に歩幅をあわせて進んでいる。病院を出た三人は、小萌先生のアパートに向かつて歩いていた。アパートに小萌先生がいないのは事前に上条が電話して、既に確認済みである。もちろん上条が三日間の眠りから醒めた後に小萌先生には連絡を取って入るが、そのときは色々すつ飛ばして大急ぎで病院に駆けつけたらしく、乱れた髪で大いに喜んで騒いでいたのを覚えている。彼女は夕方には帰ったが、インデックスのことは疲れ果てて眠っているのだと説明すると、納得したような顔をみせた。

そんなことがあったので着替える暇なく、未だパジャマ姿の上条が衛宮士郎に心配そうに声を掛ける。

「いいのか？　こんなに堂々と出てきて」

「下手におどおどしながら入り口から出たり、やましい事があるかのように窓から逃げ出したりするのは逆に危ないだろうよ。これなら奴らもそうそう気付かん。それに奴らにしても、病院で術を施すのはやり辛いはずだからな」

声を落ししながら話す二人は急いでいる割に歩みが遅いが、上条の怪我もあるので仕方のない話であった。あまり風はなく、外は既に夜の帳が下りている。夜の街並みをしばらく二人で歩いていると、セイバーが衛宮士郎に話しかけてきた。

『このペースで行けば十時前にはコモエのアパートに着きそうですね』

『まあ、何の妨害もない場合はそうだろう』

『……シロウは魔術師たちからの妨害がある?』

『少々時間が押している。制限時間が近づいて、奴らも気が立っているだろうよ』

そう言つて衛宮士郎は、その意識だけを後ろに集中させる。病院を出たときから感じていた視線が、二人に注がれているのを感じ取る事が出来た。ひりつく様なとまでは行かないものの、明らかに監視されているのがわかるほどだ。おそらく向こう側も警告を込めて、わざとそうさせているのだろう。

『このままやり過ぎせればいいがな……』

『彼らはどう動くかわかりませんね。昼間の会話で余計な刺激を与えてしまったかもしれませんし、早めにインデックスを拘束しておこうとすることも充分に考えられます』
衛宮士郎がセイバーとそんな事を話しながら歩いているうちに、ようやく小萌先生のアパートに着くことが出来た。

近代的な学園都市に似合わないボロアパートが、ひよつこりと街中に生えているような感じだ。そんなアパートの階段に、上条が足早に近づこうとすると、

「……当麻、止まれ」

衛宮士郎が、片手で上条を制した。その目は鋭く、アパートとは反対方向の、つまり

上条たちが向かってきた方向を見据えている。上条は嫌な感覚がした。この感覚は、あの三日前の夜に感じた違和感と同種のものだ。やけに人の気配がなく、不気味なほどの静寂。気温が一気に下がったような、夏なのに寒気を感じ、冷や汗が止まらない感覚。衛宮士郎は上条を近くに呼び戻すと、インデックスをゆつくりと背中から下ろし、上条の手に任せた。

「……あいつらか！」

「そのようだ。……少しの間、インデックスを頼む」

もしもの時のために、インデックスを上条に背負わせる衛宮士郎。そうしてインデックスと上条の前に守るように立ちはだかると、虚空に向かって声を放つ。

「いるのだろうか！　ここそこそと隠れていないで、出来たらどうかね！」

そんな衛宮士郎の言葉に答えるかのように、夜の闇の中から二つの人影が姿を現した。赤い長髪が目立つ、真つ黒な神父。長い刀を腰に挿した、黒髪の女剣士。つまり、ステイルⅡマグヌスと神裂火織。二人は上条たちにゆつくりと近づきながら、衛宮士郎に声を掛ける。

「別にここそそなどとはしていませんが。それに制限時間リミットが近づいた今、標的ターゲットを監視するのは極々当たり前の事だと思いませんか？」

「十二時になったら迎えに来る、と言っていたのはそちらだろう。まだ二時間もあると

思うが？」

来るのが早すぎやしないかね、と口の端を上げながら聞く衛宮士郎に、ステイルが鼻を鳴らしながら答える。

「あの子の傍に居るのが、そこに突っ立っている超能力者だけならそうしたかもしれないけどね。……お前は怪しすぎる。正直、二時間も猶予なんて与えたくもないんだよ」

禁書目録インデックスの傍に居る外部の魔術師。それがどれほど危険な存在なのか、彼らは知っている。使いようによっては魔神にすらなりうる知識の蔵書は、加えてこの妙な男の傍にあることで彼らの中では危険度が相当に増しているのだ。

十二時が近づいた今、万全を期すために衛宮士郎とインデックスを早めに引き離しておこうとする彼らの考えは当然であった。

「困ったな、どうしてもここでインデックスを回収するのか？」
「残念ながら。彼女との、お別れの時間を上げててもよかったです、そこまであなたは信用できない」

あと一步、あと数分あればいいのに。直前で詰まされた現状に、上条は齒軋りする。
ここまできて、あとはあの紋様に、上条の右手、——
< r p > (< / r p > < r t > イマジンプレイカ < / r b > < r b > 幻想殺し < / r b >

</ r t > < r p >) < / r p > < / r u b y > が触ればいいだけなのに。

(くそっ！……ここまでできたのに、あと少しなのに——)

悔しげに顔を歪めながらそこまで考えた上条は、ある一つの手を考え付いた。

「——あ、」

時間がなければ、稼げば良い。流石の上条にも魔術師二人、しかも神裂火織もまとめて相手にするなんて不可能な芸当だ。そう、上条当麻には。だが、ここにはもう一人いるではないか。上条とは違う、もう一人の魔術師が。インデックスのために戦い、上条のために身を投げ出せる、そんな男が。

(土郎……………ッ！)

だが、その選択は本当に正しいのか？ いくら衛宮士郎でも、あの魔術師二人相手に戦えるのか。いや、そもそも生き残れるのか。幻想殺しという、なかば非常識な能力ちからを持った上条ですら危ういの。

(ぐ……………ッ！)

この選択肢は、リスクが高い。全滅の恐れすらある、危険な賭け。しかしインデックスを助けるには、彼女がこれからも笑って過ごせるには、この選択肢以外有り得ない！

「……………、」

上条は、意を、決した。この場は衛宮士郎に任せる。そして自分には、自分にしか出

来ない事をやる。これは衛宮士郎を犠牲にするわけではないのだ。自分を信じる彼を信じて、彼を信じる自分を信じる。そのための、完全無欠な幸せな結末のための選択肢。見れば衛宮士郎も、上条のほうを向いて笑っていた。いつもの顔で、あの皮肉げな表情で。彼は目で語っている、ここは私に任せると。その視線に覚悟を決めた上条は、衛宮士郎に向かって頼む。

「士郎、頼む。俺がインデックスを連れて行く。だから士郎は、ここで時間を稼いでくれ」

「——な、」

上条の口から出た意外な言葉に、思わず固まる魔術師二人。そんな二人を尻目に、上条はぼろぼろの身体で精一杯、インデックスを背負って小萌先生の部屋へと向かおうとする。

当然神裂とステイルは上条を止めようとするが、そこに立ちふさがる男が一人。いつの間に出したのだろうか、両手に剣を携えて、彼は一人覇気も鋭く立ちはだかる。その勢いに飲まれる二人を前に、衛宮士郎は上条に尋ねた。

「ところで当麻。一つ確認していいかな」

「……どうした、士郎？」

上条からはその背中しか見えないが、彼にはやけに、その背中が大きく見える。

「ああ。時間を稼ぐにはいいが——別に、彼らを倒してしまっても構わんのだろう？」

そうして衛宮士郎は、そんな台詞を言い放った。一瞬啞然とする上条だが、すぐさま顔を笑わせながら言い返す。

「おう。そのわからずやを、ぶっとばしてやれ！」

威勢の良い上条の返事に、くくくと喉を鳴らす衛宮士郎。こうして衛宮士郎対魔術師、その第二幕が、上がったのだった。

十でなく

夜は遅く、人気もなしのアパート前で対峙する三人。人払いの結界でも張つてあるのであろう、およそ見渡す限りの範囲には人の気配すら感じられない。

衛宮士郎とて流石に相手が人払いの結果を張ることまで予期していた訳ではないが、それでもこの場所まで上条とインデックスを引つ張つてきたのには理由があった。

一つは、この場が一番場慣れているということだ。インデックスが小萌先生のアパートに世話になつてからというもの、衛宮士郎はその周辺の土地勘を念入りに頭叩き込んでいた。いつかこういう事態が来る場合に備えての当然の対処であつたが、それがそれなりに功を奏したと言える。

そして、もう一つは距離的な問題だ。ただ単純に遠く離れた場所まで引つ張つていく時間がなかつた事もそうだし、あくまで相手方を騙しつつ——インデックスの内部に直接『幻想殺し』を叩き込む事ために場所を移しているという事を極力悟られなくなかつたという事もある。明らかに人気の無い所までインデックスを連れて行つては、上条達が何か企んでいる事を神裂たちに早々に看破されてしまうであらう。

……誤算であつたのは神裂たちの動きの早さだ。まだ午前零時を迎えるには間が

あり、少なくともアパートに入るまでは手は出してこないであろうと衛宮士郎は予想していたのだが、想像以上に神裂たちに警戒されていたようだ。結果として、今こうしてぎりぎりの状況で、衛宮士郎が単独で魔術師二人を相手にしなくてはならなくなった。

稼ぐ時間は一分か二分か。重症の人間が、さらに重症の人間を背負って階段を上っているのだ。ただ二階に上がりインデックスを部屋に連れ込むだけといっても、それだけは掛かるであろう。この近距離でそれがきついのは当然、むしろ無謀かもしれない。

『ぶつとばしてやれ』

上条のその言葉が終わってから一秒と経たないうちに、戦線は目まぐるしく動き始める。まず始めに動きを見せたのは聖人、神裂火織であった。

彼女はしやがみこんで脚をぐぐつと縮ませると、まるでバネのようにしてその全身ごと跳ねる。一直線、只真つ直ぐに衛宮士郎の頭上を跳び越すことで、上条に迫らんとする神裂。それはまさしく、音速を超えた弾丸の如く。

そうして発射された身体は、しかし突如として神裂の目の前に現れた黒い無骨な塊によって進行を妨げられた。その正体は、ひたすらに巨大な岩の斧剣。

神裂が跳ぶか跳ばないかの瞬間、彼女が何をするかを察した衛宮士郎が、その右手を高々と掲げつつも投影したものである。前方に振り下ろす勢いで投影したそれは、両者の重量差も手伝って、ごきりと鈍い音を響かせながら神裂の動きを止めた。

神裂とて当然斧剣ごと切り伏せようとしたが、ここは空中、足元の踏ん張りも効かず方向転換も出来ない。そしてなにより、第五次聖杯戦争を通して彼のギリシヤの大英霊が振ったその武器は、たとえ名刀であったとしてもそんじよそこの刀剣では切れはしない。聖剣、魔槍、たとえ何の魔力がなくなるとも、数々の英霊の象徴たる宝具と真正面から切り結ぶ事すら可能な斧剣だ。

振り下ろす重力に任せた、しかし鋭い一撃は、神裂を刀ごとステイルのいる位置に弾き飛ばした。そして衛宮士郎はそのまま斧剣も投げ打つ。神裂と一緒に着弾した斧剣は、コンクリートの地面を大きく抉りながら爆風のような風を起こした。ぶわっと土煙を起こし、辺りに風と共にコンクリの礫が散らばる。

もちろん衛宮士郎は追撃の手を休めない。斧剣を振り下ろした右腕をその反動で体の前でクロスさせながら、さらに暗器であるダークを投影。弓のように反らした腕から、三本のダークを爆心地へと放った。その名の通り真っ黒に染められた短剣は、闇夜では視認する事も困難だ。

だが放ったダークは、いずれも土煙の中から飛び出してきた剣閃によつて弾き飛ば

される。そうしてその後を追うようにして、紅い焰の剣が衛宮士郎に向かって飛来してきた。

飛んで来たそれを半身を逸らすことで避けた衛宮士郎の目の前に次に現れたのは、刀を構えたままこちらに切りつけてくる神裂の姿。当然、衛宮士郎は干将・莫耶で彼女を迎えうつ。

(まずいことになった……)

神裂の猛攻を双剣で凌ぎながら、衛宮士郎はそう考えていた。この現状、実は衛宮士郎が想定していた中では相当に部の悪い事態である。

そもそも一対二という不利な状況から始まったこの戦闘。万全の魔術師二人に対し、衛宮士郎側は守るべき手負いが二人もいるのだ。そうした場合、今このように一対一の状況を作られるのは非常にまずい。

何故かといえば、

『シロウ！ ステイルⅡマグヌスの方が階段に！』

そう、こういった事態が起こりうるから。セイバーの切迫した声に、衛宮士郎は一瞬目だけでその場を把握した。衛宮士郎が神裂に足止めされている間に、ステイルが上

条を止めようと足を進めているのだ。

(くそつ、このままでは！)

直ぐにでも追いついてしまうであろう、舌打ちする間も惜しい現状。長々と考える暇はない。ここでインデックスが、上条が捕まったら全てが終わる。なんとしても、何に変えても今この一瞬を守らなければならない。

そんな今を打開するために衛宮士郎が取った行動とは、

「ぐうっ!!」

呻きと共に、血飛沫が、宙を舞う。胸から噴き出したそれは、当然ながら衛宮士郎のもの、そして、

「っ、の……、部外者があ!!」

階段の手前でガクンと膝を折りながら、吼える様にして叫ぶステイル。彼の脚からは、真っ赤な血が流れ出ていた。その傷口には、鈍く輝く黒鍵。ステイルの脚を縫いとめるようにして、それは地面に深々と刺さっている。

そう、衛宮士郎はほんの一瞬だけ神裂火織から完全に意識を外して、ステイルの脚に向かつて黒鍵を投げつけたのである。黒鍵には返しこそないものの、前のめりに大きく倒れこんだ体勢で、背後から脚に刺さった剣を抜くのは至難の業だ。これで、ステイルの動きは止められたはずである。

もしも相手が上条一人なら、ステイルも炎剣を背後から投げつけなければいいであろう。だが上条はインデックスを背負つて階段を上つてゐるのだ。しかも彼女の『歩く教会』は既に機能を果たしておらず、上条を攻撃すればインデックスにも被害が及ぶ事は必至。

インデックスを傷つける事を良しとしないステイルは、彼女ごと上条を攻撃できはしない。ステイルに残された行動は、何とかしてコンクリの地面に刺さつた黒鍵を抜くことだけである。

しかしこうして何とかステイルの足止めには成功したものの、その代償は軽いものではなかつた。神裂ほどの達人を前にして、彼女から一瞬でも意識を逸らした事の対価。それは衛宮士郎の胸についた深くはなくとも、決して浅くもない傷。

その切れ目からはどくどくと血が流れ、衛宮士郎の服が鮮血で染まつてゆく。せめて彼が聖骸布か鎧でもつけていればマシであつたものを、ここに来るまでの道中で上条を引つ張るようにして歩いてきた衛宮士郎にそんな時間はなかつたのだ。

動けば動くほど血は止め処なく流れ続け、地面には紅い水滴が飛び散る。だがそれでも、それでも衛宮士郎は剣を振るうことをやめはしない。それどころか神裂には、今の衛宮士郎が先日よりも鬼気迫るような雰囲気を持つて自分に向かつてきているように感じた。

しかし神裂とて譲れないものがあるのだ。インデックスに掛ける彼女の熱意も、並々ならぬもの。自分がどれほど嫌われようが、今の彼女にはこうする事でしかインデックスを助ける方法を知らなかった。そうして彼女もまた、衛宮士郎に気圧される事なく刀を振るい続ける。

まるであの夜の焼き直しであるかの如く、両者の剣閃は絶え間なく辺りに響き渡った。いや、もしかするとあの時よりも更に激しい金属音の円舞曲^{ロンド}。

永遠に続くかのように感じたこの二度目の剣舞も、だが片割れが崩れる事でその均衡は傾く。

崩れたのは衛宮士郎、傾いたのは神裂のほう。

血を流しすぎたのか、衛宮士郎の体のバランスがほんの少し、ほんの一瞬だけぶれたのだ。そしてその一瞬を、神裂は見逃さない。

今度こそ衛宮士郎の動きを完全に止めるべく放たれた一撃は、とつさに防御した衛宮士郎の莫耶を遙か後方へと吹き飛ばし、その手にさらに大きな隙を作った。

(勝った！)

内心、神裂がそう思ったのも無理はない。二刀流の使い手がその片方を手放すという

事は、それすなわち敗北といつても過言ではないのだ。

しかし神裂が次の瞬間目にしたのは信じられない光景であった。

「なっ!!」

なんと、確かに衛宮士郎の手から弾き飛ばしたはずの莫耶がいつのまにか、再びその手に納まっているではないか。まるで何事もなかったかのように二刀で切りつけてくる衛宮士郎に、流石の神裂も不意をつかれる。

緊急回避で後ろへと飛びのいたは良いものの、その莫耶に左腕を浅く切られてしまっていた。

(馬鹿な！ 確かに片方、弾き飛ばしたはず……！)

だがその弾き飛ばしたはずの莫耶も、なぜかどこにも見当たらない。

(こいつ、もしかして今何らかの魔術を使った?)

忘れてはいけませんが、神裂もまた魔術師だ。目の前で起こった現象にどんな魔術が行使されたかなど、幾らでも予測できる。ただ妙なのは、そこに直前まで一切の魔術的兆候がなく、魔力も殆ど感じなかったという事か。

答えとしては単純で、衛宮士郎がただ跳ばされた莫耶を消して再投影しただけの話なのであるが、種を知らず、別世界の魔術師である神裂にはそんなことは分からない。

思わず苦い顔をした神裂であるが、それでも未だに彼女が有利なのは一目瞭然だ。一

矢報われたとて、たかが浅い傷が一筋。それに対して衛宮士郎のほうは、いよいよ全身血塗れになってきている。そんな現状で神裂が苦い顔をしているのは、別に理由があった。

「……この状況で、あなたは どうしてそんなに余裕の表情でいるのです？ —— 既に結果は見えていると思いますよが」

単純に考えれば、このまま戦闘が進めば衛宮士郎はいつか倒れる。だがそれにもかかわらず、彼の顔には先程からずっと薄い笑みが張り付いているのだ。警戒心を崩さない神裂の疑問の声に、衛宮士郎はふつと口の端を上げて答えた。

「確かに、もう決着は見えているな」

「……でしたら何故？」

「ただし」

衛宮士郎はそこで一息つくくと、アパートの方へと向き直る。

「我々の勝ちだ」

「—— ツ!？」

衛宮士郎の言葉が終わるか終わらないかの瞬間、突如としてアパートの二階の側面から、巨大な光の光線が迸った。既に戦闘が始まってから、ちょうど二分が経過していた所であった。

「始まったか!!」

まるで何かが起こることを予測していたかのように、光の柱が出てきた小萌先生の部屋に向かつて走り出す衛宮士郎。時間は充分稼いで、後は上条とインデックスのアクション待ちであったのだが、まさかこんな規模の罠が仕掛けられていたとは思ひもしなかった。

後ろで何か叫んでいる神裂やステイルは無視して、全力で部屋の前まで跳ぶ。そうして扉を切り倒した衛宮士郎が見たのは、魔法陣を眼前に浮かべながら極光の光線を発しているインデックスに、それを『幻想殺し』で何とか防いでいる上条の姿。

「当麻! 簡潔でいい、状況を説明してくれ!」

「あの魔法陣に右手を突っ込んだら、こんなふざけた攻撃してきやがった! なにが魔術は使えないだ、クソツ!!」

悪態をつく上条だが、その顔はどこか笑っているようにも見える。それは突破口をつかめたからか、インデックスを救えるかもしれないという希望が見えたからか。

「よくわかんねえけど、今のインデックスに『幻想殺し』を叩き込めれば……!」

そこまで言って上条は、苦しげに歯を食い縛る。この謎の光線に、『幻想殺し』の処理

が追いついていないのだ。じりじりとゆっくり、しかし確実に何かが浸食してきている気がする。

『あの魔法陣さえ壊せれば…… セイバー、対魔力まかせて突っ込めるか?』

『……………厳しいかと。私には元々の竜の因子による対魔力も備わっていますが、それでは対応できそうにありません』

セイバーの答えに、衛宮士郎はそうかと返す。確かにこれほどの魔力の奔流、たとえ対魔力がAであつたとしても厳しいであろう。

(だとすると残された手は……)

そうして衛宮士郎がある武器を投影しようとした矢先、ちやうど衛宮士郎の後ろから神裂とステイルの声が聞こえてきた。

「なんだ——これは——」

「そんな、ど、『竜王ドラゴン・プレスの殺息』だなんて…… いや、それよりどうしてあの子が魔術だなんて!!」

そろって驚愕の声を上げている二人だが、衛宮士郎には一々反応している暇はない。上条の後ろを回りつつ部屋の反対方向に移動しながら、手元の干将莫耶に加えて、聖骸布の外套、そしてライダーの釘剣を投影した。

衛宮士郎が直接攻撃できないのなら、上条が『幻想殺し』を叩き込めるようにサポー

トすればいい。インデックスの法衣を狙って、衛宮士郎は釘剣を投擲する。体狙いでなくあくまで服狙いの一撃は、インデックスの服の端を針を通すかのように射抜いた。

ライダーの釘剣はその所有者の意思が命ずるまで、貫いたものから決して抜けることのない。衛宮士郎は服ごとインデックスを引くことで、光線の狙いを上条から反らそうとしたのだ。

しかし、

「ちっー！」

『どうやらあの魔法陣は、インデックスの『眼球』と連動しているようですね』

それをインデックスは、首を上条のほうに向けたままで、ぐるんと不気味な動きで身体だけを動かすことで回避した。インデックスを注視していたセイバーの分析に、衛宮士郎は舌打ちをする。

そもそも光線の規模が大きすぎてどこまで被害が出るかわからない以上、あまり派手にインデックスをひっくり返すは出来ないのだ。方向転換程度の軽い力で引つ張ったのが逆にあだとなってしまうらしい。

インデックスを観察しつつ、衛宮士郎が釘剣を抜いて次点の策を模索していると、その耳に上条と神裂、ステイルの言い争う声が聞こえてきた。光の柱が唸らす轟音で良く聞こえる訳ではないが、魔術師二人が上条のその言葉に明らかに動揺しているのが分か

る。

いくら超能力があるとはいえ、ただの一般人である上条の言葉が、今まで幾度となく修羅場を潜ってきたはずの魔術師を確かに揺さぶっていた。

——その、そのなんとおかしな事か。こんな状況なのに、衛宮士郎は何だか急に笑いたくなくなってしまった。つくづく変な奴だと、衛宮士郎はそう思う。衛宮士郎自信が感じている事ではあるが、上条の言葉は、やけに迫り響くのだ。

言葉だけでない、その行動もまた、上条の持つ何かを後押ししている。上条の行動原理はよくわからないが、彼に関わると、やってやる、出来ると思えてしまうから妙なものである。

「——手を伸ばせば届くんのだ。いい加減に始めようぜ、魔術師！」

そして上条が、叫んだ。その言葉に魔術師達が息を呑むのが、衛宮士郎にもわかる。だが同時に上条の右手から、グキリと妙な音が聞こえた。

「——当麻！」

このままでは、持たない。衛宮士郎の背筋に走る悪寒。考える間もなく、衛宮士郎はインデックスの足元に釘剣を突き刺す。こうなったら被害がどうこうと言っていられ

なかった。上条がいなくなってしまうたら、そもそもインデックスを止める手立てがなくなってしまうのだ。

(せめて真後ろに倒れてくれれば……!)

そうすれば被害は最小限だが、倒れる方向までコントロールできるわけではない。そうしてついに光線が右手を弾き、ぐらりとよろめく上条の眼前に迫った。もはやどうしようもなく運に頼らざるを得ない状況であるその時、

「——ッ!!」

神裂火織が、何かを叫んだのが聞こえた。同時に、空中を煌く何か走り、インデックスの足元が逆三角形に切り裂かれる。『七閃』。神裂の操る鋼糸が、インデックスの足を崩したのだ。足場さえ綺麗に切り取れたならば、インデックスを狙った方向に倒すのも容易い。

衛宮士郎がすかさず釘剣を引けば、その狙い通り、インデックスは後ろ向きに倒れた。同時にインデックスの『眼球』と連動している魔法陣も、がくと上方向に逸れる。光の柱はアパートの壁と天井を真っ二つに切り裂き、空高く、雲をぶち抜く勢いで立ち上がった。

『なんとという出力……!! シロウ、インデックスにアレを振り回させては……、』

『わかっている。数秒も持たないかもしれないが、盾で防ぐ!』

まさに竜の息吹の如き、想像以上の火力。インデックスが体勢を立て直す前に、衛宮士郎が『熾^{ロ!}天覆^アう七つの円環^ス』で時間を稼ごうと準備する。そしてインデックスが倒れているうちに彼女に迫らんとする上条。

だが彼女が首だけを巡らせて、上条に再び襲い掛かからせた光の柱を防いだのは、聳え立つ炎の巨人であつた。

「魔女狩りの王！」

上条を守るかのように両手を広げて光の柱を受け止めるその姿は、まさに巨人。幾度となく再生を繰り返しながら、十字架のように立ちふさがる。

魔術師達の意思を汲んだ上条は、ただひたすらにインデックスへと走り寄つた。しかし脅威はまだ去つたわけではない。『竜王^{ドラゴン・ブレス}の殺息』が破壊した天井が、その破片を白く輝く羽に変えて舞い降りてきているのだ。

アレに触れば何が起こるか、到底予測もつかない。上条に襲い掛かるそれを、今度は衛宮士郎が打ち落としてゆく。釘剣を振るい、時には干将・莫耶でなぎ払う。

いまや、この部屋にいる全ての魔術師が、上条のために動いていた。神裂と衛宮士郎で羽を落とし、ステイルが光の柱を防ぐ。今この時だけ、彼らの動きは一つに集約されている。

数秒か、数十秒か。ついに上条が、インデックスの手前までその身を辿り着かせた。

あと少し、もう手を伸ばせば彼女に届く、そんな距離まで。だが何もかもが上手くいつているわけではなかった。

「——警告、第二二章第一節。炎の魔術の術式を逆算に成功しました」

インデックスの言葉と共に、突如として光の柱の色が赤黒く変わり始めた。そしてみるみるうちに、魔女狩りの王の勢いが衰えてゆく。

同時に上条の頭上に降りかかる羽の量が、いよいよもつて衛宮士郎にも処理しきれなくなってきた。上条がその右手を使えば全て消せるかもしれない。しかし光の羽から打ち消そうにも、魔女狩りの王がそこまで時間がもたないのだ。

そして止まらない衛宮士郎の悪寒。彼の長年の感が告げている。心眼を使わずともわかる、この先の結果を。後にも引けないこんな状況で、上条当麻だったらどうするか。数週間だが、共に日々を過ごした衛宮士郎にすらわかる。

衛宮士郎の中でふつつつと何かが煮え立つ。

不安？ 絶望？ わからない、わからないが、今のこの様子からは、嫌な予感しか感じない。

必死に羽をさばく衛宮士郎。だが間に合わない。

上条の手が、インデックスの魔法陣に伸びた。

焦ったように何事かを叫ぶ神裂。

そして上条が、頭上に舞い落ちる羽を無視して、魔法陣を、裂、い、た………。

「当麻——!!」

衛宮士郎が吼える。確かに、確かに上条の右手——『幻想殺し』は魔法陣をあつさり
と引き裂いた。そしてただそれだけで、インデックスは動きを止め、光の柱も消失した。
しかし、上条は、彼自身は。光の羽にまみれ、ソレからインデックスを庇うように倒れ
こむ上条。

衛宮士郎は釘剣で二人の服を同時に縫いとめると、これ以上羽が降りかからないよう
にその場所から引つ張った。

「当麻、インデックス！ しっかりしろ、二人とも!!」

インデックスと上条を引き離し、その鼓動を確認する。どちらも正常に動いているよ
うだが、まるで意識がない。インデックスはまだしも、上条はあの羽を浴びたのだ。ど
ういう状態にあるのか、衛宮士郎には見当がつかない。

「おい、魔術師！ どうなっている！ あの羽はなんだ!!」

三人がいるほうへと寄ってきた神裂とステイルに、衛宮士郎は大声で尋ねた。だが
帰ってきたのは、無情な答えだった。

「わ、わかりません。あれは伝説にある聖ジョージの一撃と同義で……」

焦っているのか、安心していいのかわからないような表情で、神裂がぼろぼろと言葉を漏らす。衛宮士郎はステイルの方へと顔を向けたが、彼もまた首を横に振った。ぎりりと衛宮士郎は齒軋りをする、上条とインデックスを抱えて立ち上がる。

「……………一時休戦だ、魔術師。私は二人を病院に連れて行く」

「馬鹿を言うな。そこのお節介はまだしも、その子はイギリス清教の一員だぞ。彼女はこちらが預かる」

ステイルがずいっと前に出て睨んでくるが、衛宮士郎はふんと鼻を鳴らして答えた。

「お前らはイギリス清教の上層部にまたインデックスを預けるのか？　せつかく彼女が呪縛から逃れたのにな？」

「……………彼女の力は個人で守り通せるものじゃない。その子を守るには、組織の力が必要なんだ！」

面と向かつて睨み合う両者だが、そこに神裂が割って入った。

「二人とも、そこまでで良いでしょう。今は時間が惜しいはず。……私たちも同行します。急いでその病院に案内してください」

「な……………」

ステイルが驚いたような顔をして反論しようとするが、神裂はそれを抑える。

「病院に行つてからでも、話し合ひの余地はあるはずです。我々もこのことをイギリス清教に報告しないといけません。それに……」

そこまで言つて神裂は、上条のほうをちらりと見た。ぐつたりとした様子で衛宮士郎に抱えられる上条を見て、ぎゅつと口を引き結ぶ。今までどんな事があつたにせよ、この少年がインデックスを救つてくれたのは事実。

そんなインデックスの恩人を、見殺しに出来るほど神裂たちだつて冷酷ではない。結局、衛宮士郎の言うとおりに、二人とも病院へ運ぶ事へとなつたのであつた。

それからはまさに怒涛の勢いで時間が過ぎて行つた。前日まで上条が入院していた、カエル顔の医師がいる病院までついた彼らは、二人を救命に担ぎこみ、精密検査を依頼。そこでインデックスそして他二人の魔術師が学園都市のIDを持っていないことがばれてしまったわけだが、なぜかそのことについてはお咎めがなし。

さらにインデックスの精密検査が終わり、何の問題もないことがわかると、神裂とステイルはさつさと学園都市を出て行つてしまつたのだ。

別れる前に衛宮士郎が、イギリス清教は一体どのような判断を下したのかと尋ねると、

「……保留、といった所でしようか」

「保留だと?」

すやすやと眠るインデックスの寝顔を見ながら、神裂火織はそういつた。ここはインデックスの病室。医師のいない間に、彼らなりにインデックスを調べたのだが問題は特になかったそうだ。明日には目が覚めると思うけどね?とは、あのカエル顔の医者の特談。

二人の魔術師は既に身支度を終え、インデックスが目覚めてその様子を見たら、直ぐに帰るつもりらしい。

「イギリス清教の表向きとしては、直ぐに連れて帰って来い、ということですが、実際はしばらく様子見でしょう」

「その間、彼女はこの学園都市に預けると?」

「全く気に入らないけどね。ま、許可さえ出ればさっさと奪い返しにくるんだけど」

神裂とステイルの声に、衛宮士郎はふむと腕を組む。正直な話、そういう展開を衛宮士郎は予想していなかった。

必要のない戦闘も回避できるし、別に不満がある訳ではないが、ただ相手の意図が読めないのが不安ではあった。イギリス清教のトップと学園都市のトップとの間でどのような話し合いが行われたのかは想像がつかないが、少なくとも衛宮士郎にはメリット

が思いつかない。

まさか情にほだされた訳ではあるまい。組織の上に立つものとして、情に流されるなんてものは欠点にしかならない訳で、この二つの組織の長がそんな性格だとは、衛宮士郎は考えていない。

つまり、何かしらのメリットが両者にあるはずなのだが……、

『ダメだな。全く思いつかない』

『……私たちもこの世界に来て日が浅いですし、なにかしら未知の部分が関与しているのでしょうか。また情報が集まってから考えたほうがよいかと』

『そうだな……』

セイバーの言葉にとりあえず衛宮士郎はそれについて考えるのを止めたが、頭の片隅に違和感が残ったままだ。突然黙り込んでしまった衛宮士郎に眉を顰めながら、神裂は話を続ける。

「それではインデックスに対する事の詳細の説明は、あなたに任せてもよろしいでしょうか？」

「……構わない。元よりそのつもりだ」

「それと……」

そこで神裂は一旦言葉を切ると、衛宮士郎を真っ直ぐ見つめた。

「——あなたは一体、何者ですか？」

「……………」

衛宮士郎は答えない。ただ、神裂のその目を見返している。

「自慢ではありませんが、私は聖人です。倫敦でも十指に入る実力があると自負しています。……その私とまともに剣で戦うなど。そんな人物がこの極東に、しかもこの学園都市にいるという情報はありませんでした」

「……………世界は広いという事だ」

衛宮士郎はただそれだけ答えるが、今度はステイルが横から口を挟んだ。

「イギリス清教への報告ついでに、君のような人物について調べるよう頼んだんだ。――

——結果は、『該当なし』。それだけ力のある魔術師の癖に、どこの記録にも情報がな
いんだよ。随分と妙だとは思わないか？」

まあ調べる時間も条件も少ないから、取りこぼしがあったのかもしれないけど、と言
い訳をするように続けるステイルだが、その目はじつと衛宮士郎を見ている。黙りあう
三人。

しばらく沈黙が続くが、互いを探り合うような雰囲気的空間を破つたのは、カエル顔
の医師であった。

「そこの若白髪のキミ、もう一人の患者の診察結果がでただけどね？」

「……………すぐ行く」

未だにこちらを見つめている二人を無視して、衛宮士郎は医者の後についていく。白い廊下を黙って歩きながら、衛宮士郎はセイバーに話しかけた。

『だいが、不信がられてしまったな』

『仕方ありません。魔術師と関わった以上、シロウが注目を浴びてしまうのはどうしようもない事です。……………漏らした情報は必要最低限に留められていますし、今は事件が解決した事を喜ぶべきでしょう』

『……………当麻の容態次第ではあるがな』

そんなやり取りをしながら、診察室に入る二人。医者が椅子に腰掛けるのを待って、衛宮士郎もまた座る。

「まず、この画像なんだけどね?」

医者が手元のタブレットを操作すると、断面図——おそらく脳のものが大きな画面に浮かび上がってきた。

「結果から先に言うと、彼の記憶は『破壊』されてしまっているね?」

「……………なに?」

意味が、分からない。

呆然とする衛宮士郎に、医者は言葉を続けた。

「だから記憶喪失じゃなくて、記憶破壊っていうのかな？ エピソード記憶って知ってる？ 人の『思い出』を溜め込む記憶なんだけど？」

知ってるも何も、衛宮士郎はつい先日、脳に関する書籍を片っ端から読み漁っていたのだ。当然、その言葉にも聞き覚えがある。

「そこが完膚なきまでに破壊されているね？ 脳細胞ごと死んでしまっていると言っているのかな？」

「……脳細胞ごと、死んでいる？ では、当麻の記憶は……」

「うん、もう二度と戻らないと断言しているね？」

「——馬鹿な」

「ん？」

カエル顔の医者 of 冷静な声に、衛宮士郎はぼそりと口を開く。そうして立ち上がり、カエル顔の医者 of 襟元をがごと掴んだ。

「そんな馬鹿な話があるか!! 当麻は必死に、必死にインデックスを救おうともがいたんだぞ!! その結果が記憶喪失？ インデックスを記憶の縛りから助け出したのに、自分が逆に記憶喪失になるなんてそんな馬鹿な話が……!!」

「残念ながら、あるんだね？」

いきなり大声を出して掴みかかってきた衛宮士郎にも動じず、医者は一ピシヤリと告げる。どこまでも冷静に、ただ淡々と医者は事実を告げた。

「実際、なんでこんなことが起こったのかよくわからないんだよね？ 脳みそに直接スタンガンを当ててくるくらいしないと、こうまではならないと思うけど？」

『……シロウ、落ち着いて下さい。今は彼の話を聞かなくては』

『……………』

セイバーにも諭され、衛宮士郎はゆっくりとその腕を下げる。そのまま医者を椅子に下ろすと、深々と頭を下げた。

「……すまない。少し、動揺してしまった」

「まあいいけどね？ ここは防音だし、患者さんの家族を冷静にさせるのも、医者役割だからね？」

「……………」

再び椅子に座った衛宮士郎は、医者に向かってぼそりと尋ねる。

「……本当じゃないのか？ 記憶を回復する方法は？」

「残念だけど、ここまで破壊されちゃったら流石に無理だね？ ただまあ、他に異常がないのが不幸中の幸いかな？」

「———そうか、」

他に異常はない。……ただ記憶を失っていることを除いたら。しばらくしたら目が覚めると思うよ? という医者 の 声 を バック に 衛宮士郎 は 診察室 を 立ち去った。そしてそのまま、無言でインデックスの病室に戻る。するとそこには、何故か魔術師二人の姿はなく、意識が戻ったインデックスがいるだけであつた。

「インデックス? 起きたのか?」

「あ……」

インデックスは衛宮士郎に気付くと、そのままベッドから飛び起きて、衛宮士郎に尋ねる。

「とうま! とうまはどうなつたの!?!」

「当麻は……」

はやるインデックスの声に、言いよどむ衛宮士郎。果たして真実をそのまま伝えるべきか。だがいずれ、いずれわかつてしまうことでもあるのだ。ならば、早いほうがいい。「……診察室に行くといい。そこにいる医者が、当麻の容態について教えてくれる」

「わかつた! 診察室だね!」

衛宮士郎の返事を聞くや否や、病室を飛び出すインデックス。彼女も本来は病み上がりのはずなのだが、想像以上になんともないらしい。病院内はお静かに、と書かれた張

り紙の前を、全速力で駆け抜けるインデックス。

衛宮士郎はその様子を見ながら、ため息交じりで病室の扉を閉めた。そんな衛宮士郎に、セイバーが話しかける。

『……シロウが説明すれば良かったのでは？』

『そこは、な……』

衛宮士郎は切れ悪く答えながら、何となく部屋を見渡した。おそらくあの魔術師たちは、インデックスが元気であることを確認した後、すぐに帰ったのであろう。既に影も形も無い。

しばらくして衛宮士郎のところに看護婦が一人やってきて、インデックスは既に退院手続きが済んでいること、そして上条当麻が目覚めたことを伝えにきた。

『どうしますか？ 直ぐに会いに行きますか？』

『……いや、まずはインデックスと会った方がいいだろう』

インデックスが病室を出て行ってからそれなりに経っているが、衛宮士郎はまだ彼女と顔を合わせていない。上条が記憶喪失と聞いて、彼女は一体何を思うのか。それは衛宮士郎も心配する所ではあった。

上条がいるという病室の前まで衛宮士郎が歩くと、中から何か騒がしい声が聞こえて

きた。そしてナースコール。明らかに上条のものとと思われる叫び声の後に、病室の中からインデックスが出てくる。そしてそのまま、何故か怒り顔の彼女は、衛宮士郎には気付かずにすたすたとどこかへ行ってしまった。

「……………」

頭に疑問符を浮かべながら衛宮士郎が病室に入ると、そこには上半身をベッドからずり落とした状態で、頭を抱えている少年が一人。まあ言うまでもなく、上条当麻その人であるわけだが。

「……………」

そんな上条の様子を見て、呆れ声を出す衛宮士郎。上条の方はというと、病室に入ってきた衛宮士郎に気付いたのか、身体を起こして、よおと笑いかけてきた。

「誰かと思ったら士郎か。心配掛けちゃったな」

「全くお前はいつも……………」

今、彼は何と言ったか？

士郎とそういわなかったか？

記憶がないはずの人間が？

「当麻……………」

「お前、今……………」

驚愕に顔を染めながら尋ねる衛宮士郎に、上条はニヤニヤと笑いながら答える。

「俺が記憶喪失のハズだつて？　へへーん。さつきもインテックスに言ったけどよ。俺の右手はどんな魔術でも打ち消しちまうんだぜ？」

「そうだ。だが、あの時、当麻は確かに……」

「だ、か、ら」

言葉を続けようとする衛宮士郎に対して、上条がそれを遮るように声を上げた。

「ようは、その『光の羽』の魔術が俺の頭に触れたとしても、それが脳に届くまでの間に力を打ち消しちまえばいいわけだろ？」

「……………」

「そのダメージも魔術の力なら、この『幻想殺し』で碎けちまうって寸法よー」

ドゥーユーアンダスタン？とひらひらと右手を振ってみせる上条だが衛宮士郎は動かない。

しばらく手を振っていた上条だが、衛宮士郎の様子がおかしいので、あれ？と手を止めてその顔をそつと覗き込む。

すると、

「クツクツク……」

「ん？」

「はは……、はははははははははは！」

突然、衛宮士郎が大声で笑い出した。いきなりの笑い声に、思わずビクツと身体を震わせた上条だったが、衛宮士郎はそんな上条をがしつと抱え込むと、背中を笑いながら背中をばしんと叩いた。

「——ツツ！　いつてえ!!」

「この馬鹿め、当麻の癖に味なマネを！」

笑いながら叩く衛宮士郎に、上条はげほげほと咳き込みながら答える。

「当麻の癖について、ちよつと失礼じゃねえか？」

「くくく、いやすまない。はしやぎすぎたな」

上条を離れた衛宮士郎は、腕を組みながら、ではと口を開いた。

「あとはお前が退院すれば、万事解決と言うわけか」

「こそ。……だからさ、インデックスと一緒に退院するまで待つてくれよな！」

そんな言葉と共に、びつと親指を上げる上条。衛宮士郎は元気そうな上条の様子に、お前が退院したら、その日は豪華な食事にしてやると約束しながら、ひとまずその病室を出て行った。

さつき出て行ったインデックスを探さないといけないし、それに……。出て行くところで、例のカエル顔の医者とぶつかる。どうやら彼も、上条に話があるらしい。病室に入っていく医者を見ながら、衛宮士郎は廊下を歩く。インデックスはわりとすぐ見つ

かった。廊下でうろうろしていたので、さっさと病室に戻るよう注意する。

そして衛宮士郎は、そのまま病院の外に出た。外で、すうーっと大きく息を吸うと、それをゆっくりと吐き出す。空は目の醒めるような蒼さで、雲一つない。あんな事件があつたのに、町並みにもちつとも変化がなかった。

どこかでだけかが、隠蔽工作にでも走つたのだろう。この数日のニュースにも、それらしいものはないのは確認済みだ。そんな町並みを見ながら衛宮士郎は、セイバーに話しかけた。

『……当麻は、記憶喪失だ』

『やはり、そうですねか……』

悔しそうな、無念そうな。衛宮士郎自身よくわからない感情を、持て余したままに吐露する。

『あの夜のことは、良く覚えてる。……上条がどう動いたか、思い描けるくらいにな』
『シロウは、目がいいですからね……』

そう、彼は覚えている。上条の右手が、あの時どう動いたのかを。彼は見えている。上条の右手が、その頭に触れていないことを。上条の右手は、あの時確かにインデックスの魔法陣を打ち消した。

……そしてそのまま、上条当麻は地に伏したのだ。

『このまま、気付いてないふりを続けるつもりですか?』

『そのほうがいいだろう。——何よりそれが、当麻の意思なのだからな』

そういつて衛宮士郎は、後ろに建つ病院を見つめる。その一室。今もまだ、上条当麻がいる病室を。事件は起こり、そして終わった。犠牲もあつたが、それでも終わったのだ。いやむしろ、これからが忙しくなるだろう。

衛宮士郎という存在の露呈、上条当麻の記憶喪失、インデックス。これからどうするか、考える事はたくさんある。

だが、今はまず……

「とりあえず、当麻の退院祝いのメニューを考えなくてはな」

そんな事を呟きながら、衛宮士郎は街の雑踏へと混ざつていくのだった。

誰も彼もが

上条当麻は記憶喪失だ。魔術によってエピソード記憶というものをそっくりそのまま破壊してしまったせいで、今までの思い出など何一つ思い出せない。それは言うまでもなく、様々な場所に影響が出るわけで……。

(……………どこに何があるのかさっぱりわかんねえ！)

上条が病院を退院し、自分の寮の部屋に戻ってきて最初に感じたのがそれだった。病院から寮までの道は、同居人らしい二人の横を並んで歩くことでどうにかなったのだ。——だが問題はその後。道中も目を皿のようにして辺りを見渡して地理を頭に叩き込んでいた上条だが、家ではさらに立ち回りを気にしないといけないのである。

何しろ周囲には『実は記憶喪失でなかった』といった風で振舞っているのだ。上条が記憶喪失であることを勘付かせない様、他人に違和感を覚えさせることなく生活しなくてはいけない。

(つつてもな……………どうしたもんかね実際)

正直かなり厳しいのではないかと、上条は今更ながら感じていた。だって生活用品の場所や、果ては口座の暗証番号すら思い出すことができない現状なのだ。自分がどの

学校に通っているのか、というかそもそも何歳なのか、どういうサイクルで日々を過ごしていたのか。およそ生活史と言えるものを、全て失ってしまっているのである。誰がどう考えたって、日常生活に支障を来たさなない訳がない——

——はずだったのだが。結論から言ってしまうえば、実はどうにかなった。どうやら同居人の一人である衛宮士郎という男性（そもそも上条は何故彼と同居しているのかさえ知らないが）、相当に家事が得意であるらしい。上条が病み上がりだからという理由で、家事全般を一手に引き受けてくれたのだ。

おかげで上条は衛宮士郎の様子を観察することで、少なくとも自分の家に何があるのかはほとんど全て把握することが出来た。自分自身の情報についても、学生証やらなんやらで確認済み。流石に交友関係までは理解することは出来なかったが、おおよそ一日に必要な情報を集めることが出来たのであった。

——当然、それらは全て偶然ではない。わざと上条に見せつける様に家事を行つたのは衛宮士郎であるし、それとなく上条の自己確認に役立つものを事前に一箇所に纏めておいたのも衛宮士郎だ。要は上条の記憶喪失のサポートを、彼に気づかれないうようにさりげなく行っていたのである。

衛宮士郎は上条当麻が記憶喪失になった事を聞いた時、しばらくの間は学園都市で生活する事を自身の心の中で決めていた。上条の記憶喪失に責任を感じているという点

もあるし、学園都市自体をもっとよく知る必要があると考えた末の措置だ。そしてなにより、衛宮士郎自身が上条当麻の在り方に興味を持ったのが大きい。自己犠牲かんなのかは知らないが、あつて数日の見知らぬ少女に命を懸ける人間がどこにいる？ 少なくとも衛宮士郎はそういう人間を知らない。……自分以外は。

上条の行動力、そしてその源に興味を持った、いや、惹かれたといつても過言ではなかつた。そしてそれは、衛宮士郎が学園都市に留まることを決意するには十分な理由になつたのだ。

……だが衛宮士郎は、自分がそういう選択をしたという事の違和感に気づいていない。衛宮士郎が目指すのはいつでも正義の味方であり、彼にとつての正義は偏に人の命を救うことである。そんな彼が、救つた後の命を気に懸け、そしてその場に留まつた。

以前の彼なら、上条を救つたなら場合もそこそこに立ち去つて、戦場にも立ち去つていっただろう。しかし残つた。彼は残つたのである。衛宮士郎を良く知るもの、たとえば遠坂凜などがその場にいたら、その微かな変化に驚愕していたことだろう。

確かにセイバーも衛宮士郎を良く知る人物の一人だ。だが彼女が知っているのはあくまで聖杯戦争当時の、まだ日本にいた頃の衛宮士郎である。時計塔に渡つた後、世界各地の戦争に首を突っ込んでいた今の衛宮士郎を、セイバーは知らない。

月詠小萌のアパートでインデックスを介抱してから、まだそれほど日数がたっている

わけでもなく、あの時は色々ごたごたしていたせいで互いの話も聞いていなかったのだ。そんなセイバーでは、今の衛宮士郎の違和感に気づくことは出来ないであろう。

衛宮士郎の選択を半ば当然のこととして受け取ったセイバーは、上条が退院した日に一つだけ彼に尋ねた。

『これからどうするのです？ トウマは退院しましたが……』

『……しばらく学園都市で様子を見ようと思う。当麻の事もそうだが、こつちの世界は向こうとだいぶ勝手が違うからな』

『そうですか……』

セイバーは、いつまで衛宮士郎が学園都市にいるつもりかまでは尋ねない。聞く気がないわけではないが、今はまだ、という彼女なりの選択だ。聖杯戦争の時から気になっていた、衛宮士郎の在り方。その在り方をセイバーが見ない間にどう変化したのか彼女自身が確かめる時間が欲しかったというのもあるが、それ以上に彼女としては上条とインデックスに関心があった。正確には、彼らが衛宮士郎に与える影響が。

常に身近にいるからわかるのだ。衛宮士郎が自分のこと以上に、どれほど二人に気をかけていることか。いやむしろ、気をかけるといふよりは異変を悟らせないようにするという感じ。その点ではある意味、聖杯戦争時の衛宮家の状態に似ているかもしれない。あの時も、衛宮士郎は自分の家族に、非日常を感じ取らせないように尽力していた。

……それが上手くいつていたかはさておいて、衛宮士郎が家族というほどではないにしろ、常人以上に彼らを気にかけているのは事実である。それならば衛宮士郎がここに留まることを咎める様な事をするつもりも毛頭ない。この世界に於いてその存在自体がイレギュラーなのは衛宮士郎もセイバーも同じであるが、そもそも元の世界であつてもセイバーの存在は異端だ。そんなセイバーが今の時点では、衛宮士郎の道行きに口を挟むつもりはなかった。

——どの道、今は二人とも学園都市を離れるわけにはいかなくなってしまつていゝる。セイバーは衛宮士郎が学園都市縛り付けられざるをえなくなつた出来事のことを思い返し、顔を曇らせるのであつた。

それは上条当麻が入院した次の日の夜の事である。第七学区という主に学生が住んでいる区間で衛宮士郎のような大の大人が日中からうろろしているのは、学園都市の監視以前にそれなりに人目を引きやすい。そんな衛宮士郎はその日も夜の内に学園都市を、というか主に人気がなく、病院からも離れた場所を歩いて回つていた。

上条の様態は脳のこととは勿論だが、それと同じかそれ以上に体も当然傷だらけであつたので、流石に数日入院することになつていたので。インデックスは病院の面会時間が

終わった時点で、修理された上条の学生寮に戻っていた。

学生寮は先日ステイルが襲撃してきた時に確かに火の手が挙がったが、正直かなり部分的なものであったし上条の部屋自体は無傷なので、既に火事の跡が残らないほど修繕されてる。

それに対してインデックスによって半壊した月詠小萌の部屋は、衛宮士郎が修理しようと思えば出来たが、色々と人目に付くのでそのままであった。応急措置として一緒にブルーシートで壁を塞ぐ様は衛宮士郎をして非常に申し訳ない気持ちにさせたが、如何する事も出来ないのせめて部屋を整頓する事くらいしか出来ない。

そしてこの日の出来事も、元を辿ればそれが——あの七月二十八日の事件が原因なのだった。

ゆつたりとした足取りで、しかし周囲に目を光らせながらビル郡の裏路地を歩く衛宮士郎。首をあちこちに傾けながら何かを探しているようにも見えるが、目当てのものがなかなか見つからないのか、その足は一向に止まる気配がない。そうしてしばらく歩いたところで、衛宮士郎は壁に手を当てその動きを止めた。両手をビルの壁に当てたまま、じつと考え込むようにして目を瞑っている。

……その時、衛宮士郎の背後、いや、路地の両サイドから微かな物音がした。まるでパソコンが出すような、ファンが高速回転しているかの如き駆動音。ともすれば夜の静

けさに吸い込まれてしまうほどの、小さな小さな駆動音。

『シロウ……、両側から何かが来てます』

持ち前の直感も併せて、音に気付いたセイバーが衛宮士郎に警告を発した。衛宮士郎も目を開け、壁から手を離して路地の奥を見据える。

「……………誰かは知らんが、姿を現したらどうだ。鼠の様にこそこそと隠れて人を見ているなど、あまりいい趣味とは思えんな」

衛宮士郎の声に、しばらくの間が空く。たつぷり三十秒以上経つただろうか、やがて奥から、あの小さな機械音とともに黒い人影が姿を現した。片側に二人ずつ、両サイド合わせて四人の影を確認する。そしてその姿を目にした衛宮士郎は軽く息を吐くと、はたと薄く笑いながら口を開いた。

「……………まるでSFだな、学園都市の技術というものは」

そう、路地の奥から姿を現したのはただの人ではない。人よりも一回り大きな、全身を妙な機械で覆った黒い影。いわゆるパワードスーツ、学園都市で言う駆動鎧を着こなした集団であった。学園都市が元の世界では考えられないほどの技術力を持つていることは衛宮士郎とて重々承知の上であったが、重い機械で身を包んでいるにもかかわらず完全に人と同等かそれ以上のスムーズな動き、耳を濟ませなければ聞こえないほどの駆動音など、ここまでくれば驚きを隠す暇もなく、素直に感心してしまう。

そんな衛宮士郎の元に、じりじりと近づく駆動鎧。よく見れば両サイドに四体いるだけでなく、その奥にも倍以上の数の駆動鎧の姿が見えた。ちらりと上を見上げれば、そこに見えるのは真夏の星空ではなく、いつの間にか現れた小型のヘリのようなものがピルの合間を浮いている。

「これは流石に相手に出来んな……」

四方を敵に囲まれている今の状況を把握した衛宮士郎は、以外にも一切の抵抗の色を見せずにあっさりとその両手を上げた。

「そら、降参だ。煮るなり焼くなり好きにするがいい」

「……………」

駆動鎧達の沈黙を気にせず、勝手に手を上げて頭の後ろで手を組む衛宮士郎。駆動鎧たちは少しの間その様子をじっと見つめていたが、やがて両側から衛宮士郎を挟んだまま、黙って路地の奥に向かって歩き始めた。

「……………これはついて来いということか？」

衛宮士郎の疑問にも、駆動鎧たちは答える気配はない。両側の駆動鎧たちが歩き始めたので、その間で挟まれている衛宮士郎も自然とそれに合わせてついていかざるを得なかった。手を組んだまま、衛宮士郎は駆動鎧たちの動きに合わせて足を進める。どこへ向かっているのか衛宮士郎には検討もつかないが、この集団が何か目的があつて動いて

いるのは当然の話。

そうして駆動鎧のうしろを歩きながら、衛宮士郎はセイバーと現状について言葉を交わしていた。

『上手い具合に捕まりましたね、シロウ』

『さて、な…… まあ、最悪の展開でなかっただけマシというものか』

そんな事を言う衛宮士郎だが、実はこの展開はある程度予想できたものであり、彼らにとつてはどちらかといえば良い方に当たるのであった。

—— 既に衛宮士郎が学園都市にきて、一週間以上が経過していた。その間、学園都市をつぶさに観察していた衛宮士郎はもう理解している。いかに学園都市が堅牢か、いかにその警備が厳重か。

インデックスの件から、この世界の魔術師でさえここで『騒動』を起こすには、学園都市の許可が必要だということも分かった。そして先日的一件で暴れた衛宮士郎が、そんな学園都市に補足されていない訳がないのだ。

いくら彼が周囲に気をつけようが、それはあくまで元の世界の常識を基にしたもの。この世界では衛宮士郎の想像もつかないほどの科学技術が存在し、その最先端の目を全て掻い潜るなど、幾多の戦場を渡り歩いた流石の魔術使いでも不可能である。

……では一体これからどうするのか？ 既に衛宮士郎自身が学園都市を離れる気がない今、上条当麻の周囲を学園都市の監視を避けながら見守るのもまた不可能だ。故に衛宮士郎は、学園都市から隠れながら日々を過ごすのではなく、逆にこちらから学園都市に近づくことを考えたのである。

——これは七月二十八日の夜、どこもしれぬ場所での二人の会話。

『しかし学園都市の性質上、魔術師などここから追い出されてしまうのではないのでしょうか？』

この考えを衛宮士郎から提示された時、セイバーがそう考えたのは無理もない。実際の所そのとおりであるし、魔術と科学の相互不干渉という暗黙の了解がある以上、魔術師はよほどの理由がない限り学園都市には干渉しない、もしくは出来ないのである。

だが衛宮士郎は、彼自身に関してはそうは考えていなかった。

『確かに普通なら追い出されるかもしれない。だがセイバー、それにしても変だとは思わないか？ もうオレが学園都市に来て一週間以上経っている。あの事件までは誰にも魔術師として見つからないように配慮してきた自信はあるが、それでもオレの存在そのものに学園都市が気づいていない訳がない。いくらなんでもこれは——』

『——遅すぎる、という事ですか？』

衛宮士郎の言葉を補うように答えたセイバーに、彼は頷いた。

『そうだ。当麻が入院した時の病院の一件といい、オレは絶対に学園都市に認知されているはずだ。なのに何故追っ手がかからない？ 何故オレを学園都市から追い出そうとしない？』

『……何か向こう側にも考えがあるのでしよう。何せわれわれは別世界の人間ですの
で、いくらこの世界でシロウを調べても背景を探ることも出来ません。学園都市側も慎重にならざるを得ないのではないでしょうか』

『それならば余計、すぐにでもアプローチすべきだ。このまま向こうの判断に任せて、われわれが学園都市にとつて有害だと判定を受けて処分されそうになってはもうどうしようもないだろう。ここの全戦力を相手にするなど想像もつかんよ』

は、と肩を竦める衛宮士郎。

『となると、学園都市の中枢に近づく方法ですが——自分から近づくとなると難しいですね……』

『そうだな……』

考え込む二人だが、すぐにセイバーがあつと声を上げた。

『トウマが入院しているあの病院はどうでしょうか、シロウ。事件の時に学園都市の上層部からの関与があつたのは確実ですし、何か手がかりになるものがあるかもしれませ

ん』

『病院、か。しかし元を迎れるような痕跡を残すほど学園都市も抜けてはいないだろう？』

『それでも何もしないよりは良いでしょう。幸いトウマが入院している間なら、私たちは病院内を歩き来できるのですから』

セイバーの提案に悩む衛宮士郎だが、今のところはその選択肢以外有効な手立てが思いつかない。結局、明日から病院を調べてみようということに決まったのだが………。

(まさかこんな結果が待っているとはな……)

そうして日付は七月二十九日の夜に戻る。駆動鎧に挟まれながら、衛宮士郎はそんな事を思い返していた。

元々は路地裏に入る気さえなかったのだが、衛宮士郎が外に出てすぐに尾行に気づいたのだから仕方ない。何者かは分からなかったが、明らかに感じる視線。まるで衛宮士郎に気付いて欲しいと言わんばかりのあからさまな視線であったが、衛宮士郎はそれを無視した。

挑発かどうかは知らなくとも、もし相手が学園都市ならこちらから攻撃を仕掛けたりするのはよろしくないと判断したからだ。それにもしもの場合に大通りで暴れるような状況になるのは避けておきたい。そこで手ごころな路地に入り、相手の出方を伺う事にしたのだ。手を出してこないならそれでよし、攻撃してきたならばせめて無力化だけに抑える、と。

結局こうして捕まってしまっただけだが、ある意味では衛宮士郎とセイバーにとって願ったりの展開であった。

『このまま話が分かる人間のところまで連れて行ってくればいいのですが……』
『いざとなったら逃げるしかあるまいよ。……彼らが学園都市の支配下にあつたらの場合だがね』

前を歩く駆動鎧を観察しながら話す二人。最悪、問答無用で攻撃される事を想定していた衛宮士郎だが、こうしてどこかへと連れて行っているように見える今、何かしらの交渉が出来る可能性は高いのではと感じていた。だが先ほどの二人の会話通り、それはこの駆動鎧たちが学園都市の勢力である事に限った話である。もしも彼らが学園都市とは無関係、もしくは対抗する勢力の使いであつたら今までの事は全くの無駄、それどころか逆効果なのだ。

どこの誰とも分からぬ駆動鎧たちに着いていくことは衛宮士郎にとっては賭けで

あつたが、四の五の言つてはいられないのも現状。

それにここまで嚴重に囲まれた学園都市において、学園都市以外の勢力が真夜中にこんな機械を引っ張り出せるような事が出来るというのも考えづらい。十中八九、彼らは学園都市の勢力下、それも表側ではない事を衛宮士郎は確信していた。

『そもそも彼らが公の団体ならば、尾行などせずには昼間に堂々と活動すればいいのですからね』

『まあ、そういうわけだな』

それでも万が一という可能性もあるのは事実だ。いい目が出る結果になればと願いながら、衛宮士郎は静かに彼らに従つて歩くのであつた。

——そして数十分後、衛宮士郎は巨大な水槽の前にいた。あの後並び立つビルの一つに連れて来られた衛宮士郎は、そこでエレベーターを引っ掛けた、お下げのような髪型をした少女の能力により薄暗い建物の中へと空間^{テレポート}轉移させられたのだ。そこで彼が目にしたのが、この巨大な水槽であつた。

「……………」

衛宮士郎が首をいぶかしげに傾げながらも水槽をじつと見つめているのは、単にその場違いで巨大な水槽が気になるからではない。——その水槽に『人間』が、しかも

逆さで浮かんでいるからである。

男にも女にも子供にも老人にも見えるその姿。何とでも見えるがゆえに、逆に妙な違和感を、ずれた印象をそれは与えている。

「……………生きているのか？」

「ふむ。私自身としては死んでいるつもりはないのだが」

「……………」

衛宮士郎の疑問の声に、つまらなさそうに答える『人間』。急に口を開いた目の前の『人間』に、衛宮士郎は目を見開く。

「私はアレイスター＝クロウリー。この学園都市の統括理事長を務めている」

「……………！」

告げられた統括理事長という言葉、学園都市のトップが前触れなく現れたことに衛宮士郎もセイバーも驚きを隠せない。そんな衛宮士郎の様子をじっと観察しながら、『人間』アレイスターは衛宮士郎に言葉をかけた。

「衛宮士郎といったかな。君がここに呼ばれた理由だが——見当はついているだろうか？」

「……………」

衛宮士郎は答えない。彼だけではない、その内に潜むセイバーさえも、この『人間』の

『危うさ』を感じていた。別に威圧感を放っているわけでもなく、ただそこにいるだけなのに、感じるそれは彼らの警鐘を鳴らすには十分なものだ。

そうして黙ったままの衛宮士郎をどう受け取っているのか、アレイスターはまるで最初から答えを期待していなかったかのように話を進めた。

「君はこの学園都市に不法な侵入をしている——」

衛宮士郎の顔色は変わらない。ただひたすらに、アレイスターを見つめている。

「——魔術師である君が、だ」

「……………」

沈黙。その問答に意味を持たないと言っているかのように、衛宮士郎は口を閉ざし、まだ。対するアレイスターも衛宮士郎の反応など気にせず言葉が続ける。

「これが、君が侵入したときの映像だ」

「——っ！」

『これは……………』

アレイスターの言葉とともに、どういう仕掛けか衛宮士郎の目の前に一つの平面映像が立体的に浮かびあがった。

その画面が映していたのは夜の中空、何の変哲もない空の色。だがすぐに画面内で異変が起き、その映像に衛宮士郎は片眉を上げる。そう、そこには前触れもなく顕われた

空間の歪み、そしてそこから飛び出る黒い服の人間の姿がはつきりと映っていたのだ。「……………その映像は確かに興味深い。だが、どうしてそこに写っている人物が私だと断言できるのだ？」

画面から目を離れた衛宮士郎は、ようやく口を開くと腕を組む。実は先ほどの映像では落ちてくる人物の顔までは映っていなかったのだ。

衛宮士郎とてここまで呼ばれたからは、先ほどの映像が自分だという確証がアレイスターにも何かあることはわかっている。そもそも衛宮士郎には自分が学園都市にきた時の記憶もなく、目を覚ました時は既に上条の部屋だったのだ。

逆に衛宮士郎のほうのアレイスターの確証を、この映像が本当に自分なのかを知りたい。無言の圧を発する衛宮士郎だが、アレイスターは気にしないし、気に障った様子もない。

「ふむ。君が知っているかどうかはわからないが、この学園都市は常に三台の人工衛星によって監視されている。学園都市のIDも持たない人物の侵入など、簡単に分かるのだよ」

「人工衛星で監視していたから分かった……………と？」

アレイスターは答えない。答えになってないな、と衛宮士郎は思う。彼は外に出る時はどんな場合でも変装していたし、IDを使うような場面にも遭遇することも避けてき

た。

インデックスの事件までは出来るだけ監視を避け、それなりに慎重に動いてきた衛宮士郎が人工衛星だけで捕捉される。——その可能性はなきにしもあらず、むしろこの学園都市に限っては当然のようにも感じるが、やはり衛宮士郎には腑に落ちない。

それはセイバーも同様だった。言葉で上手く表せない勘のようなものが、二人になにかそれだけではない、秘密があると訴えている気がするのだ。

だがそれでも、アレイスターの言葉が腑に落ちなくとも、ここで認めないわけにはいかない。アレイスターの根拠を確かめられなかったのは残念だが、まさか平行世界を移動してきたなどと戯けた事を正直に言うわけにもいかなかった。ここは学園都市側の真つ只中であり、衛宮士郎の立場など吹けば飛ぶ、嵐の中の紙飛行機よりも頼りないものだ。元々学園都市とは今は争う理由もない。

ここで意固地に認めないほうがおかしいだろう。それに衛宮士郎がああ映像の通り空中から落ちてきたとすれば、彼が上条の部屋のベランダの手すりに引つかかっていたことも頷ける。

「……………そうだな、確かにその映像は私のようだ」

ややあつて、アレイスターの視線を感じながら、衛宮士郎は自分が侵入者だと、その映像に映っている人物が自分であるため息を吐きながら認めた。これ以上突っ張っ

ても反感を煽るだけ。そう考えた上での判断だったが、元々選択肢は多くない。

「さて、君が学園都市に対する侵入者なら、学園都市に来た理由を聞いておきたいが」
やはりと言うべきか、この流れではその質問が出てくるのは当然である。

だがしかし、それに対する答えを衛宮士郎は持っていない。誰が自分をここに送ったかまでは見当がついていても、どうしてここに送ったのかまでは全くわかっていないのだ。

「……理由というほどのものはないのだがな」

それでも衛宮士郎は言葉を続ける。

学園都市に残る可能性を少しでも増やすには、衛宮士郎はとにかく自分が敵ではない事をアピールしなければならぬ。それなら黙っているより、多少なりとも事情を話すほうがずっといいに決まっている。何でもいいからアレイスターを納得させられるだけの理由が、今この場では必要だった。

「実は本意な侵入だった。以前私はフリーの魔術師として国外に住んでいたのだが、ある日目を覚めると……」

いつの間にかここにいたのだ、と衛宮士郎は簡潔に述べた。

「信じがたいと思うが、これが真実だ。」

——私はわけのわからぬままに、どこかの誰かに勝手にこの学園都市に送り込まれたのだ」

「あくまで自分の意思で学園都市に来たわけではないと?」
「そういうことだ」

嘘では、ない。決して嘘ではないが、真実をすべて語っているわけでもないという微妙なラインだった。これでアレイスターが完全に納得するとは思えないが、学園都市の特殊性を考えるとこれが衛宮士郎の出せるぎりぎり、限界の際である。

しばし沈黙。衛宮士郎はこれ以上何も語ろうとせず、アレイスターは動かない。耐え難く張り詰めた空気は突けば割れるほどではないが、それでも動きを凍らせる。

そのまま、反転しあった人間が互いに見つめ合うという奇妙な光景がしばらく続いた。

『シロウ、あのような返答でよかったですか?』

『……仕方があるまい。ここが学園都市でないなら騙つてもよかつたのだがな』

『……………? それはどういう——』

だがセイバーの疑問に答える間もなく、先に沈黙を破り、時計の針を動かしたのはアレイスターだった。

「確かに、あの映像の時の君は意識がなかったな。学園都市に来てから、ほとんど動かなかったのもそれが原因か?」

「……現状把握が最優先だったからな」

ふむと頷くアレイスターだが、衛宮士郎としてはやはり逐一監視されていたという点が重要であった。

（逆にそこまで監視しておきながら今まで手を出さなかったこともやはり気になるが、今は追求すべきではないな……）

先ほども言った通り、ここでの衛宮士郎の優先すべきことは学園都市内でのある程度
の自由を得ることであり、決して相手側の意図を明らかにすることではない。

「それで、私は一体どうなるのかな？」

再び沈黙したアレイスターを見上げながら、衛宮士郎は尋ねる。セイバーとも色々
話し合ったが、結局の所アレイスターの判断がどう転ぶかはわからない。そもそもいき
なり学園都市のトップが出てきた時点で想定外の出来事である。

学園都市側がどれほど衛宮士郎のことを知っているのか、どう考えているのかも予測
はつかないし、思いもしない判断が下される場合も十分ありうる。そう考えながら、二
人は身構えていたが……………、

「そうだな、しばらくは学園都市内で生活してもらうことになる」

「……………何だと？」

『……………』

予想していたよりもずっとマシ、それどころか現状では衛宮士郎にとって一番良い処

断が下ったことに、驚きを隠せない二人。

「君の言っていることを鵜呑みにする訳にもいかないだろう。こちらはこちらで調べることがある。それが完了し、その疑いが晴れるまではここで暮らせということだ」

「……………無論、それだけではないのだろうか？」

衛宮士郎が腕を解く。警戒心を前面に出しながら見上げる衛宮士郎に、アレイスターは満足そうに頷いた。

「察しが良くて助かる。知つての通り魔術師が学園都市に侵入したとなればこちらもそれなりの対応を取らざるをえないのでね。それに君の話が真実なら、君を学園都市に送り込んだとされる魔術側の何者かについても対処しなければなるまい」

「それで？」

「科学側がそう簡単に魔術側に手を出す訳にはいかない。もしもその魔術側の何者かが見つかったなら、その時は君に対処してもらうことになる」

「……………それだけか？」

「こちらの呼び出しには必ず応じてもらうことになる。魔術師相手に普通の使いを遣る訳にはいくまい。ああ、それと先ほども言ったとおりだが——」

「——それまでは学園都市にいろと言うのだろう。それは分かっている」

「そうだ、と薄く笑うアレイスターの話聞きながら、妙なことになったと衛宮士郎は

内心呟く。学園都市に留まれる様になったのは結構なことだ。

しかしこのやり取り、違和感が、いやむしろ違和感しか残らない。この世界には存在もしないものを学園都市が探すのは別にかまわれないが、科学側が魔術側を調べる時点で既におかしいし、身元不明の衛宮士郎を学園都市内で実質の野放しにする事を認めてい
るのも変だ。

そしてあまりに、あまりに衛宮士郎を縛る条件が緩過ぎるのだった。

(私を学園都市内で自由にさせるメリットは何だ？ 一体何を企んでいる?)

衛宮士郎の疑問をよそに、アレイスターは話を続ける。衛宮士郎としては不気味な話であつたが、わざわざ拒否して不利な条件を飲む理由もなかつた。相手の裏を考えることに慣れている彼でも、このアレイスターの意図は読めない。

そしてそれだけに、下手に断るわけにもいかないのである。

その後は衛宮士郎が考えていた以上にトントんと進み、ついに数分後には、この機械だらけの暗がりから解放されたのであつた。

「アレイスター！ お前一体何を考えてる!？」

衛宮士郎が部屋を去つてすぐ、辺りに怒号が響き渡る。学園都市統括理事長の目の前で気炎を上げている一人の大男、彼の名は土御門元春。

ツンツンに尖らせた金髪、青いサングラス、アロハシャツにハーフパンツと実に場にそぐわない格好をしいる彼は、上条当麻のクラスメイトでもあり、学生寮における隣人でもある。科学と魔術の狭間を行き来する多角スパイにして、最高位の陰陽術師——
 — いや、『二元』陰陽術師か。

学園都市の学生である以上彼もまた能力者な訳で、その代償としてやはり魔術師としては非常に大きな足枷——つまり魔術を行使することが生命の危機に直結してしまっているのだ。しかもその代わりに得た彼の能力とは、レベル0の『肉体再生』オートリパリス。

精々破れた血管の応急処置などにしか役に立たず、メリットといえれば数回程度なら魔術の行使が可能という点か。……それでも土御門元春が死にかけるのには変わらないが、ないよりマシといった程度のものだ。

そして彼の主な仕事とは、魔術と科学の戦争回避のためにありとあらゆる場所をありとあらゆる手段で駆けずり回ること。そんな彼が今、アレイスターに向かって怒鳴っていた。

「あんな得体の知れない男を、どうして学園都市の中に入れてままするんだ！ 俺の報告を聞いてないのか!？」

そうして土御門はアレイスターに向かって紙束を突き出す。はたしてそれが報告書とっていいのか、第三者からしても疑問に思うに違いない。

なにしろその衛宮士郎の情報を集めたところであるはずの報告書、経歴その他出身含めてほとんどが白紙なのである。情報があるとなれば彼が学園都市に落ちてきて以降のものであり、逆に言えばそれ以前のもは一切合切が存在しなかった。

彼が今の今まで衛宮士郎と直接には邂逅しなかった理由がそれだ。科学と魔術、両サイドの綱渡り役として、そして多角スパイとしても衛宮士郎を調べるのにこれ以上適した人選はあるまい。……それでも結果は見ての通りだったわけだが。

「俺も手当たりしだいの場合をすべて調べたがな。ここまで過去を隠してる、そもそも存在しているのかどうかさえ危うい対象は初めてだ」

苛立ちが見え隠れする声色だが、アレイスターは変わらない。

「君が心配する必要はない。あれが原因で火種は起きんだらうよ」
「……どうしてそこまで断言できるか知りたいものだな」

うなるような声を上げる土御門。

「何を隠してるのかわんていまさら聞かない。だが、お前のプランとやらに本当にあいつが役に立つのか？ 所属も、思想も、はては使ってる魔術にさえ検討もつかないあれを、わざわざ綱渡りするようなまねまでして使う必要が？」

「そこまでいうならば、」

土御門の言葉に被せるようにアレイスターが告げる。

「君が監視していればいい話ではないか」

「何だと……」

「幸いにしてあの男は幻想殺しと行動をともにしている。監視する側としても楽な話だ
と思うが」

「……………」

アレイスターの言葉に、水槽を睨み付ける土御門。彼には理解できない、この男が何を考えているのか、なにがしたいのか。土御門からしてみれば、得体の知れない衛宮士郎など厄介ごと以外のなにものでもないのだから。

しかし、彼に拒否権がないのも事実。むしろ土御門が自発的に監視をすることを汲む
辺り、アレイスターの事はますます気に入らない。

でもやるしかないのだ。土御門が戦争の回避を願うならば、争いの火種も、火種の元
も、全てを摘む必要があるのだから。それがアレイスターの掌で踊らされている事だと
しても、だ。

やがて部屋は静けさを取り戻し、アレイスターはまた一人浮かぶ。

一日中を思索に沈む彼の考えなど、常人にはわからない。異端の思考が常人には理解
できないのは道理だが、異端の思考を異端が理解できないのもまた道理。

それは何もアレイスターの限った話ではないのだが、それが影響し始めるのは――

—決して遠くない。

O u t o f c o n t r o l !

兎にも角にも、衛宮士郎は学園都市の滞在（強制）を認められてしまったわけで。外へ出るにしても今までよりは気を使う必要はない。無論、警戒するに越したことはないが。そんな衛宮士郎は今、外出用の服装について悩んでいた。

「変装して出かけるというのみな……」

逆に何か企んでいると勘違いされそうである。しかし、彼が年齢的にも外見的にも学生ばかりの第七学区で目立つのは確かだ。

「スーツか白衣だけでも羽織るか？」

広げたのは適当に撮影した白衣。要は教職が研究職に就いているように見えればまだまだしなのでは？ という考えである。今までは出来るだけ目立たないように、監視カメラに映つても構わない様に髪や伊達めがねでフル装備の変装をしていたわけだが、それも今は必要ない。

むしろ四六時中観察されているらしい身にとつては、疚しい事をしていく訳でもないのに逆効果だ。出かける理由は例の如く情報収集。昼間に出かけるメリットとしては、夜中には既に閉まっている施設を利用できるといった所か。

「さて……と。 どうしたものかな」

結局スーツで出かけることにした衛宮士郎。 雑踏に混じり、夏の太陽を浴びながらの散策だ。 そちらにいる学生たちは暑そうに仰いどり、各々冷たいものを手にしたりしている。 衛宮士郎はすたすたと通りを歩きながら、セイバーと話し合う。

『夏休みだからですか、昼間から学生が多いですね』

『そうだな。 そして大人がほとんどいないのは学園都市ならでは、か』

『……超能力。 学生限定とはいえ、いや、だからこそ彼らにこうも簡単に力を与えるの

は私としてはいただけません』

『レベル4以上になると戦術的な価値を持つという話だったな』

『その戦術的価値というのが気に食わないのです。 軍隊に匹敵する、戦術的価値を持つ

…… どうも戦いを前提としてる節があるのは、仕方のないことなのでしょうか？』

『……私も学生に不要なほどの大きな力を与えるのは納得してはいない。 彼らは魔術師でもなんでもない、ただの一般人なのだからな』

魔術師はそれ自体が一般人と価値観の違う、いわゆる魔術師という別種のようなものだ。 対して、ここにいる学生たちは確かに外の世界と大きく価値観は違えど、未だ人

の範疇にあると言えよう。それに……、と衛宮士郎は続けた。

『どうにも治安が悪いのも気になる。いや、あくまで日本らしい治安の良さは維持しているのだが、より暴力的というか、規模が大きいというか……』

『私にはよくわかりませんが、やはり能力開発の関係ですかね。あのような爆発事件を起こせる程の力があれば、それを過信してしまい、結果として事件に繋がる、と』

セイバーが言っているのは以前にあつた虚空^{グラビトン}爆破事件のことだ。少し前までただの学生だった少年が、その能力で人を傷つけんとした事件。外の世界の少年が喧嘩するのは訳が違う、テロリズムとも言うべき真正銘の犯罪事件を一介の学生が引き起こした。

しかし後から情報収集した話だと、それすらとある大きな事件の一端であつたらしいのだ。幸いにしてその事件は既に収束に向かつているとの事だが、それを聞いた時、なるほど学園都市は独立国家足りえてっていると衛宮士郎は感じていた。

ここが日本ならそんな事は起きえない——少なくとも、衛宮士郎が知ってる日本なら。起きたとしてもそれは暗い世界の住民たちの問題であり、明るい表の世界まで出てくるべきものではない。

そしてそんな大きなニュースも学園都市ではいつのまにか日々話題に消え、学生たちはいたって普通に暮らしている——この世界に違和感を覚えることなく、不安

を感じることもなく。そう、決定的な何か.gzレているのだ、ここは。

前から気づいていたことだが、普通の日本人の世界観とこの少年少女の世界観は違う。法が違い、世界が違い、文化が違うなら、それを別の国家と言わずして何という？

——既にこの街に住む人々は日本人ではない、言うなれば、『学園都市人』だ。『ただ一つの事件から考えすぎるというのもよくはないが……セイバーもこの学生はただの学生と思つてはいけない。思いもよらない事態に陥るかもしれんからな』『御心配なく。私には直感もありますし、そもそも……』

今の私とシロウは一心同体ではないですか、とセイバーは微笑む。足りなければ片方が補えばいい。気づいていないなら気づかせる。今の二人にはそれが出来た。いや出来ていないと困るのだ。

なぜならそれこそが彼女がいる理由であり、多大な手間をかけてまで遠坂凜が衛宮士郎を送った理由でもあるのだから。

……実力、相性共々に衛宮士郎と合う人材などそうはいない。そう、それゆえにハイルスクでハイリターン。実のところ、二人の想像以上に危ない橋を渡っているのだが、それに気づくにはまだ日が浅い。いずれ気づくにしるそれは今でなく、二人はただ歩き続けるのだった。

そうして二人が話し合いながら歩道を歩いていた時である。

『あれは……………』

『どうしたのですか、シロウ?』

衛宮士郎の視線の先にあるのは、一台のスポーツカー。そしてその傍には一人の女性が立っていた。

全身緑色のジャージという雑な格好をしているが、大きく膨らんだ胸元と整った顔立ちが妙な色っぽさを出している女性である。

「さっさとしろ才郷! あの暴走トラックにおいてけなくなるじゃんよ!!」

「怒鳴らなくてもわかっていますよ黄泉川さん! 今行きますって」

女性は大声を上げながら目の前のアパートを見上げています。アパートの上階には男性が一人、その身を機動隊のような格好に身を包みながら階段を下りてきているのが見えた。

『確か警備員アンチスキルの黄泉川愛穂……………だったか』

『へえ、知り合いですか、シロウ』

心なしかセイバーの声が微妙に固い気がするが、今は気にしている場合ではない。

『知り合いではない。あれは確か当麻の通っている高校の教師だ。画像で見た事があるだけさ』

『そうですか。私はてつきり知らない間にシロウがまた立てたのかと思ひまして』

『……立てたとは何だ。変な発言はしないでくれ』

はあ、と息を吐く衛宮士郎。彼が見た画像というのは上条の高校のホームページに載っていたものだ。そして情報収集の一環として、近場の警備員アンチスキルの顔もほとんど頭に入れている。

なにせ今日まで日中はほとんど出ていなかったのだ。そういつた時間だけはたくさんあった。

『何にせよ、ただ事ではなさそうですね。何か事件でもあったのでしょうか?』

『暴走トラックといっていたからな…… 情報が少なすぎて状況がわからん。どうにかしてあの二人から聞き出すか』

これが衛宮士郎という男だ。彼の中では事件に関わるか関わらないかの選択肢など存在しない。事件があれば飛んでいくし、求められずとも手を差し伸べる。

全ては彼の正義のために、彼が常抱く理想のために。それは自己と他人の幸福すら天秤にかけることが出来るほど平等で、そして恐ろしい。彼はそういう人物だった。

『どうやって聞き出します?』

『いや、聞き出すのは厳しいな……』

衛宮士郎は唸る。彼は自然干渉系の魔術がからつきしなのだ。暗示も苦手であるし、この状況は投影などでどうにかなるものではない。警備員の服装アンチスキルくらいなら投影は出来るが、身分を証明するものがないのが問題なのだ。

仮にも彼らは警備員アンチスキル。同業への変装なんて容易に見破られてしまうだろう。

「となれば……」

衛宮士郎は踵を返してその場を離れる。そうして辺りを見渡しながら軽く駆け足で周り、ある建物の側面までやってきた。そこは近場でもっとも背の高い建物、いわゆる超高層ビルと呼ばれるものの一つだ。

そのビルの側面——出来るだけ通りから見えないような場所に陣取ると、衛宮士郎はそのビルの壁を駆け上った。無論、額面どおりに壁面を足で垂直に駆け上ったわけではなく、所々の凹凸を利用して飛び上がったというべきか。まあそれも、常人離れした身体能力であることには変わりはないが。

たたたん、と。軽やかに、そして速やかに上へ上へと上る衛宮士郎。風を切り、スーツの裾野をはためかせながら、あつという間に屋上へとたどり着く。幸いにして屋上は無人生であり、人の上がつてくる気配もなかった。

「暴走トラックと言っていたな」

そのまま衛宮士郎は視力を強化して辺りを注意深く見渡す。乗用車にしろトラックにしろ、それが暴走した車であるならば衛宮士郎には直ぐに見つけられる自信があった。

暴走している、とはつまり言ってしまうえば周囲の和を乱している、周囲から浮いていると言うことである。猛スピードで走りながら、流れを乱して違和感を振りまく車。海を泳ぐ小魚の群れで暴れている大型魚。そんな目立つものを他でもない衛宮士郎が発見できない訳がない。

衛宮士郎は解析を得意とする魔術師で、当然読む力も長けている。たとえ暴走トラックそのものを見つけないとも、それによって乱れた車の流れ、痕跡を追っていけばその先には自ずと答えが存在するものだ。そして衛宮士郎は視線を眼下へ飛ばして数秒で、街中にて暴走するそれを見つけた。

人工衛星『ひこぼしⅡ号』の追加実験棟モジュール、まあそれ単体での自立航行が出来ることを考えれば実質ひとつの人工衛星を積んだ運搬用のトラック、通称『將軍』。それが今暴走しているものの正体である。

では暴走した原因は？　トラックが故障した？　それとも運転手の山岳陽子が乱心

した？ 実際はどれも違う。この『將軍』が暴走したのは、純然たるテロのせいであった。

『將軍』、あの特殊車両には緊急時自動回避システムが搭載されている。運転手が何らかの事情でその意識を落としてしまった場合、安全に車両を路肩に停車させるためのものだ。本来はそういった時のための機能であったのだが、その回避システムが犯人にのつとられてしまったのである。

ただ、のつとられたと言っても『將軍』を犯人がずっと遠隔操作で運転しているわけではない。回避システムはあくまで緊急用のものであり、犯人が制御を奪えるのはおよそ一〇〇秒だ。つまり犯人は運転手の如何に関わらず、一〇〇秒だけ自由にトラックを操作できるのである。

一〇〇秒もあれば事故を起こすのも、どこかに突っ込ませるのも十分な時間に違いない。犯人の要求は『將軍』を指示通りに走らせること。運転席にあるネット対応のGPSカーナビに表示された車両を中心とした赤い円、それが移動するとおりに、赤い円からはみ出すことなくそして速度も落とすことなく運転しろと言うのがその詳細だった。はみ出せば遠隔操作で横転させられてしまう。

……… 本来なら、これが普通のトラックなら、それはどうとでもなることだった。横転程度ならば住民を避難させればよいし、それこそこちらがトラックを横転させて

『將軍』を止めればいいのだ。

しかし、このトラックは特別だった。トラックそのものが、ではない。その積荷こそが、このカージャックにおける最大の問題なのだ。

積荷は人工衛星、そしてその燃料は——極めて有毒な物質、ヒドラジン一五〇〇キロ。

仮に車両が横転して燃料が漏れ出し、引火でもしたら——その時は、地獄だ。引火した有毒物質は空へと舞い上がり、少なくとも半径一キロを汚染する。

しかもトラックは第一〇学区の研究所を出発し、第七学区、第十八学区を経由して第二十三学区にあるロケット発射場まで運んでいるのだ。市街地のど真ん中を走っているがゆえに、毒が撒き散らされたときの人的被害は計り知れない。

もはや兵器とも言えるレベルまで成り下がったそんな『將軍』に、女性の影が二人。一人は運転手の山岳陽子、もう一人は警備員アシスタントの黄泉川愛穂だ。黄泉川はあのと作戦会議に出席することなく、才郷の運転する車から一人でトラックに飛び移ったのである。

時速一二〇キロの猛スピードで走る物体に飛び移ることの危険さと言ったら。才郷も肝を冷やしたが、彼女はこうしてトラックに乗っている。乗っているけれども、

「ちくしょう、工具が！」

助手席から大きく乗り出し、車体の底面を地面スレスレで覗いていた黄泉川は叫ぶ。

彼女はそこにあるトラックの電子系の制御ボックスを手動でいじっていたのだが、『將軍』が横風で煽られた時に腕を地面と擦ってしまい、思わず工具を取り落としてしまったのだ。

これではもう、制御ボックスをいじることが出来ない。

「黄泉川さん！ 早く戻って！」

そんな悔しがる黄泉川の耳に、突如運転席から声が届いた。何事かと顔を上げれば、目の前には迫るトンネルの縁。いつの間にも迫ってきていたのか、このままでは首をへし折られてしまう。黄泉川の全身に悪寒と、嫌な汗が広がった。

「ぐうっ！」

慌てて体を引き起こそうとするも、がくんとした衝撃が体を走る。

（ま、ず………！ 腕がっ………!!）

超スピードの地面と擦った腕。勿論服どころか軽く肉まで削られて血だらけのそれが、この時文字通りに足を引っ張った。破れた服の部分がトラックのどこかに引っかかり、一瞬だけ体のバランスが崩れてしまったのだ。

時速一二〇キロで走る車体の上では、その一瞬が命取り。致命的なまでの、時間不足。

（くそっ、間に合わないっ！）

届かないことを感覚的に知りながら、それでもどうにか体を起こそうと黄泉川が全力

で自分を引き起こしたその時、

「はっ。」

真上からの一瞬の影が地面を暗くしたかと思うと、誰かに襟を掴まれる感覚を受ける。そのまま黄泉川の体は助手席から強引に引つ張り出され、勢いも良くどさんとトラックの荷台に放り投げられた。

その直後に開けっ放しにしていた助手席の扉がトンネルの縁へとぶつかり、ベキンとへし折られて後方に吹っ飛んでいく。まさにギリギリ、間一髪のタイミングであった。

「……………」

間の抜けたような声を再び上げる黄泉川。思考が事態に追いついていないのだ。死ぬかもしれないと思ったら、いつのまにか誰かに助けられていた。そんな事、そうそう想像できる訳がない。

……………だが、一体誰に助けられた？ 黄泉川が慌てて身を起こして顔を見上げれば、そこには見知らぬ誰かがいた。フルフェイスのヘルメットにスーツ姿の、どこからどうみても不審人物。警備員どうりように見える見えないの問題でなく、怪しさ満点の男が一人。

まあ、衛宮士郎その人なのだが。

顔を隠しているのはせめてもの変装で、流石に警備員に素顔を見られるのは色々とまらずいと思ったからだ。スーツは本物だが、ヘルメットは投影品だ。彼は暴走トラックを

見つけたあとにルートを予測し、トンネルの入り口から飛び降りたのである——トンネルに衝突しそうな黄泉川を助けながら。

「おい、大丈夫か？ ……怪我をしてるな。すまない、どこかにぶつけてしまったか？」

「……いや、これはあんたのせいじゃないじゃんよ。　つていうか、あんた一体——」

「悪いが説明してる暇はない。私もこのトラックを止めたい者の一人とも思ってる。それより——ちっ」

話を途中で切る衛宮士郎。その視線の先には、車体側面に迫る壁面が。

「なっ！　おい、ハンドルはどうしたじゃんよ！」

慌てて黄泉川が山岳に確認をとるが、その答えはハンドルがきかないというものだった。

「ジャミング対策!?　そうか、遠隔操作の電波がトンネルで……！」

どうやら犯人によって、電波が途切れるとハンドルがロックされるように設定されているらしい。操作不能の車両に、だんだんと横壁が近づいてくる。

「このままじゃ、ぶつかる！」

山岳が悲鳴に近い声を上げた。壁にぶつかれば、バランスを崩して横転する可能性も

ある。

「ふむ、横転させずに止めればいいのか？」

「今更何言ってるじゃんよ！ 横転したら毒ガスが広がるかもしれないじゃんか！」

電波、毒ガス、横転。衛宮士郎は状況と言葉の端から、このトラックが置かれた状態を察する。だが今は兎に角、この迫る壁をどうにかしなくてはならない。

「おい、何かに掴まっておけ！」

「あ？ あんた何して……」

黄泉川の言葉が終わらぬ内に、ドゴンと轟音がトンネル内に響き渡った。車体全体に走る大きな衝撃。その衝撃の成果かトラックの走るコースは微妙に逸れ、何とか壁に衝突する事態は避けられたようだ。

「さて、こんなものか」

「あんた一体何者じゃんよ、マジで……」

呆れ顔で黄泉川が見つめているのは、衛宮士郎が手にしているやけに巨大な鉄槌だ。そんなものどこから取り出したのか、それとも元から持ってきていたかは分からないが、それで壁を殴ることで強引に車体をずらしたようである。ちらりと後方を見れば、大きく陥没したトンネルの壁。よくもまあ崩落しなかつたじゃんよ、と黄泉川は頬を引きつらせる。

トラックが壁に当たらないようにほんの少し軌道を逸らせばいいとしても、やはりその筋力は人間離れしている。いやそもそも、何でこの男はトラックを止めようとしているのか？ 協力してくれるのはありがたいが、その意図が読めない。

(まあ、邪魔をしにきた訳じゃない様だし。この事件が片付いたらしよつ引けばいい話じゃん)

トラックを止めようとするからにはそれなりの理由があるはずで、それがどんな理由かは知らないがとりあえず現時点では害にならない。……捕まえておけるような状況でもないし。

黄泉川はそう判断すると、対策会議のオペレーターに繋がっている無線機に話しかける。

「わるい、初春！ 工具を落とすしちゃったじゃんよ！ これじゃあもうイグニッションキーは回せない！ それ以外の案は何かないじゃんか!？」

『そんな……！ ぜ、全部落としてしまったんですか？』

ああ、と返す黄泉川。予備の工具は確かにあったのだが、それは助手席の扉の内ポケットに入れていたのだ。そしてその扉は既にはるか後方に。悔しがる黄泉川だが、衛宮士郎は彼女の手から無線を取り上げる。

「ちよつと、あんた!」

驚いて取り返そうとする黄泉川を無視して、衛宮士郎は無線に向かつて話しかけた。

「もしもし、聞こえるか?」

『あ、はい! す、すいません。今別の方法を探してますから……!』

ええつと、と慌てたような声とともに、ぺらぺらと何かを捲る様な音が聞こえる。

ジャッジメント
風紀委員の初春飾利。

本来は風紀委員が危険な任務に就くことはなく校内活動が基本なのだが、今回は緊急事態ということで組織の枠を超えた協力要請がかかったのである。彼女は情報収集・処理能力に非常に長けており、超高度なハッカーでもあった。

その彼女が今まで黄泉川に指示を出すことで、事件を收拾しようとしていたのだ。回避システムの穴は、それがあくまで非常時のものであるという事。このシステムは「現在動いている車を停める」時にしか干渉できず、「既に停まっている車を再び動かす」事はできない。

つまり一度でいいから電気モーター（このトラックはこの図体にして電気自動車なのだ。しかも水素エンジンですらない）を止めさえすれば、回避システムは作動しなくなるのだ。そこで手っ取り早くイグニッションキーを回してしまえばいいという事になったのだが、それは走行中にはロックされている。それゆえそのロックを解除するために、先ほど黄泉川が車体裏の制御ボックスをいじっていたのである。

「いや、別の方法は探さなくていい。工具さえあれば、どうにかなるのだろう?」
『え、でもさつき工具は落としたって』

「自前のもがある。指示さえ出してくれば私が対処しよう」

嘘ではない。衛宮士郎は工具くらいいくらでも投影できるし、そういった手作業には自信があった。

「どうすればいい? どこのをいじればいいのだ?」

『えっと……』

いきなり変わったこの人はどこの誰なのか。どうやってトラックに乗り込んだのか。そもそも信用してもいいのか。黄泉川と似たような疑問を抱いて混乱しながらも初春は説明を始めた。

ここは迷っている場合ではないし、黄泉川と一緒にいるならそれは信用に足る人物なのだろうと考えて。そうして無線を脇に抱えながら車体の下に潜ろうとする衛宮士郎だが、黄泉川も黙ってみている訳ではない。

「あんたが工具持つてるなら、それを私に渡して欲しいじゃんよ! こういう事を部外者にやらせる訳にはいかないじゃんよ!」

「片腕を怪我した君より、私のほうがうまくやれる。それに女性を危険な目に合わせるのを、黙って見てろとも言うのか?」

「女性云々は関係ないじゃんよ！ そりゃあこっちは片腕怪我してつけども、やつぱそ
ういう訳にも……」

反論する黄泉川だが、それを無視して衛宮士郎は潜った。途中ヘルメットがじやまになつたので、消して工具を投影する。

耳元で轟々と響く音。落ちればミンチ、触れただけでも肉が削られるほどの摩擦だ。勢い良く流れる地面に暗い手元と、悪条件この上なし。だがそんな状況下でも、衛宮士郎には一切の躊躇いが無い。

「下に潜ったぞ。どうすればいい？」

『そこに縦横四〇センチくらい銀色のボックスがありませんか？』

「……あつたな。コードが詰まって、右上にスイッチが三つある」

『そのボックスの左下に、さらに小さなボックスがあるはずです。八つのねじで固定されているので、それをはずしてください』

「了解した」

投影した小型のねじ回しで、くるくるとねじを外した。外したねじはちりんと音を立てながら、一瞬で後方へと消える。蓋を開けてしまえば、あとは簡単な手作業だった。無論、危険な状況で作業しているには変わりはないが、そのまま初春の指示通りについてくつかの作業をこなし、ボタンを押ししたりつけたりする衛宮士郎。……そして数分後。

「終わったぞ。これでいいか？」

『はい、完璧ですよ！ これで走行中でもイグニッションキーが回せるようになったはずですよ！』

興奮した声で喜ぶ初春。衛宮士郎は車体の裏から頭だけ這い出すと、山岳に向かって叫んだ。

「こっちは完了した！ 運転手、キーを回してくれ！」

「は、はい！」

慌てながらも冷静に、山岳はかちんとキーを回す。モーターが止まった音がした……かどうかは分からないが、トラックの速度が目に見えて下がっていくのが黄泉川にも分かった。

成功した。その単語だけが安心感とともに黄泉川の頭を巡る。部外者に任せるのは想像以上に緊張感を伴ったが、張り詰めた糸は少しだけたわむ事を許されたのだ。

「これで回避システムも効かないはずじゃん！ ブレーキ踏んで、路肩に停めるじゃんよー！」

一通り指示を出して、はあ、と黄泉川は大きく息を吐く。工具を落としたときはどうなるかと思ったが、何とか事件は解決したと言える。それもこれもあの男のおかげだと、礼を言おうとして（ついでに確保も）車体の裏を覗き込んだが、

「ありや?」

いない。念のため反対側を覗いたが、やっぱりいない。もしや助手席にいるのかと前の方を見たが、そこには安堵の表情を浮かべながら車を運転している山岳陽子一人だけ。

「ちよ、ちよいとあんた。あの男どこに行ったかみてないじゃんか?」

「え? あれ? 後ろにいるんじゃないんですか?」

「——つ!!」

ばばつと黄泉川は後ろへ戻り、荷台の隅まで探したが……

「……いない、ねえ。逃げられちまったか」

はーあ、と今度は別の意味でため息をつく。過ぎ去った道路を見ても、男の影も形もなし。モーターを止めてブレーキを踏んでいるとはいえ、まだそれなりの速度が出ているはずなのだが、どうやら飛び降りて脱出したらしい。まさかこんなに早くは逃げまいと、高をくくつていなかったといえば嘘になる。

(あくまでちよいと事情を聞くだけで、悪いようにするつもりはなかったんだけど……)

よつほど面が割れたくない理由でもあるじゃんか?)

そうなると余計気になるが、逃がした獲物のことをいくら考えてもきりがなし。黄泉川はうんと背伸びをすると、事後処理について考え始めるのだった。

警備員活動第七三支部。今回の事件の作戦会議が行われていたこの場所では、つかの間、安堵の雰囲気の流れていた。まだ犯人が捕まっていないので事件が完全に解決したわけではないのだが、それでも一人の犠牲者も出すことなく事件が収拾されたのは喜ぶべきことだ。

「はあー。無事に停まってよかったです……」

パソコンを前にして、ぐてんとしている初春もその一人。ついさつき分かったことだが、犯人の狙いはあのトラックを第三学区にある国際会議場に突っ込ませることであったのだ。

学園都市の上層部である十二人の統括理事と七カ国の首脳陣が公式会談を行っている場所、なるほどここにあのトラックが突っ込んでいったらどんな被害が出るかは想像もつかない。最悪その事態を防ぐために運転手を犠牲にしても、途中の人工湖にトラックごと突っ込ませる案まで出てきていた所である。

それは少々運転手やその人工湖の周囲の人々が犠牲になっても、会議場さえ無事なら構わないという考えだ。

色々な事情や影響を考えればそれは正しい案であるかもしれないが、初春には納得が

いかなかった。実際にその方向に作戦がシフトした時、初春自身も自分がどういった行動を起こすかは想像もつかなくらいに。それだから無事にトラックが停まったとの報告を聞いたとき、彼女はひどく安心したのだ。

……実は山岳陽子の娘さん達が、この場を訪れていたというのもある。二人とも学園都市の学生なのだが、母の危機と聞いて思わずやってきてしまったらしい。大人でさえも威圧感を覚える警備員の詰め所に乗り込んで、囲まれながらも『母親を助けて』と願う子供たちのなんといたいけなことが。

——子を想う母の情は強いが、それと同じくらい母を慕う子の情もまた強い。彼女たちの悲痛な願いを聞いたとき、なんとしてでも山岳陽子を助けると初春は誓ったのだが、それが無事達成できたことは本当によかったと思う。

(でも……)

そんな初春に残る、ひとつの疑問。

(どこかで聞いたことのある声だった気がするんですが……)

それはあの無線で会話した謎の男性のこと。通信しているときは指示を出すので精一杯でそれどころではなかったが、落ち着いて振り返ってみればなんか聞き覚えのある声だったのだ。それも結構最近に。

(んー……………あ、)

しばらく頭のカレンダーをさかのぼっていたら、唐突に初春は思い出した。それはあの虚空爆破事件の時のこと。それも初春自身が狙われて、あの御坂美琴が解決したスキのことだ。

元々第七学区に住み、夏休みにも差し掛かったこの時期で、いわゆる大人の男性の声を聞くことはそう多くない。警備員や学校の教師以外で彼女がであった男性も然り。それでいてあの声の主は確か……、

(そうだ！ 虚空爆破事件の直前で財布を見つけにくれた……!!)

確かに、いや間違いなくその人だと初春は思い出した。伊達眼鏡で妙に黒い肌をした特徴的な男性だったし、あんな事件の前だったのだから嫌でも記憶には残っていたのだ。

気難しい顔をしていたが、人のよさそうな雰囲気でもあったあの男性。ここは風紀委員^{ジャッジメント}、学園都市の治安を守るものとして報告するべきなのだろうが。

(……………まあ、いいかな)

たつぷり数十秒は考えたか、最終的に初春はそういつた決断を下した。事件を煽ったわけではなくむしろ手助けしてくれた人なのだし、悪い人ではない……はずだ。

聞いた話では顔を隠していたというし、知られたくない事情でもあるのかもしれない。恩を仇で返す気にも、今の初春にはならなかった。……………彼女はまだ中学一年

生、人の善性を容易く信じられる年代だ。この判断も無理はない。報告すれば衛宮士郎の足取りも完璧に捕らえられてしまっただろうが、幸いにして彼女はそうしなかった。そして結局黄泉川の報告だけでは謎の部分が多すぎて、ついで警備員はその正体を掴めなかったのであった。

「さて、ひと段落といった所か」

所変わって学園都市内のどこか。衛宮士郎は着替えながらも一息ついていた。無事に脱出に成功した彼は、痕跡を残さぬようにいたるところを回った後、改めて街を歩いているのだった。今回ばかりは足取りを巻くのに、魔術も色々と駆使したほどだ。

『犠牲者も出ず。無事に終わってよかったですね、シロウ。……ですが』

『わかっている、少々目立ちすぎたな。だが結果オーライだ』

セイバーの心配。それは色々々と情報を残しすぎた点だ。声、身長、体形、個人を特定するには十分な情報を。

『まあ、仕方あるまいよ。そこは向こうに任せるさ』

衛宮士郎の言う向こうとはアレイスターのこと。ある程度はその情報処理・操作に期待するしかない。むしろ今回は衛宮士郎にとっては別の収穫があった。

『それよりも、こつちが重要だ』

衛宮士郎が手に取っているのは、黄泉川愛穂が使っていた無線機だ。つまり警備員に正式採用されている一品である。このままでは場所を特定されかねない危険性もあるので、今は電池ごと引っこ抜いているが。

『どうにか改造して、無線傍受が出来るようにしようと思つてな』

『また危険なことを……』

下手をせずとも危ない綱渡りだ。わざわざ何でそんな事をするのかとセイバーが聞けば、

『なぜって、困つてる人がどこにいるか直ぐ分かるからに決まつてるだろう？』

何でそんなことを聞くのだ、といった口調で衛宮士郎は返すのだ。たとえば学園都市に留まることを決めた後でも、彼のすることは変わつてはいない。

困っている人を助ける正義の味方。自分に降りかかる業火よりも、他人に降りかかる火の粉を気にするその人となり。いつかきつと、いや必ず破綻するであろうその在り方は、セイバーから見ても変わつてはいなかった。

何故自分がこうして衛宮士郎に憑いているのか、どうして遠坂凜はこんなことをしたのか。それを自ら考えるに当たり、最近ではセイバーにもあるひとつの考えが浮かんできていた。だがそれは衛宮士郎に話すものではないし、むしろ話してはいけないもので

あると思う。

(しかしリン、何故私なのですか?)

漠然と、思い浮かぶはそんな疑問。彼女の考えが正しいならば、それはある意味でやり直しであり、彼女の願いに遠からず。歩く衛宮士郎の様子を見ながら、セイバーもまた自問を続けるのであった。

思惑の網目を抜けて絡まり

そこに照明はなく、けれども光に包まれていた。無数の計器やボタンが星のように瞬くことで部屋を明るく照らしているのである。そして床を埋め尽くすほどのケーブルは、その部屋にあるただ一つの水槽に繋がっていた——そう、一人の『人間』が浮かんでいる水槽に。

ここは通称『窓のないビル』にある……と言われている、学園都市統括理事長アレイスターⅡクロウリーの部屋だった。本来ここには水槽に浮かんでいるアレイスターその人しかないはずだが、今日は客人が二人。

いや、客人と言うには少々アレであったが、形は違えど二人の魔術師がそこにいた。イギリス清教が必要悪の教会に所属するステイルⅡマグヌス、そして、

「さて、ここに私が呼ばれた理由をそろそろ教えて貰おうか」
買い物袋を引つぎげた衛宮士郎だった。当然、彼は自分の意思でここに来た訳ではなく、見ての通りの買い物途中だ。

上条が参考書を買うに行くと言いだしたので、ならばこちらは冷蔵庫の中身を補給してこようと衛宮士郎一人でスーパーに出かけていったのだが、その帰りに突然の呼び出

しを受けて拉致されたと言う形である。

「……ふん。学園都市で何をしてるかと思えば、まだ上条当麻にひつついていたのかい？ 魔術師だったら余計なことはずせずに、さっさと『外』に出たらどうだ」

「こちらとて外に出たいのは山々なんだがな。早く冷蔵庫にしまわなければ、アイスも溶けるし食材も悪くなる」

「……………」

ずれた会話を続ける二人。ステイルは外の意味が違う、と内心で毒づく。そんな二人を細めた目で見ながら、アレイスターは口を開いた。

「ここに君たちを呼び出した理由だが……、イギリス清教はわかっているだろうか？」

確認の声にステイルは頷く。衛宮士郎はと言うと、私にもさっさと説明してくれないかと目で言っていた。いきなり拉致されたことは勿論だが、彼には横にいるステイルの方が気にかかる。ステイル自身ではなく、彼とこの場にいる状況が、ということだが。

「ふむ。では君のためと、状況の確認のために今一度事情を話そう」

アレイスターは衛宮士郎のほうを向く。不気味な奴だ、と衛宮士郎はそう思う。人を捨てた人などごまんと見てきたが、ここまで人の範疇の限界に留まる、いや範疇を『広げた』人間はそういないだろう。

通常なら広げた分だけその性も散見し、コントロールするどころか自意識の確立すら

難しくなるもののだが、この『人間』にはその気配が全くないことが呆れる。衛宮士郎には科学の力だけでここまでいける理屈など到底理解できないが、そこにたどり着くまでの道のりを考えるとやはり空恐ろしくも感じるのだった。

実はアレイスターもアレイスターで衛宮士郎にはほんの少し感じることがあるのだが、そこは今は関係ない。……本人すら意識していない可能性もあるが。それはさておき、アレイスターは淡々と事態の説明を始めた。

「吸血殺し^{デーブブラッド}、という能力がある。学園都市が保持する能力の一つなのだが…… 簡単に言えばその能力を持つ能力者が監禁されたのが始まりだ」

吸血殺し。その名を聞いて衛宮士郎やセイバーが最初に思い浮かべたのは当然、死徒のことである。生きる者の肉を喰らい、人を外れた日陰者。彼らがこの世界に潜んでいる可能性を考えていなかったわけではないが、こういう単語があるにやはり死徒の類は存在はするのかと二人は確認しあった。

「吸血殺し、とは。なんとも物騒な名前だな」

「……僕らからしてみれば物騒どころの話じゃないはずだけどね」

ステイルがぼそりと呟く。その言葉にちらりと衛宮士郎はステイルの方を見るが、彼はそれ以上何も喋らない。

「それだけなら何の問題もないのだ。この街で起きたこの住人の事件ならば、七万と六

三二程度の解決策は講じられる」

「……なるほど、つまり問題は」

何かに気がついた衛宮士郎の言葉に、続けるようにアレイスターが繋ぐ。

「そうだ。その吸血殺しを監禁したのが——魔術師きみたちなのがよくしくないのだ」

アレイスターはそこで一旦言葉を締めるが、二人を見ながらさらに続けた。

「無論、魔術師一人程度ならそれこそいくらでも科学側こちうで処理できる手段がある。……が、科学側が魔術側を倒してしまうのはまずい。無用な波紋を広げることになりかねない」

魔術と科学の線引きがされ、互いの技術を独占している現状。それ故にぎりぎりの均衡がとれており、戦争も未だ起こっていないのだ。だがそこで敵陣で倒れた魔術師から、情報が漏れる恐れが出てきたら？

情報は戦力だ。技術の漏洩はそれだけで差を広げる。過敏に反応した魔術師が学園都市に乗り込んでくることもありえない話ではないのだ——そしてそこから戦争に繋がるというのも。

「それで私とこの小僧、か。対魔術師用のプロを頼るのは分かるが、私は君の便利屋扱いか？」

「ふむ。それについてはあとで話すとする。まだ先に説明したいことがある」

小僧と言ふ言葉にスタイルはむっとした表情をするが、彼はこれでも一四歳だ。衛宮士郎に小僧呼ばわりされても仕方のない年齢ではある。

「これがその監禁場所。今回の『戦場』だ」

アレイスターの声とともに、CGのような立体見取り図が目の前に浮かんできた。『三沢塾』と書いてあり、どうやらその何の変哲もない普通のビルが舞台になるらしい。漢字の『田』の字を形作るように配置された、一二階建てのビルが四棟。それぞれが空中の渡り廊下で繋がっていて、そこそこ大きなビルだ。

衛宮士郎はその構造の隅から隅まで目を通すが、いくつか疑問が残った。この『三沢塾』のビル、特にコレと云って拠点防衛に向いている点はなく、かといって物凄く堅牢と云うわけでもない。

「しかし、なんだってまたその魔術師はこの『三沢塾』に居を置いたのだ？ 目的のものを手に入れたならさっさと学園都市を出るか、もっと目立たぬ場所で事を起こせばよからうに」

つまりそういう事。衛宮士郎ならこんな場所を誰かを監禁するのに使ったりはしない。それとも使わざるを得なかったのであるなら別だが。

「『三沢塾』は今、少々特殊な環境におかれている」

衛宮士郎の疑問を受けて、アレイスターが説明を始める。

「このビルは全国規模の進学塾である『三沢塾』の学園都市支部と言った所だ。ただ本来の、いわゆる進学塾としての役割だけではなく、そこには学園都市特有の学習法を盗んでくるための巨大な企業スパイの色が強いがな」

そう前置きしながらアレキスターが説明したところによると、『三沢塾』が超能力の開発という分野の学習法を盗み取ろうとしたはいいが、この学園都市支部はその能力開発に非常に悪い影響を受けたのだと言う。

それは能力開発という異端で最先端な科学技術を知ってしまったことによる、過度の科学崇拜。そしてその技術を知っている自分たち自身への選民感覚。

もはや宗教とも言うべきそれは支部校の暴走へと繋がり、結局『三沢塾』グループの命令すら聞かなくなってしまった。そんな彼らが取った行動が『吸血殺し』の監禁だ。『学力』と『異能力』がそのままステータスになる学園都市では、レアな能力ほど価値は高く尊敬される傾向がある。要は箔付けのために『吸血殺し』を監禁し、保管・研究そして客寄せとしたのだ。

「……………」

話が進むにつれ、衛宮士郎の眉間に皺が寄っていく。どんな理由があろうとも個人を監禁するのは許されることではない。それも箔付けのためなど、常人からすればどうかしている。

いわんや衛宮士郎をば。正義の味方を理想として掲げる彼が、そんな暴挙を許すはずがない。

「客寄せパンダの『吸血殺し』とはな……つまりせいづらにとつては誰でもよかつたのか？ 希少価値を持つ能力者なら誰でも？」

「そうだ。『三沢塾』からすれば『この世に一つしかない、再現不能の能力者』ならば誰でも良かったようだ」

「……別にせいづらの教義が不老不死だったりする訳ではないんですね」

ステイルが確かめるように口を開く。彼からすれば学園都市のヒエラルキーの仕組みなど興味はないのだが、今回は別だった。『吸血殺し』。それが関わってくる以上、それが示すある生物にも否応なしに意識を向けなければならぬからだ。

「だがこの事件の肝要はそこではない。先ほども言ったがその『三沢塾』が『吸血殺し』を監禁したというだけならば、七万と六三二の策がある。しかしその処分をする前に、吸血殺し狙いの魔術師がやってきて、『三沢塾』をそのままの取つてしまったから話がややこしいのだ」

宗教と科学と言うものは決して水と油ではない。むしろ混ざりやすいものと言えよう。故に科学技術の最高峰でありながら教育現場でもある学園都市では、科学宗教には十分に気を使っているのだ。

何しろ『モノを教える』という環境は、些細なことから洗脳へと繋がりがかねない。『三沢塾』の場合は処分の直前に魔術師が丸ごと乗っ取ったという感じだ。

「……なるほど、そういう顛末だったか」

ようやく納得が言ったと衛宮士郎は息を吐く。対して、ステイルは未だ浮かない顔をしている。何かいまひとつ信じられないと言うかのように。

「君は……………いや、この学園都市には本当に吸血殺しが、そんな能力が存在するんですか？ いるとすれば、それはつまり——」

衛宮士郎に何か言いかけたステイルは、それを途中でアレイスターへの疑問に切り替える。彼にとつて吸血殺しを認める事は、それに殺される『ある生物』を証明することになるのだ。それが何を意味するのか、特に魔術師にとつてはそれが如何ほどの禁忌か。

『ある生物』が存在することなど、許されることではない。何故ならそれらは不老不死ゆえに『無限』の魔力を持つとされているから。有限な人の人生における魔術師がその寿命、生命力から精製する魔力の量を決定的に死で制限されている事に対して、『ある生物』にはその制限がないのだ。底のない永久資源と思えばいい。

そしてそれを自由に扱えるのだとしたら——それこそ、核にすら匹敵する脅威である。そんなことくらい魔術師にとつては当然のはずなのに、ステイルはほとんど何の

反応もしない衛宮士郎が気にかかった。

ポーカーフェイスと言えば聞こえはいいが、ここまで無関心だと妙な話だ。先ほどの台詞から見るに、衛宮士郎にとっては吸血鬼の存在より誰かが監禁されていることのほうが気をひく事らしい。

おかしな奴だ、とステイルは再確認する。結局あの禁書目録の事件のあとに衛宮士郎については調べるだけ調べてみたのだが、全く、それこそほんの一片たりとも情報が出てこなかったことには驚かされた。

どんな形であれこの世界に存在する以上、何かの痕跡を残しているはずなのにその影も形もないのだ。実際にはそこにいるのに、それを支えるものが何一つないとは。

「……吸血鬼狙いの魔術師。自分が吸血鬼にでもなるつもりか、はてさてそれを利用して何か事を起こす気なのか。どう思う? ……おい、聞いているのか?」

「……ん? ああ、勿論聞いていないとも」

考えに没頭していたステイルは衛宮士郎の声に意識を戻した。ふてぶてしくも落ちていた態度に衛宮士郎はやれやれと肩をすくめるが、特に気にした様子はない。

「それで我々はそのビルに乗り込んで、件の魔術師を撃破すればいいのだな?」

アレイスターのほうに向き直った衛宮士郎は自分たちが取るべき行動を確認する。そうと決まれば善は急げ。誰かが今この瞬間にも監禁されていると知った以上、今すぐ

にでも動きたくなくなるのが衛宮士郎だ。解放されれば飛んでいきそうな様子の彼に、だがしかしアレイスターは否定の言葉を投げつけた。

「否。今回の作戦に参加するのはステイルⅡマグヌス、上条当麻の両名のみだ」

「……何だと?」

「ここまで説明しておいてどういふことだ、と威圧感を放つ衛宮士郎。これにはステイルも意外だったようで、興味深そうに二人の様子を見つめている。

「魔術師の私が参加せずに、どうして当麻を参加させる必要があるのだ!」

「無論、それはアレが魔術師天敵となりうる能力を所持しているからだ。対魔術師としてアレ以上の適任はいまい」

「魔術師を能力者が倒すのは問題だと言う理由はどうした!? なんのための話だったのだ今までの!」

「アレは無能力者だ。重要なことは何一つ知らないし理解できるほどの脳は持ち合わせていない。ゆえに科学側の情報が魔術側に漏れる心配はなく、その逆もまた然りだ」

「ぐっ………! 貴様っ!」

怒りを露にする衛宮士郎だが、アレイスターはそれをつまらなさそうに見つめている。衛宮士郎が参加できないだけならまだ分かる。

だが上条が参加するのに、自分が参加できないと言われては黙っていられない。そん

な戦場に上条を實質一人で放り込むなど、彼からしてみれば狂気の沙汰だ。

「ならば私が参加出来ない理由は何だ！　ここまで話しておきながら不参加とは、納得のいく説明があるんだろうな！」

「……………」

確かにそれはステイルも気になるところではあった。これだけ事情を話しておきながら除け者にされるにはそれなりの理由があるはずだ。何か衛宮士郎の情報に繋がるのでは、と二人の話に耳を傾ける。

「君の不参加の理由だが、第一にその魔術師は以前の君との約束とはなんの関連性もない者である事。第二に君自身の不注意だ」

「私自身、の…………？　…………一体、どういうことだ」

以前の約束、つまり衛宮士郎が学園都市に入り込んだことに関するそれについてのことならまだわかる。だが不参加の理由が自分自身にもあると聞かされてはそうも言えない。

衛宮士郎がすぐにその事情を問いただせば、アレイスターは目の前に一つのレポートを映し出した。『三沢塾』の見取り図を出した時の様に空中に浮かぶそれは、衛宮士郎の目の前にて停止する。

「これは……………」

それを見たとき、衛宮士郎は苦い顔をする。横からステイルも覗き込んでみれば、それは一枚の映像とそれに基づく報告書だった。

その内容を要約すれば八月一日のカージャック事件について言及されたものであり、そこに現れた謎の人物という話であったが、

「これは君の事であろう？　こちらとすれば内側で解決できるものを勝手に動き回られるのは迷惑な話。今回の件に君が首を突っ込んで場をかき乱しては、非常に面倒なのだ」

「……そうきたか」

衛宮士郎が舌打ちし、目を細めて報告書をじつと見つめる。ちよつとした不意打ちのようなものに、逆に彼は落ち着きを取り戻す。確かにこれは衛宮士郎の過失だ。そしてそのリスクも背負うことを覚悟して先の事件に関わった以上、彼からは文句が言えない。相応のデメリットを覚悟していたはずだが、まさかこんな形で頭れるとは。

だが、何かが、何かがおかしいと、彼の勘が告げている。この言いがかりのような理由付けにというだけでなく、漠然とした何か。上条の事、自分の事、アレイスターの事。三つの要素が衛宮士郎の頭の中でぐるぐる廻り、警鐘を鳴らす。

「こちらの情報操作で場を収めたとはいえ、あまりおっぴらに動かれても困る。君は魔術師という異物がここに紛れ込んでいることをもつと自覚すべきだな」

「……………」

黙り込む衛宮士郎だが、その目は何かを探るようにアレイスターを見つめていた。外された事に対する不満ではなく、アレイスターの意図を掬うかの如くじつと目を向ける。

「君がここに呼ばれた理由だが——」

アレイスターが言葉が続ける。いつも通りに動じず、天地逆さに浮かびながら。

「——警告という所か。水面を波立たせる小石も、積もれば目立つ」

話が終わり帰る直前まで、衛宮士郎はアレイスターを見つめていた。

『それで？ あの説明で納得したのですか？』

『まさか。……あれだけが目的なはずがない』

ここは既に窓のないビルの外。外に出た衛宮士郎はロッカー（冷蔵用）に食材を預けると、三沢ビルが見える所まで来ていた。

と言つても数キロは離れているが、衛宮士郎には問題がない。適当に腰を下ろしながら、セイバーと先ほどの会話について思い返す。

『わざわざ警告だけにあそこまで招くかと言えば、疑問が残る。他に目的があった、と考

えるべきだな……』

『シロウにあそこまで事情を聞かせたのが気になりますね。最初から外すつもりならば、状況を説明する前に追い出すはず…… 参加させないものに余計な情報を与える意味はありませんからね』

『情報を与えることに意味があつた、と見るべきか？ いや、そもそも招くことが目的だつたか……』

考え込む衛宮士郎。セイバーはそんな衛宮士郎から意識を外し、自らも考えを巡らせる。

(さて、先ほどのアレイスターの意図はにおいておくとして。……吸血鬼ですか)

死徒という呼称がされなかつた以上また違った吸血種がそんざいするのだろう、とセイバーは予想をつける。衛宮士郎はアレイスターに意識が向いていたので気づかなかつたかもしれないが、セイバーは吸血鬼という言葉を目にしたときのステイルの妙な反応が引つかかっていたのだ。

あの禁書目録の事件の時に目にしたステイルⅡマグヌスの戦闘力ならば、普通の死徒位だつたら対処できる程の力があると彼女は踏んでいた。

そのステイルが——幾多の死地を潜り抜けたはずの魔術師のプロが、あそこまで吸血鬼に反応する理由。

(もしかしたら、こちらの世界の吸血鬼は元の世界のソレよりはるかに格上の存在なのでしょう。だとしたら、あの態度にも納得いけますが……)

それよりも心配なのはトウマですね、とセイバーは考える。どう見ても上条を好んでいるように思えないステイルと、いくら対魔術師の切り札を持つとはいえ戦闘の素人の上条がタッグで戦地に赴くなど、嫌な予感しかない。

それに……、とセイバーはさらに思考を繰り返す。

(吸血殺しがある以上、吸血鬼そのものを敵の魔術師が飼いならしている可能性もあるはず。だとすれば余計にトウマは危険ですね)

こちらの世界はどうかはわからないが、元の世界における死徒がどうして脅威なのか。その原因の一つに、人の動体視力を遥かに超えた駆動力がある。

つまり、常人の目では死徒の動きを追うことすら出来ないのだ。それは上条に関して言わずもがな。いくら幻想殺しが異常・異端の全てを砕いたとしても、当たらなければ何とやらだ。

振るう拳が空を切れば、そこら中に臓物をぶちまける事になるのは上条になる。この世界の吸血鬼が死徒を上回ると言うならなおさら。

(それだけは…… それだけは、避けなくては……)

上条自身のため、そして衛宮士郎のため。彼女は決意を固くする。

『セイバー……』

そんな彼女に、かけられる声。無論、衛宮士郎のものだが、その声はどこか躊躇いがちだ。

『提案があるのだが……』

そのころ上条は、ステイルによって錬金術師というもののレクチャーを受けていた。記憶をなくした上条は当初ステイルと出会っても分からなかったのだが、そこは話を合わせたリ逸らしたりしてどうにかこうにか乗り切った。まあ会ってそうそう不興を買い炎剣を振るわれたりもしたが、それ以外は概ね上々と言ってもいいだろう。

ついで上条は秘密を隠し通したまま、ここまできているのだから。だがステイルの話を聞きながらそれに反応するかのように出てくる自分の『知識』については、記憶を失う前の自分は一体どんな交友関係があったのだと頬が引きつくくらいだった。

………自分が記憶喪失なことに関して、上条が何も思わなかったわけでは無い。とくにあの、自分を禁書目録インデックスと名乗る少女。彼女が自分を慕っている様子を見るたびに、陳腐な表現だが上条には胸を締め付けられるような痛みが走るのだ。

彼女が——あのインデックスという少女が慕っているのはあくまで『前の』上条

だ、今ここにいる上条ではない。彼女を助けたのも前の上条だし、彼女に関する全てがそう、記憶を失う前の自分に起因しているのだ。あの衛宮士郎と言う同居人に至っても同じこと。

彼が病院で見せた様子を考えれば、いかに上条の事を心配していたかも分かる。頼れる兄貴分、のようなものか。買い物途中で迷子の道案内をすることもあれば、いつのまにか赤の他人に絡んでいる不良たちを相手に立ち回っている時もあった。

困っている人がいたら迷わず飛んでいくヒーローのような男。そしてあれだけの人物が気にかかる前の自分とは一体どんな人物なのか。『今の』上条が気にしないはずが無いのだ。いつかばれてしまうのかと、この騙し騙しの生活が終わってしまうのかと考えると、上条は背筋に嫌な汗が流れる。

それだけは嫌だ。自分のためではなく彼らのために、上条は今日も嘘で自分を包む。それで彼らが救われるなら、それでもいい思つて。

さて、協力しなければ禁書目録インデックスを回収すると脅された以上、上条はステイルに協力しなければならぬわけだが、その三沢塾に監禁されている『吸血殺し』の保有者、名をひめがみあいさ姫神秋沙という。

………実は数時間前に、上条はその姫神と出会っていたのだ。もちろんこんな事に巻き込まれる前の話であるが、あの様子はとても監禁されていた者の様子に見えなかつ

た。というか監禁されているはずなのに、そこらのファーストフード店に普通に居座っていたのである。

その時はちょうどインテックスと青髪ピアス（上条の学友、らしい。当然上条自身は覚えていない）をつれてその店を訪れていたのだが、そこで彼女と相席になったという訳だ。……しばらく馬鹿なやり取りをした後に、彼女は黒い服を着た男たちに連れて帰られた。

今思えば姫神は助けを求めているのではないのかと、上条は思う。電車賃が足りないのと呻きながら、彼女は椅子に沈んでいた。その電車賃とは脱出のために、追っ手を振り切るために必要なものだったのではないかと。それを考えると上条はざわりと胸中が泡立つ。

この感情は、怒りではなく、苛立ち。『三沢塾』、錬金術師、ステイル、上条自身、そして姫神に。あそこでなりふり構わず助けを求めれば救われていたのかもしれないのに、呼ばなかった。それは何故？ おそらく、それは……

（あいつが…… あいつが周りを巻き込むのを……！）

恐れたから。それに尽きるだろう。——おかしな話だ。それならあの時姫神は、電車賃すら貸すことの出来なかった上条を巻き込むことをしまいとしたのだから。電車賃があつたら、上条がそれを貸すだけのお金を持っていれば逃げ切れたのかもしれない

いのに。

それは自分を殺してまで、他人を助けるようなものだ。上条には、それがたまたまなく腹が立つ。物として扱われながらも、それがあるがままに受け入れる少女。自ら傷つこうとも、周りの幸せが自分の幸せだとも言うかのように微笑む少女。

どこか、心のどこかに、そんな少女がもう一人いた気がする。ならば上条は救わねばなるまい、その少女を。何より上条自身が、その少女に言いたいことがたくさんあるのだから。

錬金術師。彼らは主に中世に於いて活躍し、しかし今では半端な学問として魔術の世界では見なされている。そんな錬金術師の共通する到達点とは、『世界の全てを頭の中でシミュレートすること』だ。

つまりこの広大な世界を取り巻く膨大な数の公式を全て理解し、それを頭の中で再現すること。無論それだけでは終わらない。——彼らはその頭の中で構築した世界を、現実世界に持つてくる術を既に見つけているのだ。

……まあそれは非常に大変なことである。そもそもその複雑な法則を一つでも間違えてしまえば、途端にそれは意味をなくす。いくら頭の中でシミュレートしようとも、

歪んだ偽者では世界と言う法則を塗り替えるには足りないのだ。だが一番の問題はそこではない。

少し考えれば分かる事だが、膨大な公式を計算するにはそれ以上に莫大な時間がかかる。水の流れ、木々の揺れ、人の動き。

ありとあらゆる現象を、全てを計算しなければならぬのだ。そんな計算が、一体どれほどの時間を費やせば完成するだろうか？ 少なくとも、人の一生では払いきれないほどの時間がかかる事は間違いない。つまり呪文自体は既に存在していても、それは人の手には負えない代物なのだと言うことである。

——そう、人の手には。もしも人を遥かに超える時間を持つ生物がいたら？ もしもそんな生物がその呪文を唱えたら？ それは、世界の全てを操れる力を持つに等しい。それ故、無限の時間を持つとされる吸血鬼の存在は錬金術師の悲願であり、もつと言えば魔術師全体の悲願でもあるのだ。

上条はその説明を聞きながら少し錬金術師という者達を哀れに思う。答えを知らないがら限られた寿命のせいで届かないとは、それは、悔しいだろう、苦痛だろう。

上条からしてみれば、そんな途方もない事を人外の手段で実現させようとはどんな奴なのだろうと考えたのだが、聞けばステイルはその件の錬金術師と知り合いらしい。

アウレオルスⅡイザード。

ステイル曰く、鍊金術は確かに脅威だが、奴に出来るのは『三沢塾』に罟を張ることぐらいだ、と。そうして『三沢塾』に向かいながらアウレオルスについての話を聞いていた上条は、ふと気になったことを口にした。

「そういえば士郎はどこ行つたんだ？ 先に『三沢塾』に行つてんのか？」

「ああ、奴なら今回は不参加さ」

は？、と扱けた声を出す上条に、ステイルはにやりと口を歪ませる。

「まあ僕も詳しくは知らないけど、自業自得つてやつだな。あいつはこの事件に関与することを禁止されてる」

「禁止されてる？ お前、人を助けるのに禁止も何も、そもそも許可なんて——」

「いるんだよ、君が知らないだけでね。今回の事件は複雑な事情を抱えてる。脳が腐つてなければ直ぐにでも気づきそうなものだけど？」

心底馬鹿にしたような声で鼻を鳴らすステイル。上条はむっとした顔をするが、やはりまだ納得いかない。

だつてこんな話を聞いて、あの衛宮士郎が首をつつ込まないはずがないのだ。人助け癖とも言うべき性を持つ男。助きたいのに許可が出ないから助けられないなど、そんな馬鹿な話はないだろう。

ステイルのあの口ぶりでは、衛宮士郎はこの事件について既に話を聞いているに違い

ない。それなのに、監禁されている少女がいると分かっているのに、動けないだなんて、
(そんなのは、間違ってる……!)

上条は抗議の声を上げようと顔を上げてステイルの方を見ようとした。だが、その視線はビルの足元でピタリととまる。

いつの間にか、二人は既に『三沢塾』のすぐ近くまで来ていたのだ。不規則な形をした、しかしそれ以外は何の変哲もないビル。

しかし上条が、そしてステイルまでもがその場で釘付けにされたのは、何もビルのせいではなかった。

その原因は、ビルの入り口近くに佇む人影のせい。

燃えるような夕焼けを背に、そこにいたのは――

火蓋が切られる前のあれこれ

上条とステイルは、共々言葉を見失っていた。

二人の目に映っているのは——まるで、幻想のような少女。

金砂のように映える髪を持ち、翡翠のように澄んだ瞳を持つその少女は、白いブラウスに青いスカート、そして腰に二振りの剣を携えて佇んでいる。背はインデックスより少し大きい位の小柄な少女だが、纏う雰囲気は凛としたそれだ。

美しく端正な面立ちに、周囲を飲み込みそうなほどの存在感を放ちながら、彼女はそこにいた。自分の心臓の音がやけに高く聞こえるのは、ステイルが事前に張った人払いのせいなんかではない。

上条は今までの人生で経験したことがないほどの、その圧倒的な存在に呑まれてしまったのだ。それは、波一つない水面を思い起こさせた。

「——あ」

ぼうつと幻でも見ているかのように呆けていた二人だが、その少女がこちらに気づいて向かってくるのを見て、漸く頭をはつきりさせる。上条はいきなりの出来事に未だ動

悸が治まらないが、ステイルがカードを取り出ししているのを見て慌てたように声をかけた。

「お、おい！ テメエなにやってんだ!？」

「黙ってる！ くそ、こんなに早く出てくるなんて、いや、そもそもあれがここにいないって想定外だぞ!!」

ステイルの顔に浮かぶのは焦りの表情。確かにステイルも上条と同様にあの少女に見とれていたが、それはなにも単純に吞まれてしまったからではない。

それは、最悪の状況が現実となった可能性が彼の中で芽生えたからである。あの存在感、内にある異様な魔力。どれをとっても、この状況下で該当する存在は一つしかない。

吸血鬼。

カインの末裔。

ステイルには、あの少女が件の吸血鬼に見えたのだ。……ステイルがそう考えるのも無理はない。何せ周囲には人払いの結果が張っており、一般人が入れるような状況ではないのだ。加えてアレイスターの計らいにより科学側は勿論、魔術側の増援など存在せず、ここにいるのは自分と上条だけのはず。

それなのに今こうして目の前に現れたあの少女。ステイルはおろか、上条までもが見覚えのない人物なのだ。彼女を錬金術師が吸血殺しで押さえ込んだ吸血鬼と疑っても

仕方のない話である。

(ちっ、手持ちの炎剣だけではとてもじゃないが……!)

インデックスを学生寮においている都合上、彼の魔女狩りの王はその護衛として部屋
のほうに残してあるのだ。魔女狩りの王は同時展開できない代物のため、必然的にステ
イルの持ち札は炎剣のみとなる。

とてもではないが無尽蔵の魔力を持つとされる吸血鬼に敵うような状況ではない。
唯一の望みとして隣でこちらを見上げている上条当麻がいるが、吸血鬼相手にどこまで
いけるかは未知数だ。

(一旦引くべきか？ だが、この状況で……)

この状況で、果たしてあれが逃がしてくれるかどうか。ごくりと唾をのむステイル。
そう考えている間にも、あの少女はどんどん近づいてくる――

「っ!!」

策を練ろうにも時間が無い。逃げようにも距離が近すぎる。こうなったらと、半ばや
けでステイルが戦う覚悟を決めたとき、

「ああ、やっとききましたねトウマ」

「……………はっ」

少女の声に、抜けた返事をしたのは上条だ。ステイルの方も、指の間にカードを挟ん

だままで唾然として少女を見つめている。口をあけた二人をよそに、少女は上条の目の前までやってきた。

「シロウに頼まれてあなた方の援護に来ました。セイバーと、そう呼んでください」

よろしくお願いしますね、と手を差し出す少女——セイバーに、上条は初めばうっとその顔を眺める。だがすぐに頭を振ると、慌てて手を差し出しながら聞いた。

「えつと、あの、士郎に頼まれてって今言ったのか？ 士郎って、衛宮士郎の事……だよな？」

「ええ、あなたの友人の、その衛宮士郎です。私は彼に、今回あなたを守護するように頼まれましたので」

「……………」

援護しに来ました、と上条に微笑みかけるセイバーの様子を観察しながら、ステイルは会話に出てきた男の名前に眉を上げる。そもそも事前連絡もない援護という時点で怪しいのに、衛宮士郎が関わってくると聞けば疑いは倍増するのだ。今まで調べても形も出なかった衛宮士郎の仕事仲間という存在に、油断なくカードを構えながら問いかける。

「待て、衛宮士郎に頼まれたといったな。奴の知り合いだと言う証拠でもあるのか。お前が敵陣の刺客だという可能性もあるんだぞ」

「それは魔術師^{メイガス}、私がここに来た事が十分な証拠になるだろう。それとも敵がシロウやトウマの名前まで知っているとでもいうのか？ 必要悪^{ネセサリウス}の教会のステイルⅡマグヌス」

「いや……」

ステイル自身このタイミングで意外すぎる所から増援がきた事に対して心の整理が出来ていないだけで、このセイバーと名のる少女が錬金術師側だとは既に考えていない。敵なら近づいて来た時にさつきとこちらを仕留めれば良いだけの話であったし、実際目の前の少女にはそれだけの実力があると踏んでいる。

だが、多少の不安が残るのもまた事実であるし、そもそも意図が分からない。……衛宮士郎そのものの情報が不明瞭なこともあるし、いきなり協力すると言われても素直にはいそうですかとは言えないだろう。

「……………確かにそうだが、……………それ以前に衛宮士郎がこの作戦に参加することは禁じられているはずだぞ。それは承知の上でここに来たのか？」

「そんな事は言うまでもない。それに「参加」は禁じられていても、「関与」は禁じられてないと聞いた。私がシロウから話を聞いて自分の意思でここにやって来たとするば、何の問題もないはずだが」

「ぬ、む…………… 今一度確認するが、本当に衛宮士郎に頼まれたのだろうか？」

「そうと言っただろう。シロウが考えるところでは、あなたとトウマを二人一緒に戦場

に放り込むのは甚く危なっかしいとの事だ」

ああ、とここにきて漸く、ステイルはこの少女が衛宮士郎から送られてきたことに合点がいった。つまり誓約のようなものだ。故意に上条当麻を危険な目にあわせれば、その時は覚悟しろ、と。

何故あの男がこうまで上条の事を気にかけるかは知らないが、そういう事ならまだ納得がいく。

「……………なるほど。君は監視役でもあるわけだ。わざわざご苦労なことだね」

「では『ご苦労』をさせないようにするのだな、魔術師^{メイガス}。力量差を測れないほど能がないわけではないと見受けるが」

「……………ふん」

鼻を鳴らしてセイバーから視線を外すステイル。この少女に見た目以上の実力があ
ることは彼も判っている。それどころか聖人相手に肉弾戦で食い下がったあの衛宮士
郎よりも、純粋な力量は上なのではないだろうか。

（全く、こういうのをこの国の言葉で、類は友を呼ぶと言うんだったか？ なんなんだ
あいつらは）

本国に報告することが増えたな、とステイルは一人呟く。上条はというと、衛宮士郎
の知り合いという事に驚きながらもセイバーと言葉を交わしていた。

「いやー、士郎の知り合いが学園都市にいたなんて知らなかったな。士郎ももっと早く教えてくれれば良かったのにさあ」

「いえ、私もシロウのサポートのために先ほど来たばかりなのです。ちょうどその時にこの話を聞いて飛んで来たという訳でして」

「え？ でも、ほらさ……」

魔術師って基本的に学園都市にそう簡単に入れるものなのか？ と上条はひそひそ声でセイバーに聞く。彼女はこほんと軽く咳払いすると、同じく小さな声で上条に返した。

「実は、正規の手段で入ったわけではないのです。出来れば秘密にして頂けるとありがたいのですが」

「ん、そりゃ別にかまわないけど……」

まあ、上条からして既に不法侵入者を二人も部屋に匿っているのが現状だ。今更そんな事についてどうこう気にしたりなどしない。感謝します、とセイバーは礼を言うと、何事か考え込んでステイルに向き直った。

「私は直接資料に目を通したわけではないので、一番この戦場に詳しいのはあなただ。基本方針を伝えてくれれば、こちらとしても出来る限りそれに沿おう」

「……今更資料は見せられないよ。こちらとしても学園都市との約束があるわけだし、

君の扱いは勝手に事件に首を突っ込んだ乱入者だ。一切の責任は取らないし、なんの報酬もない。もちろん、それは判つてゐるんだらうな？」

「当然、初めからそのつもりだ。トウマを無事に守りきり、吸血殺しを保有する少女……姫神秋沙を助け出せばそれでいい」

毅然と答えるセイバー。ステイルの言う責任とは戦場でのことはおろか、その後には間違いなくあるであろう両陣営からの追求にも協力する気はないということなのだが、彼女はそれでも構わないと言った。

(……………)

彼らが何を考えているのか、今のステイルには判断できない。ただ彼としてもここで協力を断らない理由はないし、何よりこのミッションの成功率が上がるならそれは歓迎すべきことだ。情報の流出に関しても彼はそもそも炎剣一本しか持つてない上に、謎に包まれた衛宮士郎の事が何かわかるならそれで十分だった。

ステイルは息を吐くと、上条とセイバーの方へと顔を向ける。

「じゃあそろそろ行くか。いつまでもここで話してゐるわけにはいかないからね」

向かうは敵の居城、挑むは騎士に魔術師に学生。ちぐはぐだが、裏はどうあれ意志は一つだ。夕焼けを背にそびえるビルに、三人は足を揃えて向かい始めた。

「これより少し前、『三沢塾』近くの某所。衛宮士郎は一人で……いや、セイバーと二人で話し合っていた。」

『私が、変わりに?』

『そうだ。今回オレは協力できない。……だが、それだけだ。セイバーが参加してはいけないとは奴も言ってはいまい?』

『確かに、そうですが……』

いいのですか? とセイバーは尋ねる。ここで衛宮士郎の代わりに彼女を出すと言うことは、セイバーの存在が学園都市に露見すると言うことでもある。正直な話、デメリットは大きい。だが、

『別にかまわないさ。それで当麻や監禁されてる女の子が助かれば、オレが泥をかぶる分には何の問題もないだろう?』

『……シロウがそう言うならば、私も気にはしません』

はあ、とセイバーは内心でため息を吐く。こういうところは月日を経ても何一つ変わってはいない。ことこの場において情報と言うのは生命線であるのに、それをあつさり放棄するその姿勢。

人を救うためといえれば聞こえはいいが、限度を知らないのは致命的だ。何しろこの衛

宮士郎と言う男は、他人のために平気で命を投げ出せるような人なのだから。

(やはり、根っこが問題なのでしようか……)

養父の理想に骨の髄まで毒されたその在り方は、根深く容易には変えがたい。無理をすれば彼自身が壊れてしまうほどに。——いや、それを言えば彼は既に壊れた存在なのだが。

……そこまで思考を巡らしたセイバーだが、今はそんな事を考えている場合ではないと思ひ返す。衛宮士郎の事を気にするあまり、今のこの状況を疎かにしてはならない。

『それでは、トウマにはどう説明するのです。私はシロウの友人だとも言えはいいのですか?』

『まあ、それが妥当だろうな。今の……、あの当麻になら、その説明で問題はあまるまい』
『今の、とは? 一体どういうことですか?』

衛宮士郎の妙な言い回しに、セイバーは違和感を覚えた。『今の』だなんてわざわざ言及する必要はないのに、彼があえて付け加えたその理由。

衛宮士郎はセイバーの追求にぐっと眉に皺を寄せると、ぼそりと返した。

『今の、記憶喪失の当麻になら、という意味だ。以前の記憶を失ってしまった当麻になら、私に友人がいるといっても何の問題もないから……』

上条当麻が記憶を失う前、初めて彼が衛宮士郎と出会い助けたときに、衛宮士郎は上

条に自分は記憶喪失で、名前以外のことは思い出せないと説明していたのだ。名前以外が思い出せない以上交友関係など思い出せるはずもないので、セイバーが友人だと言う説明にも矛盾が生じる訳なのだが、

『なるほど。だからこそ、シロウとの出会いを忘れた今のトウマにはその説明が効果的だというのですね』

『……あいつは記憶喪失の事をずっと隠し通すつもりらしいからな。下手にこちらに疑いを持たせないよう、こっちの事情には疑いを挟んでこないだろうよ』

意外なところから出た記憶喪失の恩恵だが、無論衛宮士郎にとっては悔しきしか感じない事だ。彼からしてみれば上条の記憶喪失の原因の一端は自分が背負っていると思っているのだし、それにつけこむような真似をするのも本心ではない。

だが今この状況においては……という事で、自分を無理に納得させるようなものでもあった。

『それで、あとは武器の話だが……』

『そうですね。西洋剣の類を用意していただければ。対吸血鬼用の武装も欲しいところですが』

『約束された勝利の剣は投影出来ないが、勝利すべき黄金の剣ならできる。それでいいか？』

衛宮士郎の提案にセイバーはしばらく考え込んでいたようであったが、やがてかぶりを振るような気配を見せる。

『できれば適当な魔剣を一振りお願いします。……………世界が違うとはいえ、聖剣か

ら私の正体に感づかれる可能性が無いとは言えません。』

『君には風王結界インビシブルエアがあるだろう。それでは何か問題なのか？』

風王結界。

セイバー——アーサー王、アルトリアIIペンドラゴンの持つ宝具の一つで、風で出来た鞘といったところか。どちらかというと魔術に分類されるもので、幾重にも重なる空気の層により剣を透明化させることが可能である。間合いを隠すことで近接戦において有利になれる他、いろいろと応用も出来るのだが本質はそこではない。

この宝具の真価は、あまりに有名すぎるアーサー王の聖剣を隠すことにこそある。それ故、衛宮士郎も勝利すべき黄金の剣を投影しても構わないと踏んだのだ。

『問題という訳ではありませんが、トウマの右手がありますので…………』

『……………そうか。下手をすると、インデックスの歩く教会のように二度と機能しない可能性もあるのか』

『はい。それを考えれば、今回は風王結界を使わないほうが良いかと』

上条当麻の右手に宿る幻想殺しイマジンブレイカ。異端の力なら問答無用で無効化するそれは、宝具す

ら破壊しかねない。投影品ならまだしもオリジナルの宝具を壊されてしまったては、セイバーの戦力を大幅に削がれるのは避けられないだろう。

衛宮士郎も同様に感じたようで、ふむ、と顎を撫でる。

『わかった。格の低い魔剣を用意しておこう。……だが万が一ということもある。一応勝利すべき黄金の剣も用意しておくから、それも鞘に入れて下げておいてくれ』

ただの吸血鬼程度に剣の英霊たるセイバーが後塵を拝するなどあり得ないが、未知の敵に対して手を抜くのは愚策という物。衛宮士郎は剣を投影しようと人目につかない場所を探そうとしたが、

『……………あの、シロウ。実は、もう一つ……………非常に大きな問題がありました』

セイバーの、どこか遠慮がちな声に足を止めた。

『どうした、剣だけでは足りなかったか？ ああ、吸血鬼が相手だから黒鍵も用意すべきだったか』

『いえ、そういう訳ではないのですが……………』

珍しく歯切れの悪いセイバーに衛宮士郎はいぶかしげな顔をする。彼からすればもう何の問題は無い様に思えるのだが……………、

『……………く、がです……………ね』

『うん？ すまない、よく聞こえなかった。もう一度言っていないか？』

『……ですから。私の……くが……』

『……本当にすまない。もう一回だけ言ってくれ』

小声で呟くように言葉を発するセイバーに、衛宮士郎がさらに聞き返した。彼女がこんな態度を取るのには、衛宮士郎からしても本当に珍しい。そんなセイバーは一回大きく息を吐いたような雰囲気を見せると、意を決したように（それでも小声で）口を開いた。

『……私の、服と……し、下着も用意してくれませんか？』

『』

パキン、と。凍りついたかのようにその場で固まる衛宮士郎。そう、セイバーが言わんとしていたのは、彼女の服の問題である。鎧はセイバー自身の魔力で編まれるものなので支障は無い。だが、その下に着る服は別だ。今までは全く表に出てこなかったため考える必要すらなかったが、実際に外で動くと言うのにセイバーの服が無いのはまずいどころか問題外である。

さすがの彼らにも入れ替わる際に服まで変わるなんていうステキ性能はついていない。聖杯戦争時で鎧下に着ていた青を基調とした服は、今は存在しないのだ。となれば、衛宮士郎のしなければならぬことは一つである。固まった彼に、セイバーが恐る恐る話しかけた。

『あ、あの、シロウ……？』

『……オレの配慮不足だった。悪い』

その場にセイバーはいなくとも、頭を下げる衛宮士郎。確かに、セイバーの服が必要なのは確かだった。今回は上条を守りながら戦う関係上、彼女の鎧も幻想殺しで無効化される可能性が高いのだ。無力化されると判っていて不必要な魔力を使うのも馬鹿らしい。

歩き回るのにまさか男物の服を着るわけにもいかないし、そもそも彼の持っている服はサイズが大きすぎる。

………要は買いに行かなければならない訳だ。女物の服と下着を、いい年した男の衛宮士郎が。

『………はあ』

『シロウ…… あの、どうしてもというならば———』

『いや、言うなセイバー。大丈夫だ、これくらいなんて事ないさ』

『………本当ですか？』

少々声が震えているような気がしますが、と不安そうなセイバーだが、実際問題必要不可欠なものだ。衛宮士郎も自身に渴を入れなすと、本格的にセイバーの服について考え始めた。

『さて、まあオレとしては服を買いに行くには全くもってなんの問題も無い、が。 ……』

そうなる」とまた別の問題が出てきたな』

『別の問題?』

『ああ。だつてこのオレが女物の服を買うんだぞ?』

『わ、私は別にシロウが選んでくれた服であればなんでもかまいませんよ。シロウのセンスにお任せします』

若干嬉しそうな声のトーンで話すセイバー。そんなセイバーに対して、衛宮士郎は苦笑いしながら言葉を返す。

『……センス云々は置いといて。オレが言いたかつたのはオレが女物の服を買うところを奴に知られないようにしないといけないなつて事なんだが』

『……………』

『つまり、アレイスターのことだが』

『……わかつてますよ』

ちよつとばかりセイバーの声がむつとした感じになつていたが、衛宮士郎はその問題の対策のために気にしている場合ではない。

……セイバーが拗ねたのは別に勘違いをしていた事が恥ずかしかつたからではなく、衛宮士郎の悩んだ理由が彼女じゃなくてアレイスターだつたことに起因するのだが、そこはやはり衛宮士郎といったところだろうか、気づく様子は全くなし。

(しかし……)

まあセイバーもあまり時間が無いことは承知している。不満げな様子を見せたのも一瞬、すぐに策を考え始めた。

(確かにシロウがそれを買う様子だけは、隠し通す必要がありますね)

セイバーの存在が露見することはもう構わない。そのデメリットを承知の上で、既に二人は覚悟は決めてある。だが、だがそれでも、衛宮士郎とセイバーが一心同体、いや、二魂同体の存在であることはまさに秘中の秘。なんとしてもそこだけは隠し通さなければならなかった。

それには当然、衛宮士郎からセイバーに移り変わる場面を見られてはならないし、その逆も然り。また衛宮士郎が当日買ったものと同じ女物の服をセイバーが着ているのも、あからさまに怪しい要因となりうるだろう。

残念ながら(むしろ当然だが)彼と一緒にこちらに跳ばされていたスーツケースには、男物しか入っていない。

『投影品で服を用意するというのは——』

『シロウ、何か言いましたか?』

『……いや、何も』

凄くいい笑顔をしていそうなセイバーの声だが、衛宮士郎とて投影品の服が実用的

でないのはわかっている。幻想殺しもそうだし、そもそもイメージに綻びが生じる程の衝撃が走ったら服は消えて無くなってしまう。そうなったらセイバーがどうなるかはお察しである。

『しかし、投影品でなく学園都市にも気づかれること無く服を手に入れるとなると……』
『……少し不安ですが、私に一つ案が』

『——ほう。奇遇だなセイバー、オレにも一つだけ策がある』

一様二様は判らずとも、共に案を出す二人。しばらく道端で歩きながら話し合い、擦り合わせた策を実行に移すこととなった。

この学園都市内で、衛宮士郎が絶対の自信を持つて監視が一切無いと言い切れる場所。実はそんな場所が、たった一箇所だけ存在する。

ありとあらゆる監視網を逃れていると、衛宮士郎が保障する場所。一体、それはどこなのか？ その場所は、衛宮士郎が最低でも一日に数回は魔術・科学の双方から点検している。その場所は、衛宮士郎自身が自ら監視の対策を施している。

——その場所は、上条当麻の部屋であった。

『まだ当麻もインデックスも帰ってないようだな』

『そのようですね』

預けておいた食材を引き出した衛宮士郎は、そのまま学生寮に帰っていた。とりあえず冷蔵庫に買ってきたものを入れ、部屋の中を今一度検める。

衛宮士郎の目と解析で調べた限りでは、やはりここには監視が無いように思えた。

「さて、と……」

部屋のチェックを終えた衛宮士郎は、そこでレディースの服と帽子、その他剣を含めこれから必要なものを投影。その横にコンビニの袋で包まれた何かを置くと、はあ、とため息を吐いてセイバーに話しかける。

『……用意は出来た。電気も消すか？』

『………お願いします』

そして落とされる明かり。しばらくの間、かさかさとする音が続く。

無言のままの時間が数分経ち、次に部屋が明るくなった時——そこには私服姿のセイバーが立っていた。

投影品の服がまずいと言っても、それはあくまで上条の傍に居る場合のみの話である。服が破れるほどの激しい動きをしたりさえしなければ、日常生活を送るにそこまで支障は無いのだ。

とは言っても、無論このままの姿で『三沢塾』へ行くわけではない。要はつなぎのた

めの服だ。彼女は自分の体を確認するように、床の剣を手に取ると流れるような動きでそれを振るう。

たたん、と部屋の中を飛び回ると、急に足を止めてはまた動き出す。それを十回ほど繰り返した。

『どうだ、体の調子は？』

『万全とっていいでしょう。これなら仔細なく動けます』

衛宮士郎の問いに、剣を鞘に収めながら答えるセイバー。衛宮士郎の着ていた服を片付けてコンビニの袋をゴミ箱へ入れた彼女は、もう一振りの剣も鞘へと収めた。

その後それを大型の楽器ケースに入れて背負うと、そのまま堂々と部屋の外へと出て行く。万が一留守中に上条が帰ってきてしまっても、余計な心配をかけないようにするためである。

「おお……………」

寮を出て、開けた場所に降り立ったセイバーはそこで、ほう、と息を漏らした。眩しい陽光、肌を感じる風。五感全てを総動員して世界を感じ、改めて今ここに自分があることを実感する。

『…………やはり自分で直に感じるのとは違いますね』

『そうだろうな。私も今は、なんだか妙な感じだ』

セイバーの頭の中で響くは、衛宮士郎の声。立ち位置が入れ替わった二人は、そのまま目的地へと足を進める。幸いセイバーの背格好は高校生ほどのものなので、大きな荷物を背負っていても学園都市の光景にさして違和感はない。

袖や胸元にフリルをあしらった白黒のワンピース、黒のベレー帽といったファションだが、これらは全て衛宮士郎が道行く女性から適当にチョイスした投影品だ。……ちなみにいま履いている下着も同様。女性用下着一式を投影しているときの衛宮士郎といたら。遠坂凜がその場にいたら大爆笑して呼吸困難必須のものであったとだけ言及しておく。実物はコンビニで購入済みである。

『しかし……』

しばらく歩いて、セイバーがぼそりと呟く。

『先ほどから、色々な人からの視線を感じるのですが…… シロウ、やはりこの作戦は良くなかったのでは？ 監視の目が大きすぎるような気がします』

『監視の目、か。……まあ半分正解、半分間違いといった所だな』

『半分、ですか？』

よくわからないといった風のセイバーに、衛宮士郎は苦笑する。

確かに、今のセイバーにはアレキスターからの監視の目が向けられていることは間違いない。何しろ上条の部屋から急に現れたわけであるし、まず間違いない向こうも彼女

が衛宮士郎の関係者だと予測しているだろう。

だがそこはもう問題ではないのだ。セイバーを表に出すと決めた以上、そこは既に腹をくくつてゐる。先ほども言ったとおり、今二人が何としても隠し通すべきは唯一つ。その二人がほぼ同一の存在であること。むしろそれさえ露見しなければ、彼女にいくら監視が向けられようが全く構わない。セイバーが今おおつぴらに外を歩いているのはそういう訳である。

……ちなみに半分正解といった衛宮士郎の真意は、まあセイバーの容姿を考えれば的がつくだろう。確かに彼女は学園都市に溶け込めるだけの年齢だ。

だが、溶け込むことと目を惹くことはまた別である。見目麗しい少女が通りを歩いているなら、誰だつてちらりと目を向けるだろう。しかもそれが女性でもはつとするような美人さんならなおさら。

つまりはそういうことである。

『さあ、ついたぞセイバー』

そんな理由だとは思ひもせず、半分の意味について考えていたセイバーはいつものまにか目的地の前まで来ていた。といつてもここは三沢塾ではない。ここは学生寮から一番近いアパレルショップである。

『オレがここで女物の服を買うのは違和感があるが、セイバーなら問題ない。単純なこ

とだがな』

店を前にして口を開いているのは衛宮士郎。今回の行動での一番の肝要は、アレイスターに妙な違和感を覚えさせないことだ。

男の衛宮士郎が必要無いはずの女物を買うということ。衛宮士郎とセイバーが別々の存在だとした場合に、それは非常に変なことだ。

そんなおかしな行動を取れば誰だつてこう感じる。何故セイバーが直接買いに行かなかったのか、と。それは些細な違和感だろう。小さな問題だろう。

だが小さな芽から潰していくのが、万全を期すということなのだ。店に入ったセイバーは棚を眺めながら悩む。

『一体どういう服を選べばよいのか…… 残念ながら私にはあまり見当が付きませぬ』

『なに心配するな。セイバーならきつと何でも似合うさ』

『そ、そうでしょうか』

衛宮士郎の言葉に嬉しげな様子の子のセイバー。そんなやりとりをしながら店内を少々廻っていると、衛宮士郎は彼女が店のある一点に目を向けている事に気づいた。

『どうしたセイバー？』

『あ、シロウ…… いえ、あれを見ていたのですが……』

セイバーの目線の先には、真っ白なブラウスが一つ。胸元に青いリボンが飾られたそれは、彼女が聖杯戦争のときに着ていた服に瓜二つである。そしてその近くには、これまたそっくりな青色のロングスカートも並べられていた。

「お買い上げありがとうございます」

店員の声を背に店を出るセイバー。その手には紙袋が一つ握られている。

『それでよかったのか、セイバー？』

『もちろんです。十分満足のいく結果でしたよ』

いい買い物をしました、とセイバーはにこやかに笑みを浮かべていた。あとは再び学生寮に帰り、これに着替えるだけである。わりかし早めに済んだので、まだ夕方にさえなっていないかった。

夏休みに入っているからか、通りは賑わい喧騒が途切れることは無い。少年少女が、思い思いのことをしていることがわかる。

『平和なものですね』

『……そうだな』

彼らはこの街に錬金術師などという異物が入り込んでいることも、一人の少女が監禁

されていることも知らない。傍から見ればいたって普通の、いたって正常な光景だ。

だがその裏には、忘れてはならない、あの不気味な統括理事長が潜んでいることも確か。衛宮士郎には未だに、先ほどのアレイスターの意図が掴めない。

あれを解するには、もつと深みに潜る必要があるだろう。

(まあ、今はやるべきことが他にある)

それもこれも、とりあえずは目先の事件を片付けてから。部屋に帰って着替えたセイバーは、ケースを背負って再び外に出る。

今度こそ、向かうは『三沢塾』だ。

吸血鬼、錬金術師。吸血殺し。彼女の頭の中で三つのキーワードがぐるぐる廻るが、戦地へ向かう迷いなど、彼女には存在しない。

時代はおろか世界も違えど、彼女は確かに剣の英霊。

されど油断無く、誇りを胸に、彼女は戦場へと向かうのであった。

幻想を追う男

三人が足を踏み入れたそこは、至つて普通のビルだった。両開きの自動ドアを潜り抜ければ、ひらけたロビーに幾人かの学生たちが歩いているのが目に入る。正直、敵陣の真正面から突入するのめどうかと衛宮士郎は思ったが、そもそもセイバーは策士の質でないし、上条は言わずもがな、ステイルに至つても無策で突つ込むというのだから彼が不安になるのは仕方ない。

そんな衛宮士郎の内心を余所に、正に堂々と『三沢塾』へ乗り込む三人。とりあえずの目的地は南棟五階の食堂脇だ。図面を見た限りではこの塾には十七箇所隠し部屋があり、一番近いのがその部屋なのである。そうして三者三様で辺りを見渡しながらロビーに降り立ち――

「一番最初に異変に気づいたのは、やはりセイバーだった。その場で足を止め、剣をすらしりと抜く。」

「えっと、セイバー。急に止まってどうしたんだ？」

「……………とりあえず、トウマは足に何か感じませんか」

「足?」

言われて、上条は足元を見た。が、何か落ちてるわけでもなく、特に変わった様子はない。ステイルの方はと言うと、何かを探るように何度か床をとんとんと足で叩いている。

「魔術師メイガスはどうだ。何か違和感を覚えないか」

「……………」

床を叩くのを止めたステイルは、今度はタバコを取り出す。

「おいおい、ここでタバコはまずいって……………」

校内禁煙のマークを指しながら咎める上条だが、ステイルは聞かずに火をつけた。だが不思議と、三人の傍を歩く生徒たちはそれを注意することは無い。それどころか、非難の目すら向けないのだ。

「……………」

流石に妙だと上条も感じたが、そもそも生徒たちは今まで一度も三人のほうに目を向けたことが無いのに気づく。いや、目線こそこちらの方向を向いていても、それは上条たちの事を見ているわけではないのだ。まるで三人がその場にいらないように振舞う彼らは、忙しくそこらを行き来している。

上条はまだしも、明らかに浮いているステイルやセイバーをも無視して。

「トウマも気づきましたか?」

「ああ、なんかすつげえ変だぜ。……」

本当に気づいていないのか、気づいていてあえて無視しているのか。警戒しながら辺りを見渡す上条だが、別にロビー自体に妙な点は見当たらない。

……壁に寄りかかっている銀色の人型ロボット以外は。妙にひしゃげた壊れたロボットのようだが、それすら生徒たちは無視しているように上条には見えた。オイルは駄々漏れ、四基並んだエレベーターの間という非常に目立つ場所に立てかけてあるのに、それは誰の注意も惹いていないようだ。

「ふーん、つまりそういう結界なわけだ」

しばらく黙って検分していたステイルが、漸くその口を開く。彼が手に持っていたタバコは、いつの間にか先が黒く潰れていた。

「そういう結界?」

おうむ返しに聞きなおす上条に対して、ステイルはもう一本タバコに火をつけながら説明する。ようはコインの表と裏であると、『コインの表』の住人である生徒たちは『コインの裏』である魔術師に気づくことは出来ない。

逆に『コインの裏』の存在である魔術師は『コインの表』である生徒たちに干渉できない。それを証明する様に、ステイルは先ほどつけたタバコの火を近くの壁に押し付け

る。高熱の物体を当てられた壁は、だが煤一つ無くそこにあつた。

「こういうとき。建物そのものは『コインの表』に設定されているようだから、僕らは自分の力じゃ何一つ干渉できないわけだ」

それこそドアを開けることすらね、と続けるステイル。上条はうげつと呻いてそりややつかいだと呟くが、セイバーはロビーの奥のただ一点を見つめていた。

「なるほど。だから『あれ』に誰も関心を向けないということか」

「ま、そうだろうね」

なんともなしに返すステイルだが、上条には『あれ』の意味がわからない。目線の先から察するに、どうやらあのひしやげたロボットのようだが……。

「なあ、あのロボットも『コインの裏』って言うなら魔術側にもロボットなんかあるのか

？」

「は？ ロボット？」

上条の疑問に、ステイルは何言つてんだこいつといった風情である。そこへ上条の言いたいことを察したセイバーが躊躇いがちに口を挟んだ。

「……トウマ、あれはロボットではありません。あれは——、あれは、人間です

」

「……………は」

生きているのか死んでいるのかすら判らない、めためたに潰れたその体。銀色の体はフルプレートの鎧、上条がオイルだと思つたものはよく見れば赤黒い血。そしてどうして今まで気づかなかつたのか、つんと鼻につく独特の匂いは鉄分のそれだつた。

「……………ッ！」

思わず、上条は血塗れの騎士に走り寄る。何も出来ることがないとわかつていても、既に死んでいるかもしれないとしても。それでも、上条当麻は駆け寄つた。そんな彼の様子を見ながら、セイバーは隣に立つステイルに声をかける。

「あれは知り合いか？」

「いや、僕らには関係ない。おそらくローマ正教の連中だろうね」

なんともなしに、まるでそれが日常であるかのようにステイルは死体を見つめていた。騎士に近寄ろうとしたセイバーは、途中で何かに気づいたかのように足を止める。そうしてそのまま頭を横に振ると、ステイルのほうへと足を戻した。

「魔術師…………いや、神父。あれは、あなたの役目だろうよ」

「…………君は何を言つてるんだい。彼はもう助からないだろう？」

「だが、まだ息はある。違うか？」

そう、ステイルは騎士を助からないと評したが、それはつまりまだ生きてい………
こと。ただ確実に、それこそ数分もしない内に、その灯火は絶えるだろう。

——しかし、末期の言葉を述べる時間はあると、セイバーは言うのだ。幾多の戦場で何百人もの騎士が息を引き取る様を見取った彼女である。それを察することくらいは造作も無い。

セイバーの言葉に、ふうと煙を吐くステイル。こんななりをしても彼は神父、神に仕える聖職者だ。死に行くものの言葉を聴く事こそがその本懐である。それも彼自身は自覚しているようで、タバコを横に捨てるとステイルは騎士のそばへと寄つていく。

騎士の傍で跪くステイルを見ながら、セイバーは一人考える。一体何が、あの騎士を死に追いやつたのかと。

(鎧が潰れているからには、物理的な衝撃のような気がしますが……)

予想される敵は、錬金術師に吸血鬼。あくまで元の世界が基準だが、吸血鬼の腕力ならあの異様な事態も実現可能だとセイバーは思う。では錬金術師は？

そもそも、彼女は錬金術師と言う種類の魔術師をよく知らない。あれらは中世に入つてから頭角を現してきた分野であるし、彼女の生きた年代とは程遠い。そしてそれは衛宮士郎も同じことである。彼の時代には確かに錬金術師と呼ばれる魔術師たちは存在したが、彼らはその姿を俗世はおろか、その本拠地であるアトラス院から見せることすらしない。

とてもではないが錬金術師の情報など、二人ともほとんどないのである。この『三沢塾』に立て箆もる錬金術師に関して、アレキスターから説明された事くらいしか知らなかった。……まあそれでも、決して無関係と言うわけではない。

例えば衛宮士郎が投影するアゾット剣。魔術儀礼用の杖であるそれは魔術師の間では見習い卒業の証とされるが、その原型は大錬金術師パラケルススの持っていた剣である。奇しくも今回の敵、アウレオルス^{II}イザードはその末裔に当たるわけで、チュールツヒ学派である彼の性質くらいは予想がつけられた。

錬金術の三大学派、ボヘミア、チュールツヒ、ウイーンの中で最も魔術オカルトに特化している流派こそがチュールツヒ学派であり、その目的が黄金アルス^{II}マグナ錬成であるというのは良く知られた話である。

(アルス^{II}マグナ、ですか……)

セイバーには錬金術という物はよく理解できないが、一般的には鉛を金に換えたり、不老不死の霊薬を作るといったものらしい。もつとも、この世界では『世界の全てを自分の思い通りに歪める魔術』であるということだが。

『こんなことならインデックスからいろいろと話を聞いておくべきだったな……』

『……そうですね。確かに、我々はこちらの魔術に関しては非常に疎いですから』

セイバーの言うように、二人はこの魔術については素人に近い。二つの世界の魔術

は非常に基本的なことは似通っているようだが、その先へと少しでも進めば、それはもう全く別物といってよいほどだ。衛宮士郎がこの世界出身の魔術師と偽装している以上、溶け込むに当たって最低限の知識は欲しいところではある。

せつかく身近に知識の宝庫がいるのだから、彼女に聞いてもいいのだが……、

『まあ彼女も、あれはあれで厄介だ。妙な疑いを持たれる事なく聞くのは難しいし、なによりイギリス清教と繋がっている』

『おまけに完全記憶能力です。正直な話、それが一番きついですね』

何しろ彼女は、些細な日常会話ですら一字一句覚えていくのだ。下手な質問や行動も一切合財がその頭の中に貯蓄され、イギリス清教謹製の監視カメラに見張られているようなものである。衛宮士郎もインデックスに魔術関連の話題を振る時は、非常に言葉を選んでいた。

それに今回ばかりはそんな暇が無かったのも事実だ。自分達の情報不足を噛み締めるセイバーだが、彼女としては今はもう一つ、上条当麻の予想を外れた反応に驚いていた。

『しかし、トウマはなんというか…… 非常に場馴れしている感じが否めませんね』

『それは私も以前から思っていた。肝が大きいと言うか、度胸があると言うか……』

セイバーが意外に思っていたのは、上条の反応。死体を見たときの彼の反応が、どち

らかと言えは死への恐怖ではなく、殺人への憤怒であったことである。確かにここ最近、上条は色々と厄介ごとに巻き込まれてはいるが、死体を見たのは初めてなはず。

——特に、殺された死体というものには。普通の人間は、人の死にそうそう関わらない。あつてもそれは、親しい者の死であつたり、画面の向こう側の出来事であつたり。

衛宮士郎やセイバーの経験から言えば、日頃から戦にでも出ていない限り惨殺された死体と目を合わせた人間が覚える感情は、恐怖、もしくは悲嘆。身近に迫つた死の恐怖に怯え、その無残の姿を自らと重ね合わせて行く先を悲嘆する。だのに、上条はその様子をほとんど見せないのだ。……少なくとも、表には。見知らぬ人間の死に、恐怖より先に怒りを覚える人間は珍しい。

——いや、正直な話どこかがおかしいとも言えた。勇気があると言えば聞こえはいいが、蛮勇は無謀に転じる。

(シロウほどではありませんが……)

彼もまた、どこか『外れて』いるのかもしれないね、とセイバーは一人考えるのだつた。

狭い非常階段は、どことなく三人に圧迫感を与えている。あの騎士の死体——ステイルが言うにはローマ正教の騎士団の一人を送った後、三人は隠し部屋に向かって進んでいた。

地図を見た限りどうやら各所に点在しているようだが、その中で一番近場の南棟五階にある食堂横を今は目指している。

「はあ……、反動が倍になるってのはどうもやっかいだな」

気だるげな声を口から漏らしながら、疲れた顔で階段を上っているのは上条だ。前を歩いているステイルも、同じように息をあげている。——ただセイバーだけが、平気な顔をして先に進んでいた。

上条の言う『反動』とは、つまり床からの抗力である。このビルに張られている結界は内部を表と裏の二面に分けるものだが、入り口で確認したようにビルそのものは表に組み込まれているのだ。つまりビルの床自体にかかる衝撃が、そのまま全て自分に返ってくる。一切の衝撃を吸収されないとすることは、それだけ歩くときの疲労も倍増することを意味するのだ。

あくまで常識の範囲内の体力である上条やステイルには、これがなかなかにつらい。生粋の武人たるセイバーにとっては大して苦でないが、それ故に異変を察知するのも早かった。まあ足からの反動が倍増すれば、いづれ誰でも気づくとは思うが。

「あまりにもきついたのでしたら、一旦休憩しましょうか?」

私が周囲を見張っておきますので、と上条に声をかけるセイバー。敵陣の真っ只中と
言うことだけでだで気を張っているのに、余計な負担のせいで疲労が濃くなってきた
だろうと心配しての事であったが、上条は首を横に振る。

「いや、このまま進もうぜ。姫神も助けを待つてるだろうしな」

「トウマがそういうならいいですが…… 無理はしないようにして下さいよ」

「わかつてるって」

上条はいかにも平気そうな顔を作って手をひらひらと振った。確かに人一人捕らえ
られているのは事実だし、一刻も早く助けるのに越したことは無い。

(ですが……)

どうにも、入れ込んでいるように見える、とセイバーは思うのだ。そもそもいくら人
が監禁されているとはいえ、見知らぬ誰かを助けるために命を賭けるような真似をする
のか。まあ、そういう人間もないわけではない。

むしろセイバーの身近に——それこそ本当にすぐ傍に、そういう『人』はいる。だ
が彼は例外だ。そう思う。………それとも上条当麻もそういう人間なのか。

そこまで至って至ってセイバーは、それは否と考えた。この高校生は
まだそこまですていない。となれば、上条は十中八九その『姫神』と顔見知りなのだ

ろう。少なくとも、さつき上条がその名を口にした時は、それなりの気軽さを感じた。そしてそのセイバーの考えは、決して的を外れたものではなかったのである。

確かに、上条と姫神は顔見知りだった。ただし、それこそ本当に『顔見知り』のレベルである。何しろ彼らが出会ったのは今日の午前中、それも時間にして十分ほどの時間だ。どうしても監禁されているはずの姫神が外に出ていて、たまたま上条達の目の前で黒い服を着た大人たちにどこかに連れ戻されたように見えた。ただそれだけの話。

当然その時は上条は『三沢塾』の事情なんてこれぼつちも知らないし、姫神のほうも全く抵抗せず素直に黒服の大人——姫神がその時説明したところによれば『塾の先生』に連れられていったのだ。それで何かを察しろと言うほうが無茶ではあるが、上条がここに乗り込んできたのは一重にそこが理由である。要はイラついたのだ。そんな少女を監禁する錬金術師もそうだが——何より、その少女自身にそして自分に。

助けを求めようと思えば出来たのに、周りのために自分を殺した彼女。どんな目にあうのか知りながらそれをよしとするその姿勢は、何か、上条の内に刺さるのだ。

似たような人と出会った気がするのに、それが思い出せ無い自分。彼女と、そして自分に対する憤りが、今の上条の原動力だった。まあ、そんな事があつたなんてセイバーは知る由も無い。重い足取りで、しかししっかりと歩を進める上条を気かけながら、

彼女は周囲に気を配っていた。

『既に相手には気づかれていないはずなのですが……』

『正面から入ったのに向に敵が来る心配が無いな。それとも、出向くまでも無いほ

どの罠があるのかもしれない』

そもそも籠城とはそういうものである。第四次聖杯戦争におけるランサー陣営のよ
うに、魔術師の根城にはありとあらゆる『殺す』ための仕掛けがあるのが常だ。

……だが、今までその罠が一つも見つかっていない。衛宮士郎が一番警戒していた口
ビーにも、その心配はなかった。裏と表が分かれているこの結界ならば、罠を仕掛ける
にも都合だと言うのに。

「魔術師、あなたはどうか考えている。ここまでできて何の妨害も無いとはおかしいと思わ
ないか」

「さあ？　僕には奴の考えてることなんてわからないし、知ろうとも思わないから」
ただ、とスタイルは続ける。

「出てこないって事はそれだけ余裕なのか、あるいは必殺の策でもかんがえてるかもね」
そんなことを言うスタイルの顔も、疲労の色は出ていても余裕が張り付いている。い
くら錬金術師本人には大した攻撃手段がないからといって、もう少し警戒しておいも
のだが。

さらに少し階段を上ったところで、今度は上条が携帯電話を取り出し始めた。なんでもこの結界の中で電波が届くかどうか試してみるとの事らしい。ぎゃあぎゃあと騒いでいるところを見るに、どうやら相手はインデックスのようだ。

「なんとも緊張感に欠けるな」

「……………」

スタイルの眩きにセイバーは、あなたが言える台詞ではない、と返しそうになった。まあスタイルはプロであるし、余裕は見せていても油断はしていないとは彼女もわかっているけれど。

「……………ん？」

電話終えた上条とスタイルがなにやら話し込んでいる間にどことなく廊下を眺めているセイバーは、何やら視線のようなものを感じた。階段から廊下の奥を見据えるが、しかしそこにいるのはただの男子生徒たちだ。『表』にいる彼らには自分たちの事は見えていないはずなのだが。

「気のせい、ですかね」

念のため廊下の奥まで行って彼らに手を触れるが、返ってくるのは硬い感触。セイバーの存在に気づいた様子も無かった。

(確かに視線を向けられたと思ったのですが……)

だが凡人ならともかく、英霊たる彼女の感覚の鋭さは伊達ではない。どうにも違和感を覚えるので、もう少し様子を見ようとセイバーが決めたその時だった。がしゅん、と天井から大きな音が。

「——セイ」

異変に気づいた上条が、彼女に向かって走り出す。しかしそれよりも早く、けたたましい音と共にそれは廊下と非常階段を分断した。

防火シャッター。

火災に備えて作られた扉は、この結界の中では何よりも強固な壁と化す。『裏』からは関与できない絶対的な防壁。つまりこれは、彼女と上条たちが完全に分断されたことを意味していた。上条は廊下のほうに手を伸ばしたまま、呆然とした顔で呟く。

「マジ……かよ……」

突然で、そしてあつけない別離。スタイルも予想外の戦力分断にちっ、と舌打ちをした。

「馬鹿が。あれだけ罨を警戒していたくせに自分が引つかかるとは」

「心外だな。あの程度の罨では私は捕らえられないのだが」

「は。」

二人の後ろから聞こえる、凜とした声。ぱつと声の方向へ振り向いた二人の目に入っ

たのは、向こう側に閉じ込められたはずのセイバーの姿だった。
「え？ いや、どうして……」

どうしてここにいるのか。当然の疑問に混乱する上条だったが、ステイルはタネがわかったのか先程とは別の意味で苦い顔をする。

「この化け物め。あの距離を一瞬で詰めるか」

「詰める？」

わからない、といった表情をした上条にステイルは苦い顔のまま説明した。

「単純な話さ。この女は防火シャッターが閉まるより早くこちら側まで滑り込んできただけだ。……単純な身体能力だけなら神裂クラスだな」

「滑り込んだだけって……」

言われて、上条が思い返すのは廊下の長さ。ほとんど反対側にいたはずのセイバーが、シャッターの閉まるより早くこちらまで駆けて来たという事実。おいおい、と顔を引きつらせて上条はセイバーを見上げる。

見た目はインデックスより少し大きいくらいの少女なのに、上条が覚えている中では一番の身体能力というのは中々に衝撃的だった。そうして少々呆けている上条に向かつて、セイバーが手を差し出す。

「さあ、トウマ。ここであまり長居するのはよくない。はやく隠し部屋まで向かいま

しよう」

「あ、ああ。そうだよな」

さつさと姫神を助けてやんねえとな、と上条は自身に活を入れる。そんな様子を見ながら、ステイルは独り言のようにポツリと言葉を漏らした。

「しかし、どうしてあのタイミングであいつだけを分断しようとしたのかね」

ほどなくして、三人は『隠し部屋』のあるであろう場所までたどり着いていた。だがその場にあつたのは何の変哲も無い壁であり、三人は通路のど真ん中で立ち往生するこ
とになってしまった。

『いくら隠し部屋に見当をつけても、そもそもこちらからは干渉できないからな』

衛宮士郎の言うとおりであって、たとえ隠し部屋に通じる仕掛けを発見したところで上条たちにはどうすることも出来ない。

だからといって何もしないわけにはいかないので、上条たちは隠し部屋に隣接しているであろう食堂へと足を踏み入れた。が、踏み入れた途端。

「おいおい、やばくないかコレ……」

そこに並んでいたのは百六十の瞳。食堂にいた八十人近い生徒たちが、一斉に立ち上

がり三人のほうを向いたのである。無機質。何を考えているかわからない、否、何も考えていないであろう目が、しかし確かな意図を持って上条たちに視線を投げていた。

「なるほど、隠し部屋の近くにはちゃんと警報機が置いてあるわけだ」

顔を引きつらせながらステイルが後ずさる。『表』の生徒は本来、『裏』の上条たちを認識できない。それが今、彼らのほうを向いていると言うことはつまり——、
「ただの学生まで巻き込んでいるということですか……！」

怒りで声を震わせるセイバー。そう、ここにいる生徒たちもまた、裏側の住民になったと言うことを意味するのだ。それもおそらく、錬金術師に操られると言う形によって。

「くそっ」

上条もまた怒りで叫ぶが、生徒たちは意にも介さない。やがて一人の生徒の口から、感情の無い声がお経のように流れ始めた。

「熾天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純ば——」

「——言わせませんよ」

だが生徒の言葉は唐突に途切れる。意識を失い崩れ落ちるその生徒の傍らにはいつの間にか、剣を携えた少女が一人。無論、剣の英霊たるセイバーである。

呪文が完成するよりも早く斬り付ける事など、彼女にとっては造作も無い。しかし生

徒の動きはそこで止まらなかった。そしてセイバーの動きも。何と生徒が崩れ落ちた瞬間に、また別の生徒が詠唱を再開したのである。それも一人や二人ではなく、何十人もいつべんに。

それを追うのは銀色の剣閃、セイバーの剣だ。総勢八〇を越える生徒たちを、次々と剣でその意識を刈り取っていく。

「おいセイバー！　いくらなんでも剣で斬るのは……！」

上条が声を上げるが、よくみれば血の一滴も流れていない。どうやら全て峰打ちで落としていくようであった。上条の目には、ただただ銀色の光が辺りを走っているようにしか見えていない。広い食堂の中を、縦横無尽に飛び回る光だ。一人、また一人と倒れてゆく生徒たち。そして数秒後には、そこには一人の少女しか立っていないかった。

「……すっげえな」

ぼそりと、素直な感想を漏らす上条。後ろに下がっていたスタイルも、倒れている生徒の一人に近づき様子を確かめる。

「ふむ、完全に意識は落としてあるようだね。これなら数時間は動けないんじゃないかな」

「魔術師、これは……」

『『グレゴリオの聖歌隊』だ。ローマ正教の最終兵器の一つだね。本来なら三三三三三人の

修道士が聖堂で呪う^{うたう}ことで威力を激増させる大規模な魔術だけど——」

これはそれを模したレプリカさ、とステイルは億劫そうに息を吐く。

「つまりこれは、そのの八〇人バージョンってことか？」

「ちよつと違う。本物をもつと危険な代物さ。とてもじゃないけど一魔術師でどうになるようなもんじゃない。……まあ、この規模の物にしてもそうなんだけど」

上条の疑問に、答えになつてない答えを返しながらステイルは立ち上がる。

「さあ、さつさとここを離れたほうがいいと思うよ。ここの建物には二〇〇〇人近い生徒がいるんだ。いくら君でもそれを一斉に相手にはしたくないだろ？」

その言葉に意味がわからないといった顔をする上条に、ステイルは若干感イラつきながら言葉を続ける。

「だ・か・ら！ 今倒したのはあくまでこの場における呪文の噴出点なんだよ。言うなればこのビルの中にいる全生徒が、『偽・聖歌隊』^{グレゴリオレプリカ}の一員なのさ」

「全生徒って！ 二〇〇〇人全員相手にしなきゃいけねえのか！」

上条の背に怖気が走る。二〇〇〇対三だなんて、そんなの考えたくも無い。

「離れたとして次はどこへ行くのです？ 隠し部屋をまた探すのですか」

「あの錬金術師が二〇〇〇人も操ってるなら話は別さ。『偽・聖歌隊』を操作するための核を探せばいいんだよ。魔力をたどればそう遠くないうちに見つかる」

言いながら食堂からでるステイルに、セイバーと上条も後を追う。

「しっかし、二〇〇〇人を同時に操るなんてな。お前は軽く見てたのかも知らないけど、やっぱアウレオルスってのはやばい奴なんじゃねえか」

「それに関しては僕の認識不足だったよ。まさか奴がここまでやるなんてね」

そんな上条とステイルの何気に会話に、セイバーはふと違和感を覚えた。

「魔術師、あなたは敵の錬金術師と知り合いなのか？」

初耳だが、と聞くセイバー。ステイルは廊下で何やら辺りを探っているようなので、疑問には代わりに上条が答える。

「ああ、なんでも顔見知りなんだったよ」

「………それであの余裕だったのですか」

呆れたとでも言う様な声を出すセイバー。実際いくら顔見知りだからと言って、相手の実力を以前と同様だと考えるのは早計と言わざるを得ない。自分が月日を重ねて成長するように、相手も修練を重ねているのは確実なのだから。

『しかし、敵の錬金術師がステイルの事を知っていると厄介だな』

『少なくとも火の系統を扱う魔術師だということは割れているはず。まあそもそも今の彼は魔女狩りの王を学生寮に置いてきていますから、そこまでの戦力を期待してはいませんが……』

『ステイルの反応を見るに、アウレオルスの方はだいぶ変わっているようだな』
『それでも魔術師に聞くだけ聞いてみます』

錬金術師と直接対峙した時に何かヒントになるかもしれないから、とセイバーはステイルの方へ足を向けた。しかし彼女が廊下を二三歩も歩かないうちに、その身に悪寒がぞわりと走る。未来予知にも等しいと称される彼女の『直感』が、明確なヴィジョンを持って警鐘を鳴らしている——!!

「うおっ！」

「な、何をする!?!」

言葉で伝えている暇も無いと判断したセイバーは、傍にいた上条とまだ何かやっていたステイルを左手でまとめて引つつかんだ。二人の首根っこを掴んだのでごとと頭同士がぶつかる様な鈍い音がしてしまったが、そんな事を気にしている場合でもない。

(間に合うか?……?)

焦るセイバー。右手には剣を持ち、風の鞘を纏わせた。そして突然のセイバーの行動にまるで訳がわからず混乱していた上条だったが、その目に映った光景に息が止まる。それは光の洪水だった。

セイバーに首を掴まれたときに見えたそれは、廊下の両端に栄える光り輝く壁。いや、壁と見間違ってしまうほどの大量の光球である。光の球の一つ一つは大した大きさ

ではない。せいぜいがピンポン球くらいの大きさで、青白く輝きながら上条たちに向かつてくる。

ただその量が半端ではないのだ。それこそ洪水と違っていいほどに、廊下を埋め尽くさんとする数の光球が迫りくる。

『偽・聖歌隊グレゴリオレプリカ』かつ！』

首根っこを掴まれて廊下に引きずられたままステイルが叫ぶ。食堂でのそれはセイバーが呪文を唱えさせる暇も無いほどの速さで倒したので問題は無かったが、今回はそうも行かない。この量の光球、八〇人なんて比でないほどの規模の詠唱がどこかで行われ、それを恐らくここまで引つ張ってきたのであろう。

これでは幻想殺しなどではとても防げる数でなく、ステイルにも勿論防ぐ手立ては無かった。……まあ、実はステイルにはこういうときのための秘策があるにはあったのだ。既に彼らの侵入はアウルレオスにばれているとステイルは前に言ったが、それは上条という存在が大きい。

なにしろ彼の幻想殺しはそこにあるだけであらゆる神秘を打ち消す、まさにジョーカー。そんなものが自分の支配する結界内に入ったのだ。むしろ気づくなど言うほうがおかしいであろう。対してステイルの方は、魔術を使うことさえしなければそこまで目立ちはない。

だからこんな状況に陥ったときは、上条には囧としてせいぜい頑張つて貰おうと内心考えていたのだが、

(……この量はまずいね)

そもそも両サイドから光球が迫っている時点で逃げ場など無く、囧など何の役にも立たない。加えてセイバーの存在が、彼のその行動を抑制していた。しかし彼に打つ手が無いとすれば、ここはこの少女剣士に頑張ってもらう他無い。

(さあ、この場をどう切り抜けるのかな?)

自分では手の打ち様が無い状況に陥りながらも、ステイルⅡマグヌスは自分でも妙だと思ふ冷静さでセイバーを見つめていた。それは彼女の存在感からくる目に見えない安心感かもしれないし——あるいは、ただの達観かもしれない。

上条は上条で言葉も碌に出ないほど焦つてはいたが、首を掴まれたまま床に引きずり倒されては何も出来なかった。彼もまた、セイバーに望みを託すことしか術はない。

そうして二人の命を預かるセイバーは、剣に纏わせた風の鞘を轟とうねらせる。両方向から迫る光の波を見据えながら、彼女は機を伺う。

(まだまだ……まだ、その時じゃない)

彼女の直感では、もう一つ。この光の球の洪水だけでなく、まだワンアクションあると訴えている——！

——来た)

限界ギリギリまで光球を引き付けたセイバーの目に映ったのは、その奥でせり上がる廊下の床だった。

「はあっ!？」

形容し難い轟音を立てながら瘡蓋の様にべりりと捲れた床には、上条も素つ頓狂な声を上げる。まるで三人を光球ごと包み込むかのように、両側の光の壁の奥から床がせり上がってきている。一見して絶望的な状況。逃げ場は既に無く、二人を守りきれぬほどの猶予も無い。

セイバー一人ならまだしも、到底三人無傷とは言えない状況のはずだ。

………普通だったら。だがここにいるのは剣の英霊。人の限界などとうに超えた、人類の憧れそのものである。

「今っ!？」

迫る光球、せり上がりつつある壁。そこからは正に一瞬であつた。そこにタイミングを見計らつていたセイバーの掛け声と共に、右手で風王結界が解放される。本来は聖剣を包む風の鞘がその籬を外し、暴風と共に唸りを挙げた。

上条は左手で抑えてあるので風王結界に幻想殺しが干渉する事は無い。王の名を冠する風の宝具は、その名を示すかの如く光球をひれ伏せさせる。廊下を埋め尽くす程の

光球は地に墜ち、右方の天井付近に隙間が出来た。

「はあああああつー！」

瞬間、風王結界の反動も利用して回転したセイバーは左手の二人を右方の天井へと放り投げた。廊下の奥に標準を合わせた投擲は地に伏せられた光球を越え、さらにせり上がり今正に天井に達せんとした床の上をギリギリで超える――。

そうして、上条が床を超える直前に見たのは、彼に向かって微笑むセイバーの姿だった。

「ぐえつー！」

潰れた蛙の様な声を出しながら、そのまま壁を越えた反対側の床に叩きつけられる上条たち。ごろりと転がって体の痛みに耐えながら立った二人だが、そこにはせり上がって完全に廊下を両断した床と、反対側の奥に広がる何も無い廊下が見えていた。壁の向こうからはセイバーの声はおろか、音すら漏れてはこない。

「……まさかこんな無理を押し通すとはね」

少し呆けた様子の上条の傍で、ステイルが体を擦りながら呻く。確かに床に落ちたときの衝撃は痛みを伴ったが、幸い二人ともどこも傷めた様子は無い。ぱんぱんと服に付いたごみを払い落とし、隣でせり上がった床――廊下を両断した壁を見つめている上条に声をかけた。

「さあ、こっちはこっちでさっさと動かないとね。……それにしても全く、床をせり上げるなんてなんてデタラメを——」

「……おい」

予想だにしない畏に何かを考えるかの様に顎に手を当てたステイルに向かって、上条の低い声が降りかかる。その声に、ん？ と不思議そうな顔をしたステイル。そんなに我慢がならなかったのか、ついに上条は大声を上げた。

「待てよ！ このままセイバーをここに置いていくのかよ!!」

ふーっ、と今にも飛び掛りそうな様子で、上条はステイルに詰め寄る。

「あいつのおかげで俺たちは助かったのに、俺たちはあいつを見捨てるのかよ！」

気炎を上げる上条を、ステイルはじつと見据えた。

「早く助けてやんねえと、あいつが死んじまうだろうがっつ！ あれだけの量の魔術を一人で身に受けて、セイバーは。セイバーはっ——」

「……それで彼女の覚悟を君が無駄にする、と?」

「——っ!!」

ステイルの、ぞつとするほど冷えた声が、上条に刺さる。

「彼女は君を助けるためにあの場から君を引き離れたのに、君がその危険な場に戻るのかい?」

「……………ぐっ！」

それは彼女の意思に対する冒瀆だ、とステイルは続けて告げた。確かに、上条を助けるためにその身を犠牲にしたのに、そこで上条が戻ってしまったては元も子もない。上条もそんなことわかっている。

理性でわかつてはいるが、彼の中でうねる感情の渦がそれに納得がいかないと訴えているのだ。しかし、セイバーの意思を無駄にしてはならないのも事実である。悔しそうに歯軋りする上条に、追い討ちをかけるかのようにステイルが続けた。

「それに、そもそもどうやって君はこの壁を越えるんだい？」

「……………それは」

ステイルが指差すのは、せり上がった床。既に天井まで届き完全に廊下をふさいだ壁は、結界の影響で一切の干渉が出来ないのだ。この壁が立ちふさがる限り二人にはセイバーの安否を確認すること、ましてや救い出すことなんて不可能である。

「くそおっ！」

だんつ、と音を立てながら、右手を壁に叩きつける上条。当然反動は二倍で返ってくるし、効果が無いのもわかっている。わかっているが、上条はそもやもやを何かにぶつけられずにはいかなかったのだ。

「……………そんなに彼女の無事を確かめたいなら」

そんな上条の様子を見ていたステイルは口を開く。

「さっさと錬金術師を片付けることだ。奴さえ抑えればこの結界も解けるんだからな」

上条の目に力強い何かが宿る。もう一度だけ、もう一度だけ上条は壁を見つめると、拳を握り締め廊下の先に向き直った。

「……いくぞステイル。こんな事件、さっさと錬金術師を倒して解決してやる」

「ようやく先に進む気になったのかい？」

ステイルの茶々も気にせず、上条はずんずん先に進む。どつちにしろ、彼のやる事は変わらないのだ。その右手で姫神を救い出し、錬金術師を打ち倒せばそれでいい。ここに来て初めて、上条の覚悟も定まったのだ。

今までの上条は正直どこか姫神を救い出すことには賛同できても、錬金術師を倒す覚悟までは決まっていなかった。アウレオルスと上条の間には何の因縁も無かったのだし、あの一階の騎士の惨劇だって正当防衛の可能性もある。

しかし、今は違う。錬金術師からは明確な排除の意思を感じ、結果として仲間が一人倒れた。姫神を救い出すだけなら、錬金術師を倒す必要は無かったのかもしれない。だがセイバーを救うには結界の解除、つまりアウルレオスに立ち向かう必要性が出てきたのである。完全に、上条の覚悟は決まっていた。

……それでもあくまで『倒す』のであって『殺す』と決意しないのは、彼の甘さでもあり美德でもあるのだが。

(まあ、『これ』が覚悟を決めたのはいいんだけどね)

そうして先に進む上条を後ろから追いかけてながらステイルは考える。

(果たして彼女はあの程度でリタイアするだけの存在だったのかな?)

時は少し遡り、セイバーが上条たちをせり上がる床の向こうに放り投げたところから始まる。彼女は風王結界の反動を利用して回転し、その勢いで二人を放り投げた。しかしセイバーは、さらにその勢いを利用して上条たちとは反対の方向に飛んだのである。

当然、風王結界で光球が下方に押さえつけられた右側と違って、彼女が飛んだ左側には未だ光球で満ち溢れていた。だがセイバーはその光球の群れにそのまま、頭から突っ込んだのである。

「いっ」

魔力放出に加え風王結界まで利用した彼女の加速は、文字通り目にも止まらぬ速さで光の渦に晒された。なるほどこの速さなら、彼女もまた閉じ込められることなくせり上がる床の向こうに脱出することが出来るだろう。

だが光球は？ 視界を覆い尽くすほどの光球は変わらずそこに存在し、セイバーの骨まで食い破ろうと迫ってきているのだ。常人は元より魔術師でさえ、この光球の洪水に飲み込まれれば絶命は避けられない。だが、

「はあっ！」

鋭い一声。気合と共に、彼女の肌に触れようとしてきた光球が掻き消えた。対魔力。確かに、今の彼女はクラススキルを持っていない。しかし、彼女にはその身に流れる竜の血脈がある。どんなに弱く小さな龍でさえ、幻想種では最高位の位置づけを誇るのだ。魔術師とは比べ物にならない彼女の生来の対魔力が、彼女の柔肌を『偽・聖歌隊』から守っていた。

いくら総量が多くとも、個々の球体が小さいのならば彼女にとっては脅威にはなりえない。結果として彼女もまた、上条たちとは反対方向の廊下に無傷で降り立つことが出来たのだ。そのまま難なく彼女は着地すると、ふうと小さくため息を吐く。

『なんとか切り抜けることが出来ましたね』

『当麻とステイルと一緒にさせておくのは不安だが…… まあ、仕方ないだろうな』

『そうですね。 何せこちらには——』

カツン、と靴の音が聞こえた。廊下の奥、階段のほうからその音は聞こえてくる。カツン、カツンと。

臆することなくむしろ正々堂々と、その音は段々と大きくなってゆく。

「……………やはり、来ましたか」

何故彼女が、上条たちを右側の廊下に放り投げたのか。どうしてわざわざ三人を二人と一人に分けるような真似をしたのか。それは確かに、あの時のタイミングやら勢いやらあるのかもしれない。しかし、彼女がそうしたのには一つ明確な理由があった。

あの瞬間。両側から光球が迫ってきたときに、セイバーは左側の廊下から強い何かを感じていたのだ。その何かは、言葉に出せるようなものではない。悪寒とも殺気とも違う、しいて言うなら意思力か。

無論、そんな方向に上条やステイルを放る訳にも行かない。それに三人一緒に飛んだとしても、彼女の予想が当たっていたならばむしろ二人が足手まといになると考えた点もあつた。

『セイバーの直感が当たつたな』

『当然でしょう。私の直感ですよ？』

大きくなる靴音に備え、剣を正眼に構えるセイバー。そうして彼女が身構えたところに、その男は堂々と現れた。

二メートル近い細身の長身に、オールバックの緑色の髪。高価な純白のスーツに加え、イタリヤ製の高級革靴に身を包んだその男は、いかにもキザな感じだ。しかしその中性

的な顔立ちと身に纏う異様な雰囲気、彼を冷え冷えとした威圧感と共に際立たせていた。

彼はそのままセイバーに近づくと彼女の数メートル手前で止まり、懐から取り出した細い針で自身の首を突き刺した。

（鍼療法、か？）

敵を目の前にしたその行動に衛宮士郎があたりをつける。目の前の男はそのまま鍼を投げ捨てると、じろりとセイバーを見下ろした。

「無然。よもや『アレ』がわが手中に収まるかと思つたが、やはり勘違いか」

無機質な声。彼にとつてはこの邂逅、この状況そのものが予想の範疇だったとでも言うかのように息を吐く。

「アウレオルスライザードだな」

そこに横入るセイバーの声。剣を構えた姿は油断無く、ぎりぎりどと空氣が軋む。だが目の前の男はそんな空氣にもお構いなしの余裕を、しっかりした自信が彼のどこかに根付いているように見える。

「当然。私以外にアウレオルスライザードなど存在しない。……どうやら貴様は私に用がある様に見えるが————あいにく、私は貴様に用はない」

用は、無い。

返答は短く、そして簡潔な排除の意思。

そのまま彼は——自らをアウレオルスライザードと名乗った男は、目の前の少女を排斥せんとする為に、再びその口を開いた。

遠く離れて

その廊下は、夕陽の色をしていた。夕陽？ おかしい、そんなはずはない。だって日はさつき沈んだはずだ。上条は落ち行く太陽を、その目で窓越しに見たのだから。でも確かに上条の目の前の廊下は今、真っ赤に染ま………っているのだった。

「――」

言葉が出ない。紅の液体と鉄の臭いに満ちたそこには、伏した大勢の人。今まで嗅いだ事が無いほどの濃密な『ソレ』が、上条の鼻腔を満たす。一階のロビーとは、まるで比べ物にならない。ねっとりとした何かが煙のように自分に纏わりついている気がする。足を動かせば、ぴちやりと聞きたくも無い水音が聞こえる。

(……は、なんだ?)

セイバーとの合流を後に回し、『偽・聖歌隊』グレゴリオレプリカの核を追ってステイルと上条がたどり着いた場所がそこだった。いや、そこにたどり着く前から嫌な予感はしていたのだ。

漂ってくる異臭に、人の少なさ。そして何よりよくよく考えれば、学園都市の学生が『偽・聖歌隊』に組み込まれたという事実がある。重要なのは学園都市に入る以上、この学生たちも何らかの超能力を持っているというわけで。

それはつまり、超能力者が魔術を使ったということの意味していた。上条には記憶は無くとも知識はある。超能力者が持つ魔術への拒絶反応。その知識が語るには、魔術はそもそも普通の人間でも超常的な現象を起こすことが出来るようにするためのものである。

それ故、普通ではない超能力者の体はどんな小規模魔術を起こすにも適していない。そんな超能力者が無理に魔術を使用すればどうなるか。その結果が、目の前の惨劇だった。

文字通りの血路に上条は震える。そして震える上条の先に立っているのが、平然とした顔のステイルⅡマグヌスだった。彼は至って普通の表情で、まるでそこらの歩道でも歩いているかのような気軽さで血の海を渡る。

「さて、ここらにあるはずなんだけどね」

ステイルは廊下の壁を軽く叩いた。彼の感覚だとこの階層に聖歌隊の核があるはずなのだ。そしてそれは、大した労もかからずにすぐに見つけることが出来た。その隠し場所、つまり廊下の壁そのものに彼は目を向ける。

「なるほど、壁に埋め込んでいるわけだ」

「……おい」

そうして核を壊そうとするステイルの耳に聞こえる声。核を見つけたステイルの隣

には、なんとか自分を立て直した上条がいた。その顔は未だ悄然としているが、少なくとも二本の足で立つ事は出来ている。上条の靴は辺りの血溜まりのせいで紅く染まり、走ったわけでもないのにその息は上がっていた。

「お前、なんも感じねえのかよ！」

「感じる？ 何の話だい？」

「惚けんな!!」

叫ぶ上条は勢いのままに周囲に倒れている生徒の一人を指差す。その生徒は息こそあれど、全身に走る裂傷からは止めどなく血が流れ出ている。

「早くこいつらを治療してやんねえと…… このままじゃ死んじゃもう！ 死んじゃもうだろうが!!」

敵陣の真っ只中にもかかわらず激情を抑えもしない上条に、ステイルはふうと息を吐く。

「治療だなんて無理に決まってるだろう？ やるだけ時間の無駄さ」

「なっ……!!」

にべもないステイルの返答に、上条の頭にかつと血が上る。

「ふざけんな！ このまま全員見捨てろって言ってるのか!!」

「そう言ったつもりだけど？」

冷静。対するステイルは至って冷静だった。こんな場面何度も見たことがあると言っているかのように、別段変わったことでもなんでもないとやっているかのように。実際、ステイルにはある種見慣れた光景だ。必要悪ネセサリの教会ウズの指示で、彼が一体幾人の魔術師を焼き殺したのか。

……今の彼にこの光景を見て思うところが一切ないというわけではない。ただ、出来ることがない、余裕がないということこそステイルは知っているのだ。

「……のっ!!」

ステイルの言葉に彼の胸倉を掴まんと上条は迫ったが、その手をステイルはぱつと払った。

「よく考えてみなよ。ここは敵の本拠地で、僕らには任された仕事がある。そもそも、君はここにいた全員を助けられると本気で思っているのかい？ 碌な供えもないのに？」

救急車なんて呼べもしないこの状況で？」

「そ、それは……」

「ちなみに僕の魔術は当てにしないでくれよ。まともに扱えるのは火傷を治すことくらいだからね」

「……………ぐっ!!」

ぎり、とそんな音が聞こえそうなほどに歯を食いしぼる上条。よくよく考えればわか

ることなのだ、彼らに出来ることがないなんて。倒れ伏している生徒たちを治療する手段もなければ、外に出させるような力もない。無力。ただ無力。

助けを求める声こそなければ、彼らは巻き込まれてしまった被害者なのに。顔を下げた床を見れば、虚ろな目をした生徒たちがぴくりともせず倒れている。

「それに、そんな事で騒いでいる暇も僕らにはないみたいだよ」

「そんな事って……!」

とはいえあんまりなスタイルの言い方に、上条は抗議の声の声と共に顔を上げ、

「……………つ!!」

廊下の奥から歩いてくる、妙な男に気がついた。いかにも高級そうな靴と白いスーツに身を包んだ長身の男。緑色にオールバックという可笑しな風体をしてはいるが、なぜかそれはひどく様になっている。その男には、その姿をさも当然とさせるような気品がどこかあった。

「……………お前が、アウレオルスIIイザードか?」

「当然、私以外にアウレオルスIIイザードなど存在しない。貴様たちがここにくることは、『偽・聖歌隊』グレゴリオレプリカを使えば容易に予測できることだ」

「……………テメエか」

揚々と語るアウレオルスに、上条は腹の底から響くような声で言葉を投げかける。

「デメエが、こいつらをこんな風にしやがったのか!!」

上条は手を横に風ぎ、右手をぐつと握り締めた。怒り心頭とは正にこの事か。怒髪天を衝くかの如く、見えない熱気が上条を覆っているようにも見える。怒号は廊下にビリビリと響き渡り、この場を揺らした。

だがしかしそんな怒りはどうとでも無いという風に、あくまでアウルレオスは静かに語る。

「自然、一体何を驚いている。魔術師ならば血路を進むことぐらいどうとでもなかろうに」

「……どうとでもない、ね」

アウルレオスの言葉に反応したのはステイルだ。彼は依然、怒る上条の隣に佇んでいる。

「お前、元々研究畑の人間だろう。なんだってそんなけつたいな道を歩いている？ 大人しく引きこもって本を書いていればいいものを」

そう、アウルレオスの本職は元々ローマ正教の隠秘記録官カンセクレリウス。教会の為に魔道書――

――魔道書の注意書きとしての魔道書を書く専門家だ。そもそもそんな彼がこの極東に、よりにもよって科学側の総本山とも言える場所で騒動を起こしていることのほうがおかしい。

「慥然、説明するまでもないと思つたが。私がここにいるのはローマ正教にいては出来ないことを成す為に決まつている。今の私の悲願は、ここでこそ完成し得るのだ。自然、この『三沢塾』の特性上、材料にも事足りるからな」

「……………」

アウレオルスはその言動に、眉をひそめるステイル。別に非人道的だとかいう話ではなく、もつと根本的な違和感を彼は感じたのだ。その点について、ステイルが追求しようとしたその時、

「材料、だと……………」

声が、響いた。唸り声とも吼え声ともつかぬソレは、ある一つの感情を凝縮したような何か。怒り。そう、怒りだ。ひり付く様な怒りが、その声には籠められている。ある種の熱と共に発せられた怒号は、まさに空気を震わした。

「ふっ……………ざけんなよ！ テメエ、一体どういう神経してやがる!!」

その熱源は、ステイルの隣にいた上条だ。先程の比ではない勢いで彼は轟と吼える。

「そいつらは、そこで倒れてる奴らはただの学生だろうが！ お前の勝手な都合で巻き込みやがつて、魔術のゴタゴタに引き込んでんじやねえ!! 何も知らねえ一般人を、こんな、こんな傷つけやがつて……………お前は自分が何やつてるのかわかつてんのか!!」

「当然、理解している。使ファミリアい魔風情が口を挟むな。私が材料をどう扱うかなど、貴様に言

「 われる筋合いはない」

「——」
そこで、上条の中の何かが切れた。まさにぷつんと。頭の中は真っ白で、思考は一気に放棄される。

—— 気づけば、上条は足を前に出していた。ずんずんと、拳を握り真っ直ぐにアウレオルスに向かう。そんな上条を興味深そうに眺めているステイルの横を通り過ぎ、倒れ伏す生徒たちから流れる血を踏みしめる。

無論、アウレオルスもただ待っているだけではない。向かってくる上条をつまらなさそうに見ながら、彼はその手をヒュンと振りぬいた。上条がソレに反応できたのは、まさに僥倖と言う他ない。いや僥倖というか、不運が転じたというか。先程から血溜まりに足をつっ込んでいた上条の靴はそこそこ滑りやすくなっていたのだ。

そんな状態で勇み足のまま掛けたのだから、上条は僅かにその足を滑らしてしまった。アウレオルスの狙いがずれたのではなく、上条が不意にぐんとその体を落としたのだ。そして上条の顔を狙った何かはそのまま虚空を突っ切り、倒れていた生徒に突き刺さった。

—— パン。そんな何かが弾けたような音が上条の後方から聞こえた。そして妙な熱気が彼の背中をふわりと撫でる。嫌な予感がした上条は、体制を整えながら足を止

めて後ろを振り向いた。

——そこにあつたのは、黄金の塊。しゅうしゅうと煙を出すいかにも高熱な液体が、黄金色に輝きながら広がっていく風景だ。

「我が必殺の『瞬間鍊金』^{リメン||マグナ}をまぐれとはいえ避けたか。だが次はない、大人しく我が鍊金の糧となれ」

アウレオルスは、その袖口から出ている鎖付きの金色の鍬を黄金から引き抜きながら揚々と喋る。そんな鍊金術師の声が、上条にはどこか遠くに聞こえた。灼熱の黄金に反し、上条の内面は固く底冷えする。

確かあそこには、あそこには学生が一人横たわっていたはずだ。それが黄金の塊に変わっているという現状がどういうことを意味しているなんて、そんなの分かりきっている。一人一人が黄金に変えられた。……それは遠まわしに人が殺されたと言っている様なものだ。

身近に迫った死の恐怖からか、それとも今の光景が余程信じられないのか。流石の上条も、その条理を無視した現象に足を止めてしまう。だが傍らで上条の突撃を眺めていたステイルは僅かに眉をひそめたものの、どこかつまらなさそうな目でそれを見つめて息を吐く。

「……やれやれ、何が出てくるかと思えば子供の自慢じゃないか」

「——儼然。貴様、我が『瞬間鍊金』^{リメンシマグナ}を何と言った？」

ステイルの眩きを、耳ぎとくアウレオルスは拾い上げた。先程の人を黄金に変えた魔術、アウレオルス曰く『瞬間鍊金』。魔術師の使う魔術は、その人の人生といっても過言ではない。魔術師が生涯を掛けた研究や鍛錬の果てに手に入れたそれを馬鹿にされるのは、その魔術師自身に対する愚弄他ならないのだ。

いくらステイルとアウレオルスが顔見知りとはいえ、いや、顔見知りだからこそか、——アウレオルスは、そのステイルの発言が許せなかった。じろりとステイルを睨め付けると、腕の狙いをそちらに合わせる。

ステイルはステイルで、それに一切動じた様子を見せない。相変わらずアウレオルスを馬鹿にしたような目で見たままで、懐からカードを引き抜き謳い上げた。

AshToAsh
DustToDust
SquashBleedRoad
「灰は灰に——塵は塵に——吸血殺しの紅十字」

ごう、と風が舞う。そして辺りにルーンのカードが散らばると同時に、彼の右手からはまるで業火の象徴のような炎が線となって迸る。それは単純な剣のような形に姿を変えると、ステイルの右手に収まるようにして『炎剣』となった。

「まるで子供の自慢だな、と言ったんだよ。そんなちやちなものを自慢げに語るお前を見てたら、なんだか笑えてきてね」

「——貴様っ!!」

ステイルの台詞に激昂するアウレオルス。そしてそのまま、腕をステイルの方に向けて振りぬこうとして、

「——ッ!!」

何かにその体を、いや顔面をぶち抜かれた。

「ぎっ……………! がああああああつ!!」

そのまま横様に吹っ飛び、壁に体ごと叩きつけられる。何かに殴られたような衝撃でぼたぼたと鼻から血を流しながら立ち上がったアウレオルスが見たのは、——獣。

いや、獣のように唸りながら突進してくる上条の姿だった。ぶつ殺す。そんな気迫さえ感じるそれは、アウレオルスには到底ただの人間とは思えなかった。

「が、ひっ」

その突撃をかわそうと身を振るも再び、今度は腹部にその拳を受ける。がぼ、と妙な音を口から漏らしながらアウレオルスは吸った息を全て吐き出した。急な展開に対応出来ていない。受けたダメージも勿論あるが、先程まで全く動いていなかった上条が、まるで魔術のように突然現れた事に動揺しているのだ。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお——ッ!!」

更なる追撃をかけんとする上条の気迫に、アウレオルスは命の危険すら感じた。根源的な恐怖。彼が今まで感じたことのないソレが、ぞわりとした怖気とともに襲い掛か

る。経験したことの無い感情に飲み込まれながら、もはや狙いすら定めずアウレオルスは鍬を振るった。

しかし狙って打ち出したならまだしも、そんな適当に放ったものがまともに飛ぶわけがない。あさつての方向とまではいかなくとも速度が足りず、鍬を上条の右手で叩き潰される。もはやアウレオルスには、その不可思議な現象を分析するだけの冷静さも残っていないかった。不意打ちに加え、必殺の一撃すら無に帰されるとは。

(愕、然、何故我が『瞬間鍊金』が——!?)

そして三度目の衝撃がアウレオルスに走る。今度こそ、アウレオルスは吐いた。胃液を少量ぶちまけ、その口の中に独特の酸味が広がる。そも実戦派でないアウレオルスは打たれ弱い。もはやなりふり構わず床を転がりながら何とか上条の攻撃をよける様は、先程の優雅さとは程遠かった。

それでも、それでも彼は生粋の鍊金術師だ。理論もくそもないようなこの状況だが、もはや本能に近い判断で鍬を二、三本、上条ではなく真横に飛ばす。頭に血が上つてるとはいえ、上条もまた本能的にその動きを追った。……その鍬の先には、数人の横たわった生徒。アウレオルスが何を狙っているのか悟った上条が目を見開いて叫ぶ。

「よせっ!!」

上条の叫びも空しく、鍬は生徒たちに突き刺さった。ぶちゆり、と。そんな肉を抉る

音が上条には聞こえた気がする。そして内から弾ける様に、生徒たちはその姿を黄金へと変えた。数人分の液状の黄金は人一人どころか廊下一面を覆いつくさんとする勢いでどろりと周囲へ広がる。当然、アウレオルスと上条がもみ合っている場所にも。

(野郎、俺と自分を分断しようとしてっ！)

だが、アウレオルスがその気なら上条にも考えがある。要は黄金の溶岩が上条とアウレオルスを隔てる前に、アウレオルス側に飛んでしまえばよいのだ。

そう考えてアウレオルス側に跳躍せんと身をかがめた上条だが、その目に再び信じられないようなものが目に入ってきた。

「ば、ばっかやろう!!」

それを見た上条から思わず出ってしまったのはそんな言葉。上条が見たのは——先程とは比にならない、十数本の鎌を袖から放出したアウレオルスの姿。物量で潰す、それがアウレオルスの作戦ともいえない作戦だった。

いや既に彼に戦意はない。ただ単に目の前の理解不能の脅威からの逃避行。その為だけの行為だ。三発全力で殴られたくらいでここまで取り乱すのも妙な話だが、アウレオルスは実は殴られた以上のダメージを受けていた。目の前の少年に殴られるたびに、全身から『何か』が吸い取られるような、いや、飲み込まれるような感覚に襲われるのだ。

それは正しく脅威以外の何者でもない。自分を構成する『何か』、それが足場が崩れるように消え去っていく。このままでは消されてしまう。それがアウレオルスになりふり構わない撤退を余儀なくさせた一番の理由だった。

いくら彼が『人』の限界の探求者でも、自分が死んでしまつてはどうしようもない。自らが鳴らす警鐘に従うようにして、アウレオルスは無数の鎌を突き刺した生徒たち——
——今や黄金へと無残に姿を変えた彼らを振り回した。

前に跳ぼうと身をかがめていた上条も、これには後ろに下がらざるを得ない。対してアウレオルスは、その全てに背を向けて這いずる様に逃げ出した。黄金の海が、上条とアウレオルスの間に広がる。もはや跳ぶは愚か、向こう側に渡ることすら困難なほどに。

「逃げんじゃねえ！　もう勝負はついてんだろが!!　テメエが逃げたら、余計に——
——くそっ!!」

犠牲が増える。アウレオルスの背に向かって上条は怒鳴るが、その姿はどんどん遠くなつていく。

追いかけれない所まで逃してしまつた事に地団駄を踏んで悔しがる上条だが、その一瞬、背後から迫る何かを感じ取る。ぞわりと、彼に悪寒が走つた。

(後、ろ?　そういえば、後ろにはステイルが——)

ぼつと背後を振り向く上条。そして上条が振り向くのとほぼ同時に、彼の顔の真横を何かが通る。

炎剣。上条の顔スレスレで通り過ぎたのは、ステイルⅡマグヌス謹製の炎剣だった。

「あ？つっ」

その熱気に顔を歪めて声を上げる上条。髪の毛の焦げた臭いがつんと上条の鼻をついた。まあ摂氏三〇〇〇度の物体が横を通れば、誰だって声を上げる。

むしろそれだけで済んだ事が驚きだ。その時点でそれなりに配慮されているであろうが、上条としては炎剣を投げつけられるいわれはない。当然、抗議の声をステイルに上げようとして、

「がああああああああああああつ!!」

廊下の奥から聞こえた叫び声に、それを遮られた。何かとステイルの方を向こうとしていた上条は、再びアウレオルスの方に向き直り目を剥いて呟く。

「……あいつ」

そこにいたのは、だいぶ離れたところで廊下に倒れ伏すアウレオルスの姿。だがそれだけではない。未だ呻き声を上げているアウレオルスには——左足が無かった。いや、そこに左足はある。ただし黒焦げで、しかも本人から離れた状態で、という意味だが。

「まあ、下手にあの状態で動き回られても困るからね。後顧の憂いを断つ、といった感じかな」

そんな声が、上条の後ろから聞こえた。声の主は勿論ステイルⅡマグヌス。その声色には微塵の躊躇い、悔いもない。まるで道端でタバコをふかすような気軽さで、彼はアウレオルスの左足を切り落とした。アウレオルスはのた打ち回り、ひいひいと声を上げながらそれでも廊下の奥へと這いずっていく。

「……………」

そんな光景を見た上条の内心では、迷いが渦巻いていた。自分のためだけに生徒たちを犠牲にしたアウレオルスは、許せないとは思っている。実際上条も殴りかかったし、その時はそれこそぶつ殺してやるなんて思っていた。思っていた、のに。

苦しげに声をあげ地べたを這いずり回るアウレオルスを見ると、なんだかその気が萎えて来る。幾人も殺したアウレオルスを外道だと思ふ、それは今でも変わってない。でも、なんだか。なんだか知らないが、

「……………くそっ」

上条は毒づく。それは自分に対してか、それともアウレオルスか。ともかく、何かもやもやしたものが彼の内に残ったのは事実だった。そんな何かを考えるかのようにして俯く上条に、ステイルはやれやれと首を振って話しかけた。

「何をそんなにしよげてるかしらないけどね。いい加減、さっさと場所を移ろうか。あんな奴にかまけているほど暇じゃないんだから」

「……あんな奴って、あいつはこの事件の首謀者みてーなもんだろうが」

未だ重い声で返す上条に、ステイルははあ、とため息を吐く。

「ま、きみは素人だからわからないか。あれはアウレオルスⅡイザード本人じゃない、ただの偽者だよ。アウレオルスⅡダミーといったところか」

「——は？」

「ほかんと、それこそ今聞いた事が信じられないかのように上条は口をあけた。慌ててアウレオルスが這って行った方向を見るも、既に彼の姿は無い。」

「足は落としたけど……ダミー 奴も必死か。あの距離じゃ、一発分しか狙えなかったから仕方ないんだけどさ」

そんな風に感想を漏らすステイルに、上条はおいおいと手を広げながら近づいた。

「じよ、冗談はよせよ。ありや、どう見ても人間だったじゃねえか」

「あれは基礎物質にケルト十字を使った、ただのテレズマの塊にすぎない。ただ素人目ではわからないくらい精巧だったってだけの話だよ。現に、奴は恐らく自分が偽者だって事にすら気づいていないんじゃないかな？」

「そんな……」

あれが、偽者。人を容易く黄金に変えるほどの力を持ったあれですら偽者だなんて。だとしたら、本物は一体どれほどの。上条には、その先の予想がつかなかった。黙り込む上条の様子を見ていたステイルは、それを呆れたように笑い飛ばす。

「君って奴は、人の話を聞いてなかったのかい？ アウレオルスIIイザードは確かにあの偽者よりは強いだろうね、なにしろ作り上げたのは奴自身だし。でも、それでも高は知れてるんだよ」

ステイルは小馬鹿にした口調で続ける。

「前に言ったけど、アウレオルスIIイザードってのはあくまでデスクワークがおもな仕事の魔術師だったんだ。そいつが例えば僕と対等になろうとするなら、それこそ何十何百の魔道具に頼らなきゃいけないのさ」

「そんなにかよ」

「そんなに、だ。まあ、この場においてはこの建物そのものが魔道具みたいなもんなんだけどね」

あくまで余裕を崩さないステイルに、上条はなんだか不安を覚える。それでふと気になって、上条は一つステイルに聞いた。

「じゃあさ、本物の方が吸血鬼を利用して『錬金術』を完成させてたならどうなんだよ。その、世界を思い通りにするって奴をさ」

上条はただなんとなく、なんとなくそう思っただけなのだ。なのに、その言葉に足を止めたステイルの声は思いのほか冷えていた。

「ありえない。そもそも完成するわけが無いものに対して対策を練ろうとも思わない。もしそんなものを奴が完成させてたら——奴には、誰も勝てないよ」

一面が、白に染まっていた。

(何だ……これは?)

アウレオルス・イザードが感じていたのは、彼らしくないぼんやりとした疑問。自分は確かに目の前の少女に声を投げかけたはずだ。それなのに、この状況はどうしたことか。視界は白く、体の感覚もない。

(……………い、や)

だが。徐々に、徐々にであるが、失われていた五感がアウレオルスの手元へと戻ってきた。眼前が白いのは相変わらずだが、背中に感じる冷たい床の感触も。

(……………ッ!!)

当然、彼は起き上がろうと力を入れる。

——が、動けない。どうしたことかと口を開こうとして、はたと気づく。口も、開かない——いや、何かに口元を押さえられている。正確には、口元を押さええているその手で床に仰向けに押さえつけられていた。

「無駄だ、錬金術師」

そうしてもがくアウレオルスに降りかかるのは、冷徹な声。

「既に勝敗は決している。大人しく投降することだ」

その声に彼はようやく全身の感覚を取り戻し、とんだ記憶も思い出した。ほんの数秒前の、彼が敗北した瞬間も。そうあの時、アウレオルスが目の前の少女を押さえ込もうとしたその瞬間に、勝敗は既に決していたのだ。

無論、彼に油断はなかった。自身の使う魔術に絶対の信頼を置きながら、それでもなお慎重を期した上で挑んだはずなのだ。彼の目的を達成するためには、万が一つにも失敗など、挫折など許されない。故に全力。特に目の前の特異な脅威に対しては、欠片も手を抜くことなく。

そんなアウレオルスが使う魔術、彼の全てにして己の研鑽の結晶、その術式の名は、
アルスリマツナ
黄金練成。

黄金練成。

全ての錬金術師の到達点にして決して届かないはずの永遠の憧れ。言葉一つで何も

かも思い通りにするその究極を、アウレオルスは限定的ながら振るうことが出来るのである。以前ステイルが衛宮士郎に説明したとおり理論上は可能でもその呪文が長すぎるせいで、黄金練成は決して完成しない魔術であつたはずなのだ。

ではどうやって？ 一体どうしてアウレオルスはその術式を完成させたのか。

その答えは、いわゆる並行計算にあつた。途方もなく永い時間がかかる呪文を、何も一つのタスクとして扱い直列的に演算する必要はない。アウレオルスは呪文の詠唱文そのものを千単位で区切つた上で、それを区切つた数と同数の人間で同時に唱えさせたのである。

そのための人員は、『三沢塾』の生徒諸君で補つた。これだけの人員がいれば全世界とまではいかなくとも、この『三沢塾』のビル内部程度の範囲ならばほんの数日で黄金練成を行使できる。無論、それでも黄金練成が成立するように彼なりのアレンジを加へはしたが。そうしてアウレオルスがその手に修めた黄金練成は、完全に完璧であるはずだつたのだ。

正に前人未到、今まで誰も成し得なかつた事をやってのけた彼は天才と言うほかない。実際それだけの力を持つ魔術であり、外部の魔術師ならば喉から手が出るほど奪いたいものだろう。

だが、

(愕……然ッ、いかなる道理で、この私がこのような侮辱を受けるのか!!)

そんなアウレオルスは、床を背に仰向けで倒れていた。彼の目に映った一面の白、それは天井の色。彼は完璧だった。魔術も完璧だった。何故？ 何故こうして今、このような結果になっているのか。アウレオルスに油断はなかった。少女の、セイバーの實力を見た上で、自分以外では対処できないと考えて出てきたのだから。その速さも挟み撃ちの罠を仕掛けることで測ったはずなのだ。それを踏まえた上で届かない距離から呪詛を、いや言葉^{……}を発した。

『言葉^{……}を発する』。

——それが、この黄金練成の最大の弱点。

セイバーは、アルトリアIIペンドラゴンは稀代の英霊だ。第五次聖杯戦争におけるキャスターならともかく、二語も話せばそれは隙だ。ましてや実戦派でもなく、元々デスクワークが主な仕事の魔術師ならばなおさら。

そしてアウレオルス側の失策が『言葉』という根本的なものなら、セイバー側の決定打はやはり『直感』と『経験』だろう。そも一般的な魔術師は常人離れた様々な力を得る代わりに、『詠唱』というワンアクションを要することが多い。故にセイバーは、アウレオルスが何かを言う前にその『口』ごと押さえ込んだのだ。要は唱えさせなければいいという話。

例えばステイルならば、事前に唱える事で炎剣を出していただろう。それに対して黄

金練成は、——あまりに自由度が高すぎた。何でも出来るせいで、焦点を合わせる必要があったのだ。

ここで言うなら対象は目の前にいるセイバーただ一人なので省くとしても、「死ぬ」もしくは「平伏せ」。そういった言葉を発することが出来ていたならば、まさしくアウレオルスは勝利を収めていただろう。直感と経験則による合わせ技、そして罠にかかった時の彼女が決して全力ではなかったという事。それが彼の敗因だった。

「さて、と…… まずは操っている生徒たちを解放してもらおうか」

アウレオルスの口から手を離し、絶対的有利の立場から告げるセイバー。その手には剣が握られており、仰向けのままのアウレオルスの喉元スレスレに突きつけられている。正に有無を言わさぬこの状況で、彼は当然焦っていた。

急な展開に、理解が追いついていないと言うべきか。まあ敵と相対したと思っていたら負けていたただなんて、一体どうして理解できよう。とにかく今の彼には時間が必要だった。ここからの逆転の秘策を、この少女の形をした脅威を排除する手段を練る時間が。じわりと汗をかきながら、上ずった声でアウレオルスは答える。

「……核を、核を破壊しなければ生徒たちは呪縛から解けん」

「核？」

「そうだ。当然、それはここにはない。自然、私がそこまで案内する必要がある」

アウレオルスの言う核とは、つまり『偽・聖歌隊』^{グレゴリオレフリカ}の中核のことだ。その運用自体は自分のダミー、アウレオルスⅡダミーに任せてはいるのだが、それを破壊しさえすれば確かに『偽・聖歌隊』は止まる。……『偽・聖歌隊』は。

全てを話している訳ではないが、嘘を言っている訳でもない。ひゅーひゅーと息を漏らしながら話すアウレオルスの様子を見ながら、衛宮士郎はセイバーに警告する。

『気をつけろセイバー。奴が本当の事を言っているとは限らない』

『十分理解しています。ですがこの状況なら、虚偽による罠の可能性があっても対処できるとは限りません』

そもそも彼女に奇襲は効かない。アウレオルスが嘘を言っているならその時はステイルの方に突き出せばいい話だ。

「さあ、立て。貴様の言う核とやらがある場所に案内してもらおうか」

剣を首に添えられたまま、ゆっくりとした動作で立ち上がるアウレオルス。セイバーはその手を取ると後ろで組ませるように拘束する。いかんせん身長差がかなりあるので妙な感じにはなってしまうているが、片手でアウレオルスの両手首を押さえ、もう一方の手で剣を構えることになつた。

アウレオルスの斜め後ろにびったりと張り付くようにして、セイバーは足を進める。かつかつと、アウレオルスの靴の音が静かな廊下に響く。いつのまにか、そこらにいた

生徒の姿は一切見えなくなっていた。アウレオルスが歩くままに、セイバーはその後ろについていく。そうしてしばらく歩き、階段に差し掛かったところでセイバーは異変を感じ取った。

「……………この臭いは」

漂う濃厚な臭い。戦場でよく嗅いだそれを、セイバーは久しぶりに感じた気がした。血。血液。血溜まり。とかくあの鉄臭い赤い液体の香りが、セイバーの鼻腔をくすぐる。

思わず、アウレオルスを抑える手の力が増したのは感情的な動作だ。そして階段を上りきった先にセイバーが見たものはやはり、彼女の予想通りの光景だった。

『……………超能力者が、魔術を使った反動か』

冷えた声で、衛宮士郎が唸る。先程の『偽・聖歌隊』による光球攻撃。どこかに術の基点があるとは思っていたが、あれほどの量だ。この結果を失念していたのは、世界差による認識の違いというほか無い。セイバーはぎりりとアウレオルスの腕を締めると、その耳元に吐き捨てるように言葉を投げる。

「この外道が…… 貴様、これだけの生徒たちまで犠牲にして、一体何を企んでいる」

——これが、いけなかった。

自分の目的の為に人が犠牲になることとうに気にしていない人間が、その真逆の人種

に確実に有利になれる点がここにある。必死で、それこそ死に物狂いで歩きながらこの状況からの打開策を考えていたアウレオルスには、このセイバーの言葉は大きすぎる収穫だった。

つまり、人情。夢に敗れた者が最後の手段として選ぶのが魔術。だというのに、この少女は真つ当すぎた。これがステイルならこの光景に特に感じ入ることは無いだろう。よくありすぎて、今更だから。

無論セイバーだって、この凄惨な光景には慣れている、慣れてしまっている。だが戦場のそれと、この場のそれは『質』が違う。互いに自分の信念と覚悟を持ってぶつかり合い、そして散っていった戦場の騎士たち。ただただ誰かの欲望の為に、無常に無慈悲に使われた犠牲者たち。たとえそこに同じような臭いが立ち込め、赤く染まっていたとしても両者は違う。圧倒的な差が、そこにはある。

後者のような場面に、セイバーは慣れていない。慣れていない知らないからこそその、第四次聖杯戦争であれほどマスターとの齟齬もあつたのだが。それを、アウレオルスは目敏く感じてしまった。後ろ手で押さえられたまま、アウレオルスは言葉を漏らす。

「く、く、当然、……目的なぞ言うわけなかるうが。どのみち我が道が潰えたのなら、この奴らは廃人のままであろうよ」

「……………どういふことだ」

セイバーの見立てでは、刃り一定で血を流しながら倒れこんでいる生徒たちはまだ生きています。早急に外へと運び出し、適切な治療さえすれば十分間に合うだろう。だがそれを、アウレオルスは廃人コースと決め付けた。

「単純な話だ。よもや私を倒したら全て元通りとでも思っているのか？ ……それならば、なんとも甘い見立てだな」

くつくつとアウレオルスは体を軽く震わせて、そのまま言葉を続ける。

「ここにはもう一人、私が作り出した私と同じ『錬金術師』がいる。その気になれば奴は『偽・聖歌隊』を酷使してでも邪魔者を排除するだろう。———この奴らは、これ以上の負荷に耐えられまい」

正確には偽者と本物だ。その位置づけは絶対で、力の差は大きい。だが、そんな事をわざわざここでセイバーに言う必要も無い。

「貴様は、まだこれ以上に犠牲を出すと言うのか！ こちら側に関わりのない民衆を次から次へと巻き込んで、ふざけているとしか思えないっ!!」

「全然。私は至極真つ当だ。そもそも、それが魔術師だろう」

いつの間にか、アウレオルスは余裕を取り戻していた。この場を乗り切る一つの算段、それが彼の中でついていたからだ。

「ふむ。ところで、私が今すぐにでもそれを実行できるとしたらどうするっ。」

「……………っ！」

アウレオルスがセイバーに投げかけたのは、一種の人質宣言だった。ようは、私の掌には二〇〇〇人の命があるのだぞ、という。だがセイバーも、それを真つ向から受け止める気はない。

「させると思うか？ 貴様が何か行動する前に、私の剣はその首を刎ねているぞ」

ぐっ、と。より強く、首に赤い血の筋が入るほどに、セイバーは剣をアウレオルスに押し付けた。

だがそれに対して驚くことに、アウレオルスはさらにその刃に自分の首を押し付けた。

「やってみるがいい。主を失った下僕がどう暴走するか、それはそれで興味はある」

この極限の状況で、アウレオルスもむしろ開き直っているのかもしれない。アウレオルスの首筋から垂れた血が、じつとりと白いスーツの襟を朱色に染める。

『ブラフだ。奴の言うことには根拠が無い』

衛宮士郎がセイバーに告げた。確かに、アウレオルスの言葉には拠り所がなく、全てが不確定要素だ。だがもう一人の錬金術師と言う言葉に、セイバーはひかかっていた。

なにしろこの規模の大きさのビルだ。一つだけでも巨大なビルが四棟もあり、おまけに二〇〇〇人の人員がいる。その備えを一人でやるのは、それは少し無謀ではない

か。もう一人くらいいることも十分ありうる、そうセイバーは踏んでいたのだ。

らしくなく、逡巡する。今ここでこの手を動かせば、二〇〇〇人犠牲になるかもしれない。

『馬鹿な、今すぐそいつの首を刎ねろセイバー！ 核の場所くらいならステイルでもどうとでもなるだろう!!』

『しかし、シロウ！ それでは生徒たちが危険に……………!!』

『それがどうした！ 今ここで奴を斬らねば、それ以上が犠牲になるかもしれないのだぞ!! 二〇〇〇でできない人たちが犠牲になるなら、その二〇〇〇は切り捨てるしかない!!』

「え」

致命的だった。驚きを口で出してしまうほどに。アウレオルスにそれを悟られてしまふほどに、それは。

そして、

「倒れ伏せッ!!」

その一言で、少女は床に叩きつけられた。

違和感

「……………」

「なあ」

「……………」

「なあってば」

「……………なんだい全く」

上条の声に心底めんどくさそうな表情を隠そうともせず、ステイルは返事をする。アウレオルスⅡダミーとの一戦を終えた後、二人は別棟へと足を運んでいた。『偽・聖歌隊』の核はあの時既に破壊してある。今二人が探しているのはアウレオルスⅡイザード本人の方だ。ステイルの勘ではダミーと核を破壊すれば、侵入者の対処に本物がやってくるかと踏んでいたのだが……

「全然こないじゃねえか。やつばあいつ本物だったんじゃねえのか」

上条の言うあいつとは勿論、先程戦ったダミーのことである。上条からしてみれば、どうしてステイルがあんな簡単にあれをダミーと言いつつたのか不思議であった。

「あれは間違いなく偽者さ。本物はあんなに幼稚じゃないし、弱くない」

「幼稚って、得物自慢がそんなにいけないことなのか？」

上条にはわからない。だが何度も言うようにアウレオルスは戦闘ではなく研究が本分の魔術師。そも武器を誇ること自体が妙なのだ。

「得物自慢が、じゃない。おかしいのは、奴が『瞬間錬金』そのものを自慢げにかざした事だよ」

「……………いやいや、あれは十分やばいじゃねえか。触つちまえばそれで終わりだなんて、普通に考えてまずいだろ」

「それはあくまで君の、魔術師でない者の考えだ。魔術はそもそも研究の手段であって、結果じゃない。君らで言う科学者が、実験の結果じゃなくて実験装置そのものを学会で自慢するようなものさ。ほら、そう考えるとおかしいだろう？」

「……………まあ、確かに」

言われてみれば、と上条は納得する。アウレオルスが学者であると言う観点から見れば、ステイルの指摘も妥当なものに感じた。なんだかんだ言って苦戦しなかったというのもあるが。そんな上条の雰囲気を感じ取ったのか、ステイルが呆れたように声をかける。

「まさか、自分の力だけでアウレオルスⅡダミーに勝ったと思っっているんじゃないだろうね」

「あれ、お前なんかしてたっけ？」

別に嫌味を言っているのではなく、上条はその時頭が真っ白でほとんど何も考えていなかったのだ。ステイルは後方にいたせいもあって、上条の意識には入っていなかったのである。

「借りを作ってたでも思われるのも嫌だから言っておくけどね。あの時僕の助力がなければ君はただ返り討ちにあうだけだったんだよ？」

ただステイルはそうは思わなかったようで、若干口をひくつかせながら言葉を返す。上条の方は助力があったと言われても、本当に判らないのだからしようがない。そうして思案顔で考え込み始めた上条に、ステイルは一息吐いて説明をはじめた。

「さつき君の不意打ちが決まったのは、奴が僕が作った蜃気楼——つまり君の幻に気を取られていたからさ。あれがなければ君は今頃、どろどろの黄金になっていただろうね」

「……蜃気楼って、お前いつの間にそんな事したんだよ」

「そんなの当然、炎剣を出したときに決まってる。そもそもあれは蜃気楼の魔術を誤魔化す為のフェイクであると同時に、奴の注意を僕に引かせる為のものだったんだから」

「つまりあれか？ あのアウレオルスⅡダミーは俺の幻を見てたのか？」

「正確には、あの場で固まったままの君の幻だ。君が奴に向かって突進しそうだったか

らね。事前にその場に留まった姿勢の君の幻を出して、あとは君の姿を奴から隠す。そうすれば、ほら」

結果はさっきの通りさ、とステイルは続ける。

「まあ君の右手があるから最後まで隠し通せはしなかったようだけど、効果は十分だったろう？」

「……………」

思い返してみれば、あんなに上条が近づくまでダミーが気づかなかったのも妙な話。それがステイルの魔術で上条の位置そのものを誤魔化されていたとしたら、なるほど納得も出来る。

「そもそも君が暴走しなきゃ僕があいつを燃やしてただけさ。そんなに自分の功績を主張されても僕が困る」

そんな風が続けるステイルに対し、別に自慢なんかしてねーよ、と返しながら上条はふと思いついたことを口にした。

「そういうえば、あいつは偽者なんだよな」

「だから何度もそういつてるだろう」

「…………あれが偽者——作り物なら、量産できるんじゃないやね？」

当然と言えば当然の疑問。作る方法が確立されているなら、それはつまり理論上では

何度でも作れると言うわけで、再びあのアウレオルスⅡダミーが二人の前に立ちふさがり、可能性もあるはずなのだ。だが上条の素朴な疑問に対し、ステイルは否と首を振った。

「確かに、本物さえ生きていればまた作れるだろうさ。しかしおそらくそれだけのものを作り上げる時間がない上に、あれは量産には向かないよ」

「量産には向かないって……」

「思い出してみろ。さっきの奴は自分が偽者であることにすら気づいていなかったんだぞ。そんな奴らを量産して、仮に偽者同士が鉢合わせたらどうなる？」

「あー…………… そいつは不味いな」

「だろう？ どう考えても良くて同士討ちで、仮に片方が生き残ったとしてもそいつは——」

発狂寸前さ。そんなステイルの結論に、上条もそうだろうかと考えていた。

例えて言うならドツペルゲンガーというある種の怪談、都市伝説だ。しかもこの場合はどちらも偽者なのだから質が悪い。どうあがいても破滅しかないのでから、なるほど確かに精巧さ故に量産には向かないだろう。

なんとなく、なんとなく上条はあの偽者に憐れみを覚えた。そんな上条をよそにスタスタと廊下を歩いていったステイルだが、一旦立ち止まって大儀そうにふうと息を吐く。

そのまま自然な動作で懐からタバコを取り出すと、わざわざマッチで火をつけて煙を燻らせた。

「おい、ここは校内全面禁煙だろうが」

「はっ、何を今更。禁煙以前にここはとつくの昔に無法地帯だろう」

「……屁理屈いいやがる」

上条のじとつとした目もどこ吹く風。まともに取り合う気もないステイルは頭の中で現状を整理していた。

(そもそも、だ)

ほとんどアレイスター押し付けられる形で上条を連れてきたステイルだったが、当初は——あのセイバーとか言う厄介な少女が来るまでは、彼を敵の気を逸らすおとりを使う予定であった。なにせ今回の敵は自分一人でも十分に対処できると元々ステイルは考えていたのだ。

わざわざ幻想殺しを使う理由もなく、頼る必要もない。むしろこの結界の中においては異物でしかなかった。ステイル一人なら魔術さえ使わなければ隠密に行動も出来よう。だが、上条の幻想殺しはいわば巨大なアラムと同様なのである。それもそのはず、自分の世界に等しい結界内部を、そこに在るだけで強引にかき消す異物に気づかない方がそもそもおかしい。だというのに。

「なぜ、本物がこない？」

偽者で対処できないければ、その異物、脅威を自分の目で確かめに来るはず、というのがステイルの大まかな考えであった。それを返り討ちにするというのがなんとなく考えていたことだったのだが、一向にその気配がないのは流石に妙だ。

「いや、籠城するつもりか？ 自分の方に勝ち目がないと諦めて？」

それもまた有効な手段では在る。素の地力では、ステイルはアウレオルスには負けはしないと考えていた。なにせステイルは魔術師を殺すための魔術師、必要悪の教会が一人だ。戦闘向きでないアウレオルスと比べて、どう考えても経験も何もかもに大きな開きがある。

そんな彼に対してアウレオルスが魔術師同士の戦闘での勝利を諦めたのだとしたら—— ステイルに勝つには、搦め手を使うほかない。

（例えば、こうして無闇矢鱈に歩かせる事で体力を奪うとかかな）

いくら魔術師でも、その根本は人間だ。体力はこの結界のせいでどんどん消費していくし、腹も減る。長期戦になれば、睡眠も取れないこちらが不利だ。『偽・聖歌隊』の核を破壊してしまつた以上、あとはこの建物そのもの隠し部屋を虱潰しに探すくらいしか手がかりはない。

（……………）

別にステイルとしては時間制限があるわけではないのだ。長引けば確かに件の『吸血殺し』の少女への危険性は高まるが、そんなの正直彼にとってはどうでもいい。科学側であるし、元より興味もない。この事件さえ解決できればいいのだ、ステイルは。

(一旦、引き返すのも一つの手かな)

向こうが長期戦を望むなら、こちらもそれなりに対処しなければならない。一つだけ、あの廊下で別れたセイバーの事も気になると言えばなるが、優先順位は事件解決のほうが上だ。

(そうと決まれば……)

善は急げ。未だにこちらを呆れた目で見ている上条に向かってステイルは声をかけた。

「一回、入り口に戻るよ。どうやら立て直す必要がありそうだ」

「あ？ 立て直す？」

何言ってるんだお前、という上条に説明することなく、ステイルはさっさと歩き出す。慌てたのは上条だ。ここまでできておいて何の説明もなく戻るだなんて彼には意味がわからないが、こんな場所においていかれても困る。半ば駆け足で、ステイルの後を追いかけるのだった。

「はあっ……はあっ……」

アウレオルスⅡイザードは肩を上下させながら息を吐いていた。眼前の少女の僅かな隙をついて押さえ込込むことには成功したものの、それより先に進むことが出来なくなっていたのである。

……ここで言う先、とは物理的なものではない。邪魔者を押さえ込んだ後の、次の段階——すなわち、その排除という意味だ。本来ならこの黄金練成^{アルスⅡマグナ}、一度相手を押さえ込んでしまえばそれで決着がつくはずなのだ。

だが、この場合はそうはいかなかった。何しろ倒れこんでいる少女は完全に沈黙しているわけではない。彼女が一瞬の間を見せたせいで黄金練成のによる必殺の一言を言うことには成功したものの、どういう訳か全ての動きを止めているわけではないのだ。少女は倒れ伏しながらもぐぐとこちらを睨み付け、じりじりと手足を動かしている。

その動きはそれこそスローモーションのように遅いが、——確実にアウレオルスの方へと近寄ってきていた。

「——ッ!!」

アウレオルスは思わず後ずさる。無言の圧力と止まらない動き。それが、それがとにかくアウレオルスには恐ろしかった。先程まで圧倒されていたこともあったのだろう。

——彼にはもはや、この少女を敗北させるイメージを抱くことは出来なかった。それは黄金錬成にとつては致命的だ。そもそも黄金錬成はほとんど全能の魔術ではあるが、その力にはやはり制限がある。黄金錬成は、『言葉通り』に世界を歪める魔術ではない。正確に言えば、『想像通り』に世界を歪める魔術なのだ。

そもそも頭の中の世界を現実へと引つ張り出すのがこの術式。それならば確かにアウレオルスが『想像出来うる』範囲のみでしか、様々な現象を引き起こせないのである。つまりセイバーの敗北を想像出来ないアウレオルスは、黄金錬成で例えば『死ぬ』などの言動を実現できないのだ。とりあえず無我夢中で倒したはいいものの、その先がないというのが現状だった。

「厳、然。貴様は……そこで、無様に伏しているがいい」

それだけ言うのが精一杯。ふらりと、アウレオルスは踵を返してそこから去ろうとした。なにしろこれ以上手の打ちようがない。近づけないし、制限を加えることすらできないなら、あとは放置するだけだ。いや、後に回したと言うべきか。ともかく今はどうすることも出来ない脅威を一時的に押さえ込むだけ押さえ込んで、アウレオルスはその場を離れようと決めたのだった。

——だが、それがすんなりいくほど、セイバーという英霊は甘くない。アウレオルスが体の向きを変えたその時、ひゅるりと彼の頬を風が撫でた。

(……か、ぜ？ 何故、屋内で風など——)

屋内での風。その事にアウレオルスが違和感を覚えたのも一瞬、その次の一瞬にはアウレオルスの体は宙に浮いていた。

「ば——つ!!」

かな、と叫ぶ暇もない。突風、それもただの突風ではない。確実に何らかの指向性をもったそれが、アウレオルスの全身を叩きつけたのだ。もうほとんど、反射的に口を開く。

(愕然。この風は、まさか奴の…………!)

そのさなかに彼がそう考えるのも仕方ない。ここにいるのはセイバーとアウレオルスの二人だけ。さらに自分の仕事でないなら、それは後ろで倒れていたはずの少女の作業に他ならなかった。そしてアウレオルスのその考えは、正に的を得ていたのである。

風王結界^{インレシブル・エア}。彼女が保有する宝具の一つにして、風の魔術。それこそがアウレオルスの体を吹き飛ばしたものの正体である。暴力的な風の圧力は、そのままアウレオルスを横壁に叩きつけようとして——、

「——くつ。……そう、上手くはいきませんか」

その光景を見たセイバーは悔しそうに顔を歪めた。彼女が見たのは、文字通り空を切った風王結界に、その場から消えたアウレオルス。普通なら、これが彼でなかったら、

勝負が決まっていただろう。アウレオルスは壁に叩きつけられ、後はセイバーの成すがままだ。

しかし彼は壁に接する直前、黄金練成で自分を移動させる事に成功していたのである。黄金練成がセイバーに対してこれ以上何も出来ないといっても、なにもその圧倒的な利便性、応用性が失われた訳ではない。自分を瞬間移動させることくらい、アウレオルスにとっては余裕の事。

加えて、彼は既に風王結界を目にしていた。あの挟み撃ちの罠から脱出するとき、セイバーは『偽・聖歌隊』の攻撃を吹き飛ばすために風王結界を使用した。ならばそれを監視していたアウレオルスが、風の魔術を警戒するのもまた道理である。

突然の風撃にアウレオルスも確かに動揺はしたが、元より頭の回転は速い人間。『想像』を現実に出来るなら、他人のそれよりも自身のそのの方が簡単に決まっている。結果として、アウレオルスは叩きつけられる直前に上階に逃げることに成功していたのだ。

そしてちょうどセイバーとアウレオルスの戦った上階、そこには壁に寄りかかる彼の姿があった。乱れた髪を整え、自身が横滑りした廊下を眺める。黄金練成による転移は成功しても風王結界に飛ばされた勢い、つまり慣性までは消しきれていない。

自身が飛ばされた距離——ほとんど廊下の端から端を見るにつけて、あの風の魔

術には相当の勢いがあつたのだらうとアウレオルスは冷や汗をかいた。だが、その最後の悪足掻きさえも彼は回避したのだ。

「……………当然。この空間において、私に敗北などありえない」

誰とでもなく呟くその言葉は、自分に言い聞かせているようでもあつた。事実その拠り所、アウレオルスの心が折れてしまえば、黄金練成の全てが無に帰る。それだけは、それだけは許さない。

要はもう彼女に近づかなければいいのだ。他の侵入者を片付けた後で、あの少女にはそれ相応の報いを贈る。アウレオルスはそう決心するとふらふらと立ち上がった。ダメージが抜けるまで休む余裕など、もう今の彼にはない。

どこか危なげな光を目に湛えながら、アウレオルスはその場を離れるのだった。

アウレオルスが去つたのち、セイバーは非常に緩慢な動作で廊下を這っていた。あれからアウレオルスの追撃はなく、どうにかこうにか体勢を整えようとしている次第である。

「……………」

「……………」

衛宮士郎とセイバー、二人の間に会話はなく、どこか気まずい雰囲気漂っていた。それもそのはず、そもそもあの時セイバーが衛宮士郎の言葉に動揺さえしなければ勝負は既に——いや、この事件そのものが解決していたはずなのだ。隙さえ、見せなければ。

『……何故あんな隙を見せたんだ、セイバー』

沈黙を先に破つたのは、衛宮士郎だった。

『何故、ですか』

衛宮士郎の言葉に動きを止めるセイバー。目を閉じ、何かを押さえ込むかのようにその顔を歪ませる。無論、衛宮士郎も自分があの時口にした言葉が彼女の気を引いたのだということも判っているのだ。判っていて、なお問いかける。何が原因で動揺したのかではなく、何故あんな言葉に動揺したのかと。

セイバーの方も、その意図は汲んでいる。汲んでいるからこそその沈黙だった。やがて息を吐くと、セイバーは逆に衛宮士郎に問いかけた。

『逆に聞きますが、なぜシロウはあんな判断をしたんですか？』

『……………』

衛宮士郎は直ぐには答ええない。今は表に出していない故、セイバーにも彼の表情などは読み取ることなど出来ないが、それでも重い沈黙が降りる。それでもやがて何か嫌なも

のを飲み込んだかのような声で、衛宮士郎は言葉を返した。

『あのまま奴を逃がしたら、何をしでかすか判らんだろう。吸血鬼の利用だなんて一歩間違えずとも大惨事に繋がる。特にこんな閉鎖された都市空間では、な。——な
らば二〇〇〇人を犠牲にしても、あの時は奴を止めるべきだった』

セイバーの、言葉にならない驚愕。ああ、と彼女は息を吐く。それは彼女の知る衛宮士郎ではなかった。短くも濃密な二週間を共にしたあの少年の、焦がれるほどの理想ではなかった。

百を犠牲に千を救う。それはもはや正義の味方の行いではなく、ただその身を呪う業である。あの少年なら、セイバーの知る衛宮士郎なら、あの時そんな選択をすぐに下しただろうか？

——いや、しないだろう。その選択は違う。それは彼の養父の考えに近いものだ。あの少年ならば、悩みに悩んでどうにかしてでも全てを救う策を講じたはず。それがたとえ、不可能に近いものだとしても。

セイバーの衝撃。あの時彼女が衛宮士郎の言葉に怯んだ理由がそれである。『大勢の為に二〇〇〇を切り捨てる』という選択肢そのものでなく、『あの衛宮士郎がそんな選択肢をした』事が、セイバーは信じられなかったのだ。

……そう、思わず敵から意識を外してしまうほどに。それほどに、彼女にとってそれは衝撃だった。全てを隔てなく救ってみせると言っていた彼が、あんな簡単に人を、その命を切り捨てるはずがない。少なくともセイバーには、衛宮士郎が迷いなくその行動を取っていたように見えたのだ。

そんな行動を取ることが出来ながらも、正義の味方を目指すという矛盾。ただただ理念と行動との矛盾が、そこにはあった。それをセイバーは今初めて、初めてこの局地的な戦場で感じ取ったのだ。衛宮士郎とセイバーの意識の、認識の差。

——だが、そもそもこれはセイバー自身が先送りに先送りしてきた問題が表出したものとも言える。根本的な問題。何故衛宮士郎がこの世界に送られたのか、何故それに彼女が憑いて来ているのか。それについてセイバーが衛宮士郎に尋ねた事は、実は殆どない。

時間がなかった？ いや違う、彼女には時間は山ほどあった。しいて言うなら、機を逸していたのだ。

この世界に来てそれなりの時間はたっているが、未だ衛宮士郎の学園都市での——
——この世界での地盤は固くない。先日のアレイスターとの邂逅を含め、予断を許さない状況が続いていると言えよう。そんな不安な案件を衛宮士郎がいくつも抱えている中で、セイバーは彼にこれ以上の負担を増やしたくなかったという事だ。

負担。こちらで巧く生き抜くだけで精一杯な現状、元の世界に戻る事を今考えるのは衛宮士郎にとって思慮の外である。そも平行世界間の移動なんて彼にはどうしようもない。

……ではこの世界において？ 衛宮士郎もセイバーも実はそれなりに見当がついていた。この世界には————おそらく平行世界間の移動手段はない。少なくとも余程深くこちらの魔術に踏み込まなければ、それこそ元の世界の魔法並みに踏み込まなければその一端に触れることすら出来ないほどのものだろうとの予測は既に立っていた。

そうでなければアレイスターに対して衛宮士郎のあのような、言ってしまう穴だらけの拙い説明に耳を貸すことすらしなかったであろう。先日の件にしても、その気になればいつでも衛宮士郎を処断できるだけの力がアレイスターにはある。そんなアレイスターが衛宮士郎をこうして学園都市に留まらせているのは、一重に利用価値があるからのはず。

衛宮士郎にはアレイスターが一体自分のどこに利用価値を見出しているのかはあまり見当がついているわけではないが、わざわざ『衛宮士郎』である以上、この世界の魔術師と衛宮士郎との違和感をあの統括理事長が覚えた可能性も高い。そうなれば自然、衛宮士郎もその行動を慎重にせざるを得ないのだ。そんな雁字搦めな中で行動したあのトラックの騒動。自分を度外視する衛宮士郎の根本自体は変わってはいないとセイ

バーは再確認した出来事でもあったのだが、

(私が見立てが甘かったという事ですか……)

思い返せば今までの行いで気にならない所がなかった訳ではない。そもそも見た目があまりにあの弓兵に酷似しているではないか。白い髪も黒い肌も、魔術の無茶な使用による副作用の産物だ。つまりそれだけ、この衛宮士郎も自分を酷使してきたという事。

何が彼を変えたのか、その答えをセイバーは知りたかった。だが、

(今は……まだ……)

タイミングが悪い。有利な状況から一転、体を床に縛り付けられたこの状況で彼らに問答などしている余裕はなかった。下手をすれば、余計な亀裂を生む恐れもある。言いたいことや聞きたいことは山のようにあったが、セイバーはそれを全て飲み込んだ。

『……その判断はともかく、確かにあの時隙を見せたのは私自身のミスです』

申し訳ありませんと、彼女は無理やりに首を動かす。衛宮士郎は特にそれについては言及せずに、その固い口を開く。

『互いに言いたいことはあるかもしれないが、今は状況打破を優先しよう。なんとか、まともに動けるようにしなければな』

『そう、ですね……』

結局のところ事情はどうあれ、この状況に陥ってしまったのはあそこで隙を見せたセイバーのミスだ。そんな彼女に負い目がないはずがない。自然、問いただす声も小さくなる。それに衛宮士郎の声からは、この話題はこれで一旦終わりという雰囲気と言わすもがなに読み取れた。

今はとりあえずは追求しない。……………今は。

(この事件が解決したらその時は——)

その時は、必ず。衛宮士郎としつかりと話し合おうと、セイバーは決めたのだった。

その頃、インデックスは盛大に泡を食っていた。比喩ではない。『驚き慌てる』という意味でもない。正に文字通りである。

学生寮の上条の部屋。その風呂場で、今インデックスは子猫の体をワシヤワシヤと洗っているのだ。その一幕での出来事。体を包む泡から逃げるようにして暴れた子猫が散らした一塊が、インデックスの口にちょうど命中したと言うわけだ。

うぺつと彼女は泡を吐き出して、その苦さに目を潤ませる。一体何故このような状況になっているのか。セイバーが学生寮を出た後、上条とインデックスは部屋に戻ってきたわけだが、上条がスタイルと話している間にインデックスが捨て猫を拾ってきていた

のだ。

これ以上住人が増えると色々とまずいので当然断固反対の上条と、どうしても捨て猫を飼いたいインデックスとの間で、まるで親子のようなやりとりがそこにはあった。

……………結局『三沢塾』に行く予定やそれにインデックスを巻き込みたくない上条の思惑もあり、彼が折れることでこの問題は解決したのだが。ちなみに名前はスフィンクス、珍しいことに三毛猫のオスである。

そんな子猫の泡を洗い流しながら、インデックスは考える。衛宮士郎がいないのは別にいい。彼はしよつちゆう家を空けているし、大抵は夕飯などを作り置きしてくれていた。今日も簡単な下拵えだけはしてあるようだ。上条家の最近の食事情はだいたいいつもこんな感じである。

朝は夜に出かけていつの間にか帰ってきている衛宮士郎が朝食をつくり、昼はその日によりけり、夜は大体衛宮士郎が作った下拵えを上条が仕上げるか、そのまま衛宮士郎が作るか。だからインデックスからすれば衛宮士郎がいないのは何の問題もないはずなのだが。

「……………うーん」

風呂場から上がったインデックスは首を傾げる。問題は上条の方。彼は自分が嫌なことは絶対にやらない。そういう性格なのは、インデックスも今までの生活を――

とくにあの七月末の事件を見るに身に染みていた。そんな上条がたかが子猫の事とはいえ、自分の意見を曲げたのだ。

いや、たかがではない。言うなれば一つの命を預かるという事でもあり、食費だつて馬鹿にならないだろう。普段なら、絶対にありえない。では何故、何故に上条はそれを許したのだろうか。

「なーんか変だよねえ」

ねえスフィンクス？ とインデックスは洗い立ての猫に同意を求める。スフィンクスの方もわかっているんだかいんだか、にやんと一声。なんともいえない焦燥感を覚えながら、インデックスは部屋をくるくると歩き回った。

今すぐにでも問いたしたいが、そもそもどこにいったかわからない。先程電話がかかって来たのだから掛けなおして聞けば良いとも思うが、インデックスは使い方を知らないのだ。せめてあの衛宮士郎と一緒にいてくれればまだ安心も出来るというものだが、彼は昼以降、少なくともインデックスはその姿を見かけていなかった。

上条一人。そのことが、余計彼女を焦らせる。上条からすればインデックスこそが庇護すべき対象なのだが、インデックスはそうは思っていない。なにせ魔術は使えないとはいえ、彼女もまた専門家だ。上条が何か魔術の厄介ごとに巻き込まれたなら、それは自分が手を差し伸べるべきだとさえ考えている。

そしてじりじりとした感覚に耐えかね、結局彼女は外に出てみることに決めた。いつもの修道服、『歩く教会』を着込み、勇み足で外に出る。どこに行くかなんて考えてもないが、もはや彼女はじつとしていられなかった。バン、と音を立てて扉を明け、通路へと駆け出す。とにかく外に出ようと考えたインデックスはそのまま階段のほうへ向かおうとして、

「——あ」

見つけた。見覚えのあるカードが、壁に張り付いているのを。そう、それはステイルが彼女の安全を守るために置いたカード。敵に対して反応し、イノゲンテイウス魔女狩りの王を発動させるものだ。ここにそれを置いたが為にステイルは今、魔女狩りの王が使えないわけだが、インデックスからしてみればこれは大きな手がかりだった。

まずステイルⅡマグヌスがここにきている事、上条が魔術関連の厄介ごとに巻き込まれていることは判る。彼女にとってはおどちらの情報も寝耳に水なのだが、おおかた上条と衛宮士郎、それにステイルが自分に隠していたのだらうと眉をへの字にしかめた。こうなつては彼女も黙つてはいられない。カードから伸びる魔力線を辿れば、魔術が使えないインデックスとて行き先を突き止めることも可能だ。

あの真っ白い病室で感じた空恐ろしさを、再び味わいたくはない。上条を危険に晒すことに、彼女はもう耐えられなかった。そんな恐怖と焦りに駆られて、彼女は戦場に、あ

の鉄臭い渦巻く場へと走り出すのであった。

——ステイルは出会い頭に、上条に対してお前はインデックスの『枷』だと、新しく付けられた首輪だと言っていた。なるほど確かに上条は枷なのだろう。しかし、それは何もインデックスのみを、もしくは上条のみを縛るものではない。何故なら枷とは互いの動きを封じるものだ。インデックスは上条を引つ張り、上条もまたインデックスを引つ張る。ただの一組でさえこれならば、雁字搦めの衛宮士郎はいかに。